scenario experiments

lain

the series

小中 千昭

chiaki j. konaka



scenario experiments

lain

the series

シナリオエクスペリメンツ レイン

小中 千昭

ソニー・マガジンズ

ISBN4-7897-1320-2

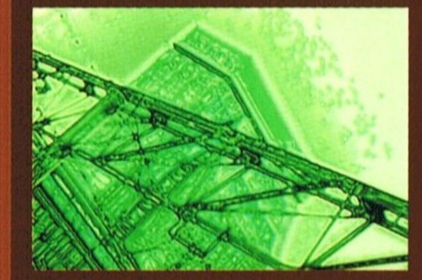
C0076 ¥850E

9784789713207

1920076008504

定価：本体850円＋税

Close the world,.txEn edt neqO



プレゼント・デイ、プレゼント・タイム

夜の街――、人が無言で行き交うにも拘わらず、
無数の喋り声が幅輳している。
ビルとビルの間には無数の電線。
どこもかしこも〝繋がって〟いる。
人は誰しも〝繋がれて〟いる。



cover illustration:yoshitoshi ABe



小中　千昭 chiaki j. konaka

(こなか・ちあき)特殊脚本家。幼少期より映画・TVを問わずファンタジー性の強いドラマに惹かれ自主映画制作を経て映像製作に従事、学生時代より映像ディレクターとなる。フリーになって以降、演出家から脚本家としての活動に移り、ホラー/ファンタジー系を中心にアニメ・特撮等の映像作品で活躍する。今回の『Ｌａｉｎ』ＴＶシリーズ(放映・98)では、シナリオのみならず、7話・9話などの実写加工の映像パートの制作にも参加した。アニメ関連の著書では、ほかに『魔法使いＴａｉ！』(放映・96)の小説版(富士見ファンタジア文庫)など。



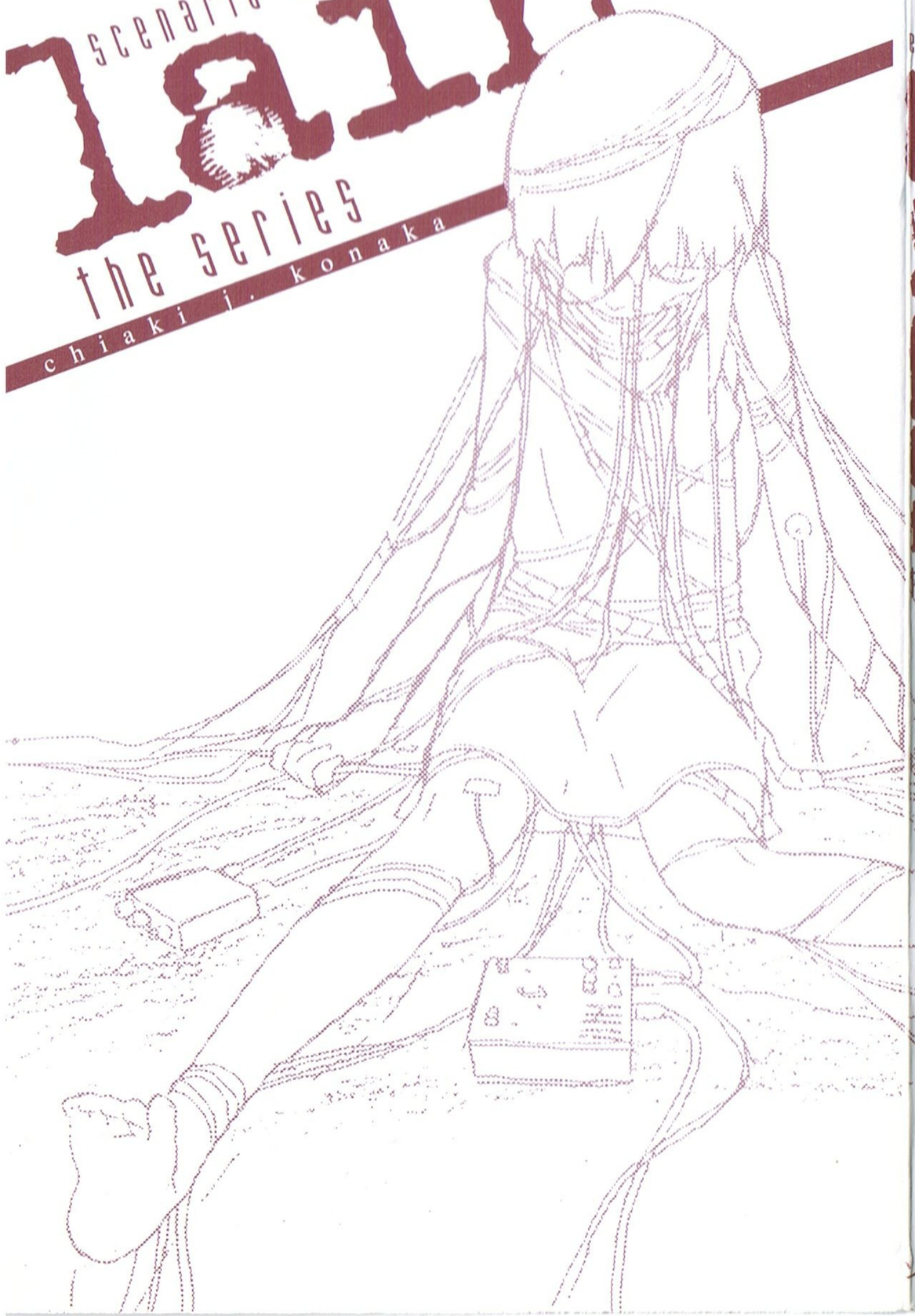
『serial experiments lain』
©1998 Triangle Staff/PIONEER LDC

scenario experiments

lain

the series

chiaki j. konaka



scenario experiments

lain

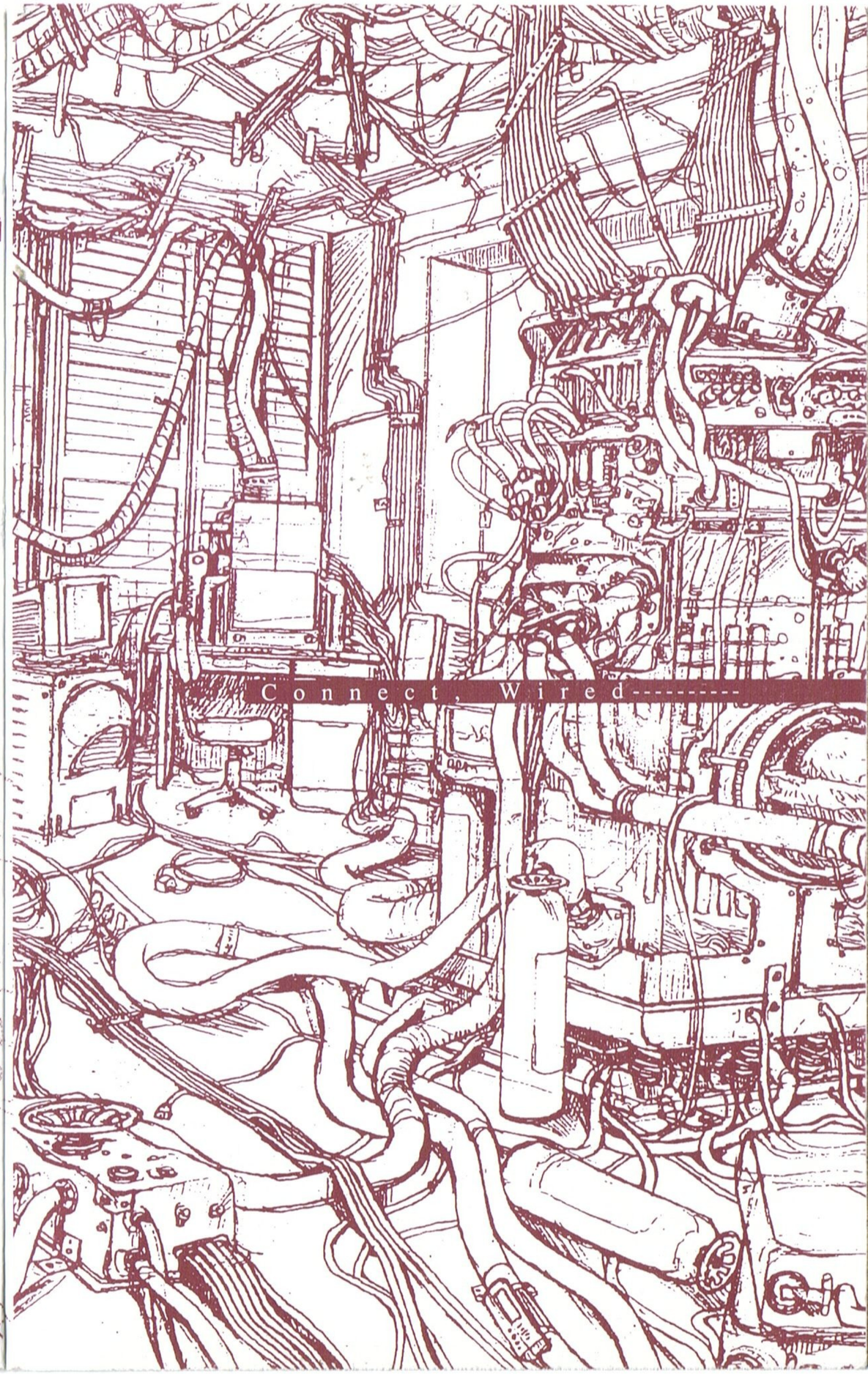
the series

シナリオエクスペリメンツ

レイン

小中千昭

ソニー・マガジンズ



Open the Next. Close the world.txt

scenario experiments

lain

the series

lain

lain

Open the Next. Close the world.txt

Character File

scenario experiments

lain

the series

岩倉玲音（14）

いわくら・れいん／本編の主人公。
鴎華学園中等部に通う内気な少女



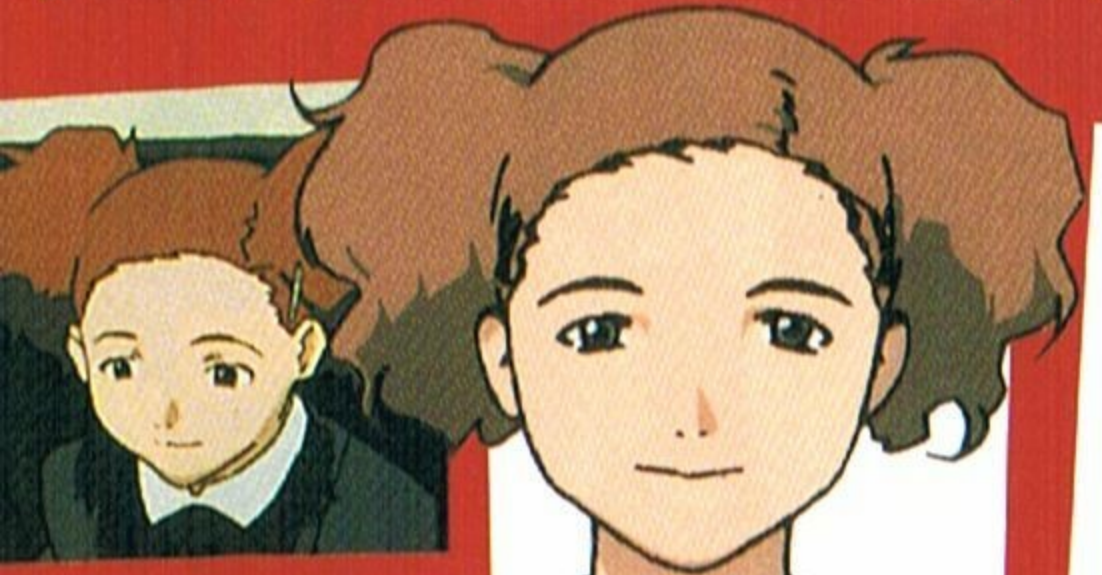




山　本　麗　華(14)

れいか／クラスメイト







加　藤　樹　莉(14)

じゅり／クラスメイト





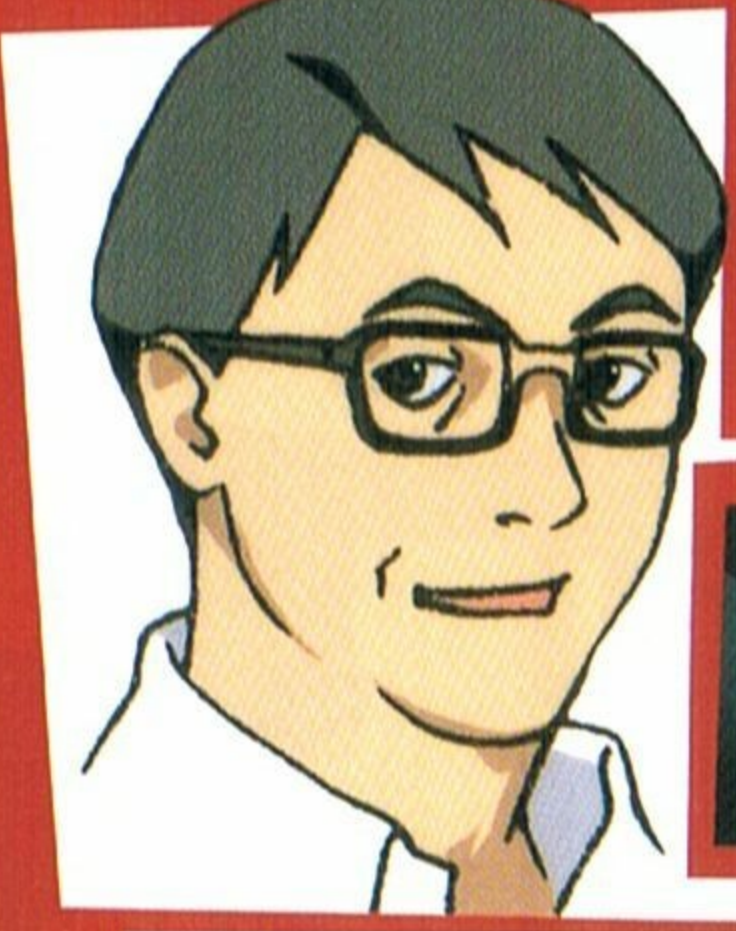




瑞　城　あ　り　す(14)

みずき・ありす／玲音を気に掛けているクラスメイト





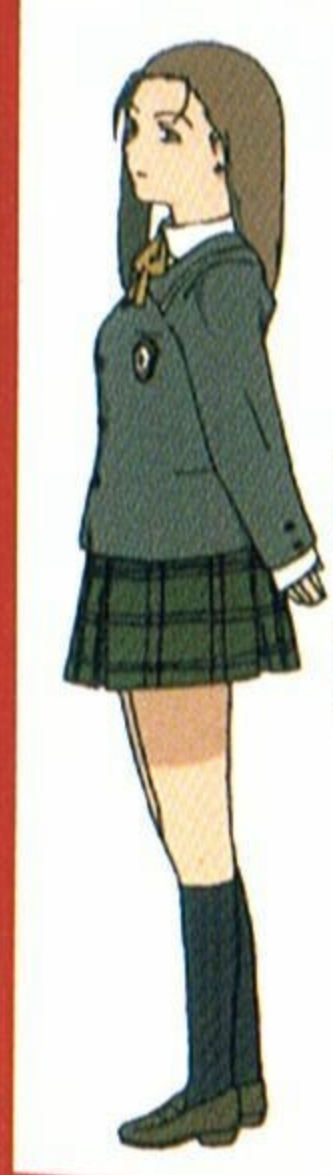




岩　倉　康　雄(45)

玲音の父親。サラリーマン











岩　倉　美　香(16)

玲音の姉。高等部に通う







岩　倉　美　穂(38)

玲音の母親



M I B

謎の黒服の男たち

カール・ハウスホッファ（35）

林随錫（32）

ミューミュー（10）

マサユキ（11）

タロウ（11）

キッズ

サイベリアに通う小学生

scenario experiments

lain

the series

英利政美（30）

えいり・まさみ／デウス

サイベリアの少年

"アクセラ" を服用する

千砂

ちさ／自殺した同級生

①ナイツ

エリート商社マン

②ナイツ

小学生の子を持つ若妻

③ナイツ

フリーター

JJ

ネットカフェ&クラブ
"サイベリア" のDJ



黒　澤

橘総研に属する男



ホジソン教授

KIDSシステムの考案者

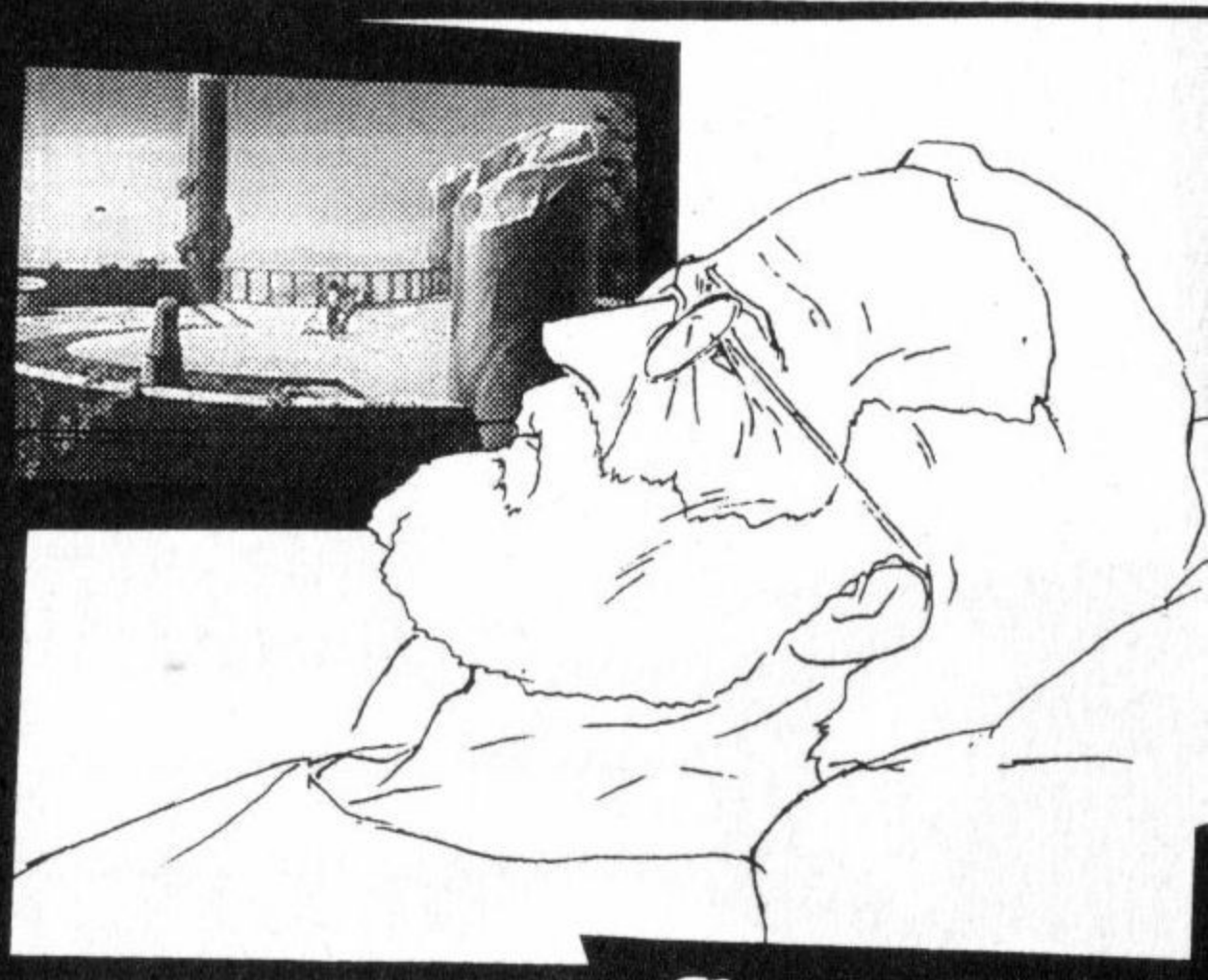


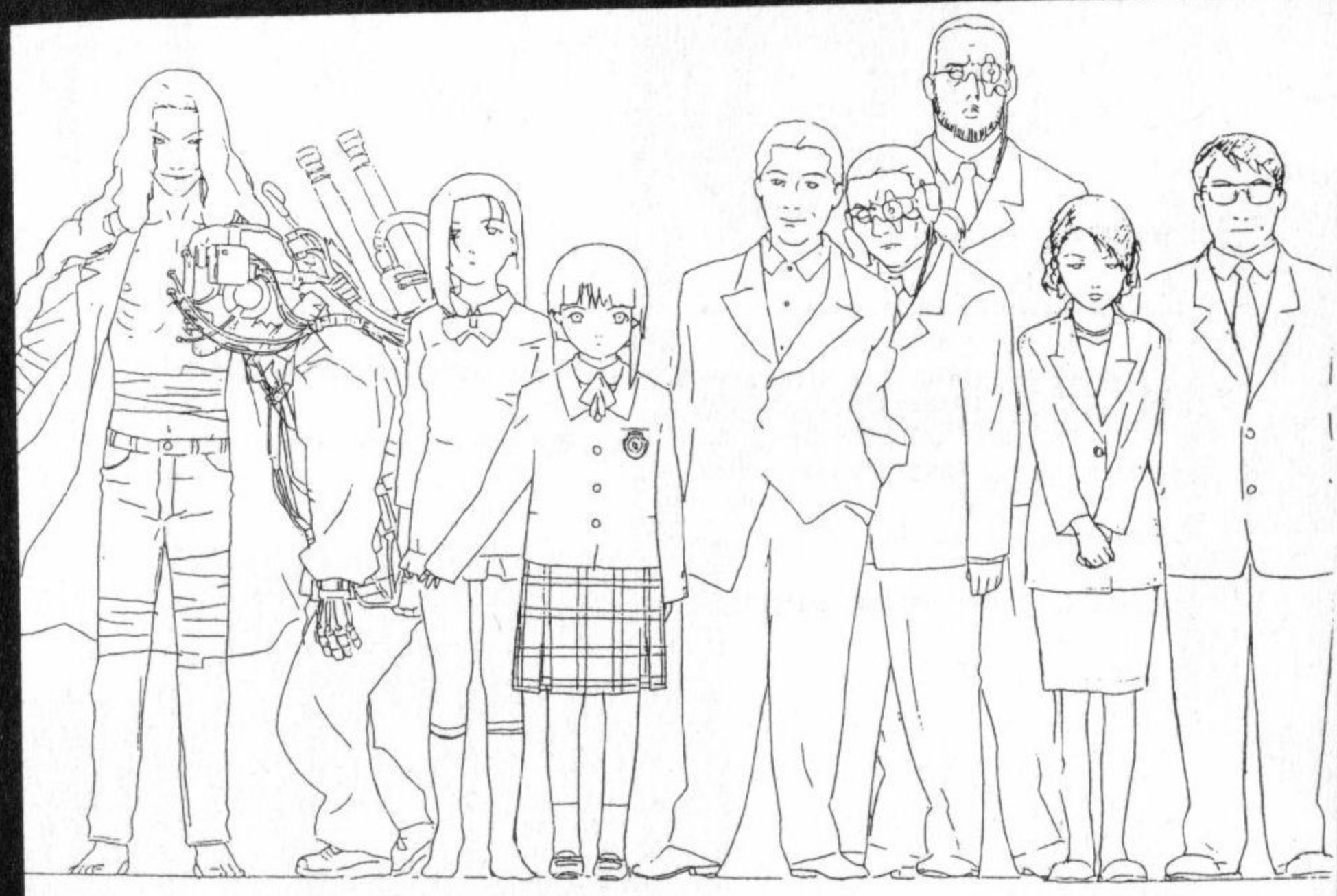




ね　ず　み

ナイツに接近したハッカー





人　物　対　比　図

scenario experiments

lain

the series

小中 千昭
chiaki j.konaka

scenario experiments

lain

the series

from
『serial experiments lain』
the TV series

contents

layer : 01 WEIRD ····· 5
layer : 02 GIRLS ····· 29
layer : 03 PSYCHE ····· 55
layer : 04 RELIGION ····· 83
layer : 05 DISTORTION ····· 107
layer : 06 KIDS ····· 131
layer : 07 SOCIETY ····· 157
layer : 08 RUMORS ····· 183
layer : 09 PROTOCOL ····· 209
layer : 10 LOVE ····· 233
layer : 11 INFORNOGRAPHY ····· 259
layer : 12 LANDSCAPE ····· 283
layer : 13 EGO ····· 309
解説 切通理作 ····· 332

本文・脚注 小中千昭

カヴァーイラスト 安倍吉俊（オリジナルキャラクターデザイン）
表紙原画 lain…岸田隆宏（TV版キャラクターデザイン）／NAVI…安倍吉俊
ブック・デザイン 土井敦史（バナナグロープスタジオ）
協力 トライアングルスタッフ／パイオニアLDC

layer:01

CAST

岩倉 玲音	清水 香里
岩倉 康雄	大林 隆之介
岩倉 美穂	五十嵐 麗
岩倉 美香	川澄 綾子
瑞城 ありす	浅田 葉子
山本 麗華	手塚 ちはる
加藤 樹莉	水野 愛日
四方田 千砂	武藤 寿美
吉井 恵子	根谷 美智子
アベックの中年男	山野井 仁
アベックの若い女	出口 佳代
おやじ	堀川 仁
少女の声	川喜 多美子
S	栗原 みきこ
男	八戸 優
DJ	アリ 森泉

STAFF

絵コンテ	中村 隆太郎
演出	中村 隆太郎
作画監督	関口 雅浩
画面設計	岸田 隆宏
原画	大関 紀子
	古川 達也
	松尾 裕子
	高崎 由利
	千島 知明
	えんどう 麻未
色指定	平出涼子
制作進行	下井 美奈子
背景	スタジオ美峰
	大橋 由佳
	河野 百合香
	島田 雄司
	保木 いずみ
	片岡 奈美
	根崎 知恵子
	井芹 達朗
	小泉 荘平
	伊藤 聖
	京田 邦晴



○プレゼント・デイ、プレゼント・タイム★

夜の街――、人が無言で行き交うにも拘わらず、無数の喋り声が輻輳★している。

わあああんんんんん

ビルとビルの間には無数の電線。

一九二〇年代までのニューヨークがまさにこうだった。地下埋設工事が行われるまでは。

その中で漏れ聞こえる声――

若い女「(オフ／囁き) どうして来ないの？　こっちに来ればいいのに」

○渋谷／センター街

深夜で店は殆ど閉まっているものの、人の通りは未だ多い。

ふらふらとした足取りで少女が歩いている。

汚れた制服は私立の中学校のもの。流行りな感じでは無く、古めかしいデザイン。

クラブとクラブを移動中の着飾った少女達が、その

★本来はイメージ的な、シーンの〝柱〟（シーン名）を、中村監督はアバン・タイトルにてテキストにして出すばかりか、外国人俳優により声としても聞かせる演出をしている。

★輻輳（ふくそう）
方々から一斉に集まるというのが本来の意味だが、天災時など電話網がパンクした状態に用いられる。

子の風体を見てゲタゲタと指差して笑う。

○白地にビットマップフォント★

S「――どうしてそうしなきゃいけないかは、自分で考えなくてはいけないこと」

○ビルの屋上

雑居ビルの屋上。ラヴホテルのネオンが眼下にひしめく様に瞬いている。

風に髪をなびかせ、無表情に手すりから真下を覗き見る少女。

疎らにアベックが歩いている。

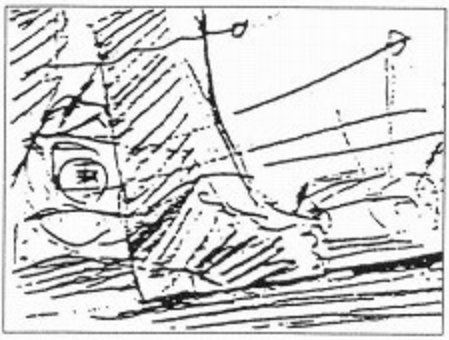
少女、顔を空に向け、声を出さず何か言葉を言う。

そして――微笑み――

○白地にビットマップフォント

S「あたしは、こんなところにいなくてもいいの」

★初期話数では、情報をテキスト文字として画面にそのまま出すというシーンを意図的に多く書いている。物語が進むに連れコミュニケーションの方法も変質していくという狙いだったが、最終話近くまでこのスタイルは貫く事になった。「白地」ではなく色鮮やかなイメージはレアトリックの担当。



○路地

アベックが歩いているすぐ背後に、黒い影が落下したかと思うと、ドンという音。
驚いて振り向く二人。

血が流れていく。
ネオンの光を浴びて、赤や青や緑……。
その血は坂を一筋の流れを作り、流れ落ちていく。

○住宅地／翌朝

朝の早い時間。
人の歩く姿も殆ど見られない。
しかし、喋り声の輻輳はここでも起こっている。
路地と路地、屋根と屋根、電柱と電柱——。
空には常に、鈍色に光るワイヤーが。
〝スキャナー★〟がドラッグが切れた状態の様に、脳の中に直接〝声〟が流れ込んでくる感覚。
意味の無い言葉の繋がり。

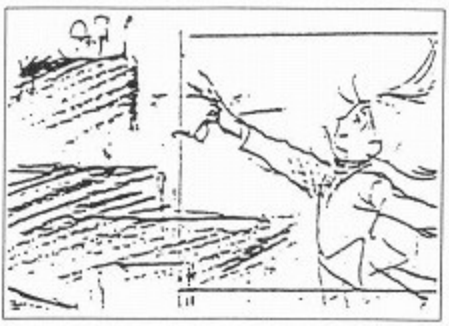
★スキャナー
ジョン・クローネンバーグが撮った映画『スキャナーズ』に於いて、テレパス能力者をこう呼称していた事に依る。テレパス機能抑止薬が切れた主人公の頭に流れ込む会話がイメージにあり、こう書いたのだが、監督にも特に説明はしていなかった。「Layer: 01」が完成した時、あまりにもその音響効果が近かったので驚き、後に音イメージ担当の笠松広司氏（このシリーズ音響面の大きな力となった）に訊ねたところ、「偶然です」。

★そう、これより始まる物語は、ネットワークやコミュニケーションを〝言葉〟として象徴させる。
ここは現実の現代が、少しだけ歪んだ世界。
しかしこれは、現実の現代と遊離したものではない。

○白地にビットマップフォント
S「こんなところにいたら、いつまでも繋がる事なんて――」

○私鉄車内
郊外へ下る電車。さして混んではいないが、玲音は立ってドアにもたれている。
微かに窓ガラスに映る自分の制服姿。
小首をやや傾けて、その奇異さを感じている玲音。
モゴモゴとしたトーンで、会話の輻輳が聞こえている。玲音、背後を見る。
吊り革に摑まる者、座って新聞を読む者――。
誰も口を開いていない。しかしモゴモゴとしたトー

★普通、こういう事はシナリオには書かない。



ンの喋り声は玲音に聞こえ続けている。

玲　音「――（ポツリと）うるさいな……」

誰も反応しない。

玲　音「――（やや声を張って）黙ってられないの……？」

近くの数人が玲音を見つめる。

玲音はじっと窓外を見ているばかり。

座っていた男、機嫌悪そうに目を新聞に戻す。

玲音、ふと見上げる。

ゆるやかに動いて見える、隣の線路の送電線。

○住宅街を走る線路

パンタグラフが送電線を擦りながら、電車が高架の上を走り抜けていく。

送電線は無数の電線と繋がり――

○鷗華学園

中学から短大まである女子学園★。

登校する生徒達の中に、玲音がいる。

★鷗華学園は女子学園であると明記し、美術やキャラクターも設定されているが、layer：04 にて男子学生

他の生徒よりやや幼い感じ。
玲音、ふと、立ち止まって小首を傾げる。
歩いていた生徒達の姿がかき消え、無人の校庭になっている。
しかし、生徒達の会話は聞こえ続けている。
わーん……。それらがコンクリートの校舎に反響して玲音を包み込んでいく。
次に玲音が自我を取り戻した時、風景は元に戻っていた。

○白地にビットマップフォント
S「みんな早く」

○二年B組／教室
玲音が入ってくると、生徒達が幾つかのグループを作り、ヒソヒソと話をしていた。
玲音、構わず自席へ向かう。
鞄を机の上に置いて教科書を出していると——



がいるという台詞があり、これは私のミス。

突如少女が泣きだす。
玲音、振り向くと、樹莉という生徒が机に伏して泣いていた。
玲　音「？」
★樹莉の周りにはありすと麗華がなぐさめる様に囲んでいる。
ありす「樹莉、気にしないほうがいいって」
麗　華「そうだよ。いたずらに決まってるってば」
玲音、じっと見ていたがやがて関心を失い、前を向いてノートを開こうとすると――
ありす「（オフ）玲音」
見上げる玲音。ありすが覗き込んでいた。
玲　音「なに」
ありす「あんたんとこには来なかった？」
玲　音「何が」
ありす「メール」
玲　音「メール……？」
ありす「（やや苛立たし気）四方田千砂からのメール」★

★ありす／樹莉／麗華
私の脚本作品では幾度か登場した名前のキャラクターで、初出は『学校の怪談／絶叫ハイスクール』（関西テレビ'94）。プレイステーション・ゲーム『ありす in サイバーランド』（96）のヒロイン三人もまたこの名前だった（麗華は麗奈になっている）。『lain』の〝ありす〟は、私の強い希望で『～サイバーランド』の〝ありす〟を演じた浅田葉子さんをキャスティングして貰った。ネットワークを題材としているところから、私自身の生理として、『～サイバーランド』と『lain』は切り離せなかったのが理由なのだが、このlayerを書いている段階では、ありす達はあくまで玲音の学友程度の想定で登場させていた。

★四方田千砂
私が脚本、弟の和哉が監督で、静岡

玲　音「（俯き）あたし――、苦手だから……」
ありす「（嘆息）メールくらい毎日チェックしなさいよ。まあいいけどさ……」
麗　華「（来て）玲音は子どもだからねー」
玲　音「何で――、（樹莉を見て）泣いているの？」
麗　華「だから、四方田千砂からメールが来ちゃったからじゃないよ」
玲　音「千砂、って……」
麗　華「D組の子。先週、渋谷で飛び下り自殺したの、先生も言ってたでしょーが」
玲　音「――」
ありす「樹莉だけじゃないの。今週入ってから何人にもメールが来るのよ……」
玲　音「――だって――」
ありす「そ。死んだ子からメールが来る筈がない。でも来る……」

玲音、思案気――。

黒板に黙々とC言語★の構文を書いている教師。

放送でオンエアした深夜ドラマ・シリーズ『Alice SI』('95)の登場人物の一人として創ったキャラクターの名前。『Alice SI』の千砂は、シリーズの一話目で失踪してしまう〝6人目のアリス〟だった。

★C言語
コンピュータのプログラミングに用いる人工言語。

生徒達は黙々とそれを引き写している。
玲音にはやや難解であるらしい。必死に理解をしようと黒板を見つめるが、無意味な文字の羅列に見えて仕方がない。
小さく嘆息し、目を自分の手元に移す。
シャーペンを握っていた自分の右手。
ペンを落とし、掌を広げる。
まだ子どもっぽい指先。その一本一本から、エクトプラズム★の如きものが、しかし赤黒いそれがすっと延びだして虚空に漂い始めていく。
玲音はそれをじっと見つめ続けている。

○白地にビットマップフォント

S「死ぬ時？　痛かったよ（笑）」

○住宅街／午後

わあああんんんんんんん

会話の輻輳。

★これは神経症に於ける幻視の典型的なものの一つ。玲音が特に病んでいるのではなく、それがあたかも自然である様な空気を描きたかったのだが、実際どういう画面になるのかは想像がつかなかった。
layer:: 01 は、アニメーション・キャラクター・デザイン岸田隆宏氏が全カットのレイアウト（画面設計／原画・背景の元になるもの。実写映画で言えばキャメラのフレーミングに近い）を描かれているが、このシーンのレイアウトだけで一ヶ月半が費やされている。
余談ながら、『lain』1話のレイアウトはアニメーターの間で極めて高い評価を得、このコピーが幾つかのアニメ・スタジオに流通していたらしい。

風にびゅんびゅんと音を立てる送電線。
坂道。★
坂の多い町。
ゆっくりとその坂を登っていく玲音。
彼女の自宅はその頂にある。
『岩倉』の表札。まだ建って間もないモダンな住宅。
玲音、鍵を開けて中へ。

○岩倉家／ダイニング

玄関から階段に向かって歩く玲音。
この時間には誰もいないらしい。

○玲音の部屋

入ってくる玲音。
子どもっぽい色彩の壁紙。しかし物はあまり無く、ガランとしている。
鞄を床に置いて机に近づく。
そこには、子ども用のNAVI★（ネットワーク・コ

★坂道が多い町、というのは、テレビシリーズに先行して製作されたプレイステーション・ソフト版のアニメーション部分（監督・えんどうてつや氏／キャラクターデザイン・坪和等氏）で書いたシナリオからそのままイメージを引き継いだもの。

★NAVI
いわゆるパソコン、携帯端末などを総称したものとして用いている語。初出は『アミテージ・ザ・サード』('95)というOVAシリーズで、以降

ンピュータ端末。卓上型・携帯型共にある。玲音の最初の端末は極めて機能が低く、モニタも液晶）が隅に寄せて置かれていた。
じっと見つめる玲音。

セーターに袖を通しながら、再び机に近づいてくる玲音。
ＮＡＶＩの操作パネルを机の中央に持ってきて――
起動キー★を押す。
Ｓ「Login」
Ｓ「Who?」
玲音、おぼつかない手でキーを打つ。
Ｓ「lain」
玲　音「れ・い・ん」
声に合わせ波形が表示され――
Ｓ「Accept」
Ｓ「You have mail」
玲　音「誰から?」

私が書く近未来物でそういったアイテムを出す場合はほぼ統一呼称している。語源は、アラン・ケイの理念を受けApple Computerが提唱した概念 Knowledge Navigatorから。
このシーンに登場する児童用ＮＡＶＩは、オリジナル・キャラクター・デザイナーであり、全てのｌａｉｎプロジェクトのキー・ヴィジュアルを握った安倍吉俊氏がデザインしたもの。CADで使うプロッタの様なポインティング・デヴァイスが特徴的。

★ここで立ち上がるオペレーティング・システムCOSは、以降テレビシリーズに登場する全てのＮＡＶＩのインターフェイスをデザイン・製作した中原順志氏によるもの。中原氏はプレイステーション版『ｌａｉｎ』のディレクターであり、本来はプログラマ。シリーズ中盤以降は、オンエアに追われての大変な作業となったが、ここで登場するCOSはかなりの時間を掛けてデザインされ、

ややあって――

S「四方田千砂」

玲音「――」

S「Read?」

玲音、エンターキーを押す。

白地の画面に文字が打ち出されていく。

S★「こんにちは。元気?」

玲音「――」

S「玲音とは一度だけ、一緒に帰った事あったよね。覚えてる?」

玲音、小さくこくりと頷く。

S「あたしはただ肉体を捨てただけ。あたしはこうしてまだ生きてるって証明できるの」

玲音「――」

S「それを教えたくて、玲音にこのメールを送ってるの。判る?」

玲音「――」

S「今判らなくてもいい。きっとすぐに判る様にな

Macintosh上でAfterEffectsというアプリケーションを駆使して創られた。

★S
このSは、〝スーパー・インポーズ〟の略で、シナリオでは単に文字で出すという通常のシナリオ作法として書いている。中村監督はこれを、合成音声によるヴォイス・ナヴィゲーション・システムとして演出し、全てが台詞として発語された。故にエンド・クレジットに〝S〟というキャラクターが表記されている。

るから。みんなだって……」

玲　音「どうして――死んだの？」

S「誰かのいたずらメールだとかって、学校では噂になってるそうだけど、そうじゃないって事を玲音には判って貰いたいの」

玲　音「どうして自分で死んじゃったの？」

まるで会話をしているかの様。しかし――

S「ここには神様がいるの」

玲　音「――」

もう文字は何も語ろうとしていなかった。

玲　音「――」

○ダイニング／夕刻

母親、姉と玲音が食事をしている。

誰も見ていないテレビが無意味な情報を垂れ流し続けている。音は消されており、食器の触れる音、食物を嚥下する音ばかりが肥大して聞こえる。

玲音は自分の前の皿に載ったものが、とても食べ物

に見えず困っている。
母親も姉も玲音には全く関心を払っていないらしい。
姉の美香、半分以上残して席を立つ。

美　香「昼が遅くってさ。ごちそうさま」
玲音は食べるのが遅いらしい。
スプーンを動かすのをやめ――、母親を見て

玲　音「――ママ？」
美　穂「何？」
玲　音「（極く小さな声）メールが来たの……」
美穂、玲音に目を向けず。
玲　音「――先週自殺した子から」
美　穂「――」
二人、食事を続ける。

○玲音の部屋

ＮＡＶＩの画面が点っぱなしになっている。
しかし単に緑色の待機状態になっているばかり。
玲音はベッドに寄り掛かり、独りぼーっとしている。



と、外で車が止まる音。
玲音、窓に近づく。
タクシーから父親が下りるところが見える。

○父の部屋

着替えもせず、父の康雄は自作の端末に買ってきたパーツを接続しているところ。
ハッキーな性分らしく、かなり手の込んだシステムになっている。
と、ドアが薄く開き、玲音★が半分顔を覗かせる。
康雄、気づき——

康雄「——玲音、どうした?」
玲音、おずおずと部屋に入ってくる。
玲音「——」
康雄「玲音がこの部屋に入るの、珍しいな」
玲音「——あたしの、NAVI——、新しいのに——」
康雄「(破顔)やっと興味が出てきたかのかい。だから言ってただろう?」

★完成作品のこのシーンで、玲音は〝くま〟の着ぐるみの様なパジャマを着ている。
岸田隆宏氏が最初にこのデザイン・ラフ画を描いてきた時、私はやや抵抗感を抱いた。というのは、〝くま〟というのは私や弟の一種のトレードマークの様な存在で、『くまちゃん』という映画も製作していたからだ。
私が脚本ということで、そこまでイコンの様に〝くま〟印を出してしまうのは、監督や岸田氏にとっても損なのではないか、と考えた。しかし、中村監督は、何故岸田氏がそういう衣装案を描いたかを解釈し、私やプロデューサーに説明をしてくれて、納得したのだった。
玲音がくまパジャマを着るのは、家族と対峙する時、或いは外界からの干渉を絶つ時——という演出がここで生まれた。

言いながら、筐体を開いた基盤に新しいキャッシュカードを差し入れる作業をしている康雄。

玲音、その手元をじっと見つめている。

康雄「中学生になったんだから、もっといいマシンを使いなさいって。友達に遅れちゃうだろ？」

玲音「――」

康雄「この世界はね玲音。リアル・ワールドでもワイヤードでも、人間はみんなが繋がって、それで社会が動いている。玲音の様な子でも、すぐに友達が出来るんだって。怖がる事なんて全然ないんだよ。そこら辺のところがママには理解出来ないんだな……」

玲音「――（儚い声）怖くなんか――ないよあたし」

康雄「――（玲音に向き）でも、どうして急にそんな事を言い出したのかな？」

玲音「――会いたい友達がいるの」

康雄「――」

組み上がったマシンに灯が入る。

★キャッシュ
Cache現金の事ではなく、CPUに最も近いところで動作するメモリの事。しかし実際の画面ではPCI拡張カードが描かれていた。斯様に、この作品のNAVIは'98年現在のパソコン、及びその周辺機器そのものが描かれている。フィクションなのは、その機能と動作速度。

★リアル・ワールド
Real Worldネットワークと相対した意味での現実世界。

★ワイヤード
Wired このシリーズに於けるネットワークの総称。アメリカではインターネットをこう呼ぶケースもあるが、このシリーズに於ける用い方は〝繋ぐもの〟というニュアンスを強める意図で選んでいる。

大規模なＮＡＶＩの前に、安楽椅子で座る康雄。
じっと部屋の隅で見つめる玲音。
シュウンンンンンン
★ペルチェ・クーラーのファン音が低くこもる。
康雄の前に仮想ウィンドウが次々に開いて、★ＣＵメールの交換が始まる。
顔の無い人の形。それがウィンドウに一人ずつ。
声も出さずに会話をしているかの様な康雄。
時間差のある★ｂｂｓボードでも、仮想リアルタイムモードにより、あたかもシンクロ・ミーティングの様に会話が成立する。それを複数こなしている康雄。
まるで――、まるで異界にだけ魂が飛んでいる様。
肉体の康雄はアルカイックな笑みを浮かべ微動だにしない。
その相貌をじっと見つめ続ける玲音――。

○私鉄車内／翌日朝

また同じ様にドアにもたれ、ぼんやりと外を流れる

★ペルチェ・クーラー
ペルチェ素子という、電流を通すと熱を吸収するものを利用した、集積回路冷却装置。実際にはこれのファン音は筐体の外には聞こえない。

★実際の画面では、大型ＣＲＴモニタが六台並べられ、マルチ・ウィンドウＯＳが起動するという描写となった。この０Ｓのインターフェイスも中原順志氏の力作。

★ＣＵメール
動画を伴う音声メール、という意味で『～サイバーランド』で造った言葉。〝ＣＵ〟はＳｅｅ Ｙｏｕの意味で、暫く前に流行ったテレビ電話風チャットの名前をもじっている。

★ｂｂｓボード
ネット上のテキスト・ベースによるコミュニケーション形態。掲示板と称される事が多い。

景色を見つめている玲音。
キキキキキキキキキキ
急ブレーキ。どよめく車内。玲音、手すりに摑まろうとして——届かず、床に転げる。
会話の輻輳が高まる。
膝の痛みを堪えながら立ち上がる玲音。
と、車内アナウンスの声。

車掌「皆様お急ぎのところ申し訳ございません。只今この車両は事故の為停車中です——」

新聞を手にしていた男——

男「人はねたんじゃないのか？」

ざわめく室内。
玲音、窓外を見る。

玲音「！」

隣の線路の上の送電線、何か液体が伝って流れている。ポタポタと地面に雫を落として。
玲音、線路を見下ろす。
それは——血。ポタポタと送電線を伝って血が流れ



ていた――。

玲音「――」

○抽象的イメエジ

街の中にいる玲音。
否、それは学校の中かもしれない。
あるいは、家の中――。
どこにいても玲音は一人。
その周囲に居る者は、全てただの他者でしかない。
人間ですらないかの様な感触。
ずっと玲音はそれで構わないと思っていた。
しかし――

○線路

白く靄が掛かった様な世界。
玲音はぽつりと鞄も持たず線路の上に立っている。
何故自分がここにいるのか判らない。
ふと見ると、前方に人がいる。

他校の女子生徒の様だ。
玲音、怪訝そうに少女を見つめる。
少女は髪のせいで表情が見えない。
あの飛び下りた少女の様に、ふらふらとした足取りで線路の中央に立つ。

玲音「！」

遙か彼方から、ライトを点灯させて電車が走ってくるのが見える。
少女はそれを待ち構える様に、しかし何の決意もしてなそうなポーズで立つ。

玲音「――!!」

玲音は叫んだ。しかし声が出ていない。
それだのに、少女の耳にはそれが届いたらしい。
少女が玲音に振り向く。

玲音「！（恐怖）」

少女の顔は、まるで曇り硝子の向こうの様にぼやけていた。
その背後から光が迫り――



あっけない程、少女の躰を車輪下に巻き込み、玲音に向かって迫る!!

玲　音「!!（悲鳴を上げる顔）」

○2年B組教室

ハッと我に帰る玲音。

自席にきちんと座っていた。

見回すと、他の生徒達は皆黒板を見ながらノートに書き写している。

担任の声「岩倉さん」

玲音、ハッとなって前を見る。

未だ若い、スーツ姿の女の教師★が固い顔で玲音を見つめていた。

玲　音「（か細い声）はい……」

恵　子「ここ、テストに出るわよ」

玲　音「――」

玲音、唇を噛み、シャーペンを手にとって黒板を見る。

★女の教師
この話数を書いた時点では、このキャラクターをもっとフィーチャーする腹案があったので、吉井恵子という名前を与えているが、結局は背景的な存在で終わってしまった。

玲音「――」

暗い緑色の黒板に無秩序に書かれた文字が――蠢いている。

玲音「――」

やがてその文字は、玲音の子ども用ＮＡＶＩのモニタと同じ書体の文字になって――

Ｓ「早くワイヤードに来て」

玲音「――」

もう文字は元の恵子の書いた英文に戻っている。

○住宅街

無数の針金が空を覆う、いつもの町の風景。

坂を登っていく玲音。

誰も他に人はいない――筈だが、誰かとすれ違った気がしてふと振り向く玲音。

玲音「――」

白い顔をした千砂が、力無いポーズで立って玲音を見ていた。



玲　音「――千砂、ちゃん……？」

千砂、微笑む。

玲　音「――そこは、どこ？」

千砂の顔が――徐々に白く消えて――

玲　音「――（か細い声）待ってよ」

もう、その場所に人の姿など無かった。

立ち尽くす玲音。★

To Be Continued...

★このラストショットは、レアトリックがレンダリングを吐き出すのに一日半掛かったという大労作。最初の玲音のサイズから、あの異常な広角画面まで1カットで引いている。何気ないかもしれないが、通常のセルやフィルムだけでは創り得ないデジタルならではのショット。

layer:02

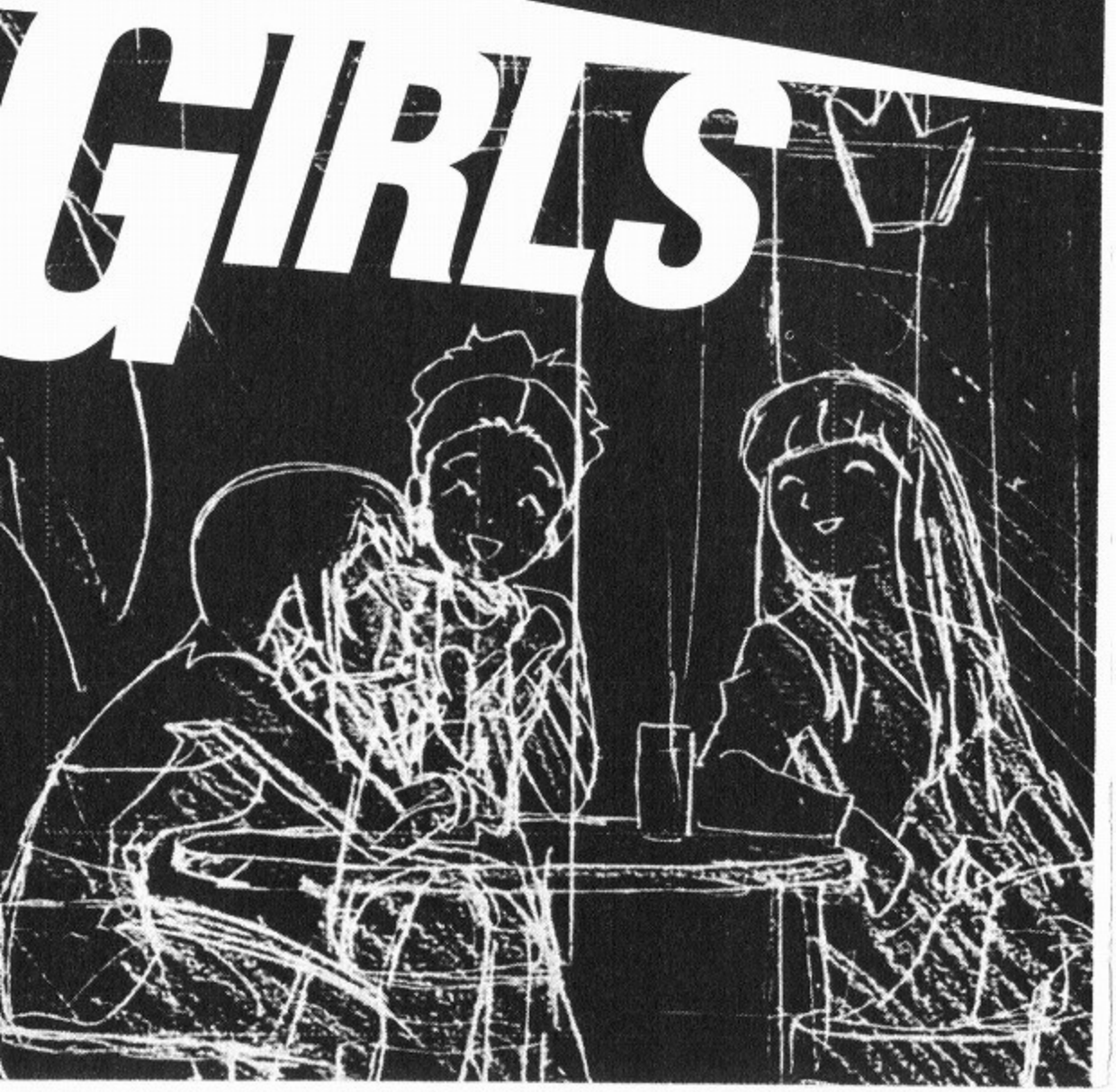
GIRLS

CAST

岩倉 玲音	清水 香里
岩倉 康雄	大林 隆之介
岩倉 美穂	五十嵐 麗
岩倉 美香	川澄 綾子
瑞城 ありす	浅田 葉子
山本 麗華	手塚 ちはる
加藤 樹莉	水野 愛日
四方田 千砂	武藤 寿美
少 年	小宮 悟史
タロウ	滝本 啓人
ミューミュー	山本 有紀
マサユキ	藤間 宇宙
若い女の声	佐藤 美佳子
S	吉岡 久仁子
男の声	伊藤 英敏
運送屋のバイト	千葉 進歩
DJ	アリ 森泉

STAFF

絵コンテ	中村 隆太郎
演出	中村 隆太郎
作画監督	菅井 嘉浩
画面設計	柳野 龍男
	関口 雅浩
	菅井 嘉浩
原画	安藤 正浩
	後藤 有宏
	三宅 雄一郎
	中谷 マリ
	後藤 隆宏
	千島 知明
色指定	ますだ よしまさ
制作進行	鈴木 眞砂弥
背景	猿プロダクション
	本田 修
	小杉 光芳
	本田 利恵
	真悠 峻大



○プレゼント・デイ、プレゼント・タイム

夜の街――、人が無言で行き交うにも拘わらず、無数の喋り声が輻輳している。
わあああああんんんんんん
ビルとビルの間には無数の電線。
その中から漏れ聞こえる声――
若い女「(★オフ／囁き)――何を怖がっているの？　ちょっと試してみるだけでいいのに――」
どこもかしこも〝繋がって〟いる。
人は誰しも、〝繋がれて〟いる。

○クラブ・サ★イベリア

インダストリアル・パンクが無機的な超低周波で暗い穴蔵の中を揺さぶる。
ひしめく人の顔すらも判然としない程暗い。
夜行性の生き物達。
着飾る者、そうでない者。

★中村隆太郎監督は、シナリオが4話まで進行したところで参加された。そこまで出来ていたシナリオに、殆ど直しの注文は出さなかったが、このアバンタイトルに不特定な女性の語りかける声を入れるというのをフォーマットにしたいという意向を出された。

★サイベリア
このクラブの名前は、layer:: 09でもその名が登場するダグラス・ラシュコフの著書から引用したもの。サイバーカルチャーを論じた同名書は大森望氏の翻訳で出版されている(アスキー出版局)。

○白地にビットマップフォント

S「サイベリア？　別に来たくて来てるんじゃない」

○クラブ・サイベリア

★ヒュプノウシスへ誘う様な明滅するライティング。ガスマスクを被り、★PVCヴィニルのメイド衣装を着た★ハウス・ミストレスがドリンク・ボトルをトレイに載せて、踊るでもなく立って話している客の間を巧みにすり抜けて歩く。

隅のテーブルに座っていた中学生くらいの少年の前にドリンク瓶を置くハウス・ミストレス。

少年、防毒ガスの顔を見上げる。

と、女、ボトル底に小さく畳んだ紙片をそっと差し入れる。

少年はポケットからくしゃくしゃになった一万円札をその脇に放る。

ハウス・ミストレス、それを胸元に仕舞い、再び雑踏の中へ消えていく。

★ヒュプノウシス
hypnosis 催眠状態

★PVCヴィニル
ラバーと並ぶフェティッシュな衣装の定番素材。光沢のある伸縮性の無い生地。

★ハウスミストレス
コスチュームを着た、演劇的存在としての、ウエイトレスという意味の造語。実写ビデオシネマ作品『毒婦』(監督・小中和哉'95)にて、防毒マスク姿の女というのは既に登場させていた。

○白地にビットマップフォント

S「一万？　そりゃ高い。相場は四千円てとこだ」
S「アクセラ。俺らはそう呼んでる。仕入れは同じ様なもんだけど、あれは正確にはドラッグじゃない」

○クラブ・サイベリア

少年、紙片を広げる。
その中には――、一★錠のカプセル。
少年、脇に置いていたショルダーバッグからルーペを取り出し、ライトを点灯して錠剤に見入る。
そっと二つに割る少年。
カプセルの中身は、極めて精緻なサーキット。★極小LEDがチカチカと青い光を明滅させていた。
初めて微笑む少年。
それを嚥下し――ボトルの液体を飲み干す。

少年の瞳孔が開く。

★テレビ番組としては、ドラッグ的な描写は好ましくないと考え、極小機械という設定にしたが、シナリオの描写でも不適切という事で、画面ではカプセルではなくグミ状のゼリーに覆われたものという描写になった。このアイデアは中原順志氏による。

★極小LED
発光ダイオード。機器類のパイロットランプに用いられる。

○白地にビットマップフォント

S「僕は、加速したのを感じた」

○クラブ・サイベリア

ふっ。音がかき消え、少年は自分が加速を始めた事を知る。

人々の動きが緩慢に見える。

その人々の中に――、談笑している女の子のグループが見えた。

ありす、麗華、樹莉。少年の存在を気にも留めず、すれ違う男から声を掛けられても無視。

じっと凝視し続けていた少年、立ち上がり――

○白地にビットマップフォント

S「早くこっちにおいでよ」

○住宅街／翌朝

わあああんんんんん



高圧電線が風に揺れて笛の様な音を立てている。
坂道。
その登り切ったところが玲音の住む家。

○岩倉家／玲音の部屋

子ども用ＮＡＶＩの前に座っている玲音。
画面には文字化けしたテキスト。
じっとそれを見つめていた玲音、被りを振る。

玲　音「ううん、違うよ」

文字、うねうねと無意味な記号としてスクロールしていく。

玲　音「――判んない……」

ギッ。背後のドアが開いた。
振り向く玲音。

美　香「あれ、誰か来てんのかと思った」

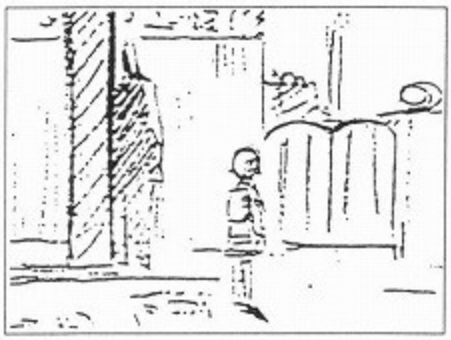
高校の制服を来た姉の美香、物憂げな目で玲音を見つめる。

玲　音「――誰かって、誰？」

美　香「――玲音の空想の友達」
玲　音「――」
美　香「とかね」
玲　音「――」
　美香、玲音から関心を失いドアを閉めつつ
美　香「そろそろ出ないとまた遅刻だよ」
　あっ、と思い、急いで鞄の支度を始める玲音。

○坂道

　早足で下っていく玲音。
と――、やや下の電柱の背後に、黒い人影。
玲　音「――」
　極く僅かに、漠然とした不安を抱く玲音。眉を顰めなるたけその方を見ない様にと急ぐ。
　徐々にその電柱に近づく。
　堪えきれず、玲音、横目で電柱を見る。
　電柱の背後に立っていたのは――黒ずくめの服を着た男だった。全く感情を感じさせない陶器の様な目



で玲音を見つめている。
玲音、目を逸らし、駆けだす。

○鷗華学園

登校する生徒達。
玲音、一人歩いていると背後から
ありす「（オフ）おはよ」
振り向くと、ありすら三人。
玲　音「お、おはよう」
樹　莉「（しげしげと玲音を見て）――違うよぉやっぱり」
玲　音「え……」
麗　華「そうかなぁ」
玲　音「な、に？」
ありす「（苦笑）よしなさいよ、可哀相じゃない玲音が」
麗　華「あ？　あごめん。いやさぁ、昨日の夜、サイベリアに玲音そっくりな子がいてさ」
玲　音「さい、べりあ？」
樹　莉「あたしたち昨日、勇気出して初めて行ってみたんだよね」
麗　華「大した事なかったじゃん」

ありす「キンチョーしてたくせに（くすくす）。（玲音に）あ、クラブだよ。夜中に若い子たちが集まる様なところ」

玲　音「――」

ありす「そこで玲音にちょっと似た子がいたの」

玲　音「（小首を傾げ）――あたし、昨日は……」

ありす「判ってるって。玲音じゃないよその子。あたしたちもはっきり見た訳じゃないんだけど、凄く派手な恰好してたし、何か凄い剣幕で怒鳴ってたし」

玲　音「――」

樹　莉「そうだよぉ。性格とかも全然違うって感じ」

麗　華「でも――（しげしげ）似てたけどなぁ」

玲　音「（俯き）――あたしも★――行ってみたいな……」

ありす「！　行ってみようよ！」

樹　莉「まじー？　玲音みたいな子が行って面白いかなぁ」

ありす「折角行ってみたいって思ったんだもの、いいと思う。玲音だって、もうちょっと社交的になった方が楽しいよ。ねっ？　玲音」

玲　音「――」

★中村監督は、徹底して玲音はサイベリアへ行きたがらないという描写にしている。

○3DCG―画面

〝★アクセラ〟の構造を微細に見せつつ――

男の声「――一種のスマート・ドラッグであるこのアクセラは、ナノ・メカニズムによって胎内にて固有の周波数の振動を発振し、ある特定のホルモンの分泌を促します。そのホルモンが分泌されますと、人間の意識の中の時間の感覚が影響を受け、意識が加速した様になると言われています。意識だけではなく、確かに脳の働きも活性化されまして、演算機能が倍から最大十二倍まで高くなる様です。このナノ・メカニズム自体は消化液で一昼夜にてほぼ消滅しますが、その影響力は、断続的にフラッシュバックとして現れます。薬品ではないので厚生省の管轄では当然ありませんが、警察庁では麻薬と同等の効果があるとして現在調査を進めており――」

○白地にビットマップフォント

S「人はみんな、繋がっている」

★アクセラ
Accela 加速させるもの／アクセラレーションからの造語。
実際のダイアローグでは〝スマート・サプリメント〟と言い換えられた。
このアクセラのデザインも安倍氏による。単に外装だけでなく、本体がナノマシンを放出し、胃壁に刺さって機能するまでを図解した設定書までも描かれていた。
ナレーション後半は完成作品では聞き取れない。

○教室★

授業を受けている生徒達。

玲音、ぼんやりと黒板に書かれた★シェル・スクリプトの構文を見つめていた。玲音の耳には耳鳴りの様なゴーッという音だけが低く聞こえている。

と――、玲音の脇を誰かが元気よくすりぬけ黒板に向かっていく。

玲音「――」

黒板前に立った子、振り向く。それは――玲音。しかし表情は普通の子の様に明るい。先生に何かを言って、黒板に構文の欠落部をチョークで埋めていく。

玲音「――」

拍手。玲音、振り向く。

生徒や先生達が、教壇の玲音に向かって微笑みかけながら拍手をしている。

玲音もまた、当惑した顔で拍手――

ハッと振り向く。

生徒や先生達、席の玲音をじっと見つめていた。

★このシーンは大幅にコンテで変更されている。
ここに限らないのだが、シナリオと画面の相違部分を注意して観て貰うと、監督の意図が明確に浮かんでくる、と思う。

★シェル・スクリプト
UNIXというネットワークOS（一般ユーザではなく、ネットワーク・サーバーや研究目的、プロフェッショナルなグラフィック用ワークステーションに使われる）にて、ユーザのコマンドを受け取り、自動実行するプログラム。MS-DOSで言えばバッチ・ファイルに相当するが、比較にならない程複雑。よって普通中学校で教える事はない、と思う。

玲音、我に返る。あの耳鳴りの音も消えていた。
恥ずかしさで俯く玲音――。
と、前の席のありすが振り向き、自分のＮＡＶＩを見せる。

玲　音「？」

玲音、自分のＮＡＶＩ★を見る。
ありすの可愛い自画像の下にテキスト。
Ｓ「今夜、サイベリアに一緒に行かない？」
玲音、嬉しさを顔に出せないが――、ありすを見てちょっと顔を赤らめていた。

○廊下

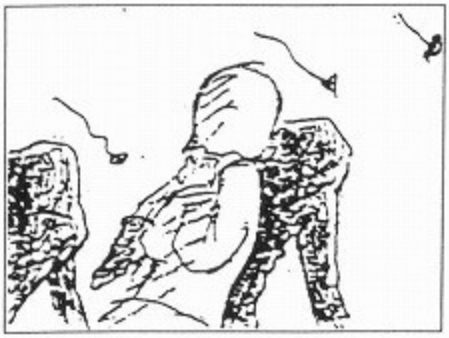
一人歩く玲音。
授業をしている声が廊下にまで漏れ聞こえている。
無人の廊下に、玲音の上履きの音が響く。
突き当たりは階段。その脇にトイレ。
ふと、突き当たりに人が立っているのに気づく。
陰になっていて、判然としないが制服を着た生徒の

★携帯ＮＡＶＩ
これも安倍氏のデザイン。現行のＰＨＳに、ペン・オペレーション機能を持たせた設定で、主にメーラーとしての機能に特化したものとなっている。

様だ。
玲音、立ち止まり、その人影をじっと見つめる。
徐々に――、見えてくる。
玲音の息、荒くなる。
判ってきたのだ。それが、少なくとも今、この現実世界で生きている者ではないという事を。
女の子の人影、ゆらりと前に出る。
その顔は曇り硝子の向こうにある様にぼやけている。

玲　音「ひっ」

玲音の方へ歩み寄ってくる女の子。
玲音、恐怖に足が竦んでいる。
何と、女の子だけではない。
壁から抜け出たかの様に、男や女など何人もの〝顔の無い者〟達がこちらに向かって歩きだしてくる。
玲音の吐息だけが廊下に響く。
無音のまま〝顔の無い者たち〟が玲音の方へ。
そして立ち竦んでいる玲音の脇をどんどんと通り過ぎていく。



ぼやけた顔のまま、少女が玲音の眼前へ！

玲　音「やだよぉ……」

目を閉じる玲音。

女の子は玲音の体を通り抜け――過ぎ去っていく。

玲音、はっと目を開けて振り向く。

そこには誰も歩く姿などない。

チャイムが鳴った。

○住宅街

わあああんんんんんん

高圧電線が風に震える。

玲音が坂道を登ってくる。

○岩倉家

玲音、家の前にトラックが止まっているのに気づき駆けだす。

運送屋の若い男（かっこいい）、玲音を見て――

運送屋バイト「ここ、君ン家？」

こくりと頷く玲音。

運送屋バイト「(安堵)良かったぁ。今下ろすからさ、ドア開けてくれる?」

玲音頷き、急いで鍵を開けドアを開く。

バイトの男子、額に汗を光らせてながら、幾つもの大きな段ボールを玄関先に運び込む。

箱には全て、人の目を意匠にした企業CI★がついている。

運送屋バイト「じゃここ、サインくれる?」

差し出された伝票に、ボールペンで『岩倉玲音』と書く玲音。

バイトの子、自分が下ろした荷物をしげしげと見入って

運送屋バイト「すげぇなあ。俺も欲しいよ」

玲音、当惑。

運送屋バイト「(伝票のサインを見つつ)これ全部あんたのだろ?」

玲　音「(小首を傾げ)判んない……」

★橘総研のマークは、安倍氏のデザイン。



運送屋バイト「ふうん、じゃあこれが何だか知らないのか」
玲　音「（頷く）」
運送屋バイト「最新式のＮＡＶＩだよ。それもフル装備の。これだけのマシン・パワーがあったらワイヤード入っても全然ストレス無く自由に動けるだろうなぁ。俺も自作マシンやってんだけどさ、全然敵わないや」
玲　音「――（微笑）そんな事――ないよ。あたし全然知らないんだもの」
運送屋バイト「すぐ判るってこんなの。じゃ、どうもー」
手を振ってトラックに乗り込んでいく男子。
黙って見送る玲音。

○同／夜

岩倉家の前に止まるタクシー。

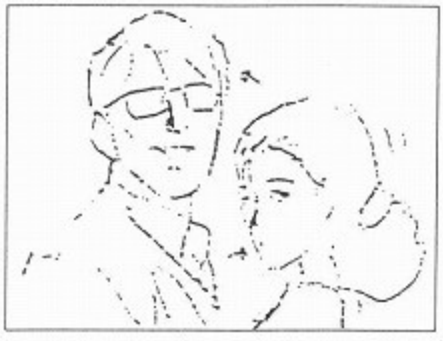
○玲音の部屋

車の音に気づき、本を読んでいた玲音、部屋から出ていく。

○玄関

玲音、階段を音も無く下りてきて――、止まる。
玄関先に積まれた段ボール。その脇で――、父親が母親を抱き寄せ、キスをしていた。
怪訝な顔でじっと見つめる玲音。
これが夫婦だろうか……？
父親、玲音に気づきゆっくりと母親を離して

父　親「届いてたな、玲音のＮＡＶＩ」
母親も玲音に気づき、ややうろたえている。
母　親「早く片づけてくださいよ。邪魔なんだから」
母親、キッチンへ。
父親、段ボールを撫で
父　親「メシを食ったらセットアップしてあげるからね。いいんだよ、このＮＡＶＩは。私が自分で使いたいくらいだ」
玲　音「（小声）今夜は……」
父　親「友達にも自慢出来るぞ」
言いながらネクタイを緩めつつ居間へ向かう父親。
玲　音「あたし、今夜……」



○玲音の部屋

開いた段ボールが脇に無造作に詰まれ、父親、玲音のデスクにハードウエアをセットしている。
玲音はやや後ろに立ってじっと見つめている。

父　親「子ども用のＮＡＶＩなんてものをいつまでも使ってはいけない。コミュニケーションというものは、人と人との関係が成熟するに合わせて、それなりの高度なシステムが必要なものだよ。判るかい？　玲音」

玲　音「――」

父親、メイン・スイッチを入れる。
ブン。仮想モニタ★が机上にスクリーンを投影する。

父　親「（振り向き）おいで」

玲音、駆け寄る。
父親、タッチキーを操作。

父　親「このマシンにレジストレーション★をしなさい」

きょとんと父親を見上げる玲音。

父　親「話しかけてごらん」

玲音、怪訝そうにマシンに向かって――

★このシーンでも未だ仮想モニタを出す事は見送られた。ＳＦ的な感覚は初期話数では極力抑えられている。

★レジストレーション
Registration 登録。現行の UNIX や WindowsNT といったOSはネットワーク利用を前提としており、ユーザはまず最初にそのマシンに触れる時、登録をする。

玲　音「ハロー、ＮＡＶＩ」

その声の波形が仮想ウィンドウに浮かぶ。

ピーッ。Ｓ「★Authorized User」

父　親「これでこのＮＡＶＩは、玲音のものだ」

玲　音「――」

○白地にビットマップフォント

Ｓ「どうして早く来ないの？」

○岩倉家／深夜

玲音の部屋の明かりが消えた。

ややあって――、玄関の扉がゆっくりと開く。

★外着をまとった玲音、そっと音を立てない様に出てきた。

坂道を駆けて下っていく――。

○深夜の街

会話の輻輳。

★Authorized User
そのマシンのOSに、ユーザが承認されたというメッセージ。

★このくだりも完成作品とは異なる。

昼間のそれより、感情が皆昂っているかの様にトーンが高い。
明滅する街の灯。
ゴキブリの様な雑踏の動き。
その中を駆けてくる玲音。

ありすの声「――それで角を右」

玲音、耳に携帯ＮＡＶＩを当てている。
見回す玲音、交差点を曲がっていく。

ありすの声「――見えた？　その地下だよ」

○クラブ・サイベリア

低周波の振幅に地下全体が揺らいでいる。
階段を下りてきた玲音、入口近くにたむろしている大学生程の若者達の目を気にして、俯く。
と――、小学生の三人連れが脇を抜けていく。

小学生１「ばーっか。そんな方法じゃ情報省★の監視センターにすぐ見つかっちゃうって」

小学生２「アタッチするだけだったら平気じゃない？」

★情報省
現実の日本では、ネットワーク事業は郵政省が司る。

小学生3（女子）「こんどあそこのゲーセンでさあ――」

こんな年下もいるのだ、とやや安堵する玲音。

と、目の前にありす達。

ありす「やっと来た来た」

樹　莉「おそいー。あたしたちもう帰ろうとか言ってたのにー」

麗　華「でもこんな時間、玲音いつも寝てるんでしょ」

玲　音「（こくりと頷き）――ごめん」

ありす「いいよ（ニコ）。学校じゃないとこでみんなと会うの、新鮮でしょ」

玲　音「（やや微笑む）」

雑踏の中を歩きながら

樹　莉「玲音さあ、夜なら夜向きな服ってもんがあるもんよ」

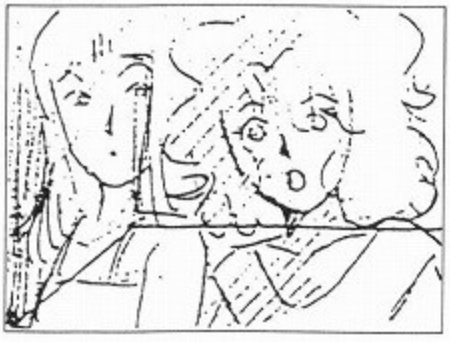
玲　音「――」

ありす「今度玲音に、大人ぽい服選んであげようよ」

麗　華「（苦笑）えー？　似合うかなぁ」

樹　莉「――けど――」

ありす「何？」



樹　莉「じゃあやっぱりこないだのって、玲音じゃなかったんだね」

麗　華「だからそう言ってるじゃないよ。玲音はあんな恰好しないし、あんな言葉遣いしないし、あんな顔しないってば」

玲音がここへ来たのはそれが理由だった。

玲　音「――あの、その子って――」

ありす「？」

玲　音「――あたしと、そっくりだったんだよね？」

樹　莉「あたし絶対玲音だって思ったくらい」

玲　音「――それ――、あたしかもしれない……」

ありす「え……？」

と、その時！　銃声がホール内に響きわたる。

悲鳴、怒号。

ありす達は脅えて体を寄せ合う。

麗　華「何よ!?」

玲音、きょろきょろと見回す。

ドゴーン!!　ドゴーン!!

再度の銃声に一斉に出口に向かって押し寄せる客達。

ありす達は押されてカウンターの方へ。

樹　莉「きゃあああああ！」

倒れる樹莉。

ありす「樹莉！」

ありすと麗華、樹莉を抱き起こす。

玲音、無人となったホールの中央を見る。

明滅するライトに照らされ、一人の男が立っていた。

冒頭の少年である。

その周囲には、少女の屍体が二体。

床にどす黒い血が流れ出している。キラキラと、店内のライトを反射させつつ、流れに従ってフォルムを次々と変えている。

じっとそれを見つめる玲音。

ありす「玲音！」

ありす達は樹莉を抱えて出口近くへ来ていた。

玲音、振り向かず。

麗　華「何してんだよあの子！」

樹　莉「――」



ありす「レイーン！」

少年、玲音を見た。

手には★タクティカル・ユニット付きのグロック。

少　年「（早口に）何で俺にこんなことさせんだよあんたに一体何の権利があるのさ俺はただ頭をクリアーにしたかっただけなんだ知らないそんなこと関係ない死んだ奴がどうして俺は関係ないあんたは傲慢なる神の俺は関係ないワイヤードは絶対にリアル・ワールドに干渉してはならない俺は関係ないあんたは誰」

玲音、じっと無表情に少年を見つめ続ける。

ありす「玲音！（麗華に）ちょっと樹莉をお願い」

麗　華「！　どうすんのよありす！」

ありす、玲音の方に走りだす（スローモーション）。

少年、ゆっくりと銃を持ち上げる。

レーザーサイトの赤い光点が玲音の足元から顔に向けて上がっていく。

ありす「れーいーん!!」

ふ、と無音。

★タクティカル・ユニット付きのグロック
レーザー照準などオプションを装着するユニットをつけた拳銃だが、テレビ的配慮から、実銃ではなくアレンジされた仮想のものと描かれた。

玲　音「（レインの声になる）どこにいたって、人は繋がってるのよ」

少　年「――」

赤い光点、玲音の顔面を通りすぎ――

少年、口を開く。その口の中に光点。

玲音の顔に、血の飛沫が点々とかかる。

フロア中央に、高校生の女の子二人、そして少年の軀が重なる様に倒れている。

★玲音に駆け寄り、抱き寄せるありす。

玲音、うっとりとありすの体温を感じている。

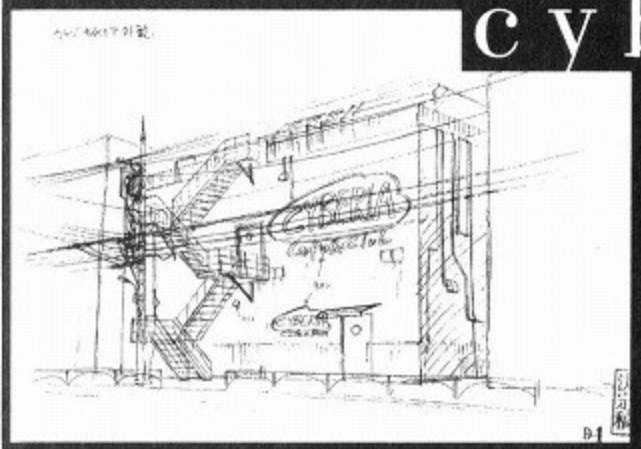
顔の飛沫が店内の明滅する明かりを反射して――

To Be Continued...

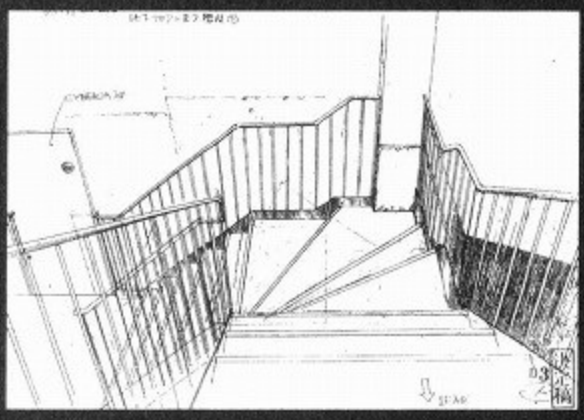
★このラストシーンもニュアンスが随分異なるものとなっている。当初コンテを見た時点では監督に異議を申し立てたのだが、監督は譲らなかった。ずっと玲音の心情を〝繋げて〟世界を創り出していた監督の計算は、後になって理解した。

cyberia
サイベリア

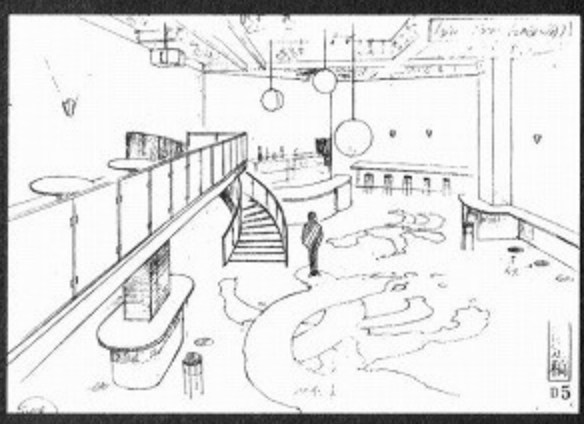
Column•01



ネット・カフェ、サイベリア。
夜には、クラブとして若者たちが集う。
地下へと向かう階段には、
飛び降り防止のネットがついている。
扉の中。ミラーボールの明かりに照らされ、
ネット・キッズたちの姿も見える。
そこには、防毒ガスマスク姿の
ハウス・ミストレスがいる。



そこは、初めて"ワイヤードのレイン"が
姿を現わした場所。
専属DJである"JJ"は、
どうやら彼女と親しいようだ。



layer:03

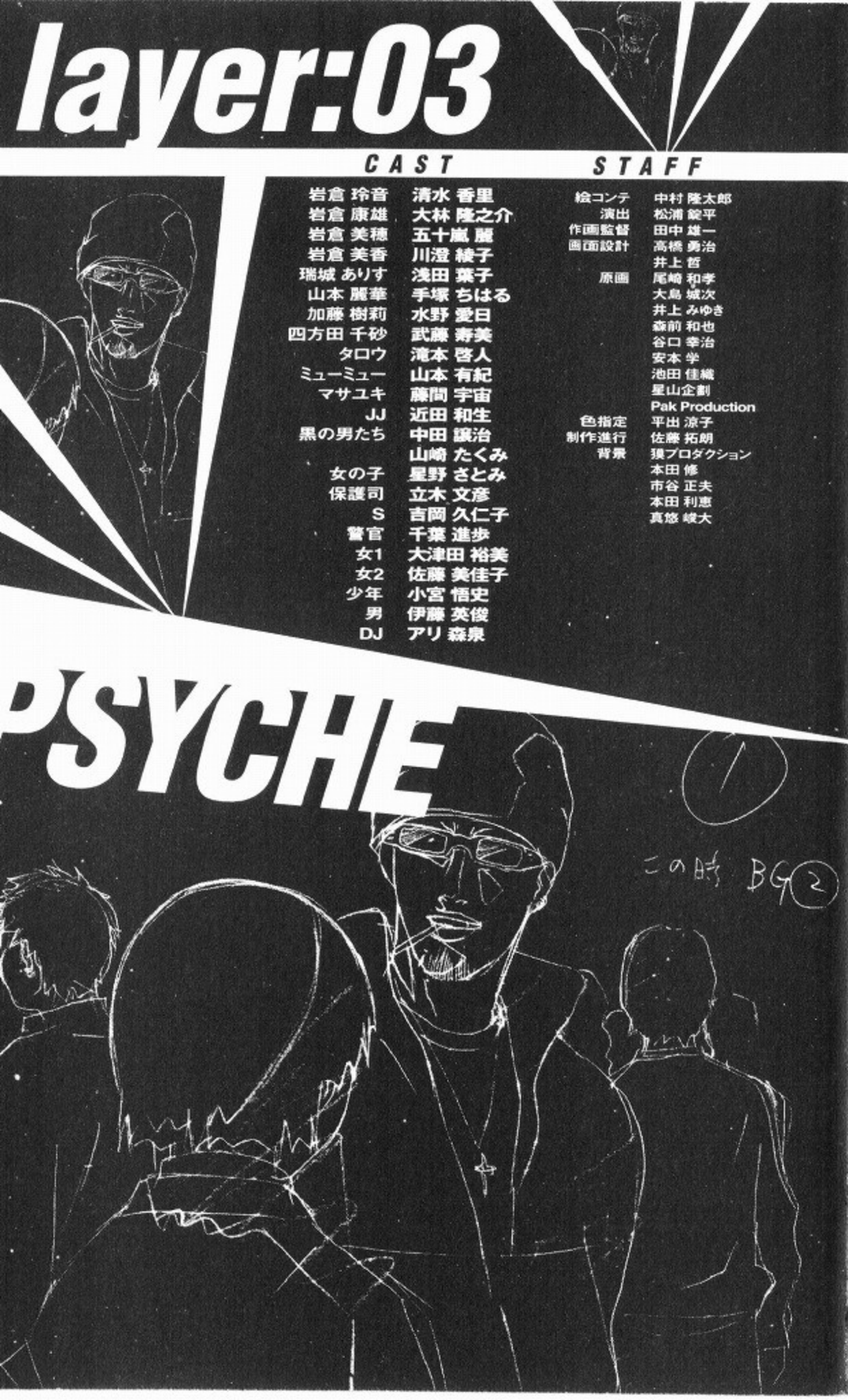
CAST

岩倉 玲音	清水 香里
岩倉 康雄	大林 隆之介
岩倉 美穂	五十嵐 麗
岩倉 美香	川澄 綾子
瑞城 ありす	浅田 葉子
山本 麗華	手塚 ちはる
加藤 樹莉	水野 愛日
四方田 千砂	武藤 寿美
タロウ	滝本 啓人
ミューミュー	山本 有紀
マサユキ	藤間 宇宙
JJ	近田 和生
黒の男たち	中田 譲治
	山崎 たくみ
女の子	星野 さとみ
保護司	立木 文彦
S	吉岡 久仁子
警官	千葉 進歩
女1	大津田 裕美
女2	佐藤 美佳子
少年	小宮 悟史
男	伊藤 英俊
DJ	アリ 森泉

STAFF

絵コンテ	中村 隆太郎
演出	松浦 錠平
作画監督	田中 雄一
画面設計	高橋 勇治
	井上 哲
原画	尾崎 和孝
	大島 城次
	井上 みゆき
	森前 和也
	谷口 幸治
	安本 学
	池田 佳織
	星山企劃
	Pak Production
色指定	平出 涼子
制作進行	佐藤 拓朗
背景	猿プロダクション
	本田 修
	市谷 正夫
	本田 利恵
	真悠 峻大

PSYCHE



○前回のフラッシュ★

どおおおんんん!!

クラブ・サイベリアの中に響く銃声。

玲音の顔に血の飛沫が点々とかかる。

玲音に駆け寄り、抱き寄せるありす。

玲音、うっとりとありすの体温を感じている――。

○プレゼント・デイ、プレゼント・タイム

警察の赤色灯、警察無線――。

夜の街――、人が無言で行き交うにも拘わらず、無数の喋り声が輻輳している。

ビルとビルの間には無数の電線。

その中の会話が漏れ聞こえ――

女の声「(オフ／囁き)――レインて子、聞いた事あるでしょ？ワイヤードのレイン――」

どこもかしこも〝繋がって〟いる。

人は誰しも、〝繋がれて〟いる。

★コンテでオミットされた。

○渋谷北警察／夜

○同／少年課

心細気に小さくなって座っている玲音。
廊下では引き取りに来たありすの両親が警察官に頭を下げている。

玲　音「（聞こえない程に小声）あ、りす……」★

ありす、気づかない。

玲　音「（もう少し大きな声で）あり――」

男の声「（オフ）君の両親は――」

ハッと前を見る玲音。精気の無いくたびれたジャージ姿の男が立っていた。

保護司「旅行にでも行ってるんか」

玲　音「え……」

保護司「君の教えてくれた電話番号にかけても、誰も出ない」

玲　音「あたし、嘘なんて言ってない――」

保護司「（嘆息）ああ、嘘とは思ってない。調べたからね。確か

★この台詞は、ニュアンスはそのままに、意味を違えて後半に移動されている。同時にありすのキャラクターをより強く出す演出がなされた。ありすの役割が後半大きくなっていく要因は、この監督コンテにもあった事に、本稿執筆時、気づいた（このコンテが上がった頃に layer:06.07 辺りのシナリオを書いている）。

かに君は岩倉玲音で、その現住所の電話番号だった」

玲　音「（怪訝）――誰も――出ない……？」

保護司「もう今夜は遅いから送らせるけどね。また話をして欲しい。連絡するから」

玲　音「――」

ありすの声「（小声）玲音！」

玲音、見る。

ありすが両親と帰るところ。小さく手を振っていた。

玲　音「――（掌を上げる）」

○岩倉家前

坂道を登ってくるパトカー。

岩倉家の前に止まり、ドアが開く。

玲音、家を見上げる。

部屋には全く明かりが点いていない。

警　官「鍵は持っているね」

玲　音「あ……、はい」

警官、パトカーに戻り走り去っていく。

○同／玄関

鍵を開け、暗い室内に入ってくる玲音。

○同／リビング

覗き込む玲音。誰もいない。

○同／両親の寝室

ドアを開ける玲音。
ベッドには綺麗にカバーがかけられている。

○同／玲音の部屋前

玲音、ドアの隙間から明かりが漏れているのに気づく。

玲　音「！」

細く蒼い光――。
玲音、脅えた顔でゆっくりと近づき、ノブに手を掛ける。



○玲音の部屋

玲　音「――」

照明の消えた部屋、その奥の机には真新しいＮＡＶＩシステムが組まれ、仮想モニタが蒼い光を明滅させていた。この家で〝生きて〟いたのはこの機械だけだった。

玲　音「――ハロー・ＮＡＶＩ」

仮想モニタに文字。

Ｓ「こんばんは、レイン」

玲音、机に寄って、椅子に座る。

おぼつかない手でキーを押していく。

玲　音「メ――ッセー、ジ……」

Ｓ「レイン宛のメッセージはありません」

玲　音「――」

感情を失ってしまった様な顔の玲音。

じっと仮想モニタを見つめる。

と――、画面の中、極く極く僅かに渦を巻いている。

見ている者が無意識下に、その混沌の中へ入り込ん

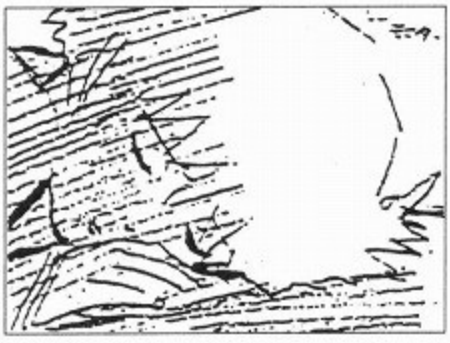
○岩倉家／朝

いくかの様な錯覚を起こさせる。
そして、その奥から声の輻輳が聞こえてくる。
男、女、子ども、老人――。
玲音はただじっと、その渦を見つめ続けている。
玲音は独りではない、そうＮＡＶＩは告げているかの様。

数時間後。
机にうつ伏せて眠っている玲音。

数時間後。
ベッドで枕を抱きしめ、眠っている玲音。

数時間後
悪夢に苛まれているのか、苦悶の顔を浮かべている玲音。



○同／階段

階下から聞こえるテレビの音。

玲音、怪訝そうな顔でゆっくりと下りていく。

○同／ダイニング★

父、母、姉が朝食を摂っていた。

玲　音「（小声）――おはよう……」

三人とも、玲音の声が聞こえないかの様。

玲　音「（やや大きく）おはよう」

誰も玲音を見ようとすらしない。

玲　音「（大声で）おは――!!」

玲音、目を丸く見開き凝視。

三人、玲音を向いている。しかし彼らの眼窩にはあるべき眼球が無く、ぽっかりと空洞になっている。

玲　音「（声無き叫び）」

血の飛沫のフラッシュ。

○玲音の部屋

★カットされたシーン。

ハッと起きる玲音。
『夢……？』

○階段

下りてくる玲音。
そっとダイニングを見る。

○ダイニング

母が一人、片付けをしていた。

母「（背を向けたまま）寝坊して遅刻なんて、中学生にもなって恥ずかしくない？」

玲音「え……」

母親、玲音を一瞥。

玲音、思わず目を落とす。

母「あら、気分が悪いの？　学校休む？」

玲音「――ううん。行く……」

玲音、部屋に戻りかけて振り向き

玲音「お母さん、昨日の夜って――」



母　「――（玲音をじっと見つめ）え？」
玲音「――いい、やっぱり」

○岩倉家前

制服の玲音、出てくる。
と、坂道のやや下ったところに黒塗りの車が止まっていた。
歩きながら玲音、その車に見入る。
米国製セダンだが、屋根には無骨なアンテナが幾つも設置されている。
窓はスモークで潰され内側を見る事は出来ない。
しかし――、玲音が見つめていると、一瞬チカっと赤い光が瞬いた。
玲音、観察されていた様な気がして、坂を駆け下りていく。

○私鉄車内

ドア前に立ってぼんやりと窓外を見ている玲音。

いつもの様に会話の輻輳が聞こえていて、玲音はそれを無視し続けている。
と――
男の声「――レイン」
輻輳する声に混じって、玲音の名を呼ぶ者がいた。
ハッとなって見回す玲音。
通勤・通学時間を外れて空いている車内。誰も玲音の事など見てもいない。
男の声「――だよ、レイン――判るね？――」
玲　音「誰……？」
必死に見探す玲音。
男の声「――独りじゃない――」
玲　音「やだ」
玲音、耳を抑え目を閉じる。
そんな事で音は遮断されず、くぐもった声がもごもごと玲音を苛み続ける。



○鷗華中学／教室

憂鬱そうな顔で教室に入ってきた玲音を見つけ

樹　莉「玲音！」

ありすら三人、駆け寄る。

玲　音「お、おはよう」

ありす「昨日、大変だったね。御免、あたしたち――」

麗　華「別にあたしたちが悪いんじゃないよ、ありす」

ありす「そうだけど、無理に連れてったのは――」

樹　莉「（玲音に）お家の人に怒られた？」

玲　音「う、ううん……」

樹　莉「そう！　ラッキーだったじゃん！　あたしんちとかもう大変で」

ありす「あれから、お家の人、来てくれたんだ」

玲　音「――うん……」

授業が始まっている。

玲音、ノートにぐるぐると執拗に渦巻きの落書きを描き続けている。

既に真っ黒になるぐらいまで――。

と――

声　「（フェード・イン）――というばかりではない。プシューケーはただのプロセッサだと捉えると全体が見えなくなってしまう」

玲音、「またか」と眉を顰める。

声　「汎用情報端末として、ＮＡＶＩは小学生にまで普及するに至っているが、ワイヤードでの活動限界はマシンに依存しているのが現状だ。プシューケーはいかなるＮＡＶＩの機能をも劇的に上げる事が出来る」

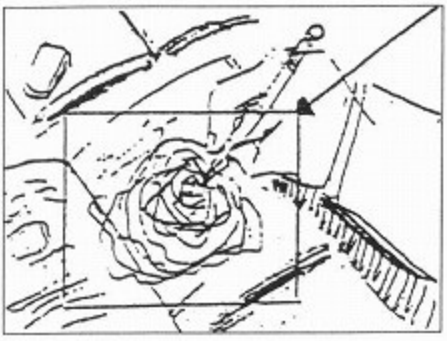
玲音、耳を塞ぐ。聞きたくない。

違う声　「（クロス・フェード）あたしはもうリアル・ワールドにはいる意味が無かったの」

はっ、と目を上げる玲音。それは千砂の声。

千砂　「（オフ）あたしはリアル・ワールドにとっていてもいなくてもどうでもいい存在だった。それが判った時、あたしは肉体を無くす事に何の怖さも感じなくなったの」

ぎゅうっ、と耳を塞ぐ玲音。



ふと振り向いたありす、玲音を見て心配そう。

違う声「――レインは誰？」

玲　音「（小さく）え……」

違う声「レインは誰？　レインは誰？」

玲音のノートの渦巻き、極く、極く僅かに回転をしている。

その中に引き込まれそうな感覚を覚えている玲音。

○玄関

下校のチャイムが鳴っている。

玲音、ありす達三人のやや後から来る。

麗　華「なーんかつまんないね」＼

ありす「（苦笑）しょうがないよー。暫くは夜、ウチ抜け出すのって超難しいし」

樹　莉「なーんかつまんないー」

ありす「――（ふと真顔）――でも、あたしたち、変だよ」

樹　莉「変？」

ありす「――あたしたち、昨日、人が死ぬをを間近に見たんだよ？

それなのに、まるで映画でも見たくらいの感覚でいる」

麗華「――だって――」

玲音、自分のげた箱に上履きを入れようと開ける。

と、何か小さな封筒があったのを見つける。

麗華「昨日の夜、確かにあたしたち、あそこにいたけどさ、何かリアリティが無かったって気がする」

三人の会話を聞かず、玲音、袋を手にとる。

樹莉「――あたしも、そんな感じかな……。ありす、そんな深刻に受け止めない方がいい思う」

ありす「そうじゃなくって、深刻に受け止められないから変なんだって――、玲音？」

玲音「（はっ）え？　あ、何……」

玲音、思わず封筒を後ろ手に隠す。

ありす「（気づき）あれ？　今のって――（ニヤ）もしかしてラヴレターとかぁぁ!?」

樹莉「うそーっ！」

麗華「ちょっ、見せて見せて見せて！」

玲音「ち、ちがうよぉ――多分……」



玲音、後ずさる。

麗　華「ケチケチしないで見せなさいよ」

執拗に迫る麗華。

だめだめと首を振る玲音。★

ありす「麗華！　そんな無理に言ったら可哀相じゃない」

麗　華「（むー）玲音のケチ」

玲　音「――」

○学校近くの道

独りになった玲音、早足で来て――、周りを見回し、人がいないのを確認。

ポケットから封筒を出す。

何か立体物が入っている。

玲音、封筒の中の物を出してみる。

それは――、1センチ四方程の集積回路。★

他には何も入っていなかった。

やや落胆した顔の玲音。

玲　音「――プシューケー……」★

★コンテでは麗華達がプシューケーを見るという芝居に変更。

★プシューケーのデザインはやはり安倍氏。それを中原氏の所属するソフトハウスSR-12Wで Light Wave 3Dにて3DCG化していたが、本篇では使われなかった（AX誌の連載では使用）。

★プシューケー
Psyche 魂、精神といった意味合いの語だが、〝サイケデリック〟の語源という方が馴染みがあるだろう。元々はギリシャ神話で、キューピッドが愛したスピリチュアルな少女の名から来たもの。

○漆黒――否、螺旋

暗い混沌が僅かに渦を巻いている。
★クロス・トークする声達。

声　1「――違うってば。あたしのヴォイス・メールが覗かれてたのよ！　信じらんないもう――」

声　2「――届いたレジュメにあった内容は、当該の条項が含まれておらず、現在対応を検討しているところです。貴社におきましては――」

声　3「――キスするのが好きなの。それだけで幸せになれる」

声　4「――こないだクラブでガキがアクセラでラリッちまって事件起こしたろ。あれで闇に流してる奴がビビっちまったみたいでよ、全然ブツ入ってこねーんだって」

声　5「――プシューケーは台湾の工場で量産されている模様です。設計したと言われているのは、ナイツと呼ばれている団体、と申しますか、いやそもそもそのナイツが実在するものなのかも判らないのです。ワイヤードにはそういった都市伝説が多く――」

★クロス・トーク
複数の会話が同時にだぶって聞こえる事象。放送業界や普通のドラマでは「やってはならないこと」となっている。
以下の様な会話は今後も多用しているが、物語のキーワードは大抵ここで最初に登場させている。



声　6「――気持ちいいよ――。死ぬって――」

声　7「僕は、加速したのを感じた――」

声　8★「――いやだ――、部屋に誰かいるの！　緑と赤の縞々の服着た、子どもみたいに小さい人が！　あたしベッドで動けないの！　ほら！　ドアのところに立ってあたしをじっと見てる！　助けてよぉぉ！」

声　9「あなたの秘密の恋人、あなたと一緒にいる写真を持ってるんです。私は商売をしたいだけです。どうです？　買って戴けないと、あなたの会社のサーバーにこの画像のデータを流しますけれど？　ワイヤード中であなたは有名になりますよ。フフフ――」

声　10「――玲音、どうしてこっちこないの？――」

○玲音の部屋／夜

ＮＡＶＩの前に座っている玲音。

仮想モニタには

Ｓ「メールが届いています――」

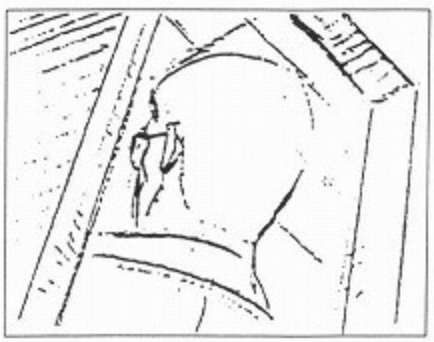
玲音「――」

★この部分は〝ありす〟役の浅田葉子さんが担当している。

玲音はプシューケーを手にしていた。
と、ドアが開く。振り向く玲音。
父「どうだい、新しいＮＡＶＩには慣れたかい？」
玲音、立って父の前へ
父「どうした玲音」
玲音、プシューケーを見せる。
玲音「これ――知ってる？」
父、チラと一瞥しただけ。
父「知らないな」
父、背を向け部屋を出ようとする。
玲音「（咄嗟に）お父さんなら！」
父、止まる。が振り向かず。
玲音「――（小声に戻り）お父さんなら、知ってるかな、って」
父「――（背を向けたまま）知らないと言っただろう」
出ていき、ドアを閉じる父親。
玲音、独りぼっちに――。

○坂道

玲音、そっと家を抜け出して出てくる。



坂道を降りようとした時——

玲　音「！」

またあの車が止まっていた。
ライトを消しているが、エンジンは回っている。
暗い室内で、チラ、チラっと赤い光が見える。
玲音、逃げる様に坂を降りていく。

○夜の街

駅から雑踏の中へ。
意味の無い会話の輻輳が充満している。
玲音、耳を抑えながら、足早に抜けていく——。

○クラブ・サイベリア入口

裏路地を入った雑居ビル。
その地下への階段が、サイベリアへの入口。
階段ではクラブ・ファッションの男女がキスをしている。
玲音、見ぬフリ★をしつつ降りていく。

★完成作では「見て見ぬフリ」ではなく、明快に嫌悪を表情に出していた。

○同内フロア

★インダストリアル・パンクの重低音が響く。

玲音、おずおずとしながら、客達の中を進んでいく。

と！　いきなり肩を摑まれ

ＪＪ「レイン！」

玲音「え……」

ハウスＤＪの男が玲音に笑いかけている。

ＪＪ「最近どうしてたんだよ。あんまし顔見なかったからよ」

玲音「――あたし……」

ＪＪ「あれー、今日はヤケに少女趣味してんじゃん」

玲音「――（目を落とす）」

玲音には判っていた。彼が言っているのは別の玲音の事なのだろう。

ＪＪ「★またレイヴやっから。★オルグ頼むぜ」

ＪＪ、ＤＪブースへ向かって歩き去った。

ほ、っと息を漏らす玲音。

ふと前のテーブルを見ると、小学生（キテる服を着

★早い時期に、シリーズの音楽は仲井戸麗市氏の、ブルージーなものになるのが決まっていたので、こういったシーンは完全にノイズ扱いになると想定していた。しかし、2nd Unit Music」とクレジットされた竹本晃氏は、ミニマルな抑圧的環境音楽をメインに、毎週毎週画面が出来てからそれに合わせて作曲するという凄まじいワークをこなす事になる。サイベリアの音楽も、エスニックなテクノなど多彩なサウンドとなった。ＪＪ役を演じたのは、実際にＤＪもしている近田和生氏で、二人のコラボレーションは二枚目のサウンドトラック盤にまとめられた。

★レイヴ
Rave「夢中で喋る」というのが本来の意味だが、1988年頃にイギリスで起こったアシッド・ハウスのムーヴメントにて野外で催されたノンストップのエレクトロニック・ダンスパーティをこう呼んでいた。

★オルグ

ている）のグループが携帯ＮＡＶＩで遊んでいた。
玲音、近づき――
玲　音「これ、知ってる？」
玲音、掌のプシューケーを見せる。
目の色を変える小学生たち
★タロウ「これ、プシューケーじゃねーのか!?」
ミューミュー「うそぉ！　あたし初めて見た！」
マサユキ「どこで買ったの？　どこで買ったの!?」
玲　音「――えっと、買ったんじゃなくって――」
タロウ「いいなぁ。これ入れたらこいつ（ＮＡＶＩ）でワイヤードでフル・アクセス出来るんだぜ」
マサユキ「フル・アクセス！　いいよなー」
玲　音「これ、どうやって使うの？」
ミューミュー「ダッさー。そんなのも知らないの？（くすくす）」
マサユキ「ねえ、これ売ってこれ売って！」
タロウ「ばか。買えるかよお前が。（玲音に）ＮＡＶＩ、何使ってんの？」
玲　音「よく判んないんだけど――、タチバナの多分、一番新し

Organize「組織する」という意味で、団塊世代であると、政治的な意味が強く感じられるだろうが、クラブ・カルチャー周辺では、イベントの主宰をするといった意味で多く使われる。

★タロウ、マサユキのキャラクターの原型は、私の映画処女作『TARO!』(91)の主人公からきている。ミューミューは『lain』で創った名前。

い奴」

三人、顔を見合わせる。

マサユキ「すっげー！」

タロウ「あのさ、それ、自分で内部にアクセスした事ある？」

ううん、と首を振る玲音。

タロウ「だろうな……。あんた中2？　中3？」

玲　音「2」

タロウ「なら情★報基礎は習ってんだろ？　ＮＡＶＩのマザーボードの基本的なレイアウトは教科書に載ってる」

頷く玲音。

タロウ「こいつ★はメインのプロセッサの裏側にコネクトするんだ。そこで本来の情報をインターセプトして勝手に動作する。（ニヤ）作業自体はプラモ作るよか簡単だよ。静電気だけ気をつければね」

玲　音「――そう。ありがとう」

玲音、去ろうとすると――

タロウ「待ってよ」

振り向く玲音。

★中学校でコンピュータの授業はあるが、マザーボードのレイアウトまでは教えていない、と思う。

★コンテでは、この台詞はマサユキに振られ、タロウはじっと玲音を見つめているという芝居になっている。当然これは後の展開を踏まえての演出（今話執筆時は、この三人はlayer: 05で死なせるつもりだった）。

プシューケの取り付けについては、後にAX誌の連載でより詳細な説明を書いた。一般的なPCのマザーボードのチップセットNorth Bridgeに上から被せる形で装着するというもの。

タロウ「情報はタダじゃないんだぜ、ワイヤードでも、リアル・ワールドでも」

玲　音「――えっと……」

マサユキ「幾ら貰う？　幾ら貰う？」

タロウ「（ニヤニヤ）あんた、レインでしょ」

玲　音「――あたしの事、知ってるの」

ミューミュー「えええっ!?　この人がレインー？　うそー。全然話と違うじゃないー」

タロウ「俺、前に一回見てるんだ。ワイヤードでね。そん時は今と全然違ってたけどな」

玲　音「あたしを――ワイヤードで……？」

タロウ「ワイヤードではリアル・ワールドと違う人格を装うってのはまあ普通だけどさ、ちょっと極端だね、あんた」

玲　音「――あたし、何をしてあげたらいい？」

タロウ「（ニヤ）一回、デートしてよ」

ミューミュー「（ムカ）ばか……」

玲　音「――」

タロウ「今の人格じゃヤだぜ。あのイッちゃってるレインの方で

だよ」

玲音、表情を顔から無くし、冷徹に少年を見つめる。

タロウ「――、じょ、冗談だよ」

玲音、背を向け店から出ていく。

○坂道／翌日夕刻

風が電線を震わせている。

坂道を登ってくる――玲音の姉・美香。

黒い車が止まっているが、気にも留めず。

○岩倉家前

美香がやってくる。と、ドアの前に二人の男が背を向けて立っていた。

美　香「？……」

背の高い二人の男★、全身黒づくめ。美香の足音が聞こえている筈なのに、振り向かず。

美　香「（やや脅え）あの……、ウチに御用ですか？」

男達、振り向かず。

★全身黒づくめの無個性な二人、乃至三人の男――。UFOフォークロアに登場するMIB（Men In Black）のイメージを借りている。MIBについては、UFO関係の本を参照されたい。
シナリオでは明確に〝MIB〟と表記していたが、同名のコメディ映画が公開されてしまったので、クレジット等では「黒の男たち」などと変更された。

美　香「――どなたですか……？」
と、ゆっくりと一人が振り向く。
美　香「！」
その目にはビデオアイ・ゴーグルが装着されていた。
赤い光が明滅している。
もう一人も振り向く。
まるで双子の様にそっくりなその男の目にもゴーグルが。
美　香「――（勇気を奮い）警察呼ぶわよ」
ＭＩＢ１「――あなたは私達と会っていない」
美　香「（混乱）え……？」
ＭＩＢ２「何故なら私達は今、ここにいないから」
そう言って二人、ゆらりと歩きだして美香の方へ。
美　香「（脅え）やだ……」
しかし、二人、美香の脇を抜けて車の方へ歩いていく。
唖然と見送っていた美香
美　香「――な、何よあいつら……」

★この layer 執筆時は、未だMIBのキャラクターはデザインされておらず、無個性な存在として描いている。岸田氏がキャラを上げて以降、二人にはダイアローグ上でも個性を与えている。

○同内／階段

ダイニングで美香が母親に報告している声。

美　香「（オフ）今度来たら絶対警察呼んでよ!?　聞いてる？　ママ！」

母親、小声で何か答えた様子。

憮然とした顔で階段を上がっていく美香。

○玲音の部屋前

通りすぎて自分の部屋へ入ろうとした美香、ふと玲音のドアの隙間から光が漏れているのに気づく。

美　香「？」

○玲音の部屋

ドアを開けて中を見た美香、愕然。

美　香「なっ――何してんのよ玲音」

玲音の机の周りには何冊もの雑誌や本。工具、チューブ類。



そして解体されたＮＡＶＩを前に、玲音がぺたりと座り込んで図面を見ていた。

美　香「玲音！」

玲★音、ゆっくりと美香の方を見て――

玲　音「（微笑）お帰り、お姉ちゃん」

To Be Continued...

★完成作品では、玲音はスリップ一枚になっており、「静電気がダメなんだって」という台詞と共にシリーズ屈指の名シーンとなった。
余談ながら私も、最初に買ったMacintoshに自分でメモリ増設をした時は下着姿になったのだけれど（しかも失敗している）、最近の電子パーツはそれほどデリケートではないらしい。

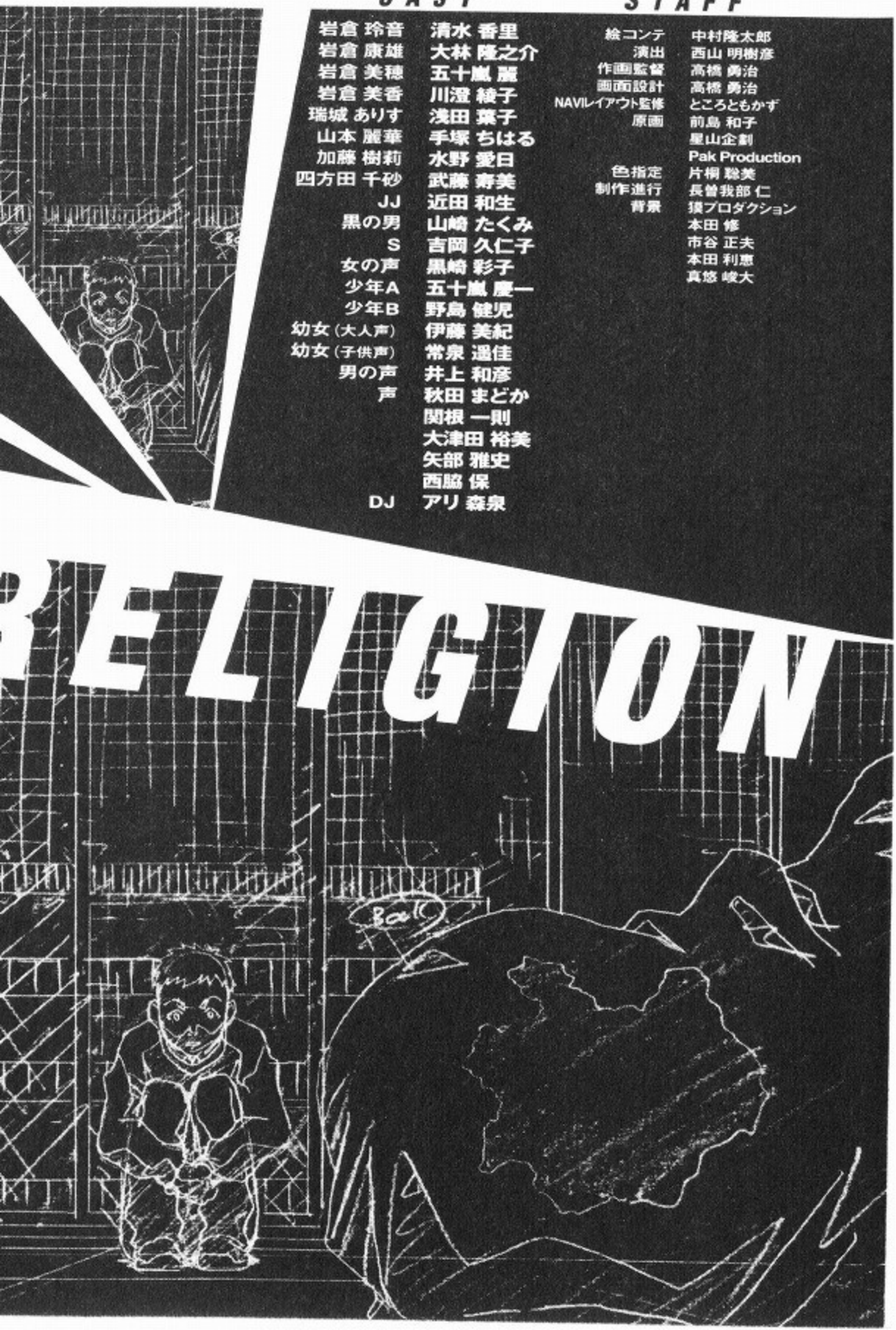
layer:04

CAST

岩倉 玲音	清水 香里
岩倉 康雄	大林 隆之介
岩倉 美穂	五十嵐 麗
岩倉 美香	川澄 綾子
瑞城 ありす	浅田 葉子
山本 麗華	手塚 ちはる
加藤 樹莉	水野 愛日
四方田 千砂	武藤 壽美
JJ	近田 和生
黒の男	山崎 たくみ
S	吉岡 久仁子
女の声	黒崎 彩子
少年A	五十嵐 慶一
少年B	野島 健児
幼女（大人声）	伊藤 美紀
幼女（子供声）	常泉 遥佳
男の声	井上 和彦
声	秋田 まどか
	関根 一則
	大津田 裕美
	矢部 雅史
	西脇 保
DJ	アリ 森泉

STAFF

絵コンテ	中村隆太郎
演出	西山 明樹彦
作画監督	高橋 勇治
画面設計	高橋 勇治
NAVIレイアウト監修	ところともかず
原画	前島 和子
	星山企劃
	Pak Production
色指定	片桐 聡美
制作進行	長曽我部 仁
背景	猿プロダクション
	本田 修
	市谷 正夫
	本田 利恵
	真悠 峻大



○プレゼント・デイ、プレゼント・タイム

夜の街――、人が無言で行き交うにも拘わらず、無数の喋り声が輻輳している。

わあああああああああんんんんん

ビルとビルの間には無数の電線。

その中から漏れ聞こえる声――

女の声「（オフ／囁き）――親なんていらいない。人間なんて、たった一人なんだよ。誰とも繋がってなんか、ない――」

どこもかしこも〝繋がって〟いる。

人は誰しも〝繋がれて〟いる。

○岩倉家／夜

玲音の部屋に明かりが灯っている。

○玲音の部屋

前回よりも更に混沌となっている部屋。バラされたＮＡＶＩと、そのパーツ、周辺機器、ケーブル、デバイス・ボード――。

その中にぺたりと座り込んでケーブルを結線している玲音。特に感情は見せず、淡々と作業をしている。
ドアが開き、父親が覗いている。
しかし玲音は気づいているのか、そうでないのか、振り向かない。
★しばらくじっと玲音を見つめていた父親、そっとドアを閉じる。

○ダイニング

冷蔵庫を開け、ミネラルウォーターのボトルを出そうとしていた美香、半分残ったワインのデキャンタを見つけ、背後の母親を気にしつつ、こっそり飲む。
父親が降りてきた。

母「――どうだった?」
父「――」

父、黙ってリビングのソファに座り、新聞を読み始める。

美香「玲音、おかしいよ。ま、今日に限った事じゃないけど」

★このシーンの康雄の芝居は、完成作品ではかなりエモーショナルなものになっている。



父、美香を見て

父「いや、おかしくはないんだ」

美香「何よそれ」

母「美香。お父さんに言葉遣いが悪いわよ」

美香、唇を尖らせ、階段を駆け上がっていく。

母、父の脇に立つ。

母「――そうなのね……」

父、母の腰に手を回し――

父「そうなんですよ」

母、父の頭にそっと掌を這わせ――

○団地の廊下

ダン！

若い男が必死の形相で廊下を走る。

背後から何かが追っているらしく、しきりに気にしている。

高校生「はあっ、はあっ、はあっ――」

突き当たりのドアの前で止まる男。震える手でポケ

ットをまさぐり、鍵を探している。

高校生「あっ」

チャリン！　鍵が床に落ちた。

慌ててしゃがみ込んで拾い、ふと背後を見る。

高校生「わあああっ！」

廊下の奥、暗いその先に、ぼんやりと立つ白い人の影。幼い幼女の様だ。

脅える男、必死に鍵を鍵穴に入れようとするが、手が震えて中々入らない。

高校生「な、なんだよう……、くっ、くそっ！」

堪えられず、また振り向く少年。

ドン！　いつの間にか、かなり接近してきていた。

しかし依然幼女の顔は影の中。

高校生「わあああっ！」

再びドアに向かい、鍵を開けようとする少年。

と――、少年の顔のすぐ脇に白い小さな手が――

高校生「！」

少年の脇から、背が届く筈がないのに、幼女の顔が



被さり――

幼　女「（成人女性の囁き声）ガ★ッチャ」

高校生「！」

○団地外観

少年の悲鳴が響く。

○鷗華中学外観／翌日午前

チャイムが鳴った。

○同／教室

授業を終え、出ていく教師。

生徒達のリラックスした顔。

樹莉、ありすのところへ来て

樹　莉「次の時間、ホームルームなんでしょ？　ラッキー」

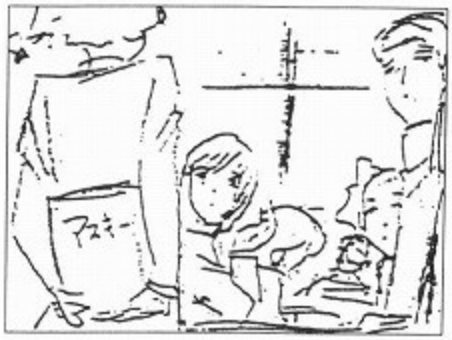
麗　華「（来て）臨時の職員会議なんて変だね」

ありす「（思案）――やっぱり、あれホントなのかな……」

麗　華「あれって？」

★ガッチャ
Gotcha!"I've got you!"の簡略形。
鬼ごっこでの「つかまえた！」

ありす「三年の男子が自殺したって――」
樹　莉「じ、自殺……」
ありす「ウチの学校だけじゃなくって、最近何人も――噂だけどね……。玲音？」
背を向けていた玲音、振り向く。
ありす、ふと怪訝な顔。玲音、前よりも明るい顔になっている。
玲　音「なあに」
ありす「玲音が聞いてる訳、ないよね……」
玲　音「自殺の事？」
麗　華「！　知ってんの、あんたが」
樹　莉「うそー」
玲　音「（微笑／小さい声）ていうか、あたしも聞いただけ」
ありす「どこで……？」
玲　音「ワイヤード」
ありす「あっ、もう新しいＮＡＶＩに慣れたんだ。今度あたしにも見せてよ」
玲　音「うん、いいよ。でも、ちょっと改造してるの」



樹　莉「改造ー？　玲音てば、そんなハッキー★な趣味あったっけ」
麗　華「――（じっと玲音を見つめ）、最近、ちょっと変わったね、あんた」
玲　音「――そう？」
ありす「――」

○ショピング・モール

モダンなアーケード。小ぎれいな店が並ぶ。
その中を、ワッフルを食べながら歩くありす達。
玲音もいる。

ありす「――で、ワイヤードじゃどんな噂になってるの？」
玲　音「――えと……、何かゲームなんだって」
麗　華「ゲーム？　ネットワーク・ゲームの事？」
玲　音「よく判んない。あたしやってないから。でも――、死んだ子達って、みんなそれにはまってたって」
樹　莉「男子って好きだよね、そーゆーの」
ありす「ふうん……。ゲーム……。でもどうして……」

玲音、残ったワッフルを急いで口に押し込み、手を

★八ッキー
Hacky Hacker の転用。
このシーンで玲音が持っている雑誌は『Super ASCII』誌か『さぺ』誌だと設定の人に言った記憶があるが、画面では『Hacker's Heaven』というオリジナルの雑誌表紙が作られていた。

スカートで払う。

ありす「（苦笑）そんなに急に食べたら喉につっかえるよー」

樹　莉「あははは。ホント」

玲　音「（照れ）――だ、だいじょぶ」

やっと嚥下した玲音――

玲　音「あたし、先に帰っても――いい？」

麗　華「いちいち断んなくたっていいけどさ」

ありす「何か用事？」

玲　音「早く帰って、ＮＡＶＩを組み上げたいの。まだちゃんとしてないから」

樹　莉「ふーん。友達よりマシンが大事か」

玲　音「（当惑）え……」

ありす「樹莉、よしなさいよそういう苛め方」

樹　莉「別に苛めてないじゃん」

ありす「（玲音に）玲音、完成したら、見せてよね」

玲　音「（はにかみ）うん」

玲音、駆けだしていく。

ありす「――（呟く）確かにあの子、変わってきた……」



と――、その脇を通り抜けていく母子。
その幼い娘は――、あの団地に現れた幼女だった。
しかし今は、極く普通のあどけない笑みを浮かべている――。

○玲音の部屋

取り敢えず、組み上がったらしい。未だ周辺は雑然としており、電線やパイプも剝き出しのまま。

玲　音「ログイン、玲音」

ぴっ。

S「Authorized」

玲　音「メール」

モニタにずらっと到着メールのアイコンが並ぶ。
じっと見つめていた玲音、その内の一つをセレクト。

S「Voice Mail」

若い男の声「――こんにちは、レイン」

玲音、立ち上がり、脇の周辺機器の調整を始める。
声は無頓着に流れ続ける。

声　「君がくれた質問は僕一人じゃ解決出来ないので、僕の研究室の仲間に聞いてみた。もし君が本当にプシューケー・プロセッサを持っているのだったら、多分君の予想通り、発振はヴァリュアブルに設定すべきだ。NAVIのマザーは大体どこの製品でも規格が統一されてるんだけど、多少の仕様差はあるからね」★

玲音、聞き流しつつ作業に没頭。

声　「成功を祈ってるよ。じゃあまた何かあったら聞いてくれ」

玲音、メイン・モニタの前に来て、椅子に座る。

暗い画面には螺旋――。

○クラブ・サイベリア

重低音の非音楽が轟音をたてて響く。

DJブースで、CDをチョイスしていたハウス・DJのJJ。

レインの声「JJ！」

JJ、顔を上げず

JJ「あー？」



★この玲音にサジェストを与える技術畑の若い男という存在は、プレイステーション版に重要な役割で登場するキャラクターと実は同一のつもりで書いている。テレビシリーズではこの後一回登場して終わりとなった。

レインの声「ガキんちょ達がハマってるネット・ゲーム、知ってる？」

ＪＪ「あー、ファントマ★ねー。よしなって。あんたみたいな〝大人〟がやるもんじゃねーよ」

ニヤっとして前を見るＪＪ。

ＪＪ「あれ……？」

誰もブースの前にはいない。

ＪＪ「――俺も空耳聞く様になっちまったかよ……」

○団地の屋上

同じデザインの建物が不条理に立ち並んでいる。

そのうちの一つの屋上。

取り込み残された洗濯物がパタパタと夜風にはためいている。

バッ！　シーツを次々とめくり走る中学生の少年。

少　年「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ――」

必死に何かから逃げている。

★ファントマ
PHANTOMa 同名のクラシック映画があり、その主人公は怪盗だが、ここでは本来の亡霊 Phantom からのイメージを狙っている。
実はこの名は、『～サイバーランド』にて、シナリオを書いていながら、諸般の事情でオミットされたエピソードのサブタイトルだった。

少　年「俺は――俺はもう止めたんだからなっ！　関係ねぇよ！」
語調とは裏腹に懇願する様なトーン。
広い空間に出る少年。
無機的なコンクリートのステージ。
はっと振り向く少年。

その少年のヴィジョンは、湿った石壁のダンジョンに見えている。
暗がりの向こうからぼーっと光る人間が近づいてくる。

少　年「わあああっ！」
背を向けよろける様に駆けだす少年。
持っていた携帯ＮＡＶＩを床に叩きつける。
ガシャン！
振り向かず走る少年。

ごおおおおおおんんんんん



ダンジョンをつき進む少年の視点。
行けども行けども暗黒の迷宮。
少　年「ここはワイヤードじゃねーんだぞ！　何で――、何でこんな――」
レインの声「待って！逃げないで！」
少年、見回す。
少　年「だっ、誰だよ！」
ばおおおおおんんん
いつしかそこは広大なドームの中。
少　年「お前もPK★か!?　助けてよ！」
レインの声「あたしはまだそこまでいけない」
少　年「（泣きべそ）何なんだよお前は！」
頭を抱え、走り出す少年。

バン！
少年、眼前の光景に愕然、立ち止まる。
何も無い筈の前方に、まるでガラスがあるかの様に人の手形が幾つも幾つも――。

★PK
Player Killerの略。一世を風靡したネットワーク・ゲーム『ウルティマ・オンライン』で有名になった存在。ゲーム本来の筋から離れ、仮想世界内にて他のプレイヤーを殺す目的のみに専心するプレイヤーの事。

少　年「ふっ――ふざけてんじゃねーよぉぉぉ（泣く）」
　戻ろうと後ずさる少年。
　と――、その肩に触れる白く小さい手。
少　年「！」
　振り向くと――、幼女（前のとは違う）の顔が何故か同じ目の高さにあった！
少　年「うぐっ――ぁぁ……」
　白い幼女、目を見開く。その眼窩にはあるべき眼球が無く――
　口を開いた。くわぁ……。
　少年、必死に目を閉じ、何も無いのに銃を撃つ構え。
少　年「ブレット・チャージ！　ゲージ5！」
　トリガーを引く仕種。
　と！　あたかも銃がそこにあるかの様に閃光と轟音。
　ガン！　ガン！　ガン！
少　年「くたばれ！　くたばれ！　くたばれ！」
　虚空に浮かんでいた白い幼女に弾着！　虚ろな孔が次々と開いていく。



少　年「くたばれくたばれくたばれくたばれ」
ガン！　ガン！――
そこで弾が切れた。

ぱたぱたぱた……。
風に飛ばされた白いシーツが屋上中に散らばっている。
ぱたぱたぱた――。
その内の一枚、赤い。否、赤く染まりつつある。
床に体育座りして膝を抱え嗚咽を漏らしている少年。
目を上げると――
そこにはシーツに覆われた、小さな屍体。
死者となった幼女の白い掌。

空が蒼くなり始めた――。
ぱたぱたぱた……。
数時間前と全く変わらない光景。

否――、少年と幼女から離れたところに、ぽつんと
玲音が、哀しそうな顔をして立っていた。

○ダンジョン

3DCGでぐりぐりと進む主観画面。

少　年「（オフ／訥々（とつとつ）と）――ファントマは、専用の★クライアント・アプリケーションがあって、それを使ってワイヤードの中で戦うっていうゲームです……。
僕はちょっと前に、非合法なサーバーからそのアプリをダウンロードして遊んでました。
そのゲームは、僕らにはダンジョン型のアクション・ゲームっていうインターフェイスだったんですけど、幼稚園で使ってる、ちっちゃい子用の鬼ごっこゲームと何故かリンクしてたみたいで……。
僕――、ただ怖かっただけで――、ちっちゃい子だったなんてそんなの――。
僕、悪くないですよ。だって全然知らなかったし――」

★クライアント・アプリケーション
ネットワーク・ゲームは、仮想世界を形成するホスト側のサーバー、及びそれを運用するソフトと、ユーザ側のソフト双方で構成される。

○玲音の部屋

ＮＡＶＩのモニタにはファントマの起動ロゴが浮かんでいる。

ピッ。Ｓ「メールが届きました」

玲　音「開いて」

声　「――やあレイン。君がファントマなんてものに興味があるなんて知らなかったぜ（苦笑）。

一応調べてみたけど、どうも判らん。いや、ベースになったゲームはワイヤードでは珍しくも無いタイプで、多分それを改造しただけだと思う。問題はプログラム同士を複合させるという部分だ。プロトコル★に変な穴があるみたいなんだ。僕達の間では、これもナイツの仕業じゃないかって」

玲音、無表情のまま読出を止める。

玲　音「ナイツ……」

父の声「玲音」

はっ、と振り向く玲音。

父がいつの間にかすぐ背後に立っていた。

★プロトコル
Protocol 取り決め。規約。『lain』テレビシリーズでは最も重要なタームとなるが、ここが最初の登場。

玲音「な――に？」
父「随分慣れてきた様だね、ワイヤードとの付き合い」
玲音「――うん……」
父「一つだけ、忠告しておこう」
　まるで父ではない様な言い方。
玲音「え……？」
父「ワイヤードはあくまでも情報を伝達し、コミュニケーションをする為の空間。リアル・ワールドと混同してはいけない」
玲音「――」
父「忠告の意味、判るかな」
玲音「――（アルカイックな笑み）違うよ」
父「（怪訝）――え？」
玲音「そんなに境界って、きちんとしてないみたいだよ」
父「――」
玲音「もうすぐ中に入れるんだよ。フル・レンジ、フル・モーションであたしをメタファライズさせて――」
父「そんな事、いくら最新でも民生用のＮＡＶＩでは――」

★この説明は、『～サイバーランド』のそれを流用している。仮想世界に完全な姿を現出させるという程度の意味。

玲　音「（くすっ）出来るの。改造したから」
父「――（愕然）プシューケー・プロセッサ――、まさか。しかしどうやって手に入れ――」
玲　音「心配しないで。あたしはあたし」
父「――（能面の如き顔に戻り）そうかな……」
　父、出ていく。
玲　音「――」
　アルカイックな笑みで見送っていた玲音、表情を消して――、インターフェイスに向かい操作。
　周辺機器のファンが低く唸る。ＬＥＤがチカチカの明滅。
　モニタ内の螺旋、生き物の様に蠢き――
　それを背景に、★コンフィグレーションのテキスト表示がスクロールしていく。

○暗黒の螺旋

　泥の様にぐねぐねと渦を巻くカオス。
　無数の声がまた輻輳している。

★コンフィグレーション
configuration OS、ハードウエアの設定という意味。

声　1「――ずっと待ってたのに――どうして、どうして来てくんなかったのよ――」

声　2「――お前を呪ってやるお前を呪ってやるお前を呪ってやるお前を――」

声　3「――このメールは幸せのメールです。あなたはこのメールを受け取った事で誰よりもチャンスに恵まれ――」

声　4「――している という事である。つまりナイツはそれ自体が実体として存在しているのではなく、ネットワーク内に於ける思想そのものなのだ。言わばワイヤード世界にて蔓延しつつある宗教だと言い換えてもいい――」

声　5「――付き合って、くれませんか？　あの、もし彼氏とかいたら御免なさい。もしその人の事を今でも好きなんだったら僕は諦めます。でも、でももし――」

声　6「――コード・J946@548AA974644。参照願います」

声　7「――誰でもいいです。このメールを受け取った人、あたしを助けて下さい。信じられないかもしれないですけどあたし、ずっと跟けられてるんです」



声　8「〈意味不明な言語〉」
声　9「――レイン、どうして早くこっちに来ないの？」

○玲音の部屋

はっ、となる玲音。
赤い光点が部屋の中を蠢いていた。
何が起こっているのか判らない玲音――、
それは窓のカーテンの隙間からだ。
玲音、そっと窓に近づき、カーテンの隙間から下を覗く。

玲　音「！」

黒い車が家の前に停まっており、二人の男がこちらを見上げていた。
二人とも例のゴーグルを目に嵌めている。そのゴーグルのビデオアイ・レンズ脇からレーザー光がこちらに向けられていたのだった。

玲　音「――」

二人の男、玲音の姿を認知し、何か会話をしている。

玲音「――（囁き）あっちへ行け」

男の一人が玲音を再び見上げた。ギラギラと赤く光目――。

玲音「――（やや大きく）あっち行け！」

ビシッ。

男のゴーグルのレンズが突然破砕。

聞こえないが、男は小さな悲鳴を上げ、目を抑えてうずくまる。

玲音「――」

玲音の背後のＮＡＶＩ、何か凄まじい計算をしているらしく、唸りを上げている。周辺機器が一斉に動作。

仮想モニタにはウォーニングの表示が明滅。

Ｓ「Intruder interupted」★

それはワイヤードを通じた玲音による霊的防御だった。しかし玲音にその自覚は未だ無い。

目を奪われた男は、もう一人に車へ乗せられ、やがて車は走り去っていく――。

★Intruder interupted
「侵入者を阻止しました」の意。

玲音、カーテンを開け、窓を開ける。
夜の冷たい風が入り込み、玲音の頬にサディスティックに触れる。
ひゅうううううう
住宅街の無数の電線が風になびいて音を立てている。

To Be Continued...

layer:05

CAST

岩倉 玲音	清水 香里
岩倉 康雄	大林 隆之介
岩倉 美穂	五十嵐 麗
岩倉 美香	川澄 綾子
瑞城 ありす	浅田 葉子
山本 麗華	手塚 ちはる
加藤 樹莉	水野 愛日
四方田 千砂	武藤 寿美
デウス	速水 奨
タロウ	滝本 啓人
女の子	香川 佳子
男	八戸 優
人形	岡田 ルミ
アナウンス	小林 研二
女子高生	大津田 裕美
	AKIKO
神像	佐藤 政道
DJ	アリ 森泉

STAFF

絵コンテ・演出	村田 雅彦
作画監督	関口 雅弘
NAVIレイアウト監修	ところ ともかず
原画	大関 紀子
	田村 篤
	古川 達也
	米林 宏昌
	高崎 由利
	倉田 美鈴
	えんどう 麻未
	青木 智由紀
	柳野 龍男
	Pak Production
色指定	ますだ よしまさ
制作進行	下井 美奈子
背景	スタジオ 美峰
	戸田 真理子
	篠原 理子
	築山 佳奈子
	丸山 英二
	中谷 美知留
	平間 由香
	東地 和生
	高須賀 真二
	中鉢 香織
	益城 貴昌

DISTORTION

○プレゼント・デイ、プレゼント・タイム

夜の街――、人が無言で行き交うにも拘わらず、無数の喋り声が輻輳している。

わあああああんんんんん

女の声「もしそれが聞こえているなら、それはあなたに語りかけている。もしそれが見えるなら、それは、あなたの……」

ビルとビルの間には無数の電線。

どこもかしこも〝繋がって〟いる。

人は誰しも〝繋がれて〟いる。

○渋谷の街（実写）★

それは、アニメーションよりも、もっと非現実的な風景であり、人々の動き。

男のモノローグ★「――人はもはや進化をしない生き物ではないのか。ガンの発生率が他の動物に比べて極めて少ないネオテニーである人類は、最早進化出来ないとする学説がある。もしそれが本当だとしたら、何と愚劣な生き物に進化してしまったものだ……」

★実際にはデジタル加工したアニメーション背景で構成された。

★いくらアドリブ的に書き進めてはいても、このモノローグの主がこのシリーズでどういう存在として登場するのかは決めていた。ただ、彼の思考ロジックは、このダイアローグを書いた時に決定されたとは言えるかもしれない。

★ネオテニー
Neoteny. 幼形成熟。体が未成熟なまま成長すること。ウーパールーパーはその典型。

徐々に実写はアニメーションの世界へ

男のモノ「自分達を動かしている力の事も知らず、ただ欲望を満たすだけの為に、肉体を維持している。つまらないとは思わないか？　人間なんてそんなものでしかないんだ」

街の中に――、立つ玲音。

男のモノ「そんな惨めな人間でい続ける必要はないんだ。抜け出す為の出口だけは、人間はやっと生み出せたんだからね」

玲　音「――何の、事……？」

男の声「ネットワーク。ワイヤードの事さ、玲音」

玲　音「あなたは、誰？」

英利の声「僕は、神様だよ」

玲　音「――」

街ノイズが玲音を包む――。

○マンションの部屋

ワイシャツ姿の美香が、制服のスカートのジッパーを上げたところ。

鏡を見て、手櫛で髪を整える。



その背後で、やや美形の若い男（Tシャツ姿）がベッドから起き上がる。

男　「何か食い行く？」

美香「――」

美香、返事をせずリップを唇に塗っている。

男　「ねぇ、腹減らねー？」

美香「――」

美香、鏡の自分を最終チェック。

床に置いてあった学生鞄を持ち上げ

美香「じゃーね」

男　「（欠伸）今度プール行かねー？」

バタン。ドアが閉まった。

男、欠伸。

○フラッシュ／テキスト・スクロール

膨大なテキスト（英文）が画面一杯にスクロール。

以下、適宜挿入。

○住宅街

わーん、わーん……。
無数に空を縫う電線が風に身を震わせ、共振して嫌な音を出している。

○フラッシュ★／マンションの部屋

キスをしている美香と男のシルエット。

○渋谷の街

スクランブル交差点を渡る雑踏の中に、美香。
駅に向かって足早に歩いている。
と――、美香、立ち止まる。
すれ違った者の姿を目で追う。
雑踏の隙間隙間で見え隠れする――

美　香「玲音……？」

玲音、俯き加減に制服のまま、歩いていた。
その時！
雑踏の中に車が次々と突っ込んでくる。

★ここなど、美香のフラッシュバックはコンテでかなり整理された。



阿鼻叫喚。
（人にぶつかる瞬間は見せない）
怒号、悲鳴――。
サイレンの音――。

○玲音の部屋／過去★、という事にしておいて

ベッドと勉強机以外何もないガランとした部屋。
玲音（現在と同じ背格好だが、幼女の衣服）、ペタリと床に座り、目の前のジェニー人形と対峙。

玲　音「（幼い感じで訥々と）おはなし、して？」
まるでそこは、バイオスフィア★実験場の中に設えられた、ティピカルな子ども部屋。
窓の外はずっと夕暮れ。

玲　音「おはなし、して？」
ジェニー★人形、瞬く。

玲　音「おはなし、して？」

ジェニー「（大人の女の声）どんな話を聞きたいの？　玲音ちゃん」

玲　音「うーんと……、うーんと……、あたしがしらないこと」

★こんな表記もないものだが、このlayer::05では、通常タブーとされる、ドラマ内の時制を崩すという試みをする意図があった。この柱の表記は、そのステートメントの意を込めたつもり。

★バイオスフィア
Biosphere　地球の自然環境から完全に隔離し、その閉鎖空間内にて擬似的生態系を作り出して何年にも渡り、人が生活するという、アメリカで実際に行われた実験。しかし完成作では、玲音の部屋の過去時制が舞台となった。

★ジェニー人形
ジェニーは商標であり、そのまま使える筈もない。ここではイメージとして書いている。

ジェニー「あなたが知らない事は存在しない事だわ。存在しないお話なんて、あたしは出来ないの。判ってるでしょ」
玲音「……」
ジェニー「じゃあこういうのはどうかしら。出来事というのは、必ず預言がまずあるものよ。出来事は、預言があって初めて現実化するの」
玲音「？　だれ？　だれがよげんをするの？」
ジェニー「……」
ジェニーは人形だ。喋る者ではない。

○画面一杯に文字

★プッシュ型ネットニュウズが配信された（その受信画面）。
「東京各地で、ＶＩＣＺＸ＝道路交通情報配信システムが間違ったデータを配信。特に渋滞していた交差点などで信号機と乗用車・トラックの自動走行プログラムが干渉しあい、暴走するなどの事故が多発しました。東京・渋谷では死傷者が出るな

★プッシュ型ネットニュウズ
プッシュ型というのは、ユーザが一旦登録すれば、いちいちアクセスせずとも情報を配信してくれるシステム。既にインターネットでは実用化されている。『lain』シリーズでは、岩倉家のダイニング以外ではテレビというものを登場させていない。情報は全てネットワーク（ワイヤード）がもたらすものだというイメージを徹底する意図による。

どの被害が出ておりますが、情報庁では既にシステムは復旧しており、今後こういう事故は起きないと――」

○渋谷の街／夕刻

雑踏の中を歩く玲音。

と、遊び人風の男がティッシュを押しつけてくる。

玲　音「あ……」

振り向くと、男は玲音などには関心を持たず機械的にティッシュを配っていた（受け取る者は少ない）。

玲音、自分が受け取ったティッシュ（テレクラ）をポケットに入れて、歩きだす。

その背後、美香がそっと後を追っていた。

美香にもティッシュが押しつけられ――

○玲音の部屋／過去、という事にしておいて

窓の外はいつも夕暮れ。

ペタリと座る玲音の前には、マレーシアの神像。
（何でもいいんですけど）

神　像「預言は実行されるんだ、玲音」

神像は男の声で喋っている。

玲　音「それじゃ、よげんじゃないじゃない」

神　像「いや、預言なんだ。歴史というのは、リニアに流れている時間軸上にて、ただ点として通過されるものではないのだ。それらは全て線で繋がっている。いや、繋がされていると言った方がいいかもしれない」

玲　音「誰に？　誰に繋がされているっていうの？」

神　像「……」

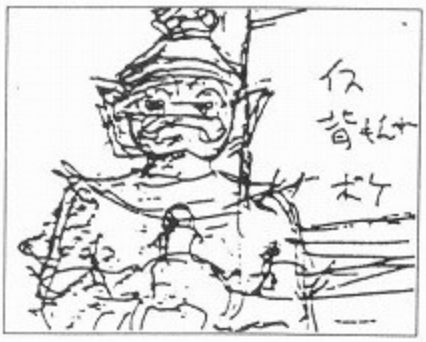
神像が喋る訳がない。

○フラッシュ／マンションの部屋

シャツのボタンを外す美香。悪戯っぽく笑い――

○渋谷の街

美香、玲音を見失ったのか、見回している。



と、いきなり若い声。

声　「あのー」

はっとなって振り向く美香。

見ると、サイベリアの常連小学生、タロウ。

タロウ「（はにかみ）ナンパ★していいっすか？」

うんざりした顔で無視し、行こうとすると――

アベックの片割れの男、噛んでいたガムをぷいっと吐き捨てる。

美　香「（小さく）あっ」

袖にガムがくっついている。

美　香「（呟く）むかつくー」

ポケットからティッシュを出してそれを剝がす。

美　香「――！」

ティッシュの二枚目に何かが書いてある。

美香、それを引き出して読む。

「冥府は溢れている。

死者共は行き場を失うだろう」

美　香「――何よこれ」

★ナンパしていいっすか？
タロウ役の滝本啓人君、この台詞には大変難儀して怒涛のリテイクを重ね、スタジオは大変和やかな笑いに包まれた。

不快そうにその紙を丸め捨てる。
辺りを見回す美香。

美　香「(嘆息)――」

あきらめて引き返そうとした時――
交差点の真ん中で、ぼう★っと空を見上げ突っ立ってる玲音。
既に信号は赤になって車が走りだしている。

美　香「玲音！」

駆けだす美香。

美　香「れいーん!!」

玲音にはその声は届いていないらしい。
と、ふと眼前のビル壁面にある巨大液晶画面を見上げる。

美　香「(唖然)」

ノイズ交じりに玲音の顔が映っていた。

○鷗華学園中学／教室

鞄に荷物をまごまご仕舞っている玲音。



★完成作品では、このシーンで既に、この後でシナリオに書いている〝つぶやき〟をしている。呟いている内容は、シナリオでもコンテでも特に指定が無かったので、鶴岡陽太音響監督の要請により、アフレコ現場にて私が指定した（よく聞けば何と言っているか判ると思う）。

と、ありすの声。

ありす「玲音」

あ、と見上げる玲音。

○廊下

玲音が出てくると、ありす達が囲む。

麗　華「あんた何やったのよ（冗談めかし）」

玲　音「え……」

樹　莉「あたし知らなかったー、玲音てば結構やるねー」

ありす「もうそんなハッキーな事出来る様になってたんだ」

玲　音「なん、の、事？」

麗　華「またとぼけんのぉ？」

玲　音「あたし――ほんとに……」

ありす「玲音がやったんじゃないの？」

玲　音「――何を？」

○画面いっぱいにネット・ニュウズの画面

ア　ナ「昨日の午後、通信ネットワークに起こった異変は故意に

引き起こされた可能性が高いとして、情報庁情報管理局は調査を始めました。
ネットワークは今や都市のみならず、社会のライフラインともなっている現在、この様な行為はテロに等しいと、情報局はコメントを発表しています」

○画面一杯にノイズ

そこにぼんやりと浮かぶ——玲音の顔。
判然としない玲音の呟き声が、ノイズの奥から聞こえてくる（かなり長い時間）。
まるで見る者の精神を別の位相に誘う様に……。

○玲音の部屋／過去、という事にしておいて

玲音と対峙しているのは母親。

母　「——ワイヤードは、リアル・ワールドの上位階層とみるのが適当です。即ち肉体の現実など、ワイヤードに流れる情報のホログラムでしかありません」

玲音「——ママ……？」



母　「（構わず）そもそも肉体、人間の脳の活動はシナプスの電気伝達によって引き起こされている、極めて物理的な現象に過ぎませんからね」

玲音「――あたしは――（自分の手を見る）」

母　「肉体の存在理由は、そうやって自己の存在を確認する為にあるだけ」

玲音「――（顔を上げ）あなたは、あたしの、本当のママ？」

そこに母の姿は、既に無い。

○岩倉家／キッチン

食事をしている家族四人。

黙々とただ食べている。

すっ。父親が空になった湯飲みを差し出す。

母、受け取って急須から茶を注ぐ。

もそもそと食べていた玲音、上目にじっとそれを見つめている。

美香「――玲音」

はっと姉を見る玲音。

美　香「今日、渋谷にいなかった？」
玲　音「え……」
美　香「――（じっと見つめている）」
玲　音「――」
美　香「いい。似た子だったかも」
玲　音「――」

玲音、★また上目で、父と母を見る。
二人とも目を伏せたまま、黙々と食物を口へ運んでいる。

○渋谷交差点

ワァァァンン!!
凄まじい警笛にハッとなる美香。
スクランブル交差点の真ん中に座り込んでいた。
周囲を車が走り抜けていく。

美　香「――なんで……」

その美香がいる交差点を俯瞰から見ると――
横断歩道ではなく、★プリント基盤の様な奇妙な図形

★シナリオでは玲音の視点で閉じているが、完成作品では、1話の玲音の所作を反復した美香の視点で通しており、これは圧倒的に正しい。

★これはナイツの紋章に変更された。

が大きく描かれていた――。

○ファーストフード店

コーヒーだけ持って席に着く美香。
疲れた顔。
ぼんやりと、外を歩く人を眺めつつ、紙カップの蓋をとる。
砂糖を入れようと中を見ると――

美　香「？」

コーヒーの黒い液体の中に、紙片が浮かんでいた。
おぞましいものを見た目で見入る美香。
指でつまみだそうとして――

美　香「（小さく）熱ッ！」

唇に指を入れて冷やす。
じっと紙片を睨んでいた美香、再度挑戦。
手早く紙を引き上げ、テーブルの上に置く。
そこに書かれた文字を読む美香。
「預言を実行せよ」

顔を歪める美香――

美　香「預言って何よ！」

紙を払う。その拍子にコーヒーもぶちまけられた。

荒い息をして立つ美香。

自分に注がれている好奇の目を感じ――

鞄を持って店から飛び出していく。

○鷗華学園中学／正門近く

ありす達と一緒に下校している玲音。

玲音、はっと門の外、向こう側の道に止まっている車を見て立ちすくむ。

ありす「？　どうしたの？　玲音」

玲　音「――」

玲音の視線の先を見る三人。

黒い車の、暗い窓の中――、赤い光点が二つ、揺らいだ。

玲　音「（微かな呟き）こんなとこまで来る……」

ありす「え？　何て言った？」

★このシーンはオミットされた。「あたしの怖い夢が来る」というダイアローグは、『Alice 6』でも一度用いたものだった。玲音にとってMIBは悪夢の存在だと思おうとしている――というニュアンスを出しておきたかった。

玲　音「あたしの怖い夢が、こんなところまでやってきた」
麗　華「夢？　あの車、夢で見たの？」
樹　莉「別に普通じゃない？　あんな車」
玲　音「――」
と、車、走り去っていった。
立ちすくんだままの玲音に
ありす「――ね、どっか寄ってこっか。何か食べない？」
玲　音「――今日は、いい」
玲音、早足で先に歩きだす。
ありす「――玲音……」
麗　華「ンだよあいつ。愛想ねーの」
と、玲音、立ち止まって振り向き――
ありす「？」
玲　音「あの、あたし――」
ありす「どうしたの？　玲音」
玲　音「誘ってくれて、あの、あたし、ありがと」
言って、逃げるように走っていく。
三人、苦笑。

○玲音の部屋／過去、という事にしておいて

今度は、父親が玲音の前にいる。

玲音「――あなたは、本当のあたしの、パパ？」

父「（構わず）ワイヤードに流れているのは、単に電気的な情報だけではないのかもしれない……」

玲音「え……？」

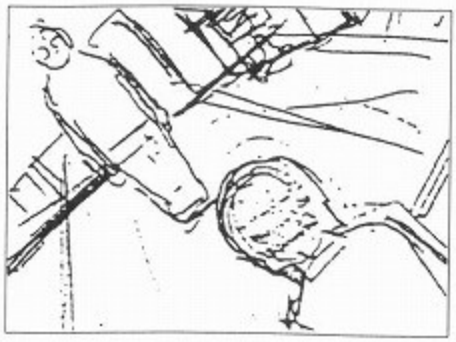
父「ワイヤードが形成されたのが、電気や電話等の発達を起源とするなら、その時点で、もう一つの世界が生まれていたのではないかという気がしてならない」

玲音「あの……」

父「このリアル・ワールドに、神という存在は概念でしか存在しない。しかし――、ワイヤードなら、ゼウス的存在が具現し得るのではないか」

玲音「神様……」

父「神と呼ぶのが適当かどうかは判らないが、少なくとも、神話に登場するそれと同様の支配的な力を有していると思う」



玲音「――あたし、神様と、話した事があるかもしれない」

父「ワイヤードのゼウスは、その支配力を、ことによったら既にこのリアル・ワールドにも及ぼしている可能性だってある。そう、〝預言〟という形で」

玲音「よげん……？」

○女子トイレ（丸井内）★

デザインされたモダンな洗面所。

青い顔で入ってきた美香、自分の顔を鏡で映す。

不安。

美香「――何であたし未だここにいるのよ。とっくに帰って、パパやママとか、玲音とご飯食べてたんじゃないの？」

と、鏡に映った背後の個室のドアが少しだけ開いたのが見えた。

はっと振り向く美香。

ドアは薄く開いたまま。中は暗くて見えない。

美香「――」

美香、恐怖に立ち向かう勇気を必死に喚起。

★シナリオは本来、不特定多数の人が読むものではない。この作品に限らず、私は固有の地名や店などを明確に書く事が多い。演出する人に日常的なリアリティを感じて貰う為である。

ゆっくりとドア前に進んで――
ドアに手をかけ、開ける。

美　香「――」

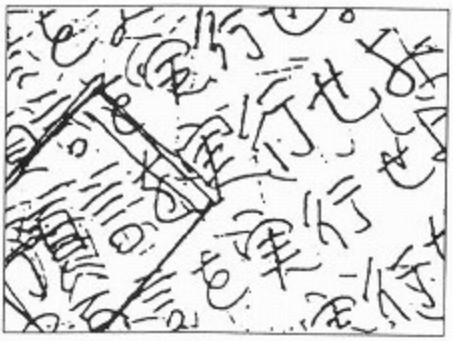
中には、当然、誰もいない。
安堵して、閉めようとした時、ドアの内側にふと目がいって――

美　香「！」

ドアの内側には、口紅で書かれた文字。
「預言を実行せよ」
それが、何十も、びっしりと書かれていた。
泣きだしそうな顔であとずさる美香。

○ファーストフード店（さっきと同じ店）

ありす達が楽しそうに話しながら、パイなんかを食べている。
と、ありす、自分のＮＡＶＩ（可愛い系シールとか貼ってある）を操作。
ありす「（顔を曇らせ）あ、また入ってるよ」



麗　華「またー？」
樹　莉「何ー？（覗き込む）」
ありす「★スパムよ。無差別メール。しつこいんだこれ」
麗　華「『預言を実行せよ』、だっけ」
樹　莉「どっかの邪教集団の宣戦布告とか？」
ありす「――ちょっとこないだ、ワイヤードで知り合った★ギークな子と話してて聞いたんだけど、これを流してるのってナイツかもって」
麗　華「ナイツ……？」
樹　莉「何それ」
ありす「すごいハッカー達の集団みたいな……」
麗　華「でもさー、ハッカーってつるまないんじゃないの？　普通」
ありす「だよね。でも――、ナイツはだから、集団っていうのも違うのかもしれない。ただ、ワイヤードの中では凄い力を持っていて、陰で色々やってるっていう」
樹　莉「じゃ、やっぱし秘密結社じゃない」
麗　華「ったく、こんな事やってて面白いんかね」
ありす「何となく、だけど……」

★スパム
SPAM インターネットのニュウズ・グループや、或いは個人に対しつこい広告や嫌がらせの様に送りつけるメール。スパムは、不味い事で知られる豚コンビーフ缶の名前なのだが、『モンティ・パイソン』がこれをネタにしたコントをやっていて、恐らくそれが語源となっていると思われる。

★ギーク
Geek　コンピュータ・ヲタク。

樹　莉「え」
ありす「面白いから、とか、お金の為とかじゃない気がする……」
　顔を見合わせる樹莉と麗華。

○岩倉家玄関

　ドアを開け、入ってくる美香。
　下駄箱の上には玲音の部屋にあった神像。
美　香「――ただいま……」
　靴を脱いで上がる。
と――
美香の声「ごちそうさま」
　ドアを開け、キッチンから出てくる美香。
　玄関の美香、唖然。
　美香と美香、見つめ合う。
――――――――★視点転換――――――――
　キッチンから出てきた美香、玄関を見つめている。
　しかし、そこには誰も立ってなどいない。
　その後から玲音も出てきた。

★こうした視点転換は過去も試みた事があるが、同一人物の異なる時制の視点が、同じ場所同じタイミングで入れ替わるというのは当然初めての試みだった。

玲　音「――どうしたの？」
美　香「――別に。なんでもないよ」
美香、先に二階へ上がっていく。
玲音、怪訝に見送り、玄関に振り向く。
白い残留思念★が一瞬、人の形の霧の様に見えて――
消えた。
玲　音「――」

○玲音の部屋

真っ暗の部屋に入ってきて、座る玲音。
ひとりでに灯が点く（体温感知）。
対峙しているのは――
増殖に増殖を繰り返して肥大しているＮＡＶＩ。
そのモニタがまるで顔の様に、玲音と対峙している。
玲　音「――今日は、誰？」

To Be Continued...

★心霊現象という意味では当然無いのだが、他に表現のしようがなかった。

この layer: 05 は、体調を崩し高熱状態の時に執筆していた。シリーズの中でもシナリオとしての特異さは高い方だと思うが、執筆時のコンディションの影響は大きかった様に思う。
以降、最後に至るまで美香は言葉を失ってしまうのだが、これは早すぎたと反省することしきりだった。

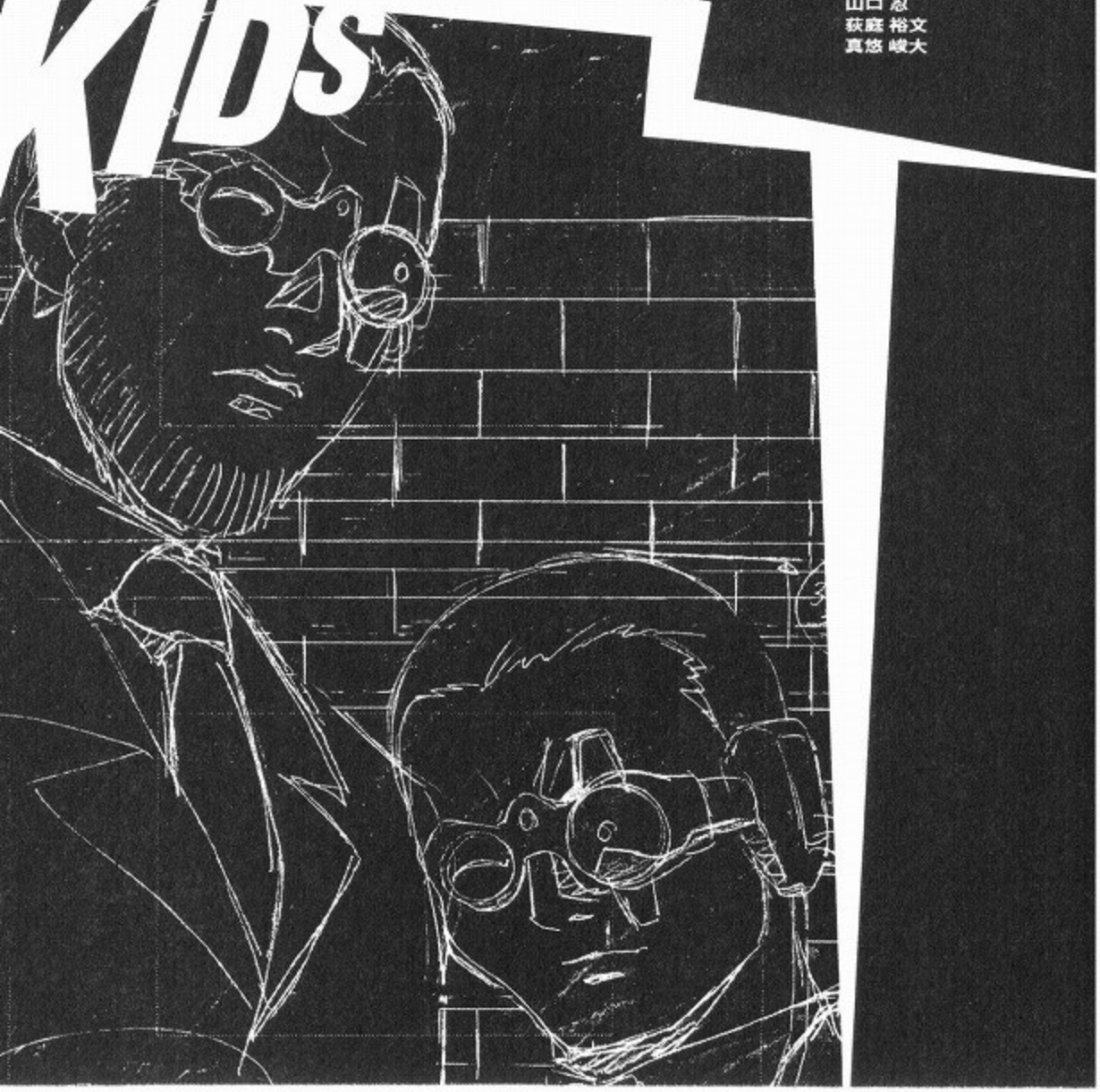
layer:06

CAST

岩倉 玲音	清水 香里
岩倉 康雄	大林 隆之介
岩倉 美穂	五十嵐 麗
岩倉 美香	川澄 綾子
瑞城 ありす	浅田 葉子
山本 麗華	手塚 ちはる
加藤 樹莉	水野 愛日
四方田 千砂	武藤 寿美
黒の男たち	山崎 たくみ
	中田 譲治
S	吉岡 久仁子
ホジスン教授	宮田 光
男	山崎 智一
女	大津田 裕美
ニュースの声	小林 研二
口	松尾 貴司
DJ	アリ 森泉

STAFF

絵コンテ・演出	中村 隆太郎
作画監督	菅井 嘉浩
画面設計	岸田 隆宏
NAVIレイアウト監修	ところ ともかず
原画	新井 浩一
	中村 深雪
	小倉 雅誉
	植田 実
	佐藤 雅弘
	高城 陽子
	江本 正弘
	須賀 重行
	菊池 聡延
	為我井 克美
	大関 紀子
	逆吉 隆輝
色指定	平出 涼子
制作進行	河田 和明
背景	猿プロダクション
	本田 修
	市谷 正夫
	小杉 光芳
	本田 利恵
	山口 忍
	荻庭 裕文
	真悠 峻大



○プレゼント・デイ、プレゼント・タイム

夜の街――、人が無言で行き交うにも拘わらず、無数の喋り声が輻輳している。
わあああああんんんんん
ビルとビルの間には無数の電線。
その中から漏れ聞こえる女の声。
女の声「――人と人が繋がれば、微かな声だって大きくなるわ。人と人が繋がれば、命だって長くなる。だから……」
どこもかしこも〝繋がって〟いる。
人は誰しも〝繋がれて〟いる。

○岩倉家／夜

○二階

みしみしと音をたて、父が階段を昇ってきた。
玲音の部屋の前に近づく。
ドアの隙間から、青い光が漏れており、鈍い機械音が響く。

父　「――」

ノックをする父。

返事はない。

父　「玲音、入るよ」

無音。父、ノブに手を掛ける。

○玲音の部屋

父　「！」

異界かと見紛う程に、変わり果てている室内。

元々のＮＡＶＩの周囲には無数の補機類が星の数のＬＥＤを明滅させている。

★透明のチューブが青いクーラント液を循環させ、バルブが時折水蒸気を上げる。

部屋の中は水びたし。

中央にはメインのモニタが仮想スクリーンに開いている。

そして――、その前にぺたりと座っている玲音。

父、辛そうな顔。

★パーソナル・コンピュータを改造し、極限まで性能を上げる人は現実にいる。クロックを規定値よりも上げれば性能が上がる分発熱も激しく、水冷式の冷却システムを組む人も存在する（しかし部屋が水浸しになる程やる人はいない、と思う）。

父　「玲音……」

振り向かない玲音。

父　「（やや大きく）――玲音」

玲音の目は虚ろに見開かれ、グラフィック・ベンチ★テストが如き凄まじい再描画をしているモニタに見入っている。

水たまりにスリッパで入り込み、父、玲音の背後へ。

肩に手を掛ける。

父　「玲音!!」

はっとなる玲音。

無意識に玲音の手は★インターフェイス・デバイス（キーボードとマウスの中間）を操作。

ぶつんと画面が切れる。

あどけなく見上げる玲音。

玲音　「★お父さん？」

父　「――（嘆息し機械を見回す）かなり高いクロックにチューンしてるらしいな」

玲音　「そうなの。だから冷却システムが大げさになっちゃった」

★グラフィック・ベンチテスト
ベンチマーク・テストとは、ハードウエアの性能を測るテスト・アプリケーションの事。

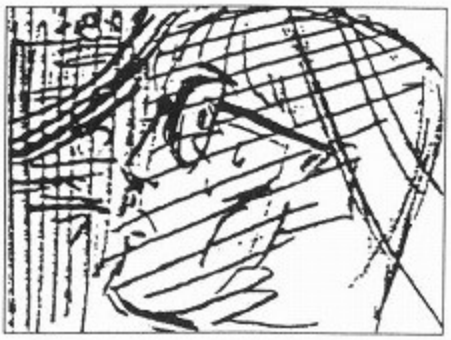
★このシーンには登場せず、9話にて見る事が出来る。

★この一連の康雄との会話はオミットされ、ひたすら康雄の哀しみの表情が描かれた。

父「これを一人で作ったのかい」
玲音「ううん、みんなが教えてくれるの」
父「――みんな？」
玲音「（微笑）ともだち」
父「学校の？」
玲音「（被りを振り）ワイヤードの。今もお話ししてたの。だからお父さんが入ってきたの、全然気がつかなかったの」
父「そうか……」
玲音「どうか、した……？」
父「――下に、水が漏れているんだ」
玲音「ごめんなさい。どこかで漏れちゃってるみたい」
父「――お母さんが――（言い淀む）いや、いいそれは。とにかくまあ、早めに直して」
玲音「うん」

玲音、再びモニタに向かう。
じっとその背を見つめる父。

玲音が見つめるモニタの中に画面は吸い込まれ――



玲音「――ありがとう。でもそこのレジスタ★だったらもう検証してあるよ」

声の様な呻きの様な音が、極端な定位であちこちから聞こえる。

玲音「――（笑）おっかしー、それ」

呻き……。

玲音「――そうだね。次世代プロトコル★が早く決まればいいのにね。そしたらあたしだって……」

呻き……。

玲音「――ね、あなたたち、どうしてあたしにそんなに親切にしてくれるの？」

呻き……。

玲音「――そんな事、思ってない。ただ、ちょっと不思議っていうか……。あたし、（俯き）友達って少ないから」

呻き……。

玲音「――（微笑）ありがとう。ナイツのみんな」

○坂道（玲音の家の前）／翌朝

★レジスタ
Register 記録、という意味だが、コンピュータ用語としては、ソフトウエア（emacsのそれとか）、ハードウエア（CPUが処理を実行するために、一時的にデータを格納しておくメモリとか）など様々な意味になる。

★後にも説明がなされるが、『lain』シリーズに於けるネットワーク・プロトコルは第6世代目のものとなっている。実際のインターネットでは、現在は IPv5(Internet Protocol version5)が用いられているが、『lain』世界のそれとは別種のもの。

無数の電線がぶーん、ぶーんと唸っている。
その下の坂道。玲音が下っていく。
ふと前を見ると、ランドセルを背負った小学生が坂の中途で立ち止まり、空を見上げ両手を広げていた。

玲音「……？」

玲音、見上げる。
空には鉛色の雲が垂れ込めるばかり。
再び子どもに目をやると――
小学生は既に坂道を下っていくところ。

玲音「――」

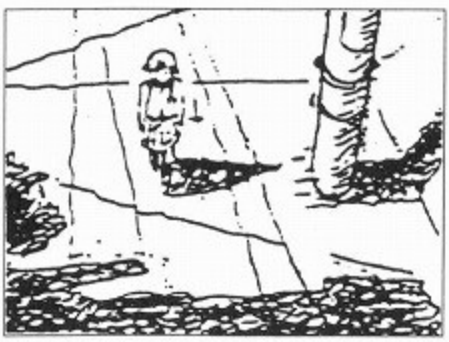
○鷗華学園中学

○同／教室

休み時間。しかし玲音は一人机に向かって、ＮＡＶＩに何かを打ち込み続けている。

麗華「（オフ）随分勉強熱心だねー」

はっとなって無意識にＮＡＶＩを隠し見上げる玲音。



玲　音「あ、えっと……」
ありす「ねぇ玲音。最近、また戻っちゃったみたい」
玲　音「え……？」
樹　莉「また、あたしたちと遊ぼうよ。一人ぼっちばっかじゃ暗い人生だぞー（笑）」
玲　音「（はにかむ）……うん。でも、一人じゃない、よ」
ありす「え？　誰？」
玲　音「みんなが、来てくれるの。あ、そうじゃなくって、あたしが行くのかな」
麗　華「なーんだ、ワイヤードの事？　★ネットパルなんてね、所詮友情なんて生まれないもんよ」
ありす「（苦笑）変なとこで麗華って古いよね」
樹　莉「古いよねー」
麗　華「（ムッ）いいよ別に古くたって。できあ、玲音、どんなとこと付き合ってんの？」
玲　音「――（悪戯っぽい笑みを浮かべ）ひみつ」
ありす「――（不安）」

★ネットパル
ネットワーク内の友人

○住宅街のマンション（ありすの家）

ありす「（オフ）これなら似合うって」
麗　華「（オフ）うそー、やめた方がいいー」
樹　莉「（オフ）あたしこっちの方が似合うと思う」
ありす「（オフ）えーっ？　玲音絶対こっちだよねっ!?」

○ありすの部屋

派手な遊び着を着せられて、おどおどしてる玲音。
三人、あーだこーだまだ言ってる。
玲　音「……あのー……」

○渋谷駅前

並んで歩く四人。結構玲音も楽しそう。
目立つ四人に振り向く大学生。
と――、麗華、立ち止まり。
麗　華「あれ……？」
ありす「何どうしたの？」
麗華が指で指した方を見る一同。



小学生女児が空を見上げ、ぼうっと立っている。

玲　音「（小さく）あ……」

樹　莉「何してんのあの子」

麗　華「さあ……」

樹　莉「早くいこいこっ」

四人、歩きだす。

玲音は気になっている……。

○パルコ裏

店先の小物に触りながら、ケラケラ笑っている四人。

と――、玲音、人と人との間に小学生が立っているのを見つけ、じっ★と見つめる。

その子もまた、空を見上げ、両手を――上げた。

釣られて玲音も見上げると――

玲　音「!?」

鉛色の空が割れていく。

ありす「（気づき）――えっ!?」

樹　莉「うそぉ！」

★私個人として、このシリーズで最も〝怖さ〟を感じる事が出来たシーンだった。玲音の視線移動方向とは逆にパンする（イマジナリーラインを崩している）中村監督のコンテが凄いのだが、斜め後ろからのアングルで、笑みを浮かべた表情が判るという子ども達の原画も凄まじかった。イマジナリー・ラインとは、映画技法の基礎的なもので、例えば二人が向かい合って会話をしている場面なら、右を向いている者と左を向いている者を交互にカット割りするのがノーマルな処理。違う二人が共に右を向いたカットが繋がっていると、それは向かい合っているのではなく、並んでいるものと観客には解釈される。中村監督のイマジナリー・ライン崩しは、1話でも顕著に見られる技法だった。

ごおおおおおおおお
レンブラントの様な光が差し込み――
その雲の向こうに、巨人の姿が――。
騒ぐ周辺の人々。

男　1「何だよあれはよぉ!!」
女　1「――いやだ……」
逆光でしかもぼんやりとしているが、玲音の裸身の様に見える。
ありす「(慄然) あれって――(玲音を見る)」
玲　音「――(無表情に見上げている)」
女　2「――神様……?」
男　2「なワケ、ねぇだろ……(自信無さ気)」
麗　華「(啞然) ――何なの――あれ……」
おおおおおおんんんんんん
巨人、極めてゆっくりと動き、咆哮。
ありす「(必死に冷静になろうとしている) ホログラムか何かよ」
玲音、振り向く。
子ども、ニヤニヤと笑いながら見上げていた。



玲　音「――」

玲音、再び空を見る。

雲が閉じていくところ。

○玲音の部屋

ドアを開け、制服姿の玲音が入ってきた。

赤外線探知で室内のシステムが起動。そこここに明かりが灯る。

玲音、ふ、と嘆息。

制服を脱ぎ始める。

プッシュ型ニュウズ・サービスの画面。

「東京の空に異常現象」

「恐怖する街の人々」

「ホログラムか？」

ワンピースから首を出し、袖を入れながら前にペタリと座る玲音。

玲　音「――ハロー、ＮＡＶＩ」

仮想スクリーンのメイン・モニタに、螺旋状の有機的な紋様が描画されていく。

玲音「――コネクト・ワイヤード……」

玲音、操作パネルにもたれる。父に甘える様に目を閉じ――。

○ワイヤード／一本道★

歩いてくる玲音。

その顔は普段とは異なり、強い意思の力を瞳に現す。

道の周囲は漆黒。しかし、会話の輻輳がノイズとしてわんわんと響いている。

声「あんたか、レインての」

立ち止まり、キッと見るレイン。

暗闇の中から大きく真っ赤な唇が現れた。

声「大したもんだね、そこまでリアル・ワールドの姿をメタファライズして、このワイヤードに来れるとは」

レイン「(冷徹)チェシャ猫★気取り？」

声「キシシシシシ。気取るもなにも、俺のユーザ・レヴェ

★6話目にして、初めてワイヤード内側の描写を登場させた。

★チェシャ猫
説明不要とも思うが、『不思議の国のアリス』に登場するキャラクター。

ルじゃこれが精一杯なのさ。耳だけの奴の方が多いんだよ？　それに比べりゃマシだろ？」

レイン「――」

シカトして先に行こうとするレイン。

声「何サーチしたいんだい？　力になるよ」

レイン「何が見返り？」

声「キシシシシシ。レインを助けた、って事実さ。それだけでこっちのローカルじゃ俺は英雄になれる」

レイン「――小学生で流行ってる遊び」

声「遊び？　子どもの遊びなんていくらだってある」

レイン「――判ってんでしょ」

声「――あれを遊びだっていうのは、あんたの直観か？」

レイン「子どもには何だって遊びになるよ」

声「――リザルト★が来た。この人なら答えを知っているかもしれない」

レインの眼前に亡霊の様にモノクロの人間が浮かぶ。

老いた科学者の写真画像。

レイン「誰」

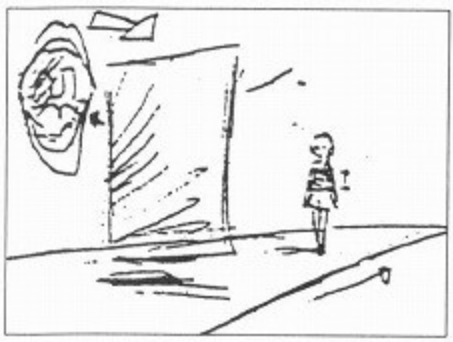
★リザルト
Result　成果。ここではサーチした答えが帰ってきたという意味。

声　「子ども殺しさ。リアル・ワールドじゃ個室病棟の死に損ないだ。キシシシシ」
　　闇に消えていく唇。
声　「(遠くからのオフ)〝キッズ〟って何か聞いてみな」
レイン「――」

○テラス

洋館のテラス。永遠に続く黄昏。
安楽椅子に座って空を見ている老科学者。
その脇に立つレイン。

レイン「――」
老学者「随分生々しい姿だね、お嬢さん」
レイン「ずっとこの夕焼けの中にいるの?」
老学者「ああ……。一番優しい時間だからね。リアル・ワールドの肉体が朽ちるまで、私はずっとここで心穏やかに過ごしていたい」
レイン「――情報は届いてるでしょ。何が起こっているか知ってるんじゃないの? キッズって――」



老学者「(遮り)だからお嬢さん、お願いだ。この静けさを乱すのはやめておくれ」

レイン、学者を睨む。

レイン「★ホジソン教授。十五年前の実験のデータが見たい」

老学者「——私は子どもたちを危険に晒すつもりは無かったんだ……」

レイン「死んでしまった子の事はもういいよ。それより、今子ども達の間で流行ってる遊び。あれは、教授の実験の再現じゃないの?」

老学者「——誰かが——ゴミ捨場を漁ったんだろうよ……。私は全てのデータを消去したつもりだったが……」

ひぐらしの声が包む……。

レイン「★ケンジントン実験の事、教えて」

俯く老学者。

○モノクロ写真

どこかの実験施設の古い静止画像。

小さなヘッドギアをつけた子ども達が映っている。

★ホジソン教授
ウィリアム・ホープ・ホジソン(海洋怪奇小説家)から、ではなく、やっぱりチャールズ・ドジソン(ルイス・キャロルの本名)をもじったのかなぁ……。

★ケンジントン実験
モデルにしたのはフィラデルフィア・エクスペリメントと呼ばれる事件。映画にもなったこの実験は、アメリカ海軍が戦艦を不可視にしようとする未知の科学実験が行われた——というもの(事実かどうかは不明)。この時の実験は失敗に終わり、乗組員は甲板にめり込んだり、発狂したという報告がある。

その静止画の中へ歩いてくるレインと学者。若い頃の姿になっている。

学　者「サイ★、超心理的な能力は、大抵の子どもは極く微弱ながらも持っているものだ。超能力などという大それたものじゃない。ちょっとした勘だとか、コインを曲げるといった程度の物理力」

静止している子どもをじっと見つめているレイン。

レイン「この頭につけてるのは何？」

学　者「アウター・レセプター★、と私達は呼んでいた。それを、これが受ける」

実験室中央に置かれたオルゴンボックス★の様な匣。

学　者「これがKID★だ」

その3DCG透視設計図面がOL。

レイン「これが……？（怪訝）」

学　者「（オフ）一つ一つは微弱でも、子ども達のその力をもし束ねる事が出来れば……」

レイン「（強く）何を期待したの!?　何をさせたのよ!?」

学　者「予測のつかない事が見たかったのだよ、お嬢さん。仮説

★サイ
PSI　〝超能力〟を科学用語として定着させようと、'48年にイギリスの心理学者、R・H・ソーレスとB・P・ウィースナーが提唱した言葉。

★アウター・レセプター
人間の脳内分泌物（ドーパミンなどの快楽物質を含む）は、受容体（レセプター）という〝受け皿〟が脳内に用意され初めて機能する。ここではそれを外的に捉えようという試みがなされた（らしい）。

★オルゴン・ボックス
フロイトの異端の教え子、ヴィルヘルム・ライヒ（クラウド・バスターの発明者）は、宇宙空間にはオルゴンという未知のエネルギーが満ちていると考えた。銅板で作られた小さな電話ボックスの様な箱に入り、オルゴン・エネルギーを体内に吸収させようというのがオルゴン・ボックス。アメリカの政府機関により摘発された。

★KID
後述

をただ証明する事だけが科学ではない。私はそう考えていた」

レイン「――で、子ども達の事は考えなかったんだ」

学　者「――そう。仰る通り。アウター・レセプターが受容した微弱な脳の電磁波をコンヴァートする、一種の脳の一部の機能だけを肥大させたのが、ＫＩＤシステム、キッズというものの正体さ」

レイン、ハッとなる。

静止していた子どもたちが次々と消えていく。

そして、やがてその室内自体も闇へ溶けて――

○廃墟

凄まじい熱線で溶けた建物――の中にいるレイン。

何かが異様だ……。

レイン「!?」

床から子どもの腕が何本も延びている。

思わず後ずさるレイン。

壁に背をつけると――妙な感触に、パッと離れ見る。

★3DCG透視設計図面
中原順志氏による。
この辺りになるとスケジュールが厳しく、フル解像度でのレンダリングをする時間が無かった。中原氏は、アンチエイリアスを掛けずに320×240ピクセル（1／4のサイズ）で3Dモデルをレンダリングし、それを引き延ばして複雑極まるフィルタをAfter Effectsで掛けて仕上げるという離れ業を見出した。※この説明の説明は――、勘弁して……。

レイン「――」

壁の中に埋められたかの様に、子どもの顔の片目の部分だけがレリーフの様に浮き出ている。

レイン「何が起こったのよ!?」

学　者「――判らない。子ども達のサイが統合された時に、一体どれほどのエネルギーが動いたのか。どのベクトルに向けてそれが生じたのか。何もかも判らなかった」

レイン「――」

壁から生えた腕が、海草の様にゆらゆらと揺れた。

レイン「――もういい!!（悲痛）」

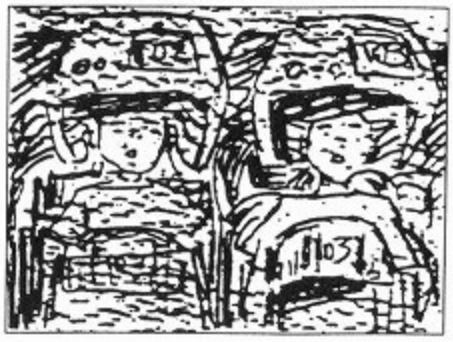
暗転

○十字路

漆黒の中に、白い十字路が交差している。

そこに立っているレインと老学者。

老学者「私はキッズを二度と復元出来ない様に粉々に粉砕したよ。しかし、どうやらあの機械の設計図面がワイヤードのどこかに流れ、時間の澱の中に沈殿していた様だ」



レイン「それを、誰かが見つけた……」
老学者「しかも、アウター・レセプターなど使わずして現象を引き起こせる様に、アップデートまでしてね。エミュレーション★であそこまで広範囲に影響を及ぼせるとは実に優秀だと言わざるを得ない。私の生徒ならAプラスを獲得しているところだ」
レイン「それしか思わないの……？　もう子どもなんてどうなったって、いいの？」
老学者「――私が何を思ったところで、あの子たちがリアル・ワールドに帰ってくる訳ではないからね……」
レイン「――」
老学者「――喋り疲れてしまった。もう何ヵ月も声を出していなかったからね……。でもお嬢さん。あなたに会えて良かったと思ってます」
レイン「――」
老学者「あなたがワイヤードで何をしたいのか、どういう存在になろうとしているのかは知りませんが、あなたは、強いですよ。とてつもなく、強い。もしこのワイヤードに神

★エミュレーション
Emulation　模倣するの意。計算機の世界では、専用のハードウエアが必要だったものを、汎用の計算機のソフトウエア上で、その専用機と同じ動作を得るというケースに用いる。『lain』シリーズでは後にも重要なタームとして再登場する。

がいるのだとしたら、あなたは祝福された子どもです」

レイン「あたしは――あたし。別に何になりたいとか――」

老学者「キッズをエミュレートしている悪戯者どもの強さとは別種の強さは、どこから来るのでしょうね」

レイン「悪戯者――（ハッ）」

老学者「それじゃ、私は失礼させて下さい。少々くたびれました。肉体も多分、残り火の時間を減らした事でしょう。私の望みもそれだった……」

レイン「えっ……」

老学者の姿――、闇に消えた。

一人、十字路の真ん中に立つレイン。

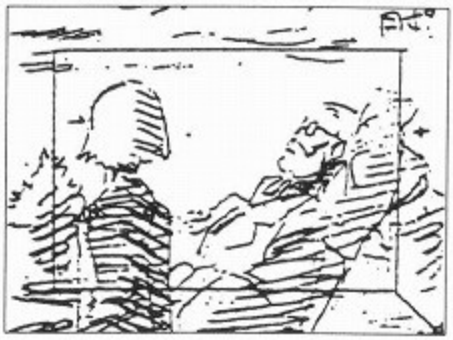
じっと思案していたが――

顔を上げる。

レイン「――ナイツ……」

○岩倉家リビング

ソファに美香が座り、テレビを見ている（背を向けていてこちらに顔は見えず）。



夕飯の支度をしている母――

母「最近、帰りが早いのね」

美香「――」

母「代わりに玲音が最近帰りが遅い日が多いのよね」

美香「――」

母「推薦とれそうなの？　ちゃんと先生に言っているの？」

美香「――」

やや暗い室内で、テレビの放つ明滅が美香の顔を照らしている。

そして、美香の目は――、視点があちこちを泳ぎ回っていた。延々と、ずっと……。

知らず家事を続ける母親……。

○玲音の部屋

玲　音「ふうっ……」

ログアウトした玲音、かなり疲れている。

しばらくじっとそのままでいる玲音。

と――、会話の輻輳ノイズが徐々に高まっていく。
不快そうにじっと聞いている玲音。
高まるノイズ――。

玲音「うるさい！」

しん――。ノイズが消えた。

玲音「あんたたち何なの!?　どうしてあたしに色々教えようとしてたのよ」

答える声（ノイズ）は無い。

玲音「あたしもあんたたちのオモチャだったの？　何がしたいのよ、子どもを使って」

ぶーん……。

部屋の隅の冷却バルブのメーターが徐々に上がっていく。しかし玲音はそれに気づかず。

玲音「ただ面白いから!?　自分たちに出来て、面白ければ何でもやるんだ!?」

嘲笑するレイン。

玲音「だったらただの猿でしかないね！」

ぶーん……。メーターのゲージ、レッドゾーンに近



づいていく。

玲　音「どうして声が無いの？　誰も答える気、無いの？」

と――、ふと玲音、部屋の壁に赤い光点が這っているのに気づく。

玲　音「――（ハッ！）」

窓に飛びつく玲音。

カーテン、そして窓を開ける玲音。

窓下には黒い車。その前にはまた黒服にゴーグルをつけた男が二人。光はゴーグルが発射するレーザーポインタ。

玲　音「まさか――これが、ナイツ……？」

徐々に憤怒の顔になる玲音。

○岩倉家前

バン！　ドアを開けて飛び出してくる玲音。

男達は動かない。

玲　音「あんたたちがナイツなの!?　そうでしょ!?」

と、男の一人が片手を前に差し出す。

ＭＩＢ「伏せて」
玲　音「えっ!?」
どおおおおおん!!
凄まじい音に耳を抑える玲音。
はっと見上げる。
玲音の部屋から煙が立ち上がっている。
玲　音「(愕然)――ど、どうして……」
ＭＩＢ「あなたの部屋の冷却システムにパラサイト・ボム★を送り込んだのでしょう」
玲　音「――人ごとみたいな言い方じゃない」
ＭＩＢ「――私たちじゃない」
玲　音「じゃあ誰よ!?」
ＭＩＢ、車に乗り込んでいく。
玲　音「誰がやったの!?」
ＭＩＢ「――ナイツです」
玲　音「!」
車、走り去っていく。
立ち尽くす玲音。

★パラサイト・ボム
ネットワークを通じて感染し、相手方のハードウエアを損壊させるウィルス――というのは、いかなクラッカー（破壊的ハッカー）でも未だ作り得ていない（と思う）。このタームも『～サイバーランド』で造ったものを流用。

窓からは未だ煙が上がっている。
遠くからパトカーのサイレンが聞こえてきた。

To Be Continued...

この layer: 06 KIDS は、そのタイトルから想像されたかもしれないが、タロウ達をフィーチュアした回を想定していた。しかし前話を上げた段階で、〝ワイヤードのレイン〟をそろそろきちんと描く必要を感じ、当初の想定には無かったエピソードとなった。シリーズ中では最もSF性が強く、玲音という存在の背景を暗示させる回になったと思う。1話以来に、コンテと演出を兼任した中村監督の手腕と、豪華な原画陣の力が遺憾なく発揮されている。

layer:07

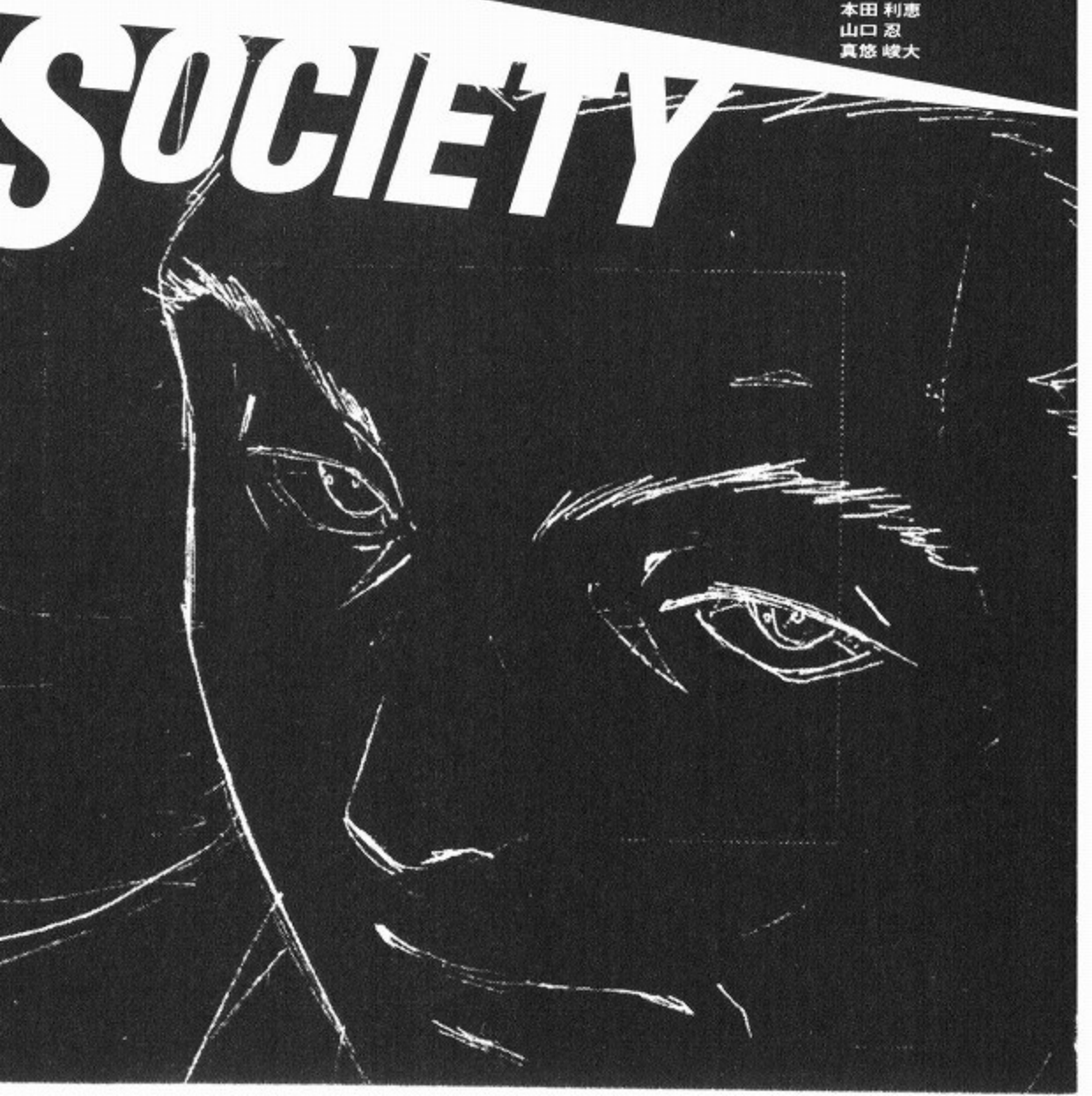
SOCIETY

CAST

岩倉 玲音	清水 香里
岩倉 美香	川澄 綾子
瑞城 ありす	浅田 葉子
黒の男たち	山崎 たくみ
	中田 譲治
ねずみ	千葉 繁
オフィスの男	渋谷 茂
秘書	麻丘 夏未
アパートの男	石川 ひろあき
若い母親	川崎 恵理子
子供	安達 心平
雑居ビルの男	鈴木 栄一郎
S	吉岡 久仁子
運送屋のバイト	千葉 進歩
アナウンス	伊藤 英敏
DJ	アリ 森泉

STAFF

絵コンテ	中村 隆太郎
演出	松浦 錠平
作画監督	丸山 泰英
NAVIレイアウト監修	ところ ともかず
原画	田村篤
	後藤 隆宏
	前島 和子
	渡辺 律子
	山岸 徹一
	須賀 重行
	米林 宏昌
	後藤 有宏
	三宅 雄二
	横山 義家
	中村 基
	屋山企劃
色指定	片桐 聡美
制作進行	鈴木 眞砂弥
背景	猿プロダクション
	本田 修
	市谷 正夫
	小杉 光芳
	本田 利恵
	山口 忍
	真悠 峻大



○プレゼント・デイ、プレゼント・タイム

夜の街――、人が無言で行き交うにも拘わらず、無数の喋り声が輻輳している。

わあああああんんんんん

女の声「――そっとあなたにだけ、教えてあげる。あなたが知らないだけで、この社会で何が起こっていて、何が進んでいるのかを――」

ビルとビルの間には無数の電線。

どこもかしこも〝繋がって〟いる。

人は誰しも〝繋がれて〟いる。

○岩倉家外観／午後

破損した二階の窓、既に応急工事が行われている。

しかし――、生じた亀裂からはチューブや電線がはみ出している……。

○玲音の部屋

しゅうううう。冷却システムが呼吸をしている様に

音と蒸気を上げている。
部屋を埋めつくしている電子機器。
そして、その中央にぺたりと座ってる玲音。
前には仮想ウィンドウ★が何枚も開き、ワイヤードの情報が表示されている。
もごもごと、大勢の喋り声が低く流れている。
玲音「――ううん、違う……。あたしは見ているだけ……」
喋り方はいつもの様に幼い。
玲音「――だって――、ワイヤードの中のあたしって――あたしじゃなくなるんだもの……。え？　誰が」
振り向く玲音。
ドアが薄く開き、無表情な美香の目が見えた。
玲音「――」
美香、すっと下がりドアが閉まる。
玲音「――お姉ちゃん、最近変になっちゃった……（微笑）」
ウィンドウの一つが、奇妙なアラートを発している。
しかし玲音、それに気づかず。

★完成作品にては、ここでやっとNAVIに仮想ウィンドウが与えられた。このメカニズム自体はueda氏と中原氏が3Dでモデリングまでして検討、極力SF的にならない様な現実的なシステムを考案している。



○街

（加工実写？）★

前シーンのアラートが画面一杯になって――、
それが縮小し――
デジタイズされた、人が歩くＰＯＶ。
ＨＳＢノイズで狂った様な色調。ゆらゆらと人の間を分けて進む視点。

男の声「（やや変調されている）――俺は知ってるんだ。ワイヤードとリアル・ワールドはリニアに繋がってるんだって」

画面には小さなサブ・ウィンドウが次々と開いては消える。まるで未来戦争の歩兵のＨＭＤ★画面。
ゲージ・バー、デジタル数字がレイアウト。
しかしそこに映っているのはただの渋谷の雑踏。

男の声「俺はどこにだって存在出来るんだ。肉体がどこにあったって、意識だけはどこへでも飛ばせられる」

（ここからノーマル）

★疑問符がついているが、そうなった。この話数に登場する〝ねずみ〟（シナリオ内では〝男〟と表記）のPOV（Point of View 主観映像）は、監督のオーダーで私が担当する事になった。渋谷などでＤＶカムにて撮影した実写を、Macintoshにて HSB ノイズ等のデジタル効果を嫌という程掛けて作成したものが基本。
この時は私も余裕があり、layer：07 でトータル約3分の映像を一ヶ月掛けて製作した。

★HMD
ヘッド・マウント・ディスプレイ、ゴーグルの様に目の部分に装着したディスプレイ。コンシューマ・ゲーム機などでもお馴染み。

雑踏の中を歩く、痩せた病的な男。その両眼には、ビデオカメラのヴュウファー★をバイクのゴーグルに無理矢理付けたもの。
耳にはインカム式ワイヤレス・レシーバー。
リュックにはNAVI★とバッテリ等が入ってるらしく重い。よろけながら、薄ら笑みを浮かべて歩く。

再度、男のPOV。人の姿が消えた。
そこにあるのは——データのみ。
波形、符号、シグナル——脳内を走るシナプスの様に、それらがパルスとなって行き来する。

○多国籍商社／個室オフィス

スーツ姿の、化粧の巧いセクレタリー★がノックをし入ってきて、前の椅子に座る。
大型液晶のビジネス・デスクトップマシンに向かっていた若い男、眼を上げる。

秘書「(メモを手に) EMA★モーター・コンソーシアム昼食会の

★ヴュウファー
View Finder

★つまり、ウェアラブル・コンピューティングを彼は実践しているのである。〝着る〟感覚でネットワークと常に繋がった状態。実践者は既に存在する。

★EMAモーター

★岸田氏のデザイン画には〝チャイニーズ〟と書かれていた。

お時間です」

男　「――はい」

秘書、媚びた笑み。脚を組み換える。

男、一瞥し、視線をモニタへ戻す。

S「Mail」（OSは★NeXT STEP）

男　「あと三分。そしたら下で」

秘書　「――判りました」

立ち上がり、部屋を出ていく秘書。

男、メイルのアイコンをクリック。

男　「（眉を顰めてる）」

文字化けの嵐のメール。男、ブラウザで★APLのアイコン群から――、デコーダを起動させる。

S「★Decoding...」

浮かぶ、★フリーメーソンの様な紋章。

男　「……（微笑）今度は、何をして遊ぶんだい？」

○鵬華学園中学／教室

情報基礎の授業中。

エドウィン・グレイというアメリカ人が作り出した、入力よりも出力が大きいという〝夢のモーター〟。フリー・エネルギー界では最も有名なもの。グレイは発表後ややして失踪してしまった。実際のダイアローグはコンテにより〝イモーター〟と変更されている。これは、EMAモーターをモデルにした私の短編小説『イモーター』（廣済堂文庫『悪魔の発明』'98所載）を面白がってくれた監督の洒落。

★NeXT STEP
Apple Computer 創立者スティーヴ・ジョブスが、Appleを追われて作ったワークステーション（上位パソコン）が NeXT であり、そのOSが NeXT STEPだった。現在はジョブスは Apple に戻り、UNIX OS の一種である NeXT (OPEN) STEP はサーバー用 MacintoshOS に受け継がれる予定――なんだけど、実際の画面では中原オリジナルな OSインターフェイスに、ueda 氏が作成したナイツの紋章のデジタルアニメーションがくるくる回っていたのだった。

玲音、授業を聞かず、自分のＮＡＶＩでひたすら計算中。
心配そうに見るあります。

○街

ぶーん……ぶーん……
ビルとビルの間を結ぶ無数の電線。

○アパートの一室

汚い。物と雑誌と汚物で床が埋めつくされている。
万年床の布団にうつ伏せで横たわり、ノート式端末に向かっている太った若い男。
画面には紋章が。
男　「――（ニヤニヤ）そうさ、俺はお前らとは違うんだ」

○鴎華学園中学／屋上

ぼうっ、と柵にもたれ外を見ている玲音。
ぶーん……ぶーん……。

★APL
アプリケーションの略

★Decoding
解凍中。暗号化されたメールを解読しているところ。

★フリーメーソン
汎世界的な規模の実在秘密結社。世の中の悪いことは全てユダヤ人の仕業だと信じたい人にとっては、悪の結社となってしまう。
フリーメーソンの紋章は幾つも種類があるが、最も有名なのは、人の目、計測器等をモチーフにしたもの。ナイツのそれはコンパスをモチーフとしていた。

電線が風に音をたてている。

ありす「（オフ）玲音」

振り向く玲音。

一人、近づいてくるありす。

玲　音「？」

ありす「――大丈夫？」

玲　音「（おどおど）え……、何が……？」

ありす「最近、玲音、また戻ってる」

玲　音「――（俯く）」

ありす「あたしたち、玲音にもっと、元気になって貰いたいって思って――、あっちこっち連れてったりして……」

玲　音「――」

ありす「もし――、玲音が嬉しくなかったんだったら――謝る」

玲　音「（ハッと見上げ被りを振る）嬉しくないなんて、そんな――そんな事、ない……」

ありす「――（微笑）良かった。じゃ、また遊ぼうね！」

ありす、戻っていく。

玲　音「――ありす！」

ありす「(振り向き) え?」
玲　音「――(はにかみ) ――ありがと……。心配してくれて」
ありす「(微笑) 友達だから」
　ありす、自分で言ってやや恥ずかしい。階段に向かって駆けていく。
玲　音「――(嬉しい)」
　ぶーん……、ぶーん……。
　また音が。
　玲音、外に向く。
　電線が空を覆っている……。
玲　音「――(呟く) リアル・ワールドなんて――、ちっともリアルじゃない……」★

○ネットニュウズ画面 (ザップ・イン)

　画面はイメージ的なもの。
ア　ナ「(オフ) 本日午後、情報庁情報監視センターのファイヤ・ウォールが何者かのクラッキングにより破壊され、現在ワイヤード・ネットワークの情報が混乱しています。

★この台詞はシーン頭に移動されていた。

このニュウスは今この時間に流しているものですが、★このニュウスが届くのは明日、もしくは昨日になる事もありますのでご注意下さい」

○ワイヤード／イメージ

声の輻輳がわんわんと響く中で、漏れ聞こえる——

声　1「——またナイツがやったらしい」

声　2「——ナイツって何？」

タイポグラフィのアニメーション（はっきり見せなくてもいいです。

S「★Knights

ワイヤードで大きな影響力を持つと言われている算法騎士団。構成するメンバーは一切不明。単に情報を操作するばかりでなく、非合法な情報機器の開発・流通も行っているとされる」

声　1「——レインが狙われたって」

声　2「——レインって誰？」

S「★レイン

★これもまた、時制を崩す概念を提示したダイアローグ。

★Knights
正式には Knights of Easetern Calculus。これは〝ラムダ算法騎士団〟のモジリ（そういうUNIXウィザードの平和的秘密結社があった）。『lain』の Knights は、その役割はさておき、在り方は大抵の人が連想するであろう、東方騎士団、テンプル騎士団（共にダークなオカルティズム結社）という存在のイメージをも重ねられる様にしている。

それに関する情報は　0件です」

声　3「レインなら最近見ないな」
声　2「レインって誰よ?」
声　1「女の子さ」
声　2「女の子?」
声　3「強いんだ」
声　2「何が強い?」
声　1「メタファライズ、意思、パワー、眼の光、存在」
声　2「ねえ、聞いてもいいかい?」
声　1「なんだい」
声　2「あんた、ひょっとしてナイツのメンバーじゃないの?」

ぶつっ。

○マンションの一室

ピンポーン。

キッチン・テーブルで可搬式端末★に向かいスプレッド・シートを広げていた若い妻——

妻　「はーい」

★このシーンのタイポグラフィックのみで構成された映像は、ueda yasuyuki氏が一人で作成した大労作。

★可搬式端末
今ならノート〜ラップトップ型のパソコン、という程度の意味。

取り敢えず、入力を終えてエンターを叩き、玄関へ。

配達人★（かつて玲音と出会った）「宅急便でーす」

妻「あ、はい。ハンコね」

妻、戻ってきて食器棚の引き出しから印鑑を出し、再びドア前へ。

配達人、キッチンの端末を見て

配達人「あ、あのＮＡＶＩ新型でしょ。いいなぁ」

妻「（苦笑）ふふっ。内職して買っちゃった」

配達人「俺なんか、こんなバイトしてても全然買えないっす」

妻「頑張んなさいよ」

配達人、にやにやしつつ、妻の躰を眺め

配達人「（やや声を落として）判んない事あったら、俺、聞いて下さいよ。教えますから」

妻「（察し）――ふうん……（値踏みする目）。そうやって暇そうな主婦を誘惑してるんだ」

配達人「いや、そんな、まあ、そう、かな……（ニヤニヤ）」

と、小学生★の子どもが飛び込んで来る。

子ども「ただいまーっ」

★また登場させようとは私も思っていなかった。

★〝ショウちゃん〟という名前。演じたのは本当に小さな子どもなのだが、あまりにも自然な演技に舌を巻いた。

ギョッとしてドアから離れる配達人。

妻　「（ニヤ）じゃ、ごくろうさま」

○マンション廊下

バタン、閉じられるドア。

配達人、悔しそうに去る。

○玄関内

子ども、もうテレビに向かってゲームを始めている。

子ども「ママーっ、後で欣也君チに遊び行っていいー？」

妻、受け取った配達物（ＤＨＬのパックみたいな）を見て――、開けつつ

妻　「ゲームだったらネットでやればいいじゃない」

中から出てきたのは――プチプチに包まれた基盤。

子ども「（オフ）だからそのゲームの仕方を教わるのー」

基盤の裏を見る妻。

そこには――ナイツのマーク。

妻　「（ニヤ）ワイヤードはリアル・ワールドと一緒なのよ？」



○住宅街の道

玲音が坂を登っていく。
ぶーん……、ぶーん……。
電線が空を覆う。

玲　音「――！」

家の前に止まっている、黒い車。
固い顔をして立ち止まる玲音。
と、ドアが開いた。

玲　音「――（脅え）」

黒い服の男が二人、近づいてくる。
目が赤く光っている。

玲　音「――な、何……？」

一人が一人に耳打ち。★広東語らしい。
頷く一人。

ＭＩＢ１「――岩倉玲音さん。私達と一緒に来てくれませんか」

玲　音「え……」

ＭＩＢ１「無理にとは言いません。これはお願いです。私達はあなたに肉体的な危害を加える意図はありません」

★このシナリオを書く辺りで、岸田氏のデザイン画が上がってきた。非個性な二人連れだったＭＩＢに、キャラクターを備えさせたのは、意識してというより、岸田氏のデザインが自ずとそうする事を強いていたと思う。背の高いゲルマン人は〝カール・ハウスホッファ〟、背の低い大陸

玲　音「――誰……なの？」
　　ＭＩＢ１、手を目にやり――ごそごそと何かをする。
玲　音「――？」
　　コンタクトレンズの様に、装着式レンズアイを外したＭＩＢ。肉眼の目を初めて見せる。
玲　音「――」
ＭＩＢ１「私達と来て頂ければ、お教えします」
玲　音「――」

○街

冒頭のビデオ男のＰＯＶ。
デジタイズされた雑踏（に戻っている）の画面。
ねずみ★「（オフ）俺はこんなところにいたくないんだ。判るだろう？　俺はここまで出来るんだよ？　見てくれよ、俺はリアル・ワールドとワイヤードの垣根をとっぱらってるんだ。へへへ。
なぁ、お願いだ。俺も入れてくれよ、ナイツに。その資格はあると思うよ。へへ、へへへ」

人は〝林随錫〟という名をつけていたが、劇中では〝カール〟しか判明しない。

★あれ？　ここでは〝ねずみ〟と書いてるなぁ……。私のイメージは、もっと若い感じの病的なキャラクターだったが、岸田氏の描いた、あの、ムサい中年浮浪者風のデザインを見て大笑いしてしまった。ただ、ねずみＰＯＶ映像を独りで延々と作っている時、「こんな奴の見た目を作っ

歩く男を気味悪そうに避ける女子高生達。

ねずみ「これがあんたたち専用の極秘回線だって突き止めたんだ。褒めてくれたっていいだろう？　褒美なんて要らない。俺をあんたたちの仲間にしてくれれば」

虚ろに笑うねずみ。

ねずみのＰＯＶ。デジタイズされた、符号化された人の虚像が流れる中に――、ただ一人、人の姿を保ったまま立って、ねずみを見つめている者がいた。

ねずみ「（やや脅え）――誰だ、あんた……」

レインが微笑んだ。

○新橋

猥雑とした街。灰色の男達の街。

狭い路地を入ってくる黒い車――、旧い雑居ビルの前に止まる。

後部席から不安そうに見上げる玲音。

ているのか」と絶望的な気分にもなったが……。

千葉繁氏にこの〝ねずみ〟を演じて戴いた。ねずみ登場場面の録音は、もう千葉氏の〝ステージ〟といった風情で、スタッフも大変楽しませて戴いた。

と、ＭＩＢがドアを開けた。
玲音、降りる。

○橘総研前

「橘総合研究所新橋事務所」のプレート。
ドアを開けて入る二人。続く玲音。

○同／内

玲　音「――」

怯えて見回す玲音。あまりにも空疎な部屋。床には黒電話が直に置かれ、その傍らにはジュラケース入りのパ★ッチ・ボックス。
パイプ椅子に座ってその操作をしていた、くたびれた中年男が目を上げる。

男　「――ちょっとこっち来て」

玲　音「え……」

男　「見て欲しいんだよ。どうにも調子悪くってなぁこれ」

玲音、おずおずと近づく。

★パッチ・ボックス
うーん……、どういうつもりでこう書いたのか謎。パッチ・ベイというのは音楽機材。ムーグ（最初のシンセサイザー）みたいなイメージだったのか。
コンテではPC-9801の様な古い計算機になっていた。

男、パネルを外し、何枚も挿さっているカードの一枚を抜く（ビデオカードみたいな）。

男「どうしても本社のファイア・ウォールに認証されない。アプリ側でやれる事はやったんだが、やっぱりこんな旧式じゃ駄目なのかねぇ」

じっと基盤を見つめる玲音。

男「（苦笑）ずっとこれでやってきたからね。今更新型のＡＶＩなんかに移行する気力が湧かない。もうこんな歳だし」

玲音「（ぽつりと）ここのジャンパ」

男「え？」

玲音、基盤の一か所を指で指す。

玲音「これとこのジャンパを抜いてみて、ください」

男「しかしそれは――」

男、一瞬思案し、言われた通りピンセットで抜く。

再度挿されるボード。

ＭＩＢ二人はじっと背後に立っている。

★ビデオ・カード
カード式ビデオ、ではなく、パソコンの、モニタに画像を出す為の拡張カード。

★ファイア・ウォール
火の壁。許可せざる人物のアクセスをせき止めるセキュリティ・プログラム。

★ジャンパ
計算機のロジック・ボードや、ハードディスクの設定を変える為に、小さなピンを抜き差しする。このピンをジャンパ・ピンと呼ぶ。最近のロジックボードからはジャンパは消えつつある。画面のジャンパは、かなり大きく誇張されている。

ぶーん……。低い唸りと共に機械が始動した。
仮想ウィンドウが開き、先端的なインターフェイスが映る。S「Authorized...」

男　「ほう……」

玲音、ちょっと微笑。

○渋谷の街／ねずみのPOV

レインの姿――、パルスの間に隠れ――

ねずみ「レ、レインか？　あんたもナイツだったのか！　そうか！　知らなかったよ！」

ふっ、とレインの姿、消える。

ねずみ「ま、待ってくれよ！　僕はリアル・ワールドだってワイヤードと同じ様にどこだって入り込んでいけるんだよ。こないだの、ガキ共を使った遊びは傑作だったねぇ。僕もやってみたいよ。僕ならもっと凄い事を考えつくよ！　なぁ、だから頼むよ、僕を仲間に入れてくれよ！」



○橘総研

西陽が差す部屋、玲音一人、パイプ椅子に座っている。その前に立つ男。

男「君の事を我々は見つめてきた。ワイヤードで特異な行動をする者は必ずそうしたフォローがされる。だからそれ自体は特別な事では無い。こんな事さえ無ければ我々も君の前から姿を消していたし、君は我々の存在に気づく事も無く幸せに人生を送る事が出来た……」

玲音「――あの、誰、なんですか？　ここはどこなんですか？」

男「本当の名前など知っても意味が無い。私は黒沢★と呼んで欲しい。彼らには、名前が無い」

立っているMIBに目をやる玲音。

黒沢「君がどれだけ自覚的にやっていたのかは知らないが、君自身のワイヤードでの存在は極めて不自然なものだった。そして、どうやらそれに特別な関心を懐いた者がいる」

玲音「――あの、何を言ってるのか――、あたし全然……」

黒沢「（構わず）ナイツ。聞き覚えが無いとは言わせない。君は彼らと一時は直接対話をしていた」

★この辺りの台詞はオミットされた。〝雑居ビルの男〟は、ここにある様に〝黒沢〟という名前（本当のそれかはさておき）を与えていた。

玲音「――（固い顔）ナイツ……」

黒沢「ワイヤードにはリアル・ワールドの政治的な国境は無いといった寝言をほざく無政府主義者★、悪ふざけが革命だと思い込んでいる馬鹿者――」

玲音「――」

黒沢「――そんな手合いならいくらでもいる。しかし――、ナイツはどうもそういうのとは違うらしい……」

玲音「――？」

○ねずみのPOV

デジタイズされた――そこは夜の国道か？　光が走り抜けていく。

ねずみ「ああ、秘密は守るさ！　勿論だとも！　君たちは、デウス★を信仰しているんだよな。僕も従うよ。でも――、本当なのかい？　ワイヤードに神様なんているのかい？　僕には未だ信じられないけど――でも、仲間に入ったらもっと知る事が出来る。そしたら信仰だって持てるよ」

★『～サイバーランド』では、この様な存在を〝サイバーナキスト〟と呼称していた。

★デウス
クレジットでは出ていたが、劇中にはここが初出。デウス・エクス・マキーナより。ギリシャ神話劇で、混沌とした物語の終盤にいきなり降臨して、無理矢理解決をもたらす機械仕掛けの神。

と――、人★が前から歩いてくる。透けてはいるものの、抽象化された白い人の擬態が三人……。

ねずみ「き、君達かい!?　来てくれたんだね!?僕を迎えに！」

三人の内、一人が近づいてくる。女のシルエット。

○橘総研

俯いている玲音。

黒　沢「教えて貰いたいんだ、岩倉玲音。君は、ワイヤードのレインと同一人物なのか？」

玲　音「――あたしは――（自信無さ気）あた、し……」

黒　沢「（嘆息）――とにかく、奴らは君を何かに利用したがっているらしい。我々にとってそれは、どんな手段を採ってでも阻止せねばならない事かもしれないのだ」

玲　音「――（見上げ／レインの声）ならそうすれば」★

ややうろたえる黒沢。

立ち上がる玲音、否、レイン。

レイン「ナイツ？　あんな奴らに何が出来るっていうのよ。所詮ワイヤードを通してくだらない仕掛けをするだけじゃな

★このシーンは、私が担当したカットの中で唯一、セルを扱ったもの。このカットの為にセルを起こしてもらい、スキャンしてMacintoshにて動かし、加工した。しかし、最初に作ったテイクは監督に気に入られず、「もっとアブノーマルにして」という事でリテイク。

★この玲音の〝ワイヤードのレイン〟への変容はシナリオの様な台詞ではなく、フルサイズ・ショットのリアリスティックな芝居（スタジオ・ジブリのアニメーターによる）によって表現された。また、黒沢の追い詰めの順番もコンテで入れ替わっている。

い」

レイン、ドアに向かって歩いていく。
嘆息する黒沢。
ドアを開けたレインに――

MIB2「(広東語)」

キッと振り向くレイン。

MIB1「デバイスが無くとも、ワイヤードとリアル・ワールドの境界がぐずぐずと崩れつつある事を、君も知っている筈だね」

レイン「だから?」

MIB1「我々はそれを危険だと考えている。何が起こるのか予測がつかないからだ」

レイン「(冷笑) だから面白いんじゃない?」

MIB1「危険なのは、それと君自身だ」

レイン「――」

MIB1「君は誰だ?」

レイン「え……」

MIB1「君の両親は本当の両親か? 君の姉は本当の姉なの



か？　君は本当に岩倉玲音なのか？」

レイン「――」

レインは玲音に戻る。
不安が玲音を圧し潰そうとしている。
飛び出す玲音。
顔を見合わすＭＩＢ。

○マンションの部屋／夜

ゲームをしている子どもの背に

妻　「（オフ）一緒にやろっか」

子ども「（振り向かず）お仕事終わったの？」

妻　「うん。今終わったとこ」

ＮＡＶＩのサイドパネルからボードを引き出す妻。
焼け焦げている。

燃えないゴミ容器に棄てられる基盤。

妻　「さ、片づいたっと」

○夜の国道

激しい車の往来。眩いヘッドライトがラインを描く。
その脇――、側溝に頭を突っ込んでいる屍体。
傍らにはビデオ・アイ・ゴーグル。
まだ生きているその画面には――砂嵐――。
その砂嵐が、ぼんやりとナイツの紋章に見えて――

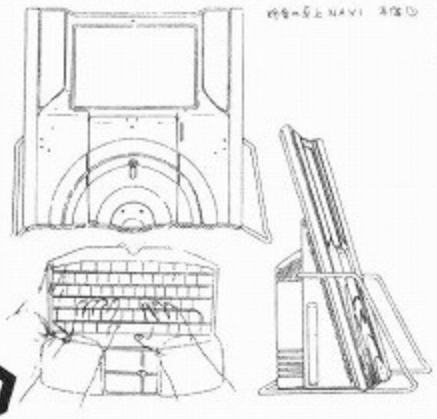
To Be Continued...

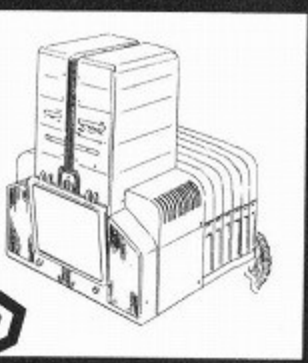


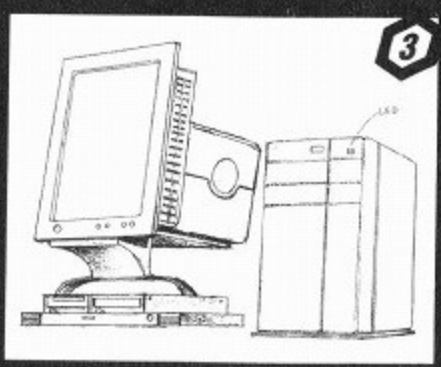
NAVI ナビ

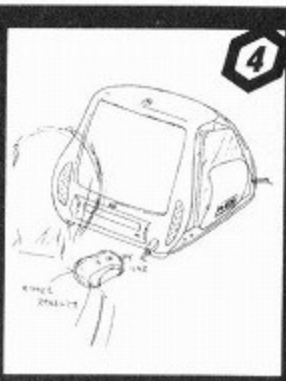
Column•02

"ナビ"と呼ばれるそれは、
この世界における情報端末。
子供向けのものから高度な機器まで、
現在よりも進展したネット環境に合わせて
進化を続け、各自のカスタムも進んでいる。
携帯端末に関しても、メール機能を
特化したものが多いようだ。



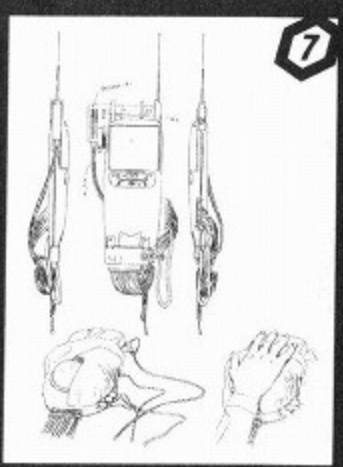


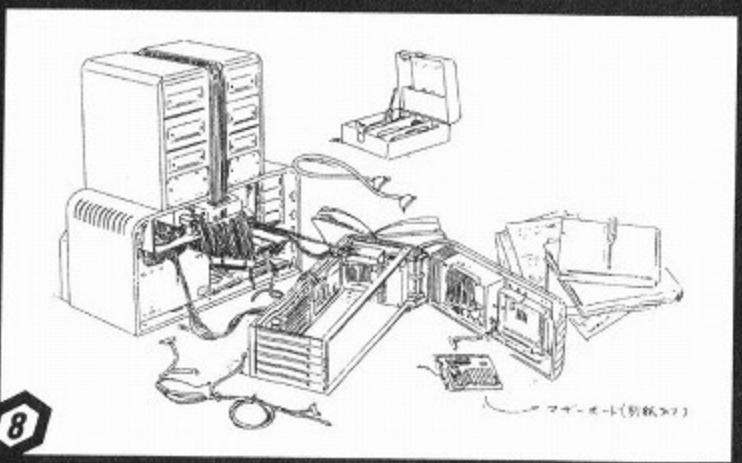














① 子供用卓上NAVI（#1〜2）＜COS＞
② タチバナの最新型NAVI（#2〜）＜コープランドOS＞
③ ナイツの縦型モニタNAVI（#7）
④ ありすのNAVI（#11）
⑤ 携帯NAVI＜ノーマルタイプ＞（#2〜）
⑥ タロウの子供用ガンNAVIとゴーグルタイプ（#12）
⑦ 玲音の改造マウスと増殖版携帯NAVI（#6、7〜）
⑧ プシューケー取付のための②の解体図（#4）

layer:08

RUMORS



CAST

岩倉 玲音	清水 香里
岩倉 美香	川澄 綾子
瑞城 ありす	浅田 葉子
山本 麗華	手塚 ちはる
加藤 樹莉	水野 愛日
デウス	速水 奨
タロウ	滝本 啓人
S	吉岡 久仁子
教　師	成田 剣
女の声	城間 章子
男の声	菅原 正志
声	吉田 弥生
	吉田 裕秋
	相楽 恵美
	川中子 雅人
	藤原 あかり
	田中 総一郎
	北島 智恵子
DJ	アリ 森泉

STAFF

絵コンテ	中村 隆太郎
演出	うえだ しける
作画監督	田中 雄一
NAVIレイアウト監修	ところ ともかず
原画	田村 篤
	米林 宏昌
	安藤 正浩
	関口 雅浩
	えんどう 麻未
	藪下 昌二
	大関 紀子
	菅沼 栄治
	須賀 重行
	岸田 隆宏
	星山企劃
色指定	ますだ よしまさ
制作進行	佐藤 拓朗
背景	猟プロダクション
	本田 修
	市谷 正夫
	山口 忍
	荻庭 裕文

○プレゼント・デイ、プレゼント・タイム

夜の街――、人が無言で行き交うにも拘わらず、無数の喋り声が輻輳している。

わあああああんんんんん

女の声「――あなたも傷つきたいの？　心をやすりにかけられる様な思いがしたい？――だったら、絶対に目を背けないで……」

ビルとビルの間には無数の電線。

どこもかしこも〝繋がって〟いる。

人は誰しも〝繋がれて〟いる。

○玲音の家／外観／夜

ぶーん……、ぶーん……。

電線が風に揺れている。

玲音の部屋から出ているダクトや電線が淡く光っている。以前よりも多く、以前よりも醜く。

亀裂からはみ出す臓物の様に――。

○玲音の部屋

ＮＡＶＩに向かっている玲音。

玲　音「――いると思う？」

○ワイヤード／ゲーム空間

ネットワークＲＰＧのドットの荒い画面。

その中にいる――ドット絵のタロウ。

タロウ、振り向き

タロウ「――いるかどうかなんて誰にも判らないさ。ワイヤードに神様なんていようがいまいが、ユーザには関係ない事だもの」

〔タロウの台詞、ビットマップのテキスト表示？〕

タロウはＰＫらしい。向こうからやってきた旅人を見て――

タロウ「ちょっと待ってレイン。（ニヤ）あいつを殺してからだ」

タロウ、ソードを抜く。

そのドット画面の中の、リアルなレイン――、無表



情に世界を見回す。

レイン「何が面白いのさ、他のプレイヤーを殺してばっかり」

ドットの血飛沫が上がる。

タロウ「何がどうして面白いかなんて、誰にも判らないさ」

レイン「――」

○玲音の部屋

虚ろに仮想ウィンドウを見つめ、頬杖をついている玲音。

レイン「――橘総研と看板には書いてあったんだけど」

○ワイヤード／アダルトサイト★

下着姿の白人女性が、挑発的なポーズを次々と変えている。

男の声「橘総研程の大企業が不法行為をする筈がない。しかし、噂は聞いた事がある」

女の前で、やや潔癖な不快さを顔に出して立つレイン。

★演出を担当されたうえだしげるさんの証言。「アダルトサイトの女性に対する写り込みにはイメージに悩んでいた所、岸田さんより『監督は外国によくあるヌード・バーにて、女性の身体に古い映画の映像を映して隠しているイメージらしい』と教授されたのですが、その様な作画をする余裕が無く、思いつきでマーブリングで色調が違う背景を数点用意して貰い、それぞれを別方向、別スピードにて引きつつ多重露出…という手段を採りました。監督にも評価をして頂き胸を撫で下ろしたんですが、後日、打ち上げで撮影スタッフと話したら、かなりの難撮影だった様で、恨まれていました（笑）」

レイン「噂？」

今度は黒人の女がポーズをとっている。

男の声「ワイヤードで俺たちがこうやって情報をやりとり出来るのはどうしてか知っているか？」

レイン「――（ムッとして）あたしをテストしてるワケ？　IP★の事を言ってんだったら――」

今度はストッキングに包まれハイヒールを履いた脚だけが、ポーズをとっている。

男の声「（笑）すまん、そうだ。我々にとってプロトコルはその存在を普段気にする事がない。しかし今のプロトコル、六世代目もデータのスループットを筆頭に頭打ちになってきている」

レイン「――第七の★、プロトコル？」

シルクの手袋に包まれたしなやかな女の手が蠢く。

男の声「そう、第七のプロトコル。それをインフラ化しようとしているのは一企業だ。プロトコルを支配する事は、ワイヤードを実質的に、経済面で支配出来るという事だからね。それに対する妨害は執拗らしい。で、その始末をし

★IP　Internet Protocol　インターネットで情報をやりとり（WebPageを見たりファイル転送したり）する上で、その情報の授受の手段を定めるもの。

★このシリーズ最大のマクガフィンである〝第七のプロトコル〟。プロトコルとはネットワークで情報をやりとりする際に必要な取り決めごとを示す。前にも述べた様に『lain』シリーズの世界では6世代目が現行プロトコル。現実に今、ネットワークで用いられているのがIPv5であり、その次世代目という感覚での呼称ではあるが、TCP／IPそのものの発展形ではない。このシリーズに於ける情報端末、ネットの在り方はかなり恣意的に〝肥大誇張〟している。『アミテージ・ザ・サード』以来、サイバー的な事には常に関心を払ってきたが、ただの取り決めを〝プロトコル〟と呼ぶのが、門外漢である私には大層面白く感じられていた。例えば『シオンの議定書／プロトコル』（有名なユダヤ人排斥を目的として贋作された密約書）に代

ているのが」

レイン「橘総研……」

ぷいっと背を向け去っていくレイン。

○岩倉家外観

○同／二階廊下

部屋から出てきた玲音（に戻ってる）、ハッとなる。

廊下の突き当たりに、こちらに背を向け美香がぼーっと立っていたのだ。

玲音「――（小声で）お姉ちゃん……？」

美香は振り向かない。

数歩、美香に近づく玲音。

と、美香の意味不明な呟きが聞こえてくる。

玲音「――（暗然）――」

○同／キッチン

二階から降りてくる玲音。

表される通り、非常に隠史的なニュアンスを持つ言葉だからだ。また、心理学用語としても〝プロトコル〟は用いられる。人が言葉によって心を語る。それを分析する考え方を〝プロトコル分析〟と呼ぶ。ヴントという、心理学を科学的に固めようとした人が始めたもの。互いの発する言語により、情報が相互に諒解される――のが普通なのか。そこにはプロトコルが暗黙の内に取り決められている。でないと言語活動は無意味なものになってしまう。やはりここでもプロトコルというのは、人間が生み出した神の様な働きをしている――という考え方も出来るのではないか。この辺りが、『lain』シリーズの縦軸を構築するものとなった。

キッチンには、何か深刻な話でもしていたのか、父と母がテーブルに姿勢良く座っていた。
玲音が入ってきても、一瞥たりともしない。

玲音「――」

玲音、冷蔵庫に向かい、ドアを開け、麦茶をグラスに注ぐ。
チラっと両親の方を見る。
二人とも微動だにしない。

玲音「――パパ、ママ……？」

二人は無言。

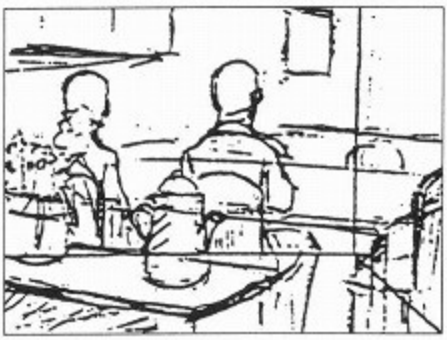
玲音「あたし、こないだある人に聞かれたの……。（泣き笑い）お前は本当に岩倉玲音か。お前の両親は本当の両親か、って。おかしいでしょ」

二人、無言……。

玲音「おかしい、よね（泣きべそ）……。おかしな事言うよね」

二人、無言……。

玲音、手にしていた麦茶を飲み干す。
水道でグラスを濯ぎ、バスケットに戻し、振り向く



と――

玲　音「！」

二人がこちらを見ていた。しかし――あまりにも無表情。あまりにも冷徹――。

玲　音「――」

○鷗華学園中学正門前／翌午前

登校する玲音。

と、背後から肩を叩かれ振り向く。

玲　音「あ、ありす、おはよう……？」

ありす、固い顔をして玲音を見つめていた。

ありす「――」

ありすの脇には樹莉と麗華。二人とも厳しい目。

玲　音「――ど、どうしたの……？」

ありす「あたしは信じてないんだけど……、玲音、違うよね？」

玲　音「えっ……、何、が……？」

麗　華「しらばっくれてんじゃないのぉ？」

ありす「麗華、そんな決めつけちゃ駄目」

樹　莉「ねえ玲音、マジで違うの？」
玲　音「あの、だから、何が……？」
ありす「――玲音、ワイヤードで……」
玲　音「（脅え）――」
ありす「（微笑）うん、いいや。絶対玲音じゃないって、あたし信じてるし――」
樹　莉「（小声）あっ、ありす！」

はっと見るありす。
向こうを歩いていく、若い男性教師。
俯いたありす、歩きだす。続く樹莉と麗華。
玲音、俯きながら歩きだす。

○教室

玲音がありすらに遅れ、入ってくると――
クラスの生徒達が玲音を見てヒソヒソと耳打ちしている。

玲　音「――」

当惑しつつ席に座り、鞄からノートと文具を出す。



と――、ふとドアを見ると――
他のクラスの生徒達が玲音を覗き込んでいた。
生徒1「――あの子？」
生徒2「玲音――」
玲音、不安に圧し潰されそうな思い。

○ワイヤード／コミュニケーション・ライン

広大な畳の部★屋。
そこに、和服の人が座っている。
しかし――彼らの顔には口があるだけ。
それぞれが読経の様に勝手な言葉を呟いている。
無表情に、彼らに向かい合って立つ玲音。
それらはメール、電話といったものの象徴。
口だけの人の間を歩くレイン。
すれ違い様に聞こえる会話の断片。
声1「――はもう危ないみたいだ。手形決裁は避けて――」
声2「――だって！　信じられる!?　あんな素敵なのに、そんな趣味だなんて――」

★この畳も、SR-12Wにより3Dモデリングされている。

声　3「――プロトコル6には極めて重要なバグがあります。これによる損害はワイヤードにとって甚大であり――」

声　4「――その子の部屋に、毎晩赤と緑の縞々のセーターを着た、子どもみたいな奴が現れて――」

声　5「――あのアイドルが高校生時代、彼氏の車に乗ってて人を轢き逃げしてるって――」

声　6「――絶対にこれは本当だからね。あたし直接聞いたんだから――」

声　7「――ははは。あのビルは出るんで有名なんですよ。夜中に端末に向かってると、誰もいない筈の社内からメールが――」

声　8「――ナイツなんて、ホントはいない。あれはアメリカの学生のジョークで――」

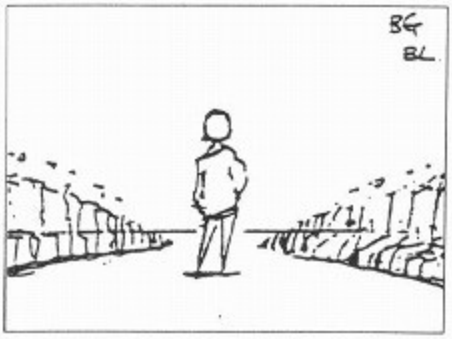
レイン、堪えられなくなり、立ち止まって耳を塞ぐ。

レイン「――何が面白いのよ……」

耳を塞いでいるのに、頭の中に響く声。

デウス「（オフ）面白くないのかい？　君は」

ハッと見回すレイン。



レイン「――誰」

レインの眼前に、淡い光に満ちた、液体の様な質感の抽象的な存在があった。

デウス「(優しげな口調) 君は僕を探してるんだろう?」

レイン「――あんたが――神様……?」

デウス「神の定義は何かな? 世界の創造主? なら違う。世界を司る万能の支配者? それは買い被り過ぎだよ」

レイン「(虚像だと察し、見回す) ――どこにいるの?」

デウス「神の定義が、その世界に普遍として存在する者――とするなら――、うんそうだね、僕はそう呼ばれても構わない。僕はちょっとだけ、世界の動きに干渉しているだけ」

レイン「――誰なのよ?」

デウス「僕は君さ。君も気づいてるんだろう? もう一人の君がこのワイヤードには以前からずっと存在しているんだ。君はそのホログラムに過ぎない。君はただの肉体だ」

レイン「――信じろっていう方が無理だよそんなの!」

デウス「(笑) リアル・ワールドの君と、今の君。同じ人格だとは君自身思えないだろう?」

レイン「あたしは――あたし」

○混乱★

レインの背後で、狂った様に背景が錯綜。
家、学校、サイベリア、街――。
ごおおおおおおお――
背景は具象を失い抽象となる。
レインは自分がどこにいて、自分が誰なのかを見失いそうになる。
玲音、もしくはレイン「あああああああああああああっっ！」
ふっ――。

○教室

授業中の教室。
玲音、我に返る。自席で、ＮＡＶＩに向かっていた。
ふと気づくと、これまで受けていた情報基礎の授業は、ずっと同じ事を繰り返している。
青ざめたレイン、ＮＡＶＩのモニタを見る。

★このシーンは後に、別の形で移動された。



メールのアイコンが明滅していた。
レイン、それを選択し、開く。
大きなフォントで――
S「玲音はのぞき屋」

玲　音「！」
見回す玲音。
何人かが玲音を見てひそひそと話している。
ありすは心配そうな顔で見ていた。

ありす「――」
ありす、自分のＮＡＶＩに向かい打ち込む。
ぴっ。
玲音のＮＡＶＩに受信。
S「ウワサなんて気にすんな」

玲　音「……」
玲音、ありすを見る。
ありす、笑顔を作って見せる。

玲　音「――」

○廊下

一人歩く玲音。
生徒達、玲音を見てヒソヒソ。
いたたまれない玲音――駆けだす。

○体育館

○同内／用具室

暗く湿った部屋。
跳び箱の脇にぺたりと座り、ＮＡＶＩを広げる玲音。
泣きべそをかいている。

玲　音「――ハロー、ＮＡＶＩ」

ピッ。

じっと仮想ウィンドウを見つめている玲音の、弱気な幼い顔――それが――、意思の強いレインのそれに変容していく。

座り込んでいたレイン、立ち上がる。

と、回りの体育用具が次々★と後退していき――

★後退、どころではなく、体育館ごと爆破炎上する凄まじいシーンとなった。岸田氏自ら原画を担当。いよいよこの物語がリアル・ワールドとワイヤードのみならず、主観の世界が交錯している事が顕著となる表現となった。

壁が蒸発し――
漆黒の空間を凄まじい渦が巻いている。その中に包まれていくレイン。

○黒味にスーパー

S「Searching…」（明滅）

玲　音「（オフ）あたしは――何をしたの？　ワイヤードで。あたしの知らないあたしが、何をしているの……？」

○高層マンションン

ぶーん……ぶーん……。電線の海から突出する様に不自然に高いマンションの上層の窓――

囁き声「（オフ）……あ……」

窓の内部にゆらりと動く人影――。

○ありすの家／内部

玄関――

ダイニング――

囁き声「(ごく微か。声にならない程)ダメ……」

ありすの部屋のドア――

衣擦れの音が僅かに聞こえ――

○ありす★の部屋

自分の机の前に座っているありす。

背後から長身の若い教師が腕を回し抱き締めている。

顔を紅潮させ、目を閉じている。

ありすの頬に掌を当て、やや背後に向けさせる教師。

キスを期待し、ありすの唇がなまめかしく動く。

教師、それを見つめている。

目を開け、不安そうに教師を見るありす――。

教師、頬に充てていた掌をズラし、指でありすの唇をなぞる。

怯えた顔のありす。

教　師「★(囁き声)先生とこんな事をしていいのかな」

ありす「よく……ない……」

教　師「よくないのにどうしてするの?」

★シリーズで唯一、私が自ら改稿を宣言してかなり悩み、苦しんで書いたシーンがこれだった。他者に一番見られたくないもの。それを見られた心の痛み。見てしまった者の心の痛み。それを描くにはこれしかない、と思い至ったが、書くのにはやはり随分と勇気が必要だった。そして、これを書こうと決めた時点で、この物語の中でのありすの役割がはっきり決まった。7話アフレコ終了時、浅田葉子さんに「これからありすはキツい芝居になっていきますが、どうか頑張って欲しい」とお願いをしていた。

★それほど想いの深いシーンであり、かつテレビで放送可能なラインを想定して構築していたのだが、意見が折り合わなかった。結果的には、絵をいじる事なく、(ありすの幻想の)教師とありすの会話をオンエア版ではカットする事になった。ビデオ版では復活しており、基本的にオンエア版とビデオ版で異なるのはこのシーンだけである。

ありす「――したい、か（ら）……（ハッ）」
背後に振り向くありす。
ベッドにちょこんと座り、見つめていた玲音（lain）。
ありすは自分の席に座っており、その背後には教師などいない。最初から。
ありすの左手は机の下にあった。それを、そっと上に出すありす。
じっと見ているばかりの玲音。
ありす「（掠れ声）――やっぱり――、玲音が――」
そのありすのすぐ脇からlainが囁く。
lain「（囁く）ねえ、知ってる？　瑞城ありすが誰を好きかって。誰の事を思って嫌らしいことしてるかって」
ありす「――（顔が歪む）」
前方には未だ玲音がいる。
ありす「やっぱり――玲音が言いふらしてたの」
lain「――（微笑）」

★この"lain"という表記は、あくまでアフレコ台本として演じ分けられる様にしたもの。シナリオ上では、玲音（奥手の子どもっぽい性格）、レイン（ワイヤードのレインに代表される、攻撃的な性格）、lain（悪魔的な性格）の三者がこの話数時点までに登場しているが、lainという存在は当然これらだけではない（女神lainも含め）。

ありす「あたしの事をそうやってじっと見ていたの!? あたしが秘密にしてる事とかあたしが絶対見られたくない時とかあたしが――」

玲音（ｌａｉｎ）、微笑んだ。

ありす「――あんたって――」

ありすの姿、ノイズに包まれ――消える。

○ワイヤード★

闇の中にある、ありすのベッド。そこに座っているｌａｉｎ――。

レイン「（オフ）誰よあんた」

ｌａｉｎ、脇を見る。

レインがｌａｉｎの前に立っている。

レイン「あんたはあたしじゃない。あたしはあんたみたいな事はしない！」

ｌａｉｎ「――（小首を傾げる）あたし……」

レイン「やめてよ!! あたしの――、あたしが自分で嫌なあたしをどうして真似するの!?」

★このくだりに入る前に、岩倉家のベッドで、くまパジャマを着た玲音がガタガタと震えているシーンが挿入された。このシーンは本当に心に突き刺さった……。

lain「――（微笑）」
レイン「――（憤怒）」
　レイン、近づき、玲音に手を差し伸ばす。
lain「――（くすくす）」
　レイン、思わずlainの首を締める恰好。
lain「あたし、自殺しちゃうの？」
レイン「（顔を歪める）――どうして――、どうして温かいの!?　どうしてあんたの体温をあたしが感じなきゃいけないのよ!?」
lain「だってぇ……、あたしは玲音なんだもの」
レイン「（絶叫）違う!!」
　玲音のくすくす笑いが増えていく。無数に、響き渡り――

○ワイヤード／コミュニケーション・ライン

　広大な畳の空間、再び。
　そこに座っている無数の和服の人――、口だけだった存在が――、全て玲音の顔になっていく。

成熟した女の躰に、醜く爛れた女の躰に、いかつい男の躰に――★人形の様な玲音の顔が無機的についてカクカクと口を開閉している。

それを愕然と見ているレイン。

その背後に、デウスの虚像。

レイン「何よこれは――!?」

デウス「(優しげな声) みんな君さ。君はワイヤードにずっと存在していたって言っただろう?」

レイン「ええっ!?」

デウス「君は僕と同じさ。ワイヤードに遍在している。だから、どんなところにも、誰のところにも常に君は側にいたんだ。人に見られたくない事も君は見つめていた。それを君は他の人に伝えただけ。それは正しい事さ。だってワイヤードの情報はシェアされるべきものじゃないか」

レイン――、驚愕していたが――

レイン「あんたが言ってる事は――全部嘘だよ」

デウス「――どうして?」

レイン「――ありす達は見ていたもの。あたしがいない時に、ワ

★文楽人形の様な、玲音の無数の頭部がカタカタと鳴る様は、アニメーションとしては非常に難しい表現だった(らしい)が、見事に作画され、音響効果と相まってブラック・ユーモアと恐ろしさを兼ねた特異なシーンとなった。



イヤードのあたしを見ていたって言っていたもの。あたしがあたし自身だって事を認識している限り、あたしの自我はあたしの中にある――」

レイン、玲音人形の中へ入っていき――

レイン「こんな不出来なデュープ★をあたし自身だと思えって？ふざけんじゃないわよおおおお！」

レイン、傍らの人形の首を叩き落としていく。

抵抗もせず、頭部を落とした人形、倒れていく。

首だけとなった玲音人形、カクカクと未だ口を開閉していた。

レイン「（はあ、はあ、はあ……）あたしが――、あたしがもしあんたが言う通りだとしたら――」

デウス「だとしたら？　何だい？レイン」

レイン「みんながレインに見られたという記憶――、情報の消去だって出来る筈」

デウス「そうだね。やってみたらいい。君はそれを出来るだけの力を持って、生まれたんだ」

レイン「――（苦渋）」

★デュープ
Duplication　複製の略

○黒味にスーパー

S「Deleting...」（明滅）

○住宅街の道

ハッ、と我に返る玲音。

ぶーん……、ぶーん……。

見上げる玲音。

電柱と電柱を繋ぐ電線が風に震えている。

ありすの声「れいーん！」

はっと振り向く玲音。

ありす、麗華、樹莉が駆けてくる。

玲音「――ありす……」

ありす、笑顔で手を振っている。

玲音「――（複雑な笑み）――忘れてくれたの……？」

ありす、笑顔で手を振っている。

樹莉「玲音ってばー！」

玲音、おずおずと手を振ろうと手を上げると――



玲　音「！」

すっと脇を抜けて、玲音の前に立った者がいた。

それは――ｌａｉｎ。

玲　音「なっ、何よぉ……、これ……」

ｌａｉｎ「（ありすに）おはよ、ありす。ねー、今日サイベリアに行きたいな」

麗　華「へーっ、玲音が自分から行きたいなんて珍しいじゃん」

ありす「いいよ！　じゃあまたあたしン家で着替えてこ」

ｌａｉｎ「うん！」

玲音の姿は彼女達に目に入っていないらしい。

玲音の眼前を、ありすらは通り過ぎていく。

と――、レインが玲音を一瞥した。

玲　音「やめて！　あたしは、あたしだよぉ！」

玲音の耳元で（別の）レインの唇が囁く。

ｌａｉｎ「そうだよ。玲音はレイン。あたしはあたし」

ハッと脇を見る玲音。

誰もそこにはいない。

前に行った筈のありすらと共にｌａｉｎもいない。

---

ueda yasuyuki　プロデューサーから'96年暮れにこのプロジェクトに誘われ、プレイステーション版、そしてこのテレビシリーズ版の〝物語〟を創ってきた。彼が最初に自分で考えていた設定やストーリーは、殆どその全てを変えてしまったのだけれど、玲音とはどういうキャラクターなのか、については明確にコンセンサスをとってきたつもりだ。そして、もう一つ。ドラマとしてのテイスト、というより、甚だ語弊ある言い方だけれど、観た人の心にどういう疵をを与えるかについて。それは心の痛みというものを描く事から逃げず、それを共感して貰って初め

玲音は一人ぼっち。
坂の途中で――一人ぼっち。

○玲音の部屋

疲れ果てた顔で入ってくる玲音。
鞄を床に落とし、ＮＡＶＩの前に倒れこむ。
しゅうううう。
機械の音が低く鈍く響く。
冷たい機械の梨地を撫でる玲音。

玲　音「――ハロー、ＮＡＶＩ……」
ぴっ。仮想ウィンドウが次々と開いていく。
玲　音「あたしは、あたしだよね……？　あたし以外のあたしなんて、いないよね……？」
ぶーん……。ぶーん……。
機械は答えない。

To Be Continued...

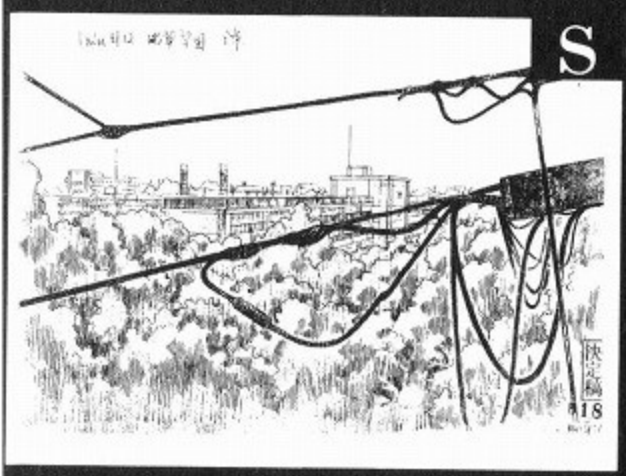
て伝わるものが、この『lain』シリーズのコアである、と私は受け止めていた。ueda プロデューサーがどういうものを私に求めているのかをずっと考え続けていた。それを形にしたのが、この layer:: 08 RUMORS だった。
実はこの挿話、内容は全く違うものの、こうしたテイストのものを、当初のラフな構成案では四話辺りでやるつもりでいた。しかし、シナリオ執筆を始めると、どんどんこの挿話が重く感じられ、結果この話数にまで遅れる事になった。しかし、終幕を見据え、玲音と対峙するありすという存在理由が明確になった意味でも、このエピソードはここに置かれるべきものだったのだ。

私はアフレコにはほぼ全て立ち合って、意見を述べたり差し込みの台詞を書いていたが、完成した作品は全てオンエアを初見としていた。この layer:: 08 は、私にとっては最も想いが深く、最も観ていて辛いエピソードだった。見終えた後、胸が苦しくて眠れなかったあの夜の事は忘れない。

school

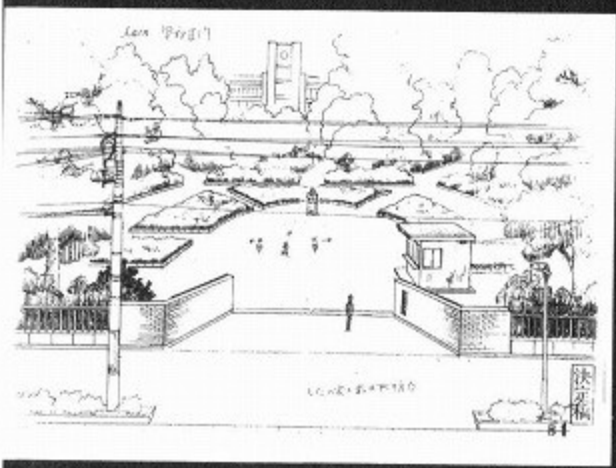
スクール

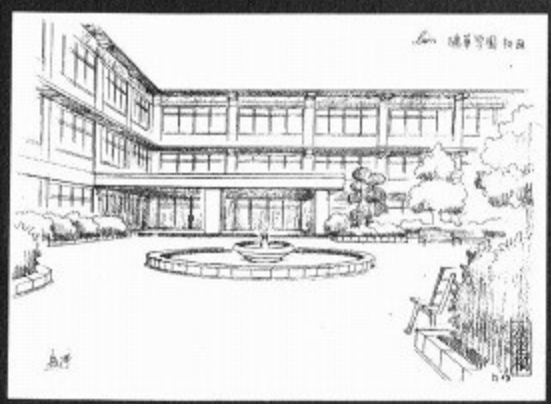
Column•03

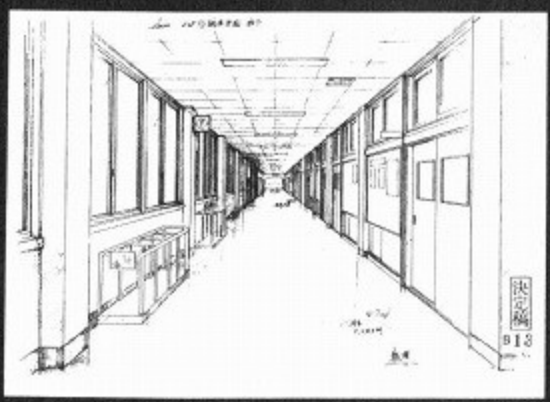


私立鳴華女子学園。
中等部・高等部・大学部が、
この敷地内にある。
取り立ててお嬢様学校というわけでは
ないが、生徒たちはみな
ある程度の品格を備えている。
だが、家と同じように、
玲音にとっての学校は
どこか違和感を感じる場所。

この教室の中でもありすだけが、
彼女にとっては体温を感じるものだった。









layer:09

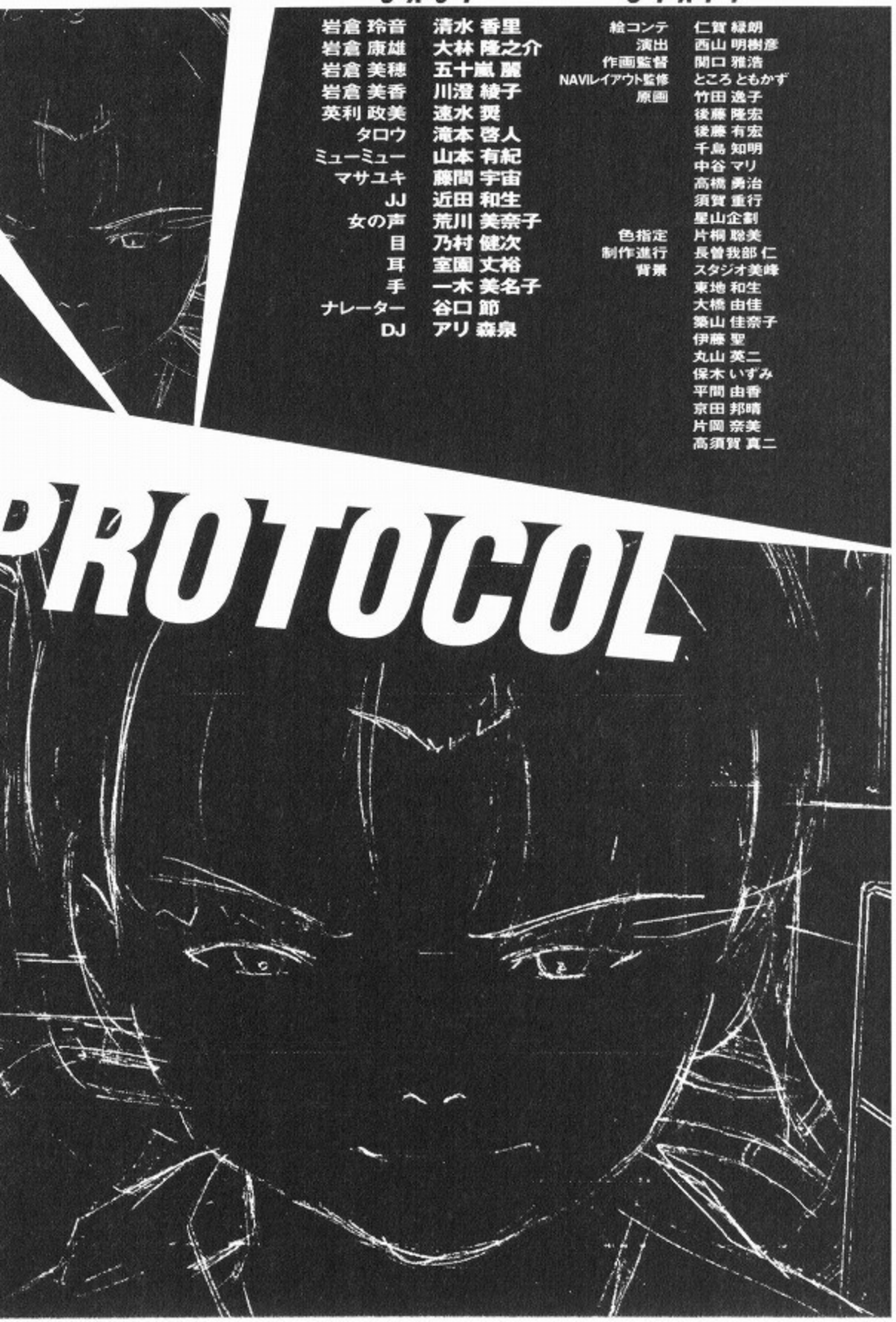
PROTOCOL

CAST

岩倉 玲音	清水 香里
岩倉 康雄	大林 隆之介
岩倉 美穂	五十嵐 麗
岩倉 美香	川澄 綾子
英利 政美	速水 奨
タロウ	滝本 啓人
ミューミュー	山本 有紀
マサユキ	藤間 宇宙
JJ	近田 和生
女の声	荒川 美奈子
目	乃村 健次
耳	室園 丈裕
手	一木 美名子
ナレーター	谷口 節
DJ	アリ 森泉

STAFF

絵コンテ	仁賀 緑朗
演出	西山 明樹彦
作画監督	関口 雅浩
NAVIレイアウト監修	ところ ともかず
原画	竹田 逸子
	後藤 隆宏
	後藤 有宏
	千島 知明
	中谷 マリ
	高橋 勇治
	須賀 重行
	星山企劃
色指定	片桐 聡美
制作進行	長曽我部 仁
背景	スタジオ美峰
	東地 和生
	大橋 由佳
	築山 佳奈子
	伊藤 聖
	丸山 英二
	保木 いずみ
	平間 由香
	京田 邦晴
	片岡 奈美
	高須賀 真二



○プレゼント・デイ、プレゼント・タイム

夜の街――、人が無言で行き交うにも拘わらず、無数の喋り声が輻輳している。

わあああああんんんんん

女の声「もし苦しみから逃れたいんだったら、神様を信じる事ね。あなたが信じようと信じまいと、神様はすぐあなたの側にいるのよ……」

ビルとビルの間には無数の電線。

どこもかしこも〝繋がって〟いる。

人は誰しも〝繋がれて〟いる。

○アメリカ／ロズウェル★

荒涼とした赤い砂漠。

その丘に何か銀色の機体が墜落している。

N「1947年7月4日、アメリカ・ニューメキシコ州の砂漠に奇妙な航空機が墜落した。それが何であったかは未だに証明される事のないまま、憶測が事実となり、噂が歴史となっていった」

★この layer: 09 に於ける実写ドキュメント・パート（トータル約8分）は、コンテの仁賀緑郎氏が 3D-CG、私が 2D のデジタル・ワークを担当した。疑似ドキュメンタリーて語ろうとしている内容は、ヴァニヴァー・ブッシュを起点とするコンピュータ／ネットワーク史をキーとなる人物で繋いでいくというものなのだが、ブッシュが MJ-12（内容は本篇で触れている通り）のメンバーの一人とされていたのが私個人として非常に面白かったので、冒頭はこういうものになった。ロズウェルは実際の映像で、かつて私が関わったUFO番組の取材テープを借り、After Effects のプラグイン・フィルタ CineLook で昔の記録映画の様なフィルム粒子荒れや引っ掻き疵を付加して作成した。あまりにもノイジーな仕上がりになった為、このままでは放送事故と見なされるという事で、編集時にテロップを挿入させられている。なお、ロズウェルで回収された、とされている〝エイリアン〟は、グレイタイプではなく、東洋人の様な小柄な人間であった。

○鷗華学園中学／朝★

校門から校舎に向かって歩く玲音。
やや前を、ありす達が歩いている。

玲音「――」

談笑していたありす、ふ、と玲音の方を見る。

玲音「――（緊張）」

ありす、笑みを消して目を逸らし、また樹莉らに話しかける。

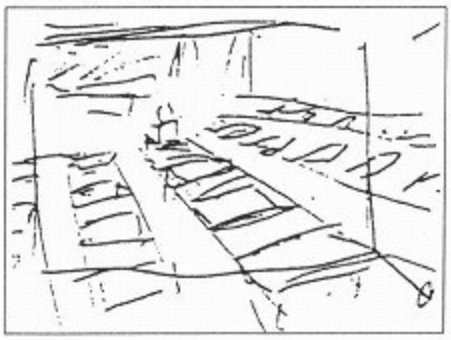
玲音「――」

○教室

しん、と静まって授業を受けている生徒達。
玲音、俯いたまま。
と――、他の生徒、そして先生の姿が消える。
玲音は独り、机に向かって座っている――。

玲音「――」

★オミットされたシーン。



○住宅街の道

わーん、わーん……。
電線が風に震えている。
坂道をトボドボと登っていく玲音。

○玲音の部屋

ＮＡＶＩのモニタだけが薄明るく部屋を照らしている。既に窓の外は暗い。
玲音は着ぐるみ★を着て、ＮＡＶＩからやや離れたところでじっと座っている。
ぎっ……。
背後でドアが開く音。
玲音、やや顔を向けて見る。
廊下の薄明かりを逆光に、小さな人影が覗き込んでいた。

玲音「――」

赤と緑の縞のセーターを着た、身長１ｍ程の男。頭髪は無く、顔は青白く、大きな目には白目が無い。

★シナリオではここで初めて〝くま着ぐるみ〟を指定している。既にその頃上がっていた1話のコンテを見て、フォローアップした形。

玲音「――誰……」

唇の無い、スリットの様な口がやや歪んだ。皮肉な笑みの様に。

玲音「――誰……」

もうそこに、侏儒の姿は無い。

玲音、膝を抱え、顔を埋める。

※グレイ★伝説の一つの元型と言われる、ベッド・ルームに現れるノーム（妖精）であった。

○資料写真モンタージュ

古い公文書――。

N「1984年、テレビのプロデューサーであったジェイム・シャンデラの自宅に、匿名の人物から茶封筒に入った未現像のフィルムが届けられた。そこに写されていたのがいわゆるMJ―12文書と呼ばれるものである」

粗いドットの人物群像。

N「ロズウェル事件当時のCIA長官ロスコー・ヒレンケッターを筆頭とする12★人のメンバーが、大統領直属の機関

★これまでに幾度かシリーズ内にて言及してきた、赤と緑の縞や格子模様のセーターを着た〝小さな者〟。それが寝室に侵入してくる――というのは、ヨーロッパではポピュラーなフォークロアであり、精神医学の文献にも登場する（UFO エイリアンによるアブダクション＝誘拐事件が脳内現象であるとする説の論拠にも用いられる）。怪奇幻想のタームで呼べば〝夢魔〟なのだろう。映画『エルム街の悪夢』でスターダムにのし上がったトリックスター、フレディ・クルーガーもまた、赤と緑の縞セーターを着ていた。岸田氏は、TESTORS 社製のプラモデルのグレイをデザインのモチーフにされた様だ。

★MJ-12
ナレーションにある通り、UFO 肯定派の間でも贋作文書であったと認

として、地球外生命体と密約を結んでいたというのが、その内容であった。この文書に書かれたトゥルーマン大統領の署名は、他の文書からそっくりコピーされたものと認められている」

一人の人物の肖像。

N　「MJ―12のメンバーの一人として名指されていたのが、MIT工学部長であったヴァニヴァー・ブッシュ★である」

○玲音の部屋

NAVIに向かう玲音。

玲　音「コネクト・ワイヤード……」

仮想ウィンドウ内の図形が活性化。

目を閉じる玲音――

○ワイヤード

次に目を開いた時、彼女はレインになっている。

目だけの顔――

耳だけの頭――

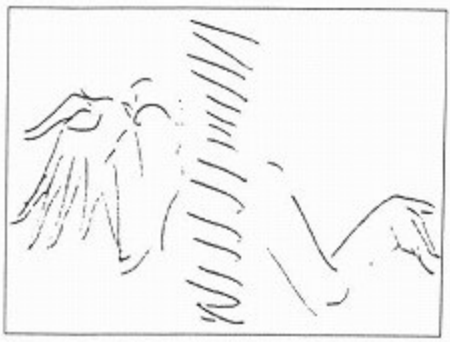
められているが、これが取り沙汰されえていた頃は、大変なブームが起こった。

画面には13人が登場しているが、一人が途中で入れ替えになったとされていた。

★ヴァニヴァー・ブッシュ
Vannever Bush（1890–1974）科学の軍事利用を研究するために創設された科学研究開発庁（Office of Scientific Research and Development）の初代長官。世界初のアナログ計算機（微分解析器）の開発者。

手だけの女――
★ゲルゲ怪人の蠢く暗い空間。
レイン「――あった事を無かった事にしてしまうなんて、どうやったら出来るのよ」
　目だけの顔がレインを見る。
目ゲルゲ「――君はレインか。そうかそうか」
レイン「あたしは、あんたのコトなんて知らない――　なのにあんたはあたしを知ってる――」
目ゲルゲ「情報というのは常に双方向に流れるとは限らないものだ。君はこのワイヤードが生まれた時から、ずっとここにいる。ここでは君は自由な存在だ」
レイン「だからそれはあたしなんかじゃないんだって！」
耳ゲルゲ「そうだな（目に）君はここにいつからいるんだ。この世界が出来た最初の時からいた訳ではあるまい」
目ゲルゲ「そんな事は関係が無い。存在自体が記憶されていれば、それは既に記録なのだから」
手ゲルゲ「それって乱暴じゃないかな。このレインという子が一体幾つに見えるのよ。未だ子どもじゃない」

★ゲルゲ怪人
70年代の等身大ヒーロー番組『超人バロム1』の怪人は、軀の器官を巨大に誇張したデザインで統一されていた。layer:06で登場したチェシャ猫（口だけの男）の仲間としてこう表現している。



レイン「――あたしの事よりも――今は……」

ゲルゲ達、消える。

○イメエジ

半透明スクリーンに投影されるタイプ文字の羅列。

N　「ヴァニヴァー・ブッシュが1945年に発表したMEMEX★、記憶の拡大構想は、半透明スクリーンにマイクロフィルム化された情報を映し出すシステムだった。彼が構想したのは情報の圧縮と迅速なアクセス。コンピュータが登場する以前にブッシュは、原爆実験マンハッタン・プロジェクトの指揮をすると同時に、現在のマルチメディアの基礎を生み出していたのだった」

○渋谷の街／深夜

終電近い時間。

雑踏達がスクランブルを渡っていく。

その流れに逆らう様に、玲音が必死に走っていく。

★MEMEX　どういうものであるかは画面とナレーションにある通りだが、付け加えるなら、ここでブッシュが抱いていた構想はハイパー・メディア（情報を関連づけして記憶する）システムの元型であったという事である。

○サイベリア入口

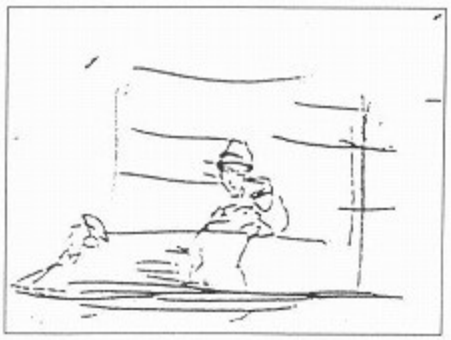
重低音が響くビルの地下へ下る階段。
高校生同士のカップルがキスをしている。その横をすり抜けていく玲音。

○サイベリア／フロア

DJブースのJJ、入ってきた玲音を見て——
指笛を吹く。
ハッと振り向く玲音。
JJ、『こっち来い』と指で呼ぶ。

おずおずとブースに近づく玲音。

JJ「忘れ物だよ」
玲音「え……」
JJ、もぐり込んで茶封筒を出す。
玲音「——」
JJ「ほら、昨日あすこのフロアに忘れてったろ」
受け取らない玲音。



J　J「(怪訝)――要らねぇんだったら棄てるけど」
玲　音「あたしが、忘れていったものなの?」
J　J「――そうだって言ってるじゃん」
手を出して受け取る玲音。

フロアの隅で袋を開け、中の物を掌に出す玲音。
転がり出てきたのは小さな基盤。
玲　音「――」
目の前に近づけてよく見る玲音。
石には、ナイツの刻印。

○イメエジ

暗い閉ざされた中にたゆたう液体。
N　「インディオの麻薬物質とアイソレーション★タンクによる感覚遮断実験によって、人間の無意識を探ろうとしたジョン・C・リリー★は自らの実験中、宇宙的存在者とコミュニケーション・ネットワークを介して接続していると考えた。

★アイソレーション・タンク
タンクは断熱材が詰められており、防音・断熱された部屋に設置される。タンク内には、30cm程の深さに、比重の重い溶液（約1.3g／cm³の硫酸マグネシウム溶液）で満たされ、その温度は体温とほぼ同じ温度に保たれる。音と光はできる限り遮断され、この中で全裸で水面に浮くことにより、温感・触覚・聴覚・視覚の入力は極度に制限され、高度の感覚遮断状態を実現できる。

★ジョン・C・リリー
John C. Lilly（1905-）アメリカ国立精神衛生研究所で脳の神経生理学の研究を行なっていた時に行ったのが、アイソレーション・タンク実

彼を導く存在を、リリーはＥＣＣＯ地球暗号制御局と呼んだ」

Ｎ　いつしか画面は温かい海の中に。★そこを泳ぐイルカ。

「後にリリーはイルカとのコミュニケーションの研究に転身する。イルカは超音波により、水中のかなりの広範囲なネットワーキングを可能としている生物である」

イルカの鳴き声――。

○サイベリア／フロア

玲音、奥のテーブルに近づいていく。

小学生のグループがいつもの様にそこに。流石に眠そうな顔。

先にマサユキが気づきタロウを起こす。

タロウ「何だよ――あ……」

不機嫌そうな目を向けるミューミュー。

玲　音「――前に――、約束したよ、ね」

タロウ「――なんだっけ」

玲　音「デートするって」



★このイルカは仁賀氏による３Ｄで、私がその映像に海中のゆらめきやフィルム的なノイズを付加している。

験であり、映画『アルタード・ステーツ』のモデルとなった。

信じられない！という顔で二人を見比べているミューミュー。

タロウ「――したっけ？　約束」

玲　音「（こくり）」

タロウ「（ガムを口に放る）でも、俺がデートしたかったのは、今のあんたじゃないんだよ、玲音」

玲　音「一緒なの。あたしはあたし。一人しかいない」

タロウ「――」

○岩倉家外観

玲音の部屋の外側には無数のダクトやチューブが臓物の様にはみ出ている。

タロウ「（オフ）すっげーっ！」

○玲音の部屋

部屋を覆うＮＡＶＩとその周辺機器に目を丸くしているタロウ（以下ずっとガムを噛んでいる）。

タロウ「（しげしげと見入り）よくこんなもの作ったよなぁ。あ

あそうか、並列処理のシンクをこれでとってるんだ。あんましスマートじゃないけど、このやり方ならまだまだ拡張出来るもんな。何で冷却させてんの？　液体窒素？」

玲　音「――そこに座って」

メインモニタの前の椅子に促す玲音。

タロウ、玲音を見てやや迷うが――座る。

玲音、背後に来て、茶封筒の中からチップを出し、タロウの前に置く。

玲　音「これが何だか知ってるでしょ」

タロウ、ギョッとなる。

玲　音「――タロウ君、だよね」

タロウ「――」

レイン「――ナイツなんだよね？」

タロウ「――（動揺）」

タロウ、ゆっくりと顔を後ろに向ける。

玲音ではなく、レインが無表情に見つめていた。

タロウ「ほんとの……レインだ……」

玲　音「ワイヤードの中に、あたしがもう一人いるかどうか、そ

★並列処理のシンク
玲音の部屋の〝増殖NAVI〟は、一機のスーパー・コンピュータではなく、無数のプロセッサを束ねて運用されている――という設定。

この部屋の原案図は安倍氏が描いたものだが、それをところともかず氏が立体的なレイアウトに解釈し、毎回登場する度にアングルや設置してある機器を設定していた。しかし画面はかなり暗く落とされ（撮影時もそうだが、仮想ウィンドウの処理があって編集時に更に暗く落とされている）、それを見て逆に意地になって細かく毎回描き込んでいたそうである。

★液体窒素
多分、違うと思う（あまりに危険）。

れはあたしには判らない。でも、このリアル・ワールドにあたしがもう一人いるなんて事は絶対に、無い」

タロウ「――」

レイン、近づく。

レイン「肉体を持つもう一人が姿を見せたのは、あのクラブだけ。あそこにいた人の記憶だけを操作すればいいんだよね」

タロウ「――俺、そんな事――」

ガタン、立ち上がるタロウ。

レインから逃れようと後ずさり――、床を這うチューブに足を引っかけ――倒れる。

タロウ「わあっ！」

次々と虚空に開く仮想ウィンドウ。そのぼーっとした明かりを背に立つレイン。

レイン「プレイ、トラック44」

部屋に鳴り響く重低音。サイベリアで鳴っていた曲。

タロウ「――」

○一階／居間

鈍く響く低音。

ソファで抱き合っていた父と母――、天井を見上げていたが――

父「もうそろそろ、終わりですね」

母「――だから、今の内――」

キスをせがむ母。

まだ上が気になっていたが――、父、母を再び抱く。

居間の外の廊下――、美香が亡霊の様に立っていた。

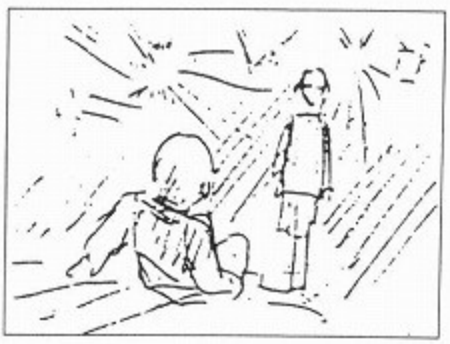
美香「(極く小さな呟き)――了解。只今交信中――。ぴー・がりがりがりぴー、ぴー、ぴー」

○サイベリア

床に座り込んでいるタロウ、呆然と見上げている。

スローモーションで歩く、レイン。いつもは決して着ない様な服――。そしていつもは決して見せない様な、人を寄せつけない表情――。

チラっとタロウの方を見て――



レイン「（オフ）ストップ」

○玲音の部屋

ふっ。音が止むと、そこは再び玲音の部屋。

タロウ「――俺じゃないよ……。でも、ＪＪンとこに流されてくるデータに、こういうイフェクト★があるっていうのは、知ってた……」

レイン、タロウの前に来て屈み、顔を寄せる。

タロウ「――」

レイン、あのチップをタロウの前に見せる。

レイン「このチップをインストール★したら、あたしはどうなるところだったの？　自殺？　それとも正気を失うの？」

タロウ「知らないってば……。俺みたいなガキが正規のナイツになれる訳ないじゃん。俺はただの――」

レイン、タロウの口にチップを差し入れ――

レイン「どうなっちゃうのかな……」

タロウ「（舌にチップがあるので喋りにくい）ほ、ほれは、不揮発性メモリ★――らよ。既にある記憶を――上書ひ、ふる」

★イフェクト
作用。

★インストール
計算機に挿入するという意味。ソフトウエアでもハードウエアでもこう呼ぶ。

★不揮発性メモリ
通電していなくてもその内容を保持しているメモリ回路。

レイン「――どんな記憶……？」
タロウ「ひ、ひらない」
　レイン、タロウの口からチップを抜き――、見入る。
　タロウ、バツ悪そうに立ち上がる。
　タロウに背を向け、じっとチップを見ているレイン。
タロウ「――ナイツはただのクラッカー★じゃないんだぜ、玲音」
　振り向く玲音。そう、玲音の顔。
タロウ「！――（嘆息）――あんたはおかしいんだ、きっと。だからナイツが関心を持つ。ナイツは、たった一つだけしかない真実を、事実とする為に闘う行使者なんだ」
玲　音「――よく判んない……。たった一つの真実って、なあに」
タロウ「だから俺は正規のナイツじゃないからさ、ちゃんと教えて貰ってないんだ。でもこれはマジだぜ。真実は真実だからこそ強いんだ。真実だからそれは正義なんだ。説得力あるだろ？　そんな真実、欲しいと思わない？」
玲　音「――」
タロウ「――じゃ――俺、もう帰っていい？　ミューミュー★が焼き餅焼いてるからさ、あんたに」

★クラッカー
コンピュータ・ネットワークの犯罪者を〝ハッカー〟と呼ぶのは誤りで、それがクラッカーである。

★これは不正確であり、焼き餅を焼いているのはタロウに対してな筈。しかし口語の会話とは得てしてこういうものであり、私は意図的にそういうダイアローグを書く。

玲　音「――ありがと……」
　タロウ、部屋を出ていきかけ――
　さっと玲音の前まで駆け寄り――
玲　音「？」
　タロウ、さっと玲音の顔を腕で引き寄せてキスを不器用にする。
玲　音「（目を開けたまま）――」
　タロウ、離れる。
タロウ「――デート★だもんな、これくらいやんないと、俺だって男だからよ」
　ドアを開けて出ていくタロウ。
　ぼーっと立っていた玲音――、自分の口に指を入れガムを出して――
　ゴミ箱の中へ放る。

○イメエジ

　テッド・ネルソン★の肖像。
N　「ヴァニヴァー・ブッシュ、そしてジョン・C・リリーと

★このシーンの滝本君は実に堂々たる演技者ぶりで、子どもならではの進歩の早さを見せつけてくれた。

★テッド・ネルソン
Theodor H. Nelson（1937-）現在は慶應義塾大学の客員教授として滞日中。ハイパーテキスト

N

いう二人の異端の先駆者に学んだシオドア・ネルソンは、軌道上に静止衛星の巨大な電子図書館を打ち上げ、電波と電話回線によって地球上のどこからでも、どんな端末でもそれが利用出来るデータ・ベースを作る構想、ザナドゥ★を発表する」

ザナドゥのグローバル・システム概念図。

「一切の文字文化が永遠に無くなる事がないと言われる蒙古の理想郷――、それがザナドゥである。それをこの世界に具現し得る思想こそハイパーテキストであり、テッド・ネルソンはその考案者として歴史に名を残すだろう」

○玲音の部屋

幾つもの規格のカードスロットが並ぶ周辺機器の筐体を開いた玲音――、

チップのソケットの形状を確かめ――、丁度合うソケットに差し込む。

正面に座る玲音――

(Hypertext) ――各種の文字および非文字情報を、互いに参照関係で結合した電子メディアの情報形態――を'62年（'65年説もあり）に提唱。現在のインターネットの主幹、World Wide Webは、1つの巨大なハイパーテキストとして表現するプロトコル&記述言語システムであると言える。そのプロトコルはHTTP (Hypertext Transfer Protocol)、記述言語がHTML (Hypertext Markup Language)。つまり、この一連のキーパーソンで紡いだ情報・ネット発達史（かなり歪んだ解釈だが）は、それ自体が一種のハイパーテキストとして、シナリオを執筆している。

★ザナドゥ
XANADU 大規模ではないにしても、その一部は既にUNIX上で稼働している。今後飛躍的に発展する可能性もある。

玲　音「ハロー、ＮＡＶＩ」
　　ぶん。システム起動。
玲　音「かちかちかちかち……。めもりーちぇっくぅ……」★
　　テキストがざっと流れていく。
玲　音「（ぼーっと見つめる）かちかちかちかち」

――溶暗

○黄昏の世界

それは過去の記憶か。
金色の光に包まれた映像。
玲音（今と同じ背格好）、見知らぬ男達（顔はアングル外）に手を引かれて岩倉家の玄関に入ってくる。
玲音はここが初めてのところで、怯えている。
玄関の中では、父、母、そして姉が優しそうな笑みを〝作って〟、玲音を迎える。
連れてきた男、玲音から手を放す。
玲　音「『あ……』」
男達は出ていき、ドアを閉めてしまった。

★計算機は、電源を入れると先ずメモりに不具合が無いかを自己チェックしてから起動する。が、ここでの玲音の呟きはその意味ではない。

父親が今度は玲音の手を引いて、二階への階段を登っていく。
玲音、警戒の目で見回している。
と、玲音の部屋のドアを、父親が開け、玲音に入る様に促す。
玲　音「――」

○玲音の部屋

ＮＡＶＩ前に座っていた玲音、ドアの方を振り向いている。
ドアの外には黄昏の光。
そしてその逆光にして立っているのは、玲音。
ＮＡＶＩ前玲音「――それが、あたし……？」
ドア前玲音「そう、これがあたし」
ＮＡＶＩ前玲音「――じゃあ――、あの人達は誰？」
ドア前玲音「あたしはあなたなんだから、知らない」
ＮＡＶＩ前玲音「――嘘だよこんなの……」



ドアの外には最早黄昏の光は無く、それを背に立つ者もいない。

玲　音「嘘だよ、全部……。どうしてこんな事するの……？」

○イメエジ

虚空に浮かぶ地球。★

N　「地球には、地球自らが持つ固有の電磁波が存在する。電離層と地表との間で、ＥＬＦ帯に８ヘルツの周波数で常に共鳴が起こっている。これをシューマン★共鳴と呼ぶ。この地球が常に放っている、言わば地球の脳波は、人類にどれだけの影響を及ぼしているのか、未だに判ってはいない」

わーん、わーん、わーん……。その音はまさに――

○住宅街

岩倉家の上――

空を覆う無数の高圧電線――。

風に揺れ、忌まわしい音を立て続けている――。

★この地球とそれを覆う波長の映像も仁賀氏による。

★シューマン共鳴
地表面と電離層の間で起こる共鳴のことで、雷などにより発生すると言われている。

玲音、ぽつりと立ち、空を見上げている。

○イメエジ

再び地球――を覆うネットワーク回線図。

N 「地球の人口はやがて脳内のニューロンと同じ数に達する。ダグラス・ラシュコフ★は、地球上の人間同士がネットワークで相互接続する事により、地球自身の意識をも覚醒させ得ると主張している。確かにネットワークはニューロティックに進化を遂げており、人の脳内のシナプスに繋がれたそれと同じく、地球そのものがニューラルネットワークと化していると言える」

○坂道

玲　音「たった一つの真実――神様……」

デウス「(オフ★)そう、僕だ……」

振り向く玲音。

★ダグラス・ラシュコフ
Douglas Rushkoff (1964-) 前述したサイバーカルチャーを独自に解釈したノンフィクション『サイベリア』の著者。このナレーション前段の部分は面白いドグマだと思った。後半部分は私の解釈。

★このたった一言、しかもオフ（台詞を言っている顔は出ない）の為に速水奨氏は9話の録音に参加された。

○イメエジ

N　「橘総研の主任研究員だった英利政美は、地球を覆うニューラルネットワーク仮説を更に進化させ、地球上の人間は凡て、デヴァイスすらも必要無く、ワイヤレス・ネットワーク上に無意識下に配置されるという仮説を発表した。更に彼は、第七世代目のワイヤード・プロトコルにシューマン共鳴ファクターを独断により暗号化し書き加えていた。

事態を知った橘総研は英利を解雇。その一週間後、英利政美は山の手線路上で轢死体として発見された」

アブストラクトな画面の中で——ぼうっと神経質そうな若い男の顔が浮かぶ。

○坂道

玲音と対峙しているのは、その英利政美。

To Be Continued...

★という訳で、この『lain』シリーズの縦軸がここに繋がる（当然この部分のナレーションのみ、フィクションである）。

この物語は、ヒロインの設定からしても謎解き構造にはなり得ないものだが、最低限、ロジックは通そうと考えていた。しかし中学二年生の女の子に、どんなキャラクターが〝説明〟したところで、ネットワークの基礎から始めたらそれはドラマにはならない。この layer: 09 の構造はかなり特異なものではありながら、中村監督には抵抗無く受け入れて貰えたのだが、それは玲音というヒロインを中心に作品を構築している監督からしても、この方法が最もスマートに情報を処理出来ると思われたからだろう。この layer: 09 の映像を作成している時に、私はウィルス性扁桃腺炎に罹患し、凄まじい頭痛に苛まれながら作業をコツコツとしていた。延べで言うと一ヶ月半以上は掛けている。そんな事から、私個人としてはあまり客観的に見られない話数となった。

layer:10

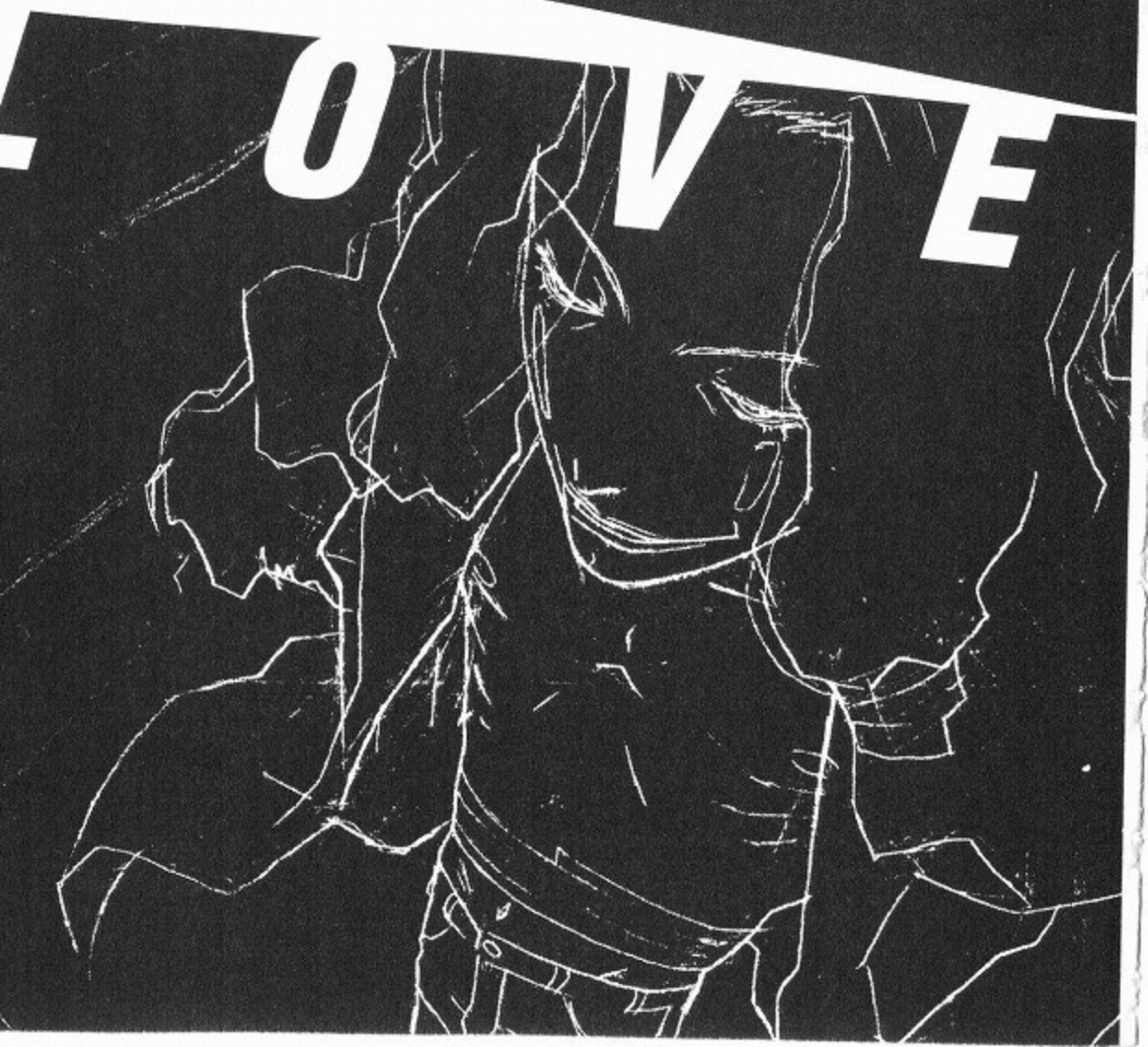


CAST

岩倉 玲音	清水 香里
岩倉 康雄	大林 隆之介
岩倉 美香	川澄 綾子
瑞城 ありす	浅田 葉子
英利 政美	速水 奨
黒の男たち	山崎 たくみ
	中田 譲治
タロウ	滝本 啓人
ミューミュー	山本 有紀
マサユキ	藤間 宇宙
吉井 恵子	根谷 美智子
オフィスの男	渋谷 茂
秘書	麻丘 夏未
子供	安達 心平
生徒	川崎 恵理子
声	古海 裕子
	樹又 ひろ子
	堀川 仁
	北沢 洋
	伊藤 英敏
DJ	アリ 森泉

STAFF

絵コンテ	佐藤 卓哉
演出	村田 雅彦
作画監督	菅井 嘉浩
NAVIレイアウト監修	ところ ともかず
画面設計	岸田 隆宏
原画	田村 篤
	米林 宏昌
	えんどう 麻未
	藪下 昌二
	大関 紀子
	古川 達也
	安藤 正浩
	須賀 重行
	Pak Production
色指定	ますだ よしまさ
制作進行	下井 美奈子
背景	狼プロダクション
	本田 修
	市谷 正夫
	小杉 光芳
	山口 忍
	真悠 峻大



○坂道

玲　音「――たった一つの真実――神様……」

英　利「（オフ）そう、僕だ」

振り向く玲音。

若い男が、微★かな笑みを浮かべ立っている。

玲　音「――」

○フラッシュ

雨の山手線路上。

★マグロと呼ばれる物体になっている、英利の死に顔に、雨粒が叩きつけられている――。

○坂道

玲　音「あなたが――神様……？」

英　利「そう。僕が神様だ」

暫くじっと見つめ合う二人。

ぶーん……ぶーん……。

ふと見上げる玲音。

★英利政美のデザインは、中村監督が敬愛する、早逝した天才ベーシスト、ジャコ・パストリアスをイメージして岸田氏が描き出した。軀にビニールテープを巻き、顔にも張り付けているのも、狂気の中で死んだジャコの末期（軀に泥やペンキを塗ってステージに立ったりしていた）を彷彿とさせ、英利という男の内面を〝デザイン〟して見せられた思いがして、私は非常に興奮した。

★このシーンは前話からのものだが、私のイメージには国鉄下山総裁の不審死事件があった。その事は別に監督に話していないのだが、熊井啓監督作品『謀殺・下山事件』のシーンにあまりに近いイメージだったので驚いた。

電線が風で震えている。

英　利「どうしてあなたなんかが神様なの？　あたし判んない」

じっと英利を見る玲音。

英　利「あなたは死んだんでしょう？　ただの人間として。そんな人が神様になんてなれる筈がないじゃない」

玲音、無意識的にサイコドラマ★のルールに従う。

玲　音「――僕は肉体なんてものが不要だと判ったんだ。死というのは単に肉体を棄てただけの事さ」

英　利「――それは――千砂ちゃんの事よ――」

○極く短いフラッシュ

ビルから飛び下りる千砂――。

○坂道

玲　音「（俯いていた）――それは……、そうだな……。（顔を上げる）。僕はワイヤードを統べるプロトコルを進化させた」

英　利「（ニヤ）そうね。あなたはそうしたわ。でもプロトコル

★サイコドラマドラマの種類ではなく、精神療法のひとつでこういうものがある。担当医師と患者が互いの立場を入れ替え、あるいは患者同士が入れ替わり、互いの考えを自らの様に想像し、話す事で理解を深めるというもの。フィクションでの応用例は、筒井康隆の小説『柿の木坂交差点』、ダニエル・ウォルターズ脚本の映画『ヘザーズ』などがある。

なんてただの取り決め」

玲音「そう。しかし僕がもっと高いフェイズ★で機能するコードを暗号化して書き込んでいた」

英利「それで？」

玲音、必死★に思考。

玲音「――そのプロトコルには――圧縮された情報が混入している――」

英利「どんな情報かしら？」

玲音「――人の記憶――。この私の、英利政美という男の思考履歴、記録、情緒――」

英利「それがどういう事を意味しているのかしら？」

玲音「――ワイヤードのアノニマス★な存在として永遠に生き続け、そこを情報によって支配し得る存在――」

英利「――そういう存在を何て言うと思う？」

玲音「――神……」

英利「神様なんて、いないわ（ニヤニヤ）」

玲音「――そう。普遍の存在であって影響を及ぼす事が出来たとしても――、崇める者がいなくては神足りえない」

★フェイズ
Phase　位相。ネットワーク・プロトコルは幾つもの階層によって成り立っている。通常用いられるより更に上位に英利は細工をしていたらしい。

★これぞ岸田玲音という、凄み溢れる原画だった。

★アノニマス
Anonymous　匿名の／名前がない――の意。ネットワークでは、Anonimous FTP という語で親しまれている。世界中に多数ある、誰でも匿名でアクセスできる Anonimous FTP サイトが、様々な情報を提供している。

英　利「でも、それがいた。いいえ、作ったのね」
玲　音「ナイツ……」
再び黙って見つめ合う二人。

○住宅街俯瞰

か細い電線が街を覆う——。

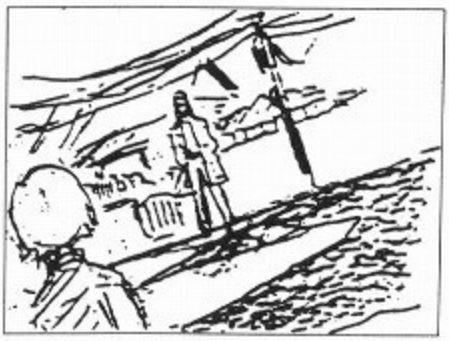
○坂道

玲音の前に、もう英利の姿は無い。
玲　音「——君にはもう肉体なんて要らないんだよ、玲音……」
玲音の目にレインの光が僅かに灯り——
レイン「——そんなの嘘だ……」
わーん……、わーん……。

○鷗華学園中学

○同／教室

入ってくる玲音。



教室の真ん中、玲音の席である筈の場所、ぽっかりとそこだけ机が避けられている。
感情を見せず立ち尽くしている玲音。
生徒達はその存在に気づかない様。
ありすは樹莉と談笑しているが、玲音の方を振り向きもしない。

玲　音「……」
女教師が入ってきた。
日　直「きりーつ」
立ち上がる生徒達。
玲音、いたたまれず、席がある筈の空間に立つ。
日　直「れーい」
礼をして座る生徒達。
教　師「――じゃ教科書仕舞って」
テストを配り始める教師。
玲　音「――」
玲音の前の席の子、玲音を飛ばして手を延ばし、答案用紙を渡す。

玲音「――」

生徒達はそれぞれな姿勢で答案用紙を埋め始めている。教師は教壇の隅で、校庭の外を見ている。

玲音「(微かに、絞りだす様に)――あ、あたし……」

気に留める者はいない。

玲音「あたし、リアルだよ――。あたし生きてるよ……。あたし、ここにいるんだよ……」

誰も玲音の声など耳に入っていない、のか。

玲音「どうして、こんな事に、なっちゃったのかな……。あたしが、何かしちゃったのかな……。そういう事にならない様にって、いっつもあたし気をつけてたのに……。変な事言っちゃわないか、いつも気をつけてたのに……」

しかし、玲音は泣かない。泣けない。

玲音「――そうなのかな、やっぱり……。あたしが肉体を持っていちゃいけないのかな……」

玲音――、ハッとなる。

ありすが振り向き、冷徹な目で玲音を見ていた。



玲　音「（息を呑む）――」
ありす「そうよ玲音。あなたはリアル・ワールドには必要が無いんだよ（淡々と）」
玲　音「――」
もうありすは背を向けていた。

○同／校庭

誰もいない校庭を、とぼとぼと校門に向かって歩く玲音。

○坂道

俯きながら登っていく玲音。
ふと目を上げる。
岩倉家の前に、ＭＩＢの黒い車が止まっていた。
玲　音「『あ』……」
と、車、走り去っていってしまう。
玲　音「――」

○岩倉家

二階の玲音の部屋がある壁には、依然パイプが剝き出しになっいる。
玲音、門を開け、中へ。

○同／玄関

ドアを開けて入る玲音。
玲　音「――ただいま……」
答える者はいない。

○居間

立ち尽くす玲音。
荒らされた、という感じではないが、家具は斜めにズレて置かれ、床には様々な物が散乱。
キッチンの方を見る玲音。
冷蔵庫は開けっぱなし。
玲　音「――」



○両親の寝室

ベッドにはシーツも無くマットレスが剝き出し。

玲　音「――」

○美香の部屋

ここは酷く散らかされている。

玲　音「――」

○フラッシュ

車の後部席に座っている美香。

美　香「（呟き）ぴーがりがりがりぴーがりがりぴー……」

○美香の部屋

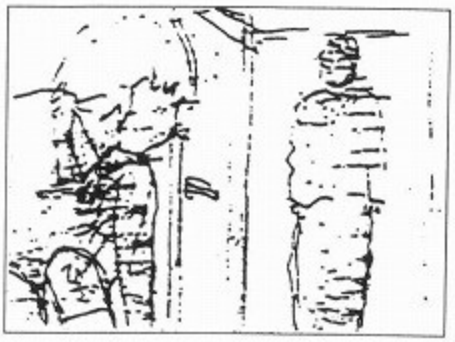
しゃがみ込んで、散らかっているものを片付けている玲音。

ミシ……。

ハッとなって振り向く玲音。

廊下に大きな男の影。

怯える玲音――。
男が入ってきた。
玲音「――パパ……」
父親、だった男は能面の様な顔で
男「これでお別れです、玲音さん」
玲音「え……」
男「もうご存じになったんでしょ。私達の仕事は終わったんです」
玲音「――」
男「短い間でしたが、大したお世話も出来ずで……」
玲音「――」
男「あなたはこれからどうしようと自由です。いや、最初からあなたは自由だったんだ……。お別れを言う許可は得ていないのですが、私はあなたが好きだった」
玲音「――」
男「別に家族ごっこが楽しかった訳じゃない。あなたという存在が、私には羨ましかったのかもしれません。じゃ」
背を向け出ていく男。



玲音、呆然と見送っていたが――

玲　音「待って！」

後を追う玲音。

○階段

玲　音「あたしを一人にしないで！」

振り向く男。

男「――一人……。一人じゃないですよ、あなたは」

玲　音「え……」

男「ワイヤードにコネクトすれば、誰もがあなたを迎えてくれる。そういう存在だったのです、そもそもあなたは」

言って降りていく男。

玲　音「――」

玄関のドアが閉じる音。

○荒廃した岩倉家

――のモンタージュ。

時間が経っていく――。

○玲音の部屋前

ドアの向こうから、微かな呻き声。

○玲音の部屋

暗い室内のそこここにＬＥＤの明滅。
蒸気――。
ハムノイズ、コンプレッサーの音、ファン音が低く垂れ込める。
その中央、玲音――
自分の半裸の躰に無数の銅線をぐるぐるに巻きつけている。

玲　音「（呻き）」

虚ろな目で仮想ウィンドウを見つめる玲音。
抽象的な形状のウィンドウが高速に開いては閉じ、文字化けしたスクロール、絶えず変容し続けるグラフィックを描き出している。
玲音の唇の端には鰐口クリップ。

★岸田氏のデザイン画には〝ぐるぐる玲音〟と命名されていた。

髪の毛からもクリップが何本も下がっている。

玲音「（呻き）――」

玲音の目――の中へ――

○渋谷の街／ワイヤードの暗喩

〔実写加工？〕

夜の渋谷の雑踏の中。ゆっくりと車の光が、人の影が流れていく。

その中にポツリと立つ――レイン。

レイン「――あたしは一人じゃ、ない……」

そこはワイヤード、らしい。

声　1「何がしたいの？レイン」

声　2「ここはあなたの世界よ、レイン」

レイン「――（憤怒）ナイツって誰なの？　嘘のあたしを作ったのはそいつらなんでしょ？」

声　3「それはどうかな」

声　4「いや、あり得る。東方算法騎士団の起源はテンプル騎士★

★この〝噂〟は事実かどうかは不明である。ナイツが果たしてそういう存在であったのか（それを英利が利用したのか）、英利自身が作り出したものなのかは謎。

団にまで遡る事が出来るらしい。ワイヤードが生まれる以前から、見えない人と人とのネットワーク、集合的無意識を彼らは利用してきたのだから」

声　1「何がしたいの？　レイン」

レイン、強い意思の力を目に。

レイン「ナイツって誰なの？」

声　1「それが知りたいのね、レイン」

レイン「――ワイヤードの神が神であるのは、それを崇める者がいるから――」

ふっ。

レインの周囲の雑踏や明かりが消える。

そして――レインもまた――。

○ワイヤード／イメエジ★

パルスがメイズを駆け抜ける。

底無しの情報の蓄積から、凄まじい勢いで抽出されていくデータ――。

★このカットは、この10話で唯一私が担当したもの。データの奔流は、DVカメラのレンズを、それを映しているテレビの画面に向け、延々とループしているテレビ・フレームを録ったもの。

○サイベリア

うだーっとしている小学生三人組。

マサユキ「なあタロウよぉ、どっか別のとこ行こうよ。ここ、つまんなくなんない？」

ミューミュー「そうだよぉ。ね、あたしん家来ない？（マサユキに）あんたは来ないでいい」

マサユキ「何だよそれよぉ」

タロウ、虚ろな目で、テーブルに置いていたＮＡＶＩに目をやる。

ウィンドウにプッシュ型ネットニュウズが流れだす。

タロウ「――（見つめる）」

ミューミュー「（マサユキに）タロウはね、あんたみたいなガキは相手にしないんだって」

マサユキ「ンだよそれー。ミューミューだって十分子どもじゃん」

ミューミュー「女の子はいいの。女の子は若い方がいいに決まってるんだから。ね？　タロウ」

マサユキ「（腐る）なんだよそれ……」

ミューミュー「――タロウ？　どうしたの？　ネット・ニュウズ

が何か言ってんの？」

タロウ「――リストだ……」

ミューミュー「え……？　何のリスト？」

タロウ「（怯え）ナイツの、メンバーのリストが、どうしてネット・ニュウズになんて――」

タロウの怯えが伝わったのか、二人も黙る。

○外資会社オフィス

端末の画面を見て脂汗をかいている若いエグゼクティヴ――、端末を消し、机の中のものを★ゼロハリのアタッシェに入れ始める。

ノックの音。

男「――（目を向けず）はい」

ドアが開き――入ってきたのはＭＩＢ二人組。

ＭＩＢ１「（静かに）声を出さないで下さい」

男「！――何だあんたら――」

ＭＩＢ２「――ケジメをつけよう。な？」

男「なっ、何の!?」

★ゼロハリのアタッシェ
ゼロハリバートン社の、ジュラルミン製アタッシェ・ケース。孤高の鞄。欲しいけど重過ぎ。

サッと駆け寄るＭＩＢ2。男の口を抑え――、頸部に握っていたインジェクター（圧力式注射）を押しつけ――ブシュ!!
力を瞬時に失う男。

○同／廊下外

歩いてきた秘書、ドアにノック。
無音――。

秘　書「？」

再度ノック。そして開ける。

秘　書「（息を呑む）」

○オフィス室内

ドアが大きく開かれ、紙が散乱している。

○マンションの一室

テレビゲームをぼーっと虚ろな目で続けている男の子――、背後に

男の子「――ママぁ……、次、ママの番だよ？　来ないと僕が続けちゃうよ？」

その背後――、キッチンのテーブルに突っ伏している主婦。
顔の下から――、血が流れ――、
テーブルの脚を伝って――
リノリウムの床に血溜まりを作っている。

男の子「（オフ）ママぁ、いいの？　僕こいつ殺しちゃうよ？」

○汚いアパートの部屋

万年床で大の字になっている若い男。
口の中にライトを突っ込んでいる。
未だ光っているライトの明かりで頬に血管が浮かんで見えている。

○ワイヤード／イメエジ

テレビ再撮の様な荒れた画面の中に映像、音声の断



片が浮かんでは消えていく。
▼パリ・ポンヌフ橋で頚を吊っている銀行員。
▼ボラボラ島の浜、ビーチチェアで死んでいる女。
▼香港、ネオンの街にある華僑のビルで死んでいる若いハッカー。モニタにはナイツのマーク。
▼ダン！　頭部至近で撃たれるグロック。
▼ナイツのマークが——消える。
これらの映像に被さるネット・ニュウズ
S「本日、世界各国にて連鎖自殺が続発しており、各国の情報管理局、警察が原因の究明に乗り出しています。自殺したのはいずれもネットワーク関係に従事している人達で、消息筋によるとナイツという友好グループのメンバーであるとの見方もされておりますが——」

○玲音の部屋

ハッとなる玲音。
口のクリップを、髪のクリップを、躰に巻き付けて

いた銅線を、もどかしそうに必死に解いて――

窓を開ける。
下には黒い車が止まっており、ＭＩＢ二人が見上げていた。

玲音「――」

○岩倉家前

駆け★だしてくるレイン。

レイン「何でそんな事したの!?　あたしはそんな事してなんて言ってない！」

ＭＩＢ１「これは私達のクライアントからの依頼です。あなたは世界中のナイツを狩りだしてくれた。我々の仲間が現在一斉に処理に回っています」

レイン「どうしてそんな事――！」

ＭＩＢ１「ワイヤードは特別な世界であってはならない。あくまでもリアル・ワールドを補強するサブ・システムとして機能すべきフィールド――」

★実際にはぐるぐる状態のまま、部屋の中で会話している。



レイン「(被って) だからって!!」
ＭＩＢ２「騒ぎなさんなって。あんたもワイヤードの中じゃ、あってはならない存在なんだよ。でもあんたは無事じゃないか。クックッ。どうやらあんたには、神とやらの御加護があるらしい」
玲　音「――」
ＭＩＢ１「いずれ英利政美の残留思念プログラムも、ワイヤード中からディスインフェクト★されます。私達のクライアントは、プロトコル・セブンのコードを全面的に書き換える作業をしているところです。神など必要ないのですよ、ワイヤードでも、リアル・ワールドでもね」
玲　音「――」
　二人、車に向かう。
　と、ＭＩＢ１、振り向き
ＭＩＢ１「私達には、あなたが何なのか未だに理解出来ていない。しかし、私はあなたが好きだ」
玲　音「――」
ＭＩＢ１「不思議な感情ですね、愛というのは」

★ディスインフェクト
Disinfect　駆除。ウィルスを排除する事。

ＭＩＢ2、声を殺して笑っている。
ＭＩＢ二人、車に乗り込み――

玲　音「――」

坂を降りていく車。

玲音、見上げる。
わーん……、わーん……。
電線が風★になびいている。

玲　音「――どうするの……？」

英利の声「（オフ）さあて、どうしようかな」

振り向く玲音。
英利が背後に立っていた。

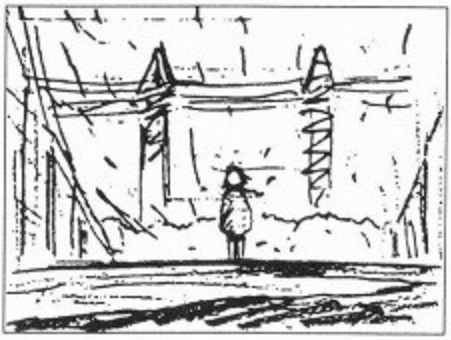
玲　音「お祈りする人がいなくなっちゃったよ」

英　利「（苦笑）――それじゃあ、神じゃなくなっちゃうね。でも、全員消えた訳じゃない。一人でも信仰を持つ者がいれば、僕は神でいられる」

玲　音「――だ、れ……？」

英　利「嫌だなぁ、君の事さ、玲音」

★なびいているどころでない、強風が吹き荒れていた。点々で風を視覚化するという野心的なレイアウトは勿論岸田氏によるもの。これは中村監督のコンテの絵を再現しようという意図だったそう。〝痛そうな風〟だった。



玲音「！」

英利「君が君でいられるのは、僕のお陰なんだよ。君は元々、ワイヤードの中で生まれた存在なんだ。ワイヤードの中の伝説。ワイヤードの中のお伽話の主人公――」

玲音「（呟き）うそ……」

英利「リアル・ワールドの岩倉玲音はそのホログラムに過ぎない。人工リボゾーム★によるホムンクルス★、君の実体など元々無いんだよ」

玲音「嘘よ……」

英利「（家を見上げ）嘘の家族、嘘の友達――。そう、全部嘘だったんだ」

玲音の目に、初めて涙が滲む。

英利、笑みを消し、近づく。

玲音「嘘だよそんなの……」

英利、優しく玲音の頭に手をやり、自分に抱き寄せる。

英利「可哀相な玲音。もう一人ぼっち。でも僕がいる。愛しているこの僕がいる。君をこの世界に送ってあげた僕を、君は愛してくれる筈だ」

★リボゾーム
Ribosome　遺伝情報に従って細胞質にあるアミノ酸を順番につなげ（ペプチド結合）、たん白質を合成（翻訳）する球状の粒。生体高分子に於ける核酸核酸にはDNAとRNAの2種類があるのは言うまでも無い。DNAの役目は遺伝情報の保存なのに対し、RNAは様々な役割な役割を持つものがある。一方で、リボザイムの発見を契機に、遺伝情報と酵素機能を併せ持つことのできるRNAは「生命の起源」として注目を集めてきた。今までになかったRNA酵素や人工のタンパク合成システムの創製も可能となってきており、ホムンクルス（後述）を科学的に創り出すドグマとして用いた言葉。
ただし！　ここで英利が語っている事が玲音の真実かは定かではない。

★ホムンクルス
魔術・錬金術用語。人工的にフラスコの中で、化学的魔術により創り出される疑似小型人間。ここでは〝人工人間〟という意味で用いている。

玲音「――」

英利「僕は、君の創造主なんだ」

英利、玲音の顎を上げさせる。

英利「僕を愛して……」

玲音の唇、僅かにわななく。

玲音「(囁き)もう一人の……」

英利「(囁き)え……」

玲音「(囁き)もう一人のあたしが――」

英利「(微笑/囁き)もう一人じゃない。元々の君さ」

玲音、レインの顔になっている。

レイン「――どっちでもいいよ――そんなの!」

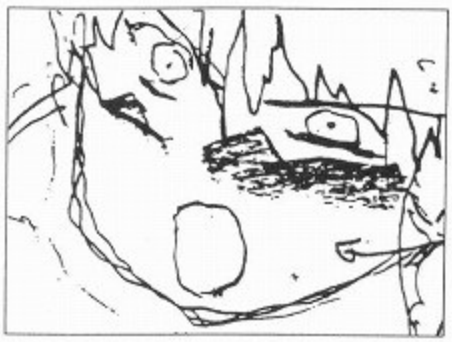
バチバチバチ!!

頭上の高圧電線が次々とスパークし、切れて地面に垂れ下がっていく。

レイン、一人立つ。

のたうち回る高圧電線が這う中央に――。

To Be Continued...

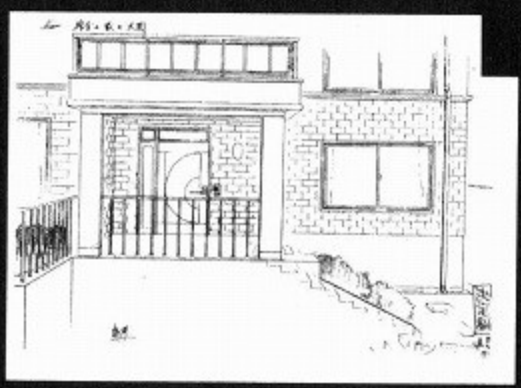


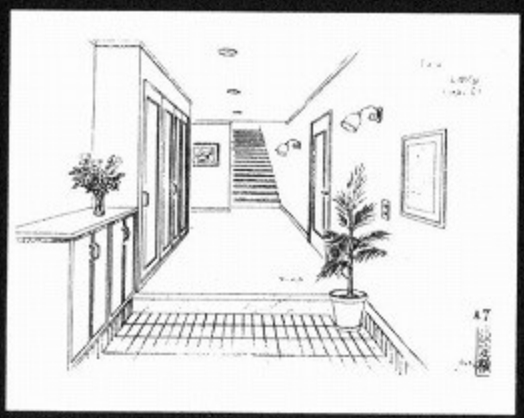
home
ホーム

Column•04

坂の上にある岩倉家。
この道からは、街と、それを覆う電線が
よく見える。貿易会社の部長宅らしく、
ゆったりとして清潔感のある住居だった。
しかし、家族であった人々が去り
荒れ果てた今の方が、生々しくも
現実感を帯びているのはなぜだろう?

いずれにせよ、彼女にとっては、
何かを纏わないことには
寒々しい家だったのだ。



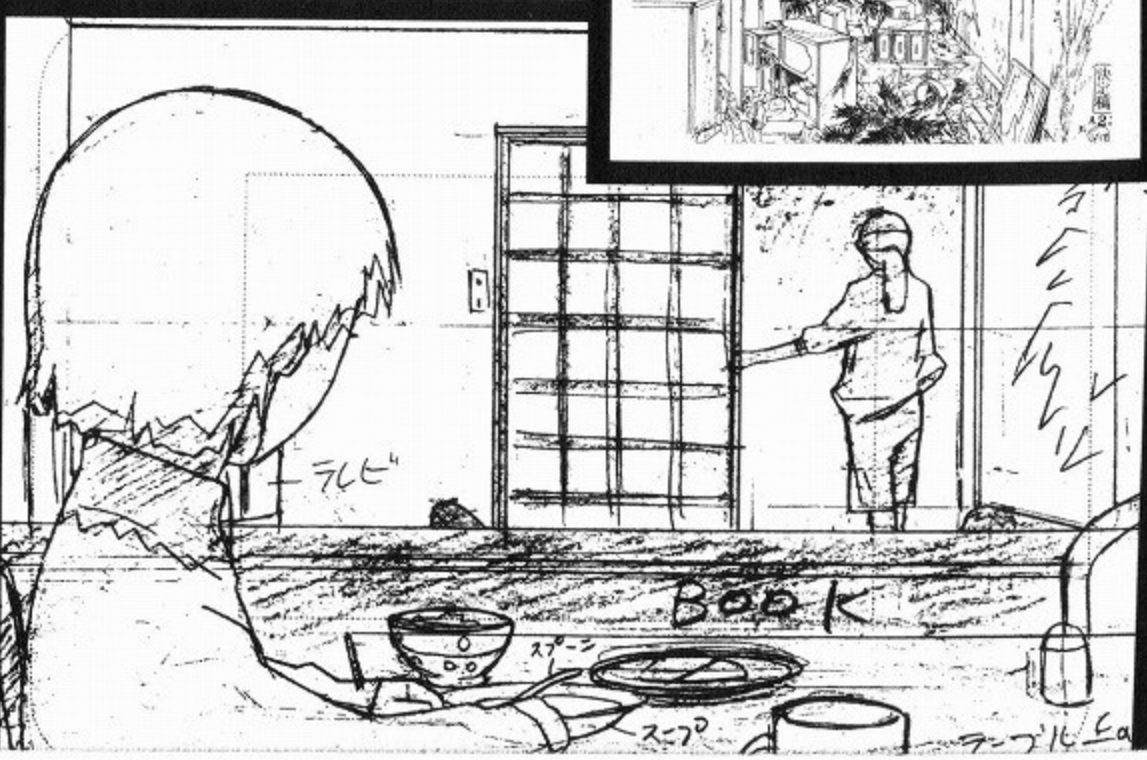












layer:11

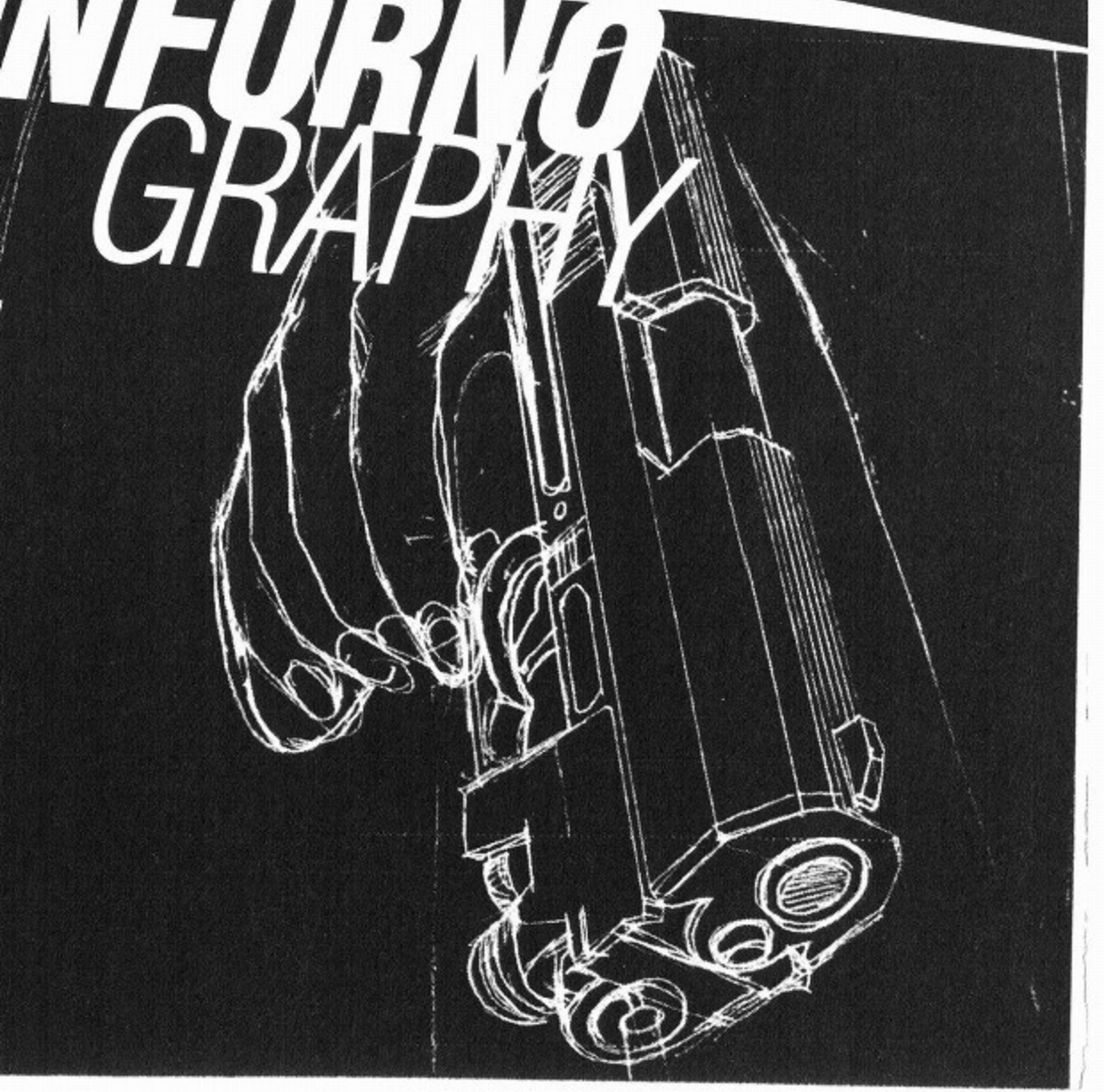
CAST

岩倉 玲音	清水 香里
瑞城 ありす	浅田 葉子
山本 麗華	手塚 ちはる
加藤 樹莉	水野 愛日
英利 政美	遠水 奨
四方田 千砂	武藤 寿美
少年	小宮 悟史
DJ	アリ 森泉

STAFF

絵コンテ	中村 隆太郎
演出	松浦 錠平
作画監督	丸山 泰英
NAVIレイアウト監修	ところ ともかず
原画	井上 哲
	井上 みゆき
	千島 知明
	須賀 重行
	高橋 勇治
	岸田 隆宏
	星山企劃
色指定	北川 太郎
制作進行	鈴木 眞砂弥
背景	獏プロダクション
	本田 修
	本田 利恵
	山口 忍
	澤田 真美
	津島 めぐみ

INFORNO GRAPHY



○岩倉家／夕刻★

低く垂れ込めた雲。
鈍色の高圧電線が覆う坂の上――。
千切れた電線は未だアスファルトの上に、朽ちた蛇の死骸の様に這っている。
周囲の住宅には――元々人など住んでいなかったのだろうか。人が生活している気配が消えている。
そして――、岩倉家。
門は半開き。玄関の扉も開いたまま。
壁という壁にはスプレーで書かれた数式、マトリクス、化学式が病的なまでにびっちりと埋めつくされている。
二階の壁から突出したケーブルやダクトの類は増えてはいない。

○玲音の部屋

無秩序に増設・改造を続けられてきたＮＡＶＩは部

★この layer: 11 のAパート（CMを挟んでの前半）は、言うところの〝これまでの総集編〟にする事を、私自身が提案した。勿論、それは厳しい制作条件の中で、最良のものを送る為の手段としてでもあるが、玲音自身の混乱を逃げずにきちんと描写をしておくべきだと考えたのだ。だからただの再編集にはしないという事で、プロデューサー、監督ともコンセンサスがとれていた。もう一つ、ライターとして試みたい事が、Aパート丸々、台詞が全く無いという構成であった。『lain』は通常のアニメーションよりもダイアローグは全体に少な目であるが、それでも、どうしても言葉が多いと感じていたのだ。結果的には、ありすのそれを中心に、僅かにダイアローグは残された。また、千砂と玲音の、過去の関わりを視覚化する新作ショットも、あたかも再編集のカットの如きさりげなさで存在している。

屋を覆うまでに。
メインの仮想ウィンドウが開いたり閉じたりしている他に、液晶の小型ディスプレイやCRTもそこにあって、それらの光だけが部屋をほの暗く照らしている。
液晶の一つはパ★ケット転送負荷状態のバーを示している。
S「Connecting..」
機器類から延びた無数のコード。
それは——部屋の中央で、下着姿で虚ろな顔をしている玲音に繋がっている。
玲音の髪、唇、指——。躰中には前回以上にぐるぐるに銅線が巻き付けられている。
「あうあう」と口をほんの少しだけ動かしている玲音。耳にはインナータイプのレシーバ。
そして——玲音の目には前方のメイン仮想モニタが映し出す抽象的な図像を見つめ続けている。
その中へ——。

★パケット転送負荷状態
データをある単位ごとにまとめて転送する方式。現行インターネットで一般的なもの。静かな室内で、膨大な情報が出入りしている——という意味合いだったが、あまり画面では強調されていない。

○イ★ンフォルノ

Inferno ＋ Information...Inforno

玲音がいるのは、そこである。

※以★下このシークェンスは、自我崩壊した玲音の内面を描き出す。

ひたすら混沌とした、抽象的なイメエジ（反復パターン含む）をベースとして、これまでの玲音の見てきたシーン（玲音の主観には拘る必要は無く玲音自身が映っていてもそれは正しい）が時制に左右される事なく、現れては消える。それは明快に見えるものではない。あくまで混沌とした中での玲音の〝記録〟である。

★サウンド・デザインは、アンビエント感を強調したステレオ・フォニックで、ノイズとも音楽ともつかぬ抑圧的なそれが、緩急あって流れつづける。意味のある人の声は一切ない。言葉はその断片であってもここでは聞こえない。

★サブタイトル Informography は私の造語。意味としてはシナリオにある通りだが、Pornography の語感も重ねている。それはただ見られるものであり、見る事で意識状態が変移するもの——。

★これまでの再編集なら、そう指定するだけでいい。このシナリオAパートの記述は、再編集に於けるポイントを示唆している。私はシナリオを、完全に行数、枚数で時間感覚を掴みながら書く。だからAパート分のテキスト量がここにはある。

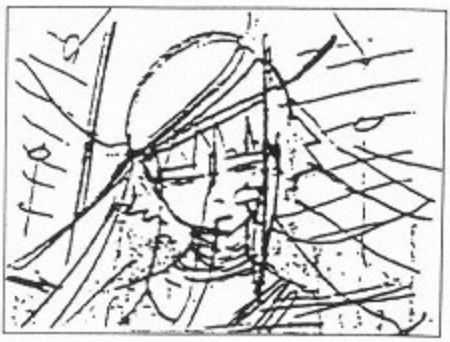
★仲井戸氏のギター・ミュージックをメインに、綿密な音響設計がなされていた。

何故なら今の玲音には、言語化された様なロジックが破綻しているからだ。

映像の中で、印象深く見えるのは——
つまりそれは玲音にとって強い印象を得ていたものなのだが——

▼人の死

四方田千砂に始まり、この物語の中で死んでいった者達の姿。
それは決して血の色を強調したものではなく、生物として、リアル・ワールドに肉体を持っている事をやめてしまった者達として玲音には認知されている筈である。
ありすがかつて語っていた様にそれは、リアルではあっても、リアリティが自分にとっては希薄なものであった。



▼家族

岩倉家の、去っていった〝家族〟達。
玲音は決して彼らが自分を庇護してくれる安心感は懐いていなかった。
しかし、それでも〝親〟という絶対的な存在である事は疑っていなかった筈である。
例え奇異な態度をとられても、不可解な行動をとられても、玲音にとって彼らは〝親〟であったのだ。出ていくまでは。

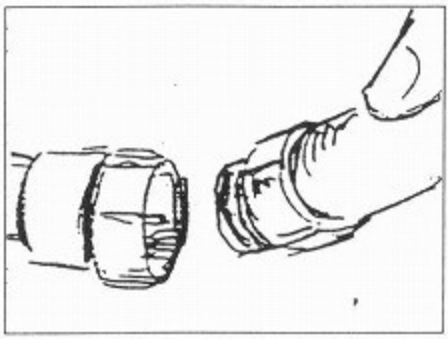
▼ともだち——ありす

しかし、今の玲音にとって最も喪失感が大きいのは、ありすの心を失ってしまった事である。
玲音の心を開かせ、ともだちという心地よい関係を刹那的であっても築こうと努力してくれていた

ありすは、玲音にとって掛けがえのない存在であった。
しかし、自分の意図とは乖離した事由から、玲音自身がありすを追い詰め、憎しみならまだしも、無価値な存在であるかの様な視線を向けさせる様になってしまった今、その事を思うだけで玲音の心は引き裂かれ、悲痛な叫びを上げている筈である。

▼マシン

今、玲音の内部に直接アタッチ出来るのは、デバイスを介したこのＮＡＶＩだけである。
このＮＡＶＩは玲音が自分の為に組み上げた。玲音自身の心と躰を拡張するものなのである。
マシンは整然としたコマンドを整然としたロジックで解釈してその機能を果たす。
しかし今、玲音のＮＡＶＩは果たして玲音の意思



を直截に反映するものになっているだろうか。
マシンにはブラックボックスな部分も多く残されている。
プシューケー・プロセッサもその一つだ。
ＭＩＴに在籍するナイツのメンバーが設計し、シンガポールの工場の非稼働時に極秘に製造され、世界中に輸出されていったもの。
これがどういう機能を果たすのかは未だに不明であるが、少なくともＮＡＶＩが単にワイヤードとユーザを繋げるだけではない機能と存在理由を有したのは確かな様だ。
玲音はありすに「ハッキー」と評された事がある。
事実彼女自身、このＮＡＶＩの改造には嬉々として取り組んでいた様だ。
半田ゴテを持つまでには至らないものの、ケーブル類の結線、ドライバの組み込み、そして電子パーツの取り扱い等についての才能を、玲音は有していた様だ。

玲音が一体何者であるか。それはこの物語の最後に至るまで明かされる事は無いかもしれない。しかし、ワイヤードが、ネットワークが人間同士を繋ぐメタ・コミュニケーションの場である事が明かされ、そして玲音は、リアル・ワールドに現出する以前からそこに遍在していた事が示唆されている事から察するに、玲音の存在とはある種の人間の嗜好を具象化したものでもある、という見方があっても不思議ではない。

ネットワークに接続する行為そのものに目的がある人々——。つまりそれは、現在のネットワークユーザそのものである。

▼リアル・ワールド

デジタル・イフェクトがかかった実写であろうと、アニメーションに描かれた絵であろうと、この物語で描かれてきた虚構内現実世界は、いくつかの



特徴を有していた。

〝電線〟――、幾分誇張気味に、かつ執拗にこの物語の作者達は電線を画面内に描き出し続けてきた。

それは当然ながらネットワーク、コミュニケーションを直截に具象化した引喩である。

そして、ここで言うネットワークとは、電話を端緒とする現実（虚構内では無く）のそればかりではなくして、人が人と接する事で成立しているこの世界――社会と言い換えてもいい――の成り立ち、そして、人が人たらしめている繋がり、つまりは人間が人間から生まれ、人間を生む事で持続していくという関係性までも暗喩している。

この物語がこれまで描いてきた虚構内現実は、私立中学生である玲音の日常生活半径にあるものであり、唯一の例外が渋谷の街と、そこを象徴せるクラブ〝サイベリア〟であった。

岩倉家にても玲音は、自らを被ぶく事でやっと父

親と会話をする事が出来た。それほどに、玲音にとってリアル・ワールドは抑圧的なものだったのである。

このリアル・ワールドに何かが起こるにしても、玲音はそれを阻止するモチベーションを持たない。では、破滅を望んでいるのだろうか——。

▼ワイヤード

〝インターネット〟〝サイバースペース〟といった呼び方を避けているのは、この虚構内仮想世界は決して特別なものではなく、電話を掛け合う程度のものとして想定しているからである。

その言葉は字義通り、繋がれている事のみを示唆している。

しかし、それを利用するプロセスとしては明らかにインターネットのそれを踏襲している訳で、それ自体は否定し得ない。



この物語の中でワイヤードは、その内部の描写を具体的に具象化する事を避けてきた。
そこにいる人々はドルゲ怪人の如き容貌だったり、人形の姿をとっている。
それらはあくまでアノニマスなユーザのメタファーであって、例外はあった。
KIDS計画にかつて従事していた研究者。
あるいはネットワーク・ゲームに興じているタロウ——。
それ以外の要素——、即ちワイヤード内の情景といったものは、極力描写しないできた。
この作品に於けるワイヤードとは、実は虚構内仮想〝世界〟という空間なのではなくして、あくまでも人と人とがコミュニケートする〝シチュエーション〟だったのである。
しかし、今の玲音にとってはそれは拒否したい事だろう。
また、この話数を見る観客にとっては、電波を通

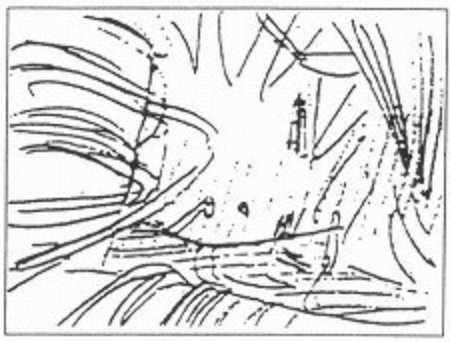
じてブラウン管に映る〝虚構内仮想世界〟が、観客の居る〝現実〟に映り込んでいる〝虚構内現実〟として映る筈である。
混沌の中で、玲音が幻視するものを、観客は共有する。
そして、観客はメタ・レヴェルに於いてワイヤードの住人となり、玲音にアクセスする事になるのである。

この、十分あまりのセグメントの映像と音響は、決して観客に解釈や批評を強いるものではない。

○岩倉家／夜

○玲音の部屋

未だ虚脱している玲音——。
緩慢な動作で自らに巻きついている銅線を外し始めるが——、疲れきっており、中途で断念。



ぐったりと床に横になる。
その前に、立っている英利。

英利「――疲れたかい」

玲音「――（目を上げず）疲れた……」

英利「（微笑）凄いんだね、やっぱり君は。君自身の脳にあのNAVIのエミュレーター★をロードするなんて。そんなに一度に情報を浴びたら危ないよ。君の今のキャパシティではオーバーフロー★してしまう」

玲音「――あたし、機械？」

英利「――」

玲音「――あたしを機械みたいに――言わないで……」

英利「そんなつもりはなかった。これはあくまでソフトウエアの問題さ。玲音、君はソフトウエアなんだよ。ハードウエアなんかじゃない」

玲音「――ソフト……」

英利「そう、実行プログラムなんだ、肉体を持ったね」

玲音「――（違う、と弱々しく頸を振り）あたしは――」

玲音、目を上げる。

★エミュレーターをロード
人の脳に、増殖NAVIを仮想的に移植したという意味。

★オーバーフロー
情報伝達量（速度）に受け入れ側が伴わず、溢れ出してしまう事。

そこには英利はいない。

○夜の住宅街／俯瞰

ひゅーん、ひゅーん……。

高圧電線が風に音をたてている。

○坂道

下着姿のまま、ユラユラとした足取りでゆっくりとっくりと下っている玲音。

周囲でくぐもった、無数の喋り声の輻輳。

不機嫌そうな顔で見上げる玲音。

電柱と電線——。

会話が聞こえてくるのは、そこからの様に思える。

玲音「——（ぽつりと）——うるさい」

会話の輻輳は止まない。

玲音「——（やや強く）——うるさい」

ふっ——。声が止んだ。

そして、電線が風に靡く音——。



玲音、ふと前方を見る。
坂道の中途に、黒い影が蠢いている。
人の様なぼ★んやりとした形の影。それがゆらゆらと移動している。
電柱の下には、四方田千砂が俯いて立っていた。
玲　音「――千砂、ちゃん？」
玲音はもう怖くない。
千砂は肉体を棄てただけの存在。
玲音、ゆ★っくりと千砂に向かって歩く。
玲　音「あたし、やっと判ったよ……。千砂ちゃんが何を言っていたのか……」
千砂、悲しそうに被りを振る。
玲　音「（立ち止まり）え……？」
電柱の下に、千砂の姿はもう無い。
少年の声「（オフ）死ぬ事なんて簡単なんだよ、レイン」
振り向く玲音。

○フラッシュ／サイベリア

★シナリオとは幾分ニュアンスが異なる描写となっている。こうした、得体の知れぬものの描写センスも、中村監督の凄さだと思う。

★ここで玲音の、1話で千砂から来たメールを反復して読む様なダイアローグがコンテで付加されている。

▼アクセラのカプセル
▼銃を自分に向ける少年――

○坂道

頭が半分潰れた少年がシルエットで立っている。

少　年「(薄ら笑い) 早く戻っておいでよ、こっちにさ」
玲　音「――死ぬなんて、簡単な事じゃ、ないよ……」
少　年「簡単さ、君はもうその為の道具を持っている」
玲　音「え……」

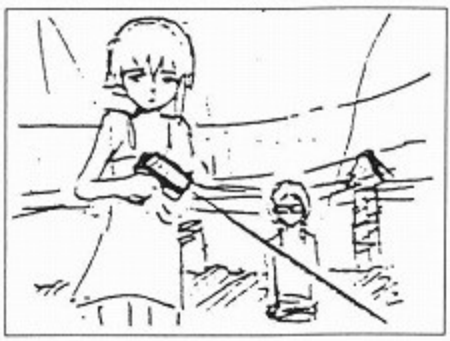
ハッとなって自分の右手を見る。

少年が持っていた、あの銃がいつの間にか握られていた。

少　年「まだ弾は4発残っている筈だよ。セフティは外してある。トリガーは重いからね。両手でしっかり持って、親指で引くんだ。女の子の力じゃね」
玲　音「――」

少年、小首を傾げる。

少　年「なに？　まだリアル・ワールドにいたいの？　ズルいな



あ。君が僕をこっちに呼んだんだぜ」

玲音「――あたし、そんな事……」

少年「もうすぐ★ここはここじゃなくなる。君がそうしようとしているんだ。だから、ここにはもういない方がいい」

玲音「――判んないよ……それ……」

少年、ぎくしゃくした足取りで、ゆっくりと玲音に近づき始める。

玲音、無意識に身構え――、銃を握りなおす。

電灯の下に近づく少年。そのおぞましい顔が見えるかと思えば――

玲音「――！」

電灯の明かりの下に来た少年の顔は綺麗なままで、血すらもついておらず、微笑みを浮かべている。

少年「肉体なんて、無意味なんだ。判ってるんだろ？」

玲音「――」

ふぁぁぁぁぁん。また私鉄が遠くを走る音。

振り向く玲音。

玲音「！」

★結構重要な台詞だと思うんだけど切られてたんだなあ。

坂から見下ろす、見慣れた筈の景色――、それがそうでなくなっている。
住宅と住宅の間に、奇怪な尖塔が立ち並び、蛍よりやや大きな淡い光が浮遊する。
どの電線もまるで脳内のシナプスの様にパルスを目まぐるしく行き来させている。

玲音「――何――、これ……」

いや、違う。
見慣れた風景なのだ。
今見えたのは玲音の毀れた心が見せた幻視か、それとも未来の予知なのか――。

立ちすくむ玲音。

○マンションの一室――

○ありすの部屋

小型のNAVIコンポ★で、CUメールを受けている
ありす。液晶モニタには樹莉。
樹　莉「――だから、明日の放課後、その顔合わせって事で会おうって思うのー。結構カッコいいんだよ？　そこの男子って。――（やや言い淀み）――その、先生とのウワサもさ、ありすが誰か彼氏作れば、嘘だって判ると思うんだよね、あたし――。（明るく）じゃ、明日詳しく話すから。ばいびー」
ぶつん。メールが切れる。
頬杖ついてそれを見ていたありす、嘆息。
ありす「――嘘じゃないから……」
憂鬱そうに目を伏せ、椅子から立ってベッドに向かおうとした時――
ありす「（息を呑む）」
ドアを背に、小さい人影が立っていた。
ありす「――（掠れ声）だ、れ……」
身長1m程の人影。しかし、体型は子どもではない。
緑と赤の縞のセーターが見える。

★東京でのオンエア時に近接して発売されたApple iMacに似たデザイン。

ありす「――誰よ……」
　俯いていた影、顔を上げる。
ありす「――玲音……」
　そう、それは小さなレイン★だった。
ありす「なんで――、なんでそんな――、だって――」
レイン「あたしじゃないよ」
ありす「え……」
レイン「ありすの秘密をあたしは覗き見なんてしていなかったし、ありすの秘密をワイヤードで広めるなんて事、してない」
ありす「――（徐々に落ちつき）――玲音よ。それは玲音がした事。だってあたし見たもの」
レイン「それはあたしじゃないの。あたしは一人じゃないみたい。違うあたしがやった事――」
ありす「（眉を顰め）――何を言ってるのよ」
レイン「ありすだって、一人じゃないのかもしれない……」
ありす「えっ……」
レイン「（強い顔になって）――でも、いくらあたしが違うって言ってもありすはそう信じてるんだよね……」

★岸田氏の設定画では〝グレイン〟と命名されていた。このグレインが、決してドアから入って来ようとしないところに留意して欲しい。



ありす「――」

レイン「だから、あたしはそれを無かった事にする。それが出来る様に、あたし頑張ったんだよ」

ありす「――どういう、意味……」

レイン「――デバイス★なんてもう要らないの。あたし、もうワイヤードとリアル・ワールドの境目、壊しちゃったみたいだから。あたし、行きたいところに行ける様になったんだよ。だからあたし、今ここにいる。あった事だって、無かった事に出来る筈なの」

ありす「――玲音？」

もう玲音の姿は無い。

ありす、暫し呆然としていたが――

突如ボロボロと涙を流し始める。

ありす「（嗚咽）こ……怖いよぉ……、怖いよぉ……」

両腕で身を抱きしめ、床に座り込み、ガタガタと震えるありす。

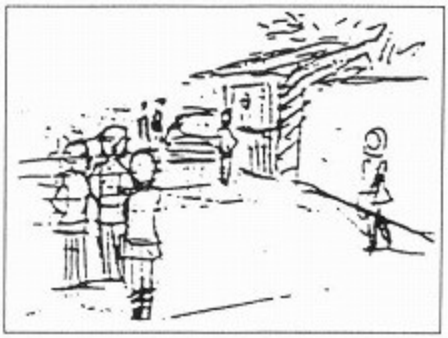
○鷗華学園中等部／翌朝

★デバイス
Device 単純に装置。計算機は様々なデバイスを増設して機能を増大させていく。ここでグレインが言っているのはしかし、ＮＡＶＩ（携帯ＮＡＶＩ含め）も無用となり、人同士のネットワークが形成される、という意味。

○同／校庭

沈んだ顔で歩くありす。
と、背後から樹莉と麗華来て——

麗　華「ありすーっ！」
樹　莉「ありすおはよ」
ありす「——おはよう……」
樹　莉「何ありす落ち込んじゃってー」
麗　華「あ、そういう日？もしかして」
樹　莉「デリカシーないなー麗華はー」
麗　華「だって」
ありす「——あ、樹莉、あたしやっぱり今日、気が進まないっていうか——」
樹　莉「え？　今日って何？」
ありす「(怪訝)昨日、CUメールくれたじゃ……（ハッ）」
麗　華「何かありす、今日変だよ」
　ありすの視線の先を見る樹莉。
樹　莉「あ、あの先生、カッコいいよねーっ」



麗　華「でもさー、三年の子と実は付き合ってるってウワサだよ」
樹　莉「えーっ!?　マジー?　フケツー」
　ありす、呆然……。
ありす「ね、あの先生とあたしの事――」
麗　華「何よ、あの先生とありす、何か関係あんの?」
樹　莉「うそー、もしかしてありす、あの先生好きとかーっ?」
ありす「(混乱)――(ハッ)」
　ありす、振り向く。
　やや離れたところに、玲音が立っていた。無表情にじっとありすを見つめている。
ありす「――玲音……」
樹　莉「あ、玲音、おはよーっ」
麗　華「早く来なよー」
ありす「――玲音、本当に……」
　玲音★、笑った。

To Be Continued...

★画面ではありすの台詞として発語されたが、シナリオでは締めの卜書きだった。浅田さんはこの台詞をどう言っていいかかなり悩まれていた。

layer:12

LANDSCAPE



CAST

岩倉 玲音	清水 香里
岩倉 美香	川澄 綾子
瑞城 ありす	浅田 葉子
英利 政美	速水 奨
山本 麗華	手塚 ちはる
加藤 樹莉	水野 愛日
黒の男 たち	山崎 たくみ
	中田 譲治
タロウ	滝本 啓人
ミューミュー	山本 有紀
マサユキ	藤間 宇宙
駐車場の男	鈴木 英一郎
アナウンサー	伊藤 英敏
女の声	古海 裕子
DJ	アリ 森泉

STAFF

絵コンテ・演出	中村 隆太郎
作画監督	岸田 隆宏
NAVIレイアウト監修	ところ ともかず
原画	齋藤 卓也
	大久保 宏
	山下 明彦
	松尾 慎
	石井 明治
	松原 秀典
	菅沼 栄治
	田中 雄一
	関口 雅浩
	新井 浩一
	菅井 嘉浩
	須賀 重行
	田村 篤
	米林 宏昌
	安藤 正浩
	藪下 昌二
	中嶋 利洋
	千島 知明
	えんどう 麻未
	今川 泰宏
	トコロトモカズ
色指定	岸田 隆宏
制作進行	片桐 聡美
	河田 和明
背景	猿プロダクション
	本田 修
	市谷 正夫
	小杉 光芳
	本田 利恵
	山口 忍
	荻窪 裕文
	真悠 峻大

○プレゼントデイ・プレゼントタイム

——の映像をバックに

玲　音「（モノ／ゆっく訥々と抑揚無く）——なあんだ、そうだったんだ。世界なんてこんなに簡単なものだったの。あたし全然知らなかった。あたしにとって世界は、ただ怖くって、ただ広くって……、でも判っちゃったら、なんだかとっても、楽……」

女の声「（かなり間があって）——だから言ったでしょ？」

○鷗華学園教室

ありす、ドアのところに立って玲音を見つめている。

他の少女達と屈託無く笑っているあどけない玲音。

ありす「（呟き）——どういう事なのよ……玲音……」

玲音、ふ、とありすを見て——微笑。

眉を顰め見つめ続けるありす——と、ポケットからビープ音。

ありす、出して液晶パネルを見る。メール着信。

S「きもちがつたわればだいじょうぶ」

ありす「――？」

S「みんなのきおくなんてただのきろく」★

ハッと玲音を見るありす。

玲音はただ微笑し、見つめているだけ。

ありす、再びNAVIを見る。

S「いやなきろくなんてかきかえればいいの」

ありす「――そんなの……」

NAVIの文字、ノイズになって――

○住宅地

電線が、高圧電線が――

○渋谷の街

電線が――、Nシステム★が――、

○ノイズっぽい黒味

玲　音「（オフ）――人は人の記憶の中でしか実体なんて無い。だからいろんなあたしがいたの。あたしがいっぱいいた

★これが、このシリーズの最大のドグマであった。ハードウエア的な記憶が、〝思い〟と同じ〝メモリ〟という言葉で表されているという、記号言語的な概念を、このラスト前のlayerでは立証しようとしている。

★Nシステム
警視庁が幹線道路などに大量に配置している監視システム。単に交通量を見ているのではなく、そこを通過した車のナンバーは全て控えられている事は、手配車両を発見（Nヒットと呼ぶ）し、犯人検挙に用いられているところから明らか。

んじゃなくって、いろんな人の中のあたしがいただけ」
——ぼうっ、と浮かぶ、玲音がブラウン管を通して
こちらをじっと見つめている目。★
（以下、このイメエジはこのエピソードで頻繁に反
復使用）。

○病院★の一室

格子窓の狭い個室。
小さな男の子がベッドに腰かけ、こちらに背を向けてボソボソと俯き話している。
と、看護婦が入ってくる。

看護婦「——（覗き込み）ゲームとお話ししてるの？」
男の子、顔を上げる。あの主婦ナイツの息子。手にはゲームボーイ4。
男の子「——ママ、死んでないんだって」
看護婦「（慄然）え……？」

○ノイズっぽい黒味

★このシリーズがやろうとしてい事の、いよいよ最終段階に入ったのを示す。

★このシーンはカットされた。

走査線が目立つ映像に――ぼんやりとした玲音の顔。
何かを告げている口。

○サイベリア

奥のコーナー、ソファにぐったりしているタロウ。
その眼にはＨＭＤ型ＮＡＶＩ。
タロウ「――（小声）――そっか……。そうなの……」
隣からミューミュー
ミューミュー「ねータロウってばー。誰とお話ししてんのよー」
タロウ「――（突如笑いだし）」
マサユキ「ど、どうしたんだよ」
タロウ、ＨＭＤをつけたままマサユキの方を見て
タロウ「俺、天使とキスしたんだぜ」
ミューミュー「（泣きそうな顔）タロウ……」

○街／イメエジ

老若男女、遠く近く――
囁く、呟く、祈る――



口々に聞こえる

声　「レイン――レイン――レイン――レイン」

と――、その街の風景が揺らぐ。

見慣れたビルの谷間に、その向こうに、奇妙な形の尖塔がそこここに佇立している。

○黒味っぽいノイズ

反復されるノイズ・インサート。

玲音の眼がじっとこちらを見つめている。

何か呟く声が聞こえるが、内容までは判然としない。

○ネット★ニュウズ画面

ア　ナ「（オフ）――このプロトコル7の採用により、ワイヤードとリアル・ワールドはシームレスに情報をシェアする環境になるものとの期待が持たれています。では次のメッセージです。玲音を好きになりましょう」

○画面を埋めている文字

★このシーンは、コンテで監督と対立した。私はこのアナウンサーの顔は最後まで画面に出すべきではないと考えていた。このテレビ・シリーズの、メタ的な構造を鑑みれば、今でもその考えは変わらない。

いずれも――
「玲音――レイン――ｌａｉｎ――」

○玲音の部屋

無人。
いびつに増設されたＮＡＶＩは、その周辺機器、冷却系もその全ての動作を止めて、ただの無機的な物質と化している――。

○ノイズ

反復されるノイズ・インサート。
玲音の眼がじっとこちらを見つめている。
何か呟く声が聞こえるが、内容までは判然としない。

○ザップ・イン／イメエジ

濡れた線路に横たわる英利の屍。

英　利「（オフ）人の肉体はその機能の全てを言語化し唯物論の用語によってあますところなく記述する事が出来る」



○〝風景〟のモンタージュ

今までこの作品で描かれてきた風景（主に電線）が、それまでとは異なるものに見えている。

英　利「（オフ）肉体も機関に過ぎない。その物理的な制約が人の進化を留めているのだとしたら、それは人という種の終わりを、いもしない神によって決定づけられている様なものだ。

人の中に刻まれた情報は、その固体が意識を受けて得たものだけではない。人という種が連綿と繋がり続け、情報をその中に蓄積してきたもの――。それは共有されねば何の意味も持たないただのデータでしかない。人は進化出来るんだよ、自分の力で。その為には、まず自分の本当の姿を知らなくてはいけない。君は、自分を何だと思う？」

最後の〝風景〟、屍都――ネクロポリスの様に変容していく――。

★この一連の奇妙なる〝風景〟群は、演出の松浦錠平氏によるデジタル・ワーク。

★このシーンの台詞を速水氏が喋っている時、アフレコスタジオにて監督は私に、「この英利の台詞はホッとする」と言われた。すぐにその意味が私には判らなかった。英利はこの物語では予め敗北する存在として生まれ、彼の語るロジックは否定される為に書かれたもの。しかしながら、私自身、ここだけでなく英利が語っている事は、本心でそう思っている部分が多く含まれている事を否定出来ない。ueda 氏も、中村監督も、私も、抱えているアンビバレンツを押し隠してものを造る事が出来なかった。

○抽象的な街

電線だけが浮き上がって、脳内のパルスの様に光が交錯。

英　利「(オフ) 人と人とは元々繋がっていたのさ。僕がした事はそれを元に戻しただけに過ぎない。君がそれを引き起こしたんだ玲音。だから――、君は好きな事をしていいんだ」

○坂道の頂上

玲音が立っている。

気分良さそうに、風を顔に受けて――。

今は何も聞こえない。

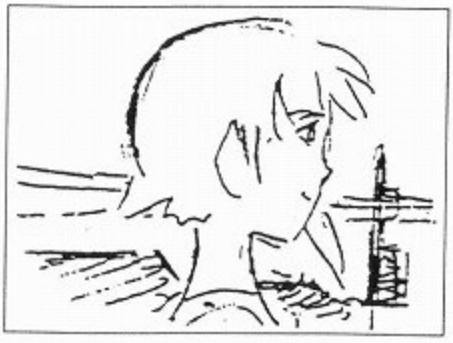
人々の声の輻輳も、電線が軋く音も。

そして――玲音がこちらを見て――

○地下駐車場

オフィス街にある高層ビルの地下。

薄暗い照明に、ポツポツと並ぶ車が浮かぶ。



その一台の中で、★ぼっと灯が浮かぶ。

○車内

にいたのはＭＩＢ二人組。

煙草に灯を点けたのは背の高い方。

ＭＩＢ２「――止めたんじゃなかったのかよ（苛立たしげ）」

ＭＩＢ１「――」

ＭＩＢ２「どうしてこんな事になっちまったんだ。俺たちはちゃんと仕事したじゃねぇか」

ＭＩＢ１「――計算機マニアの秘密結社ごっこが邪魔だったのはクライアントだけじゃなかったという事だ」

ＭＩＢ２「どういう意味だ」

ＭＩＢ１「クライアントは英利政美と通じていた――、いや、その意思は英利のものだったのかもしらん」

ＭＩＢ２「やめてくれよ！　英利なんて死んだ男の事を――」

ＭＩＢ１「――死んでないんだよ」

ＭＩＢ２「!?」

ＭＩＢ１「肉体の有無なんて、関係なかったのさ本当は」

★言わずもがなだけれど、これは初期の彼らの象徴である、ゴーグルの赤外線イメージの反復。

ＭＩＢ２「（唖然）――お前――」
ＭＩＢ１「（乾いた笑い）――」
暗然としていたＭＩＢ２、向こうから黒い車が来たのに気づく。
ＭＩＢ２「来たぜ」
ＭＩＢ１、真顔に戻り、ドアを開く。

○地下駐車場

下りてくる二人のＭＩＢ。
向こうから来たのは、橘総研の初老の男。手にはゼロハリのアタッシェ。
ＭＩＢ２「俺たちはハメられたんだな？」
男「――どう解釈しようが構わない」
男、アタッシェを床に置く。
男「これまでの報酬だ」
ＭＩＢ１「逃亡しろと？　どこへ」
男「（苦笑）そうだね、電話も電線も無くて、衛星がカヴァーしてないエリア」



ＭＩＢ２「この地球にそんなところある筈ねぇだろ!?」
男　「逃げるんだとしたら、そういうところを探すしかない」
　男、背を向けて自分の車へ歩きだす。
ＭＩＢ１「――何が起こるんだ」
　立ち止まる男。
ＭＩＢ１「デバイス無しでワイヤードとリアル・ワールドを繋いでどうするつもりなんだ」
　男、ゆっくり振り向き――
男　「――（ニヤ）素敵な事が起こるんだ。楽しみじゃないか」
　暗然と立ち尽くす二人。
　男は車で走り去っていく。
　と、突如ＭＩＢ２、わめきだす。
ＭＩＢ２「ひっ、わっ、わあああああ！」
ＭＩＢ１「どうした!?」
　ＭＩＢ、自分のモノ・ゴーグルを抑えてのたうち回る。
ＭＩＢ１「何を見ているんだ!?」
ＭＩＢ２「やめてくれぇぇぇぇぇ！」

ＭＩＢ１、２の体を引き寄せ、ゴーグルをむしり取る！　ゴーグルは眼窩と接着されており、皮が同時に取れ、赤い皮下組織が。

ＭＩＢ２「ぎゃあああああ!!」

ＭＩＢ１のモノ・ゴーグルＰＯＶ。

ＭＩＢ２の萎縮した瞳に――玲音★が一瞬映って――

ＭＩＢ１「!?」

そのＭＩＢ１の視界を赤いものが覆い始めた――

ハッと振り向くＭＩＢ１。

駐車場の暗がりのそこここに、黒い影がぼんやりと立っている。

ＭＩＢ１「――何だこれは――」

ＰＯＶ★画面。

コントラスト・明度が自動調整され、影の顔が判然となる。それは――死者達の顔！

★告白すると、コンテが上がった時、ここで玲音を見せていいのかどうか迷った。判断は監督に任せ、結果シナリオ通りになっていた。

★この死者達の映像は、デジタルで相当加工されてはいたものの、素材そのものは極めてアナログな手段で撮影された。ueda 氏と中原氏担当。

他に誰もいない駐車場に、ＭＩＢ１の恐怖の叫びが響き渡る。
ぎゃあああああ！　ぎゃあああああああ！

○岩倉家前

坂を登ってくるありす。
ぶーん……、ぶーん……。
立ち止まり見上げるありす。
高圧電線が風に靡いている。

家の前に来るありす。
家の壁を埋めつくす奇怪な文字、二階の壁を這うダクトやチューブ。
おぞましいものを見る眼で見上げるありす。
躊躇するが――、呼び鈴に手を延ばし押す。
反応は無い。

ありす「……」

○同／玄関

がちゃ。鍵の掛かっていないドアが開く。
恐る恐る入ってくるありす、廃屋の様な玄関～廊下の様子に唖然。
ありす「（小声）――玲音……？」
返事は無い。
ありす、階段を見上げる。
まるで瘴気がそこに淀んでいるかの様に、二階の廊下は一層薄暗く、靄がかって見える。
ありす「――（決意）」

ぎし、ぎし、ソックスの脚が階段を踏み、登っていく――。
瘴気がありすの心臓を抑圧する。
登る速度が遅くなる。
耐えられない。見上げるありすの唇は紫に震え、双眸には涙が滲んでいる。

★実写でもあれ程禍々しいスモーク効果は作れない。監督（この回演出兼任）は拘りに拘って、背景はかなりリテイクが出された。

恐ろしい。二階にいるのは――玲音なのか？

ありす「――れ、いん……」

ありす、必死に自らを奮い立たせ、再度登り始める。

○二階廊下

登ってきたありす、ハッとなる。

突き当たりに、こちらに背を向けて立つ女が薄ぼんやりと。

ありす「（心臓停止寸前）」

美香の声「（オフ／極く小さく）ぴーぴーがりがりがりがりぴー」

ありす、『こんな人間はいない』と頭を振る。

ありすの願いは叶った。

もう突き当たりに女はいない。

見回すありす。

薄く開いたドア。玲音の部屋――

○玲音の部屋

先程と同様、死んだＮＡＶＩが朽ちているばかりの

墓室。

ぎっ。ドアを開け、ありす、入ってくる。

あまりの惨状に眼を奪われ――

ありす「――これが――玲音の部屋……？」

部屋中央に進むありす。

床にはチューブやダクト、ケーブルが這い回り、それを踏まない様に歩く。

メインモニタの前に来るありす。

と、センサが察知したのか、ブン、と灯が入り、部屋の中の冷却システムが起動。ぶーんという唸り音が聞こえ始める。

見回すありす。

部屋のそこここのＬＥＤが明滅し始めた。

がたん。がさがさがさ。

ありす「!!!?（振り向く）」

ベッドを覆っていた機械やケーブルの山が崩れて、白く細い腕が虚空に何かを摑もうと延びる。

ありす「（声にならない悲鳴）」



後ずさり――、モニタを押しつぶすありす。
ががさがさ……。腕に続いて身を起こす、玲音。
機器類を〝着て〟★いたのだった。
ありす「玲音……」
まだ寝ぼけた様な顔をしていた玲音、ゆっくりとありすの方を見る。
玲　音「――ありす……」
ありす「――何を――してたの……？」
玲　音「――（微笑）何もしてない。ただ見て★ただけ」
ありす「――何を……」
玲　音「……」
ありす「あたし――、あたし自分がおかしくなったって思ってた。
でもやっぱり違うのよ。玲音、どうしてあたしだけ残したの？」
玲　音「……」
ありす「どうしてあたしだけ、元の記憶を残しているの!?」
玲　音「――だって……」
ありす「（泣き始める）どうしてあたしだけ辛い事をいつまでも

★完成作品では、玲音はくまのぬいぐるみを胸に抱いて起きあがった。Layer: 11で一旦自我を崩壊させた玲音を、他者（ありす）の目で描くに、これほど哀しくもリアルな芝居は無かろうと思う。そして視聴者には、玲音はどうなろうと何をしようと、中学二年生の幼い少女だという厳然たる事実が突きつけられるのだ。

★この辺りの清水香里ちゃんの芝居に鳥肌をたてた。玲音である。もう完璧に玲音の声がそこにあった。

思い出にしてなきゃいけないの!? そんなにあたしの事が憎い!?」

玲　音「――」

ありす、ケーブルの上に座り込んでしまう。

ありす「(ひっく、ひっく)――こんな、こんなのって耐えられないよ……」

玲音、立ち上がり、ありすに近づく。

玲　音「――あたし、ありすを泣かせたくなんて、なくって……」

ありす、泣きじゃくっている。

玲音、ありすの顔の前に自分の顔を突き出す。まるで幼児の様に怪訝そうな顔。

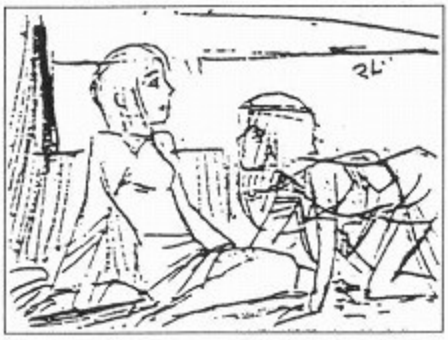
玲　音「――ありすは大丈夫だったじゃない」

ありす「――え……?」

玲　音「ありすは――、あたしが繋げなくっても、あたしの友達になってくれた……」

ありす「何の事……言ってるの……」

玲　音「ありすだけは、あたしの事――、普通に好きになってくれた。だから――あたしとっても嬉しかったのに」



ありす「――」
玲　音「ありすだけは――、あたしの――友だち――。繋がんなくっても――」
　徐々に玲音、ありすに覆い被さっていく。
ありす「つ、繋げるって、何の――事……」
玲　音「（微笑）あたしと。みんなと」
　吐息が聞こえる程にありすの前に来る玲音――。
ありす「や、やめ……」
玲　音「あたしありすが好き」
ありす「何を言ってるのか判ってんの!?　これがマトモな世界!?」
玲　音「元々人間は無意識で繋がっている存在。それを繋げ直しただけ」
ありす「――玲音が……？」
玲　音「（あどけなく）あたしは何もしないよ。あっちと、こっち側と、どっちが本物とかじゃなく、あたしはいたの。あたしの存在自体が、ワイヤードとリアル・ワールドの領域を崩すプログラムだったの」
ありす「――プログラムって……」

玲　音「ありすだって、誰だって、みんなアプリケーションでしかないの。肉体なんて、要らないのホントは」

ありす「――」

不自然な姿勢でじっと見つめ合う二人。

と――、ありすの手がそっと玲音の頬に触れる。

玲　音「――？」

ありす「――違うよ」

玲　音「え……」

ありす「――あたしよく判んないけど、玲音が言ってる事、間違ってると思う」

玲　音「……」

ありす「――こんなに冷たいけど、でも、生きてるよ、玲音の躰」

玲　音「……」

ありす、玲音の手をとって自分の頸に這わせる。

ありす「――あたしだって、ほら……」

玲　音「――どき、どき、どき……（心拍に合わせて）」★

ありす「――怖いからだよ。怖いからどきどきしてる」

玲　音「――どうして、怖いの……？」

★この辺り、より情感的に芝居が膨らんでいる。

英利の声「肉体を失う事が怖いのさ」
　ハッと振り向く玲音。
ありす「玲音……？」
　ありすには見えもせず、声も聞こえていない。
英　利「（オフ）感覚★だって脳の刺激でどうにだって得られる。嫌な刺激なんか拒絶すればいい。楽しくて気持ちがいい事だけすればいいじゃないか」
玲　音「――そうなのかな」
ありす「誰と話しているの？」
英　利「（オフ）その子が好きなんだったら、どうして繋げてあげない？」
玲　音「――判んない……」
ありす「玲音！　誰と話してんのってば!?」
英　利「（オフ）バグっているね、まだ。いいよ、時間を掛けてデバッグしてあげる。おいで」
ありす「！」
　ボウっと虚空に青白い腕（ホログラム）が現れ、玲音に差し出されている。

★いや、それはそうなんだよね、本当に。そう出来る様になるのもそう先の事じゃない。でも、そうなってしまったら判らないままでいる事がとても多い、と思うんだよ、英利。

しかし玲音は応じない。

ありす「玲音！」

玲　音「――判んないのは、あなたの事、神様」

ありす「――（呆然）――神様と――話しているの……？」

英　利「（オフ）判らないのは、何だっていうんだい？　玲音」

玲　音「あなたが出来た事は、ワイヤードからデバイスを解放する事。電話とか、テレビとか、ネットワークとか、そういうものが無くちゃあなたは何も出来なかった」

腕のみの英利「そうさ。それらは人間の進化に伴って生まれたものじゃないか。最も進化した人間はそれに、より高い機能を持たせる権利がある」

玲　音「――その権利、誰がくれたの？」

英　利「――」

玲　音「地球の固有振動にシンクロさせたコードをプロトコル7に組み込む事で、集合的無意識を意識へと転移させるプログラム、本当にあなたが考えだした事なの？」

腕のみの英利「――何を言いたいのだ。まさか――、まさか本当に神がいるなどと――」



玲　音「肉体を失ってしまったあなたにはもう判らない事……」
英　利「――う、嘘だ！（早口に）僕は――僕は万能なんだよ！　僕が君をこのリアル・ワールドに肉体化させてあげたんだぞ！　ワイヤードに遍在していた君に自我を与え――それを！」
玲　音「――あたしがそうだとしたら、あなただって――」
英　利「僕は違う!!　僕は――」
　愕然としていたありすの視点。
　ホログラムの腕が消え、その虚空に黒い影が現出し始める。
ありす「ひっ」
　冷徹に見つめるレイン。
　言葉にならない呻きを放ちながら、醜★く崩れた人間であった物の残滓が必死に人の姿をとろうとしている。
ありす「なっ、何よあれ!?　玲音！　玲音!?」
英　利「ぐおおおおおおおお」
玲　音「――（俯き呟く）ワイヤードは、リアル・ワールドの上

★この六畳間の、ベッドの上で起こるスペクタクルは、やはりと言うべきか、岸田隆宏氏渾身の作画。

位階層じゃないんだ……」

英　利「（くぐもった声）どーゆーわけ――だー――」

玲　音「――あなたは確かにワイヤードでは神様だった。でも、それはワイヤードが出来るまで待っていた誰かさんの代理の神様……」

英　利「――うそ――だぁぁぁぁ」

英利の醜く崩れた赤黒い腕が玲音に襲いかかる！

玲　音「！」

玲音の頸が捕まる。

ズルズルと引き上げられる玲音。

ありす「れいーん!!」

ありす、必死に玲音の体を後ろから抱きしめる。

玲　音「あ、り、す……」

腐臭を放ちながら実体化した英利――、咆哮。

英　利「ぐおおおおおおお」

玲音の眼、一瞬レインの強い輝きに――

レイン「（静かに）肉体なんて無意味、なんでしょ？」

玲音の部屋中のＮＡＶＩが一斉に振動！



パーツが一気に分解し――虚空に泳ぎ――
ばあああんんん！
一斉に英利に向けて凝集！
英利だった物、鉄の塊となって――倒れる。

To Be Continued...

テレビアニメーションとしては空前の原画スタッフ（扉頁参照）。中には「ええッ!?」と思わず声を上げる様な人まで参加されているが、この豪華な原画陣は岸田氏が自ら声を掛けて集められた（何人かはオープニングの原画スタッフでもある）。岸田氏は、この回にて初めて作画監督クレジットも掲げている。クレジットはされていないが、全話に渡り、24時間スタジオに詰めてこのシリーズを支えていた。この layer: 12 は、その集大成の様なエピソードとなった。

layer:13

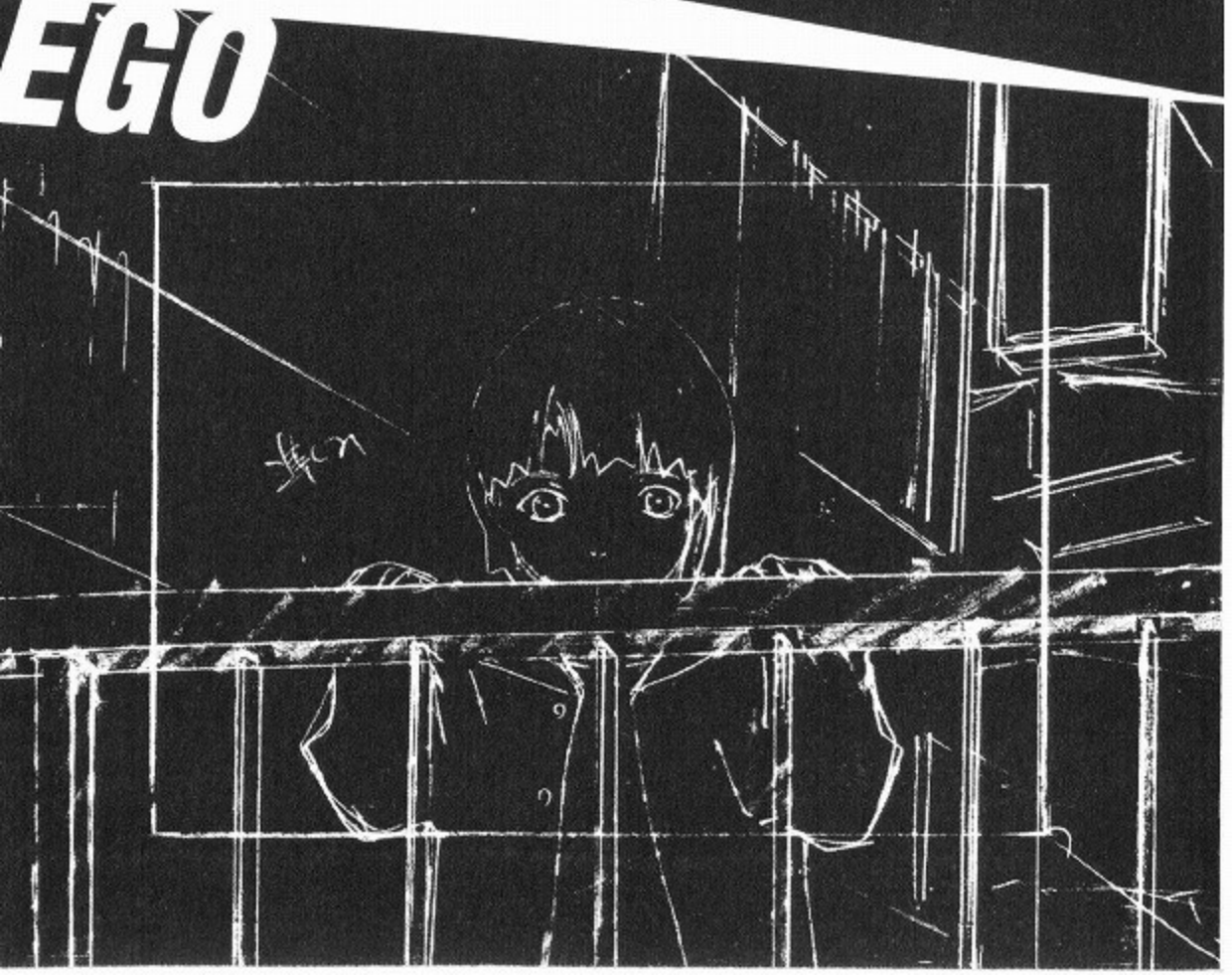
CAST

岩倉 玲音	清水 香里
岩倉 康雄	大林 隆之介
岩倉 美穂	五十嵐 麗
岩倉 美香	川澄 綾子
瑞城 ありす	浅田 葉子
山本 麗華	手塚 ちはる
加藤 樹莉	水野 愛日
英利 政美	速水 奨
タロウ	滝本 啓人
ミューミュー	山本 有紀
マサユキ	藤間 宇宙
少年	小宮 悟史
幼女	常泉 遥佳
中学校教諭	成田 剣
DJ	アリ 森泉

STAFF

絵コンテ・演出	中村 隆太郎
作画監督	丸山 泰英
	関口 雅浩
NAVIレイアウト監修	ところ ともかず
原画	安倍 吉俊
	安藤 正浩
	大関 紀子
	江本 正弘
	鍬山 仁志
	菊池 聡延
	岸田 隆宏
	須賀 重行
	高橋 勇治
	田村 篤
	米林 宏昌
	藪下 昌二
	星山企劃
色指定	ますだ よしまさ
制作進行	長曽我部 仁
背景	スタジオ美峰
	野村 正信
	中谷 美知留
	高須賀 真二
	保木 いずみ
	大橋 由佳
	篠原 理子
	益城 貴昌
	東地 和生
	京田 邦晴
	島田 雄司

EGO



○画面いっぱいに玲音の顔

暗い室内にいるらしく背後は見えない。
玲音、じっと画面のこちら側を上目づかいで見つめている。
時々俯き、考え事をしている様な顔になる。
何かを言いかけ――、やめる。
小さな吐息――。

玲　音「（ポツリと）――えっと……」
かなり長く間をとって――

玲　音「――あたし、また判んなくなっちゃって……。
あたしがいるの、こっちなのか、そっち側なのか……。
あたし、そっち側のどこにだっている。それは知ってるの。だって繋がってるんだもの……。でしょ？
（俯き）――でも――、あたしの――、本当のあたしのいるところって、どこ……？
あ……、本当のあたしなんていないんだっけ……。あたしは、あたしの存在を知っている人の中にだけいる……。
けど――、それだって、今こうやって喋っているあたし

は――あたし、だよね？　このあたしって、（やや画面に近づき）あたしって誰？」

○前話続き（リプライズから）

肉体化しようとしている英利――

英　利「ぐおおおおお」

レインの瞳が強くなって――

室内中のＮＡＶＩ、周辺機器のパーツが一斉に沸き立ち――、英利の黒い影に一気に凝集！

英利の叫びが――消え――、鉄の塊はボロボロと崩れて落ちる。

――ここから続き――

愕然と見ていたありす――

ありす「――（突如）ぎゃあああああ！　ぎゃあああああっ！」

恐怖を抑制する理性が断ち切れてしまった。わめき続けるありす。

玲　音「――ありす……？」

玲音を見て、更に恐怖するありす。叫びながら、後



ろにズルズルと手探りで下がっていく。
ぼうっとありすを見つめる玲音――。

玲　音「ありす……」

叫び疲れたありす――、放心。
目は最早玲音を見ておらず、虚空を視線が泳ぐ。
玲音、ありすの前にしゃがみ――
ぎこちない動作でありすの肩を両手で懐き――抱きしめて顔を埋める。
ありすは放心したまま。

玲　音「――ごめんね……」
ありす「……」

玲音の部屋の中は、最早機器の残骸が山を成すだけの空間。
じっとしている二人――。

○白味にEMACS★のプロムプト
一字ずつ――
S「ALL RESET」――Return

★EMACS
表記はemacsが正しい。UNIXの代表的なエディタ。玲音のNAVIのOSは基本的にUNIXだと想定していたが、中原氏による独創的

○風景

激しく移ろう風景の数々。
電線――、送電線――、
住宅街――、街――、
全く判然としない会話の輻輳が高鳴り――

○坂道

その頂に立つ玲音。
虚ろな目で夕暮れの町を眺めている――。
ぼんやりと蜃気楼の様に佇立していた奇怪な尖塔、
消えていく。
残ったのは、いつもの、見慣れた町。

玲音「――」

玲音、岩倉家がある方を見る――。

○岩倉家／ダイニング

黄昏の金色の光が差すテーブル。その上の皿に盛ら

なGUI（Graphical User Interface）により、その素性はKernelを使用しているという表示にて判るのみ。なお、Returnとは、リターン・キーを押す、の意味であるが、ドラマの表現に呼応するという意味で、このReturnもテキストとして画面に表示されていた。



れた料理を切るナイフ。
食べる音、食器同士がぶつかる音。
コトン。置かれる水の入ったグラス。

美香の声「ごちそうさま」
父の声「残ってるじゃないか」
母の声「ダイエット中なんですって」
美香の声「言わなくっていいよそんな事ー」
ガタン。椅子を引き立つ音。
父の声「ああ、荷物が来るかもしれない。着払いなんだ。来たら払っといてくれ。あそこの引き出しに入れてあるから」
母の声「(独りごちる)また計算機のパーツ……」
また暫く沈黙の食事の音。
父の声「――なあ」
という声に、初めて母親、父親を見る。
母「――」
父親、空いている席をぼうっと見ている。
父「――いや、なんでもない」
母「――」

★この台詞はコンテに掛かる間際に監督にお願いして追加して貰ったもの。美香役の川澄綾子さんは、6話以降、まともな台詞が一つも無かったのに、一所懸命役作りをしてくれていた。最終話でも「ごちそうさま」一言しか台詞が無かったので、御礼のつもりで足させて貰った。

玲音はそこにいないのだ、最初から。
食事が再開される。

○坂道

玲音はそこにいない。

○私鉄電車内

玲音はそこにいない。

○鷗華学園近くの道★

ぼうっと歩いているありす。

樹　莉「(オフ) ありすっ」

ありす「え……」

樹莉と麗華、後ろからありすに抱きつく。

麗　華「今夜、遊び行くでしょ」

樹　莉「行くでしょ行くでしょ」

ありす「(怪訝) えっと……、あたしたちだけで?」

樹　莉「他に誰がいるのよ」

★このシーンから、仲井戸麗市氏の挿入歌『孤独のシグナル』が流れる。ここでこの曲が使用されたのは、実はかなり偶発的だったのだけれど、収まるべくして収まったとしか言いようがない。この『lain』シリーズの音楽を、あまりにも人間臭いブルーズメンに委ねたスタッフの気持ちも、観ている人たちに伝わったと信じている。

ありす「――（思案）誰って、別に……」
麗　華「まさかまたあいつ？」
ありす「え？」
　麗華が指す方を歩いていたのは――
樹　莉「あー、四方田千砂かー」
　青白い顔はしているが、普通に歩いている。
ありす「……」
樹　莉「ありすが言うから一度サイベリア連れてったのに、全然関係ないって感じだよね、あの子」
麗　華「無駄だよ、誘うだけさ」
ありす「――（ぽつりと）そっか……」
樹　莉「？　どしたの？」
ありす「（微笑）何でもない。今、変な事思っただけ」
麗　華「変な事って？」
ありす「記憶に無い事は、無かった事なんだって」
樹　莉「記憶……？」
ありす「記憶に無い人は、最初からいなかったって――」
麗　華「誰の事言ってんの」

ありす「だから、誰でもないんだってば。さ、じゃまた樹莉ン家で着替えてこ?」

麗　華「おおっ！　ありすちゃん今夜不良ね！」

樹　莉「行こう行こう！」

三人、早足で街へ歩きだす。

と、アクセラの少年★と、PHANTOMaの幼女が兄妹の様に手を繋いで歩いているのとすれ違う。

お互い、全く関係が無いかの様に。否、無かったのだ、最初から。

○黄昏の街

ランドセルを背負ったタロウ、ミューミュー、マサユキがどつきあいながら交差点を渡っていく。

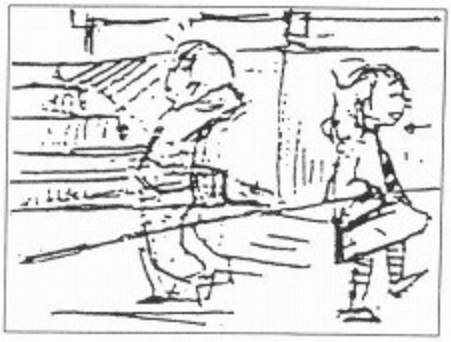
と――、タロウ、携帯ＮＡＶＩの振動に気づいてポケットから出す。

タロウ「?」

液晶に一瞬、玲音の両目が映っていた。

タロウ「――」

★この兄妹の登場は、次のシーンに振られた。



ミューミュー「タロウ、どうしたのー？」
マサユキ「メール？」
ミューミュー「（む）だれからよー、女の子？」
タロウ「――いや、知らない奴……」
何となく釈然としていないタロウ、歩きだす。
と、スーツ姿で陰鬱な顔をした英利とすれ違う。
英利、ブツブツと呟いている。
英　利「（呟き）――やめてやるあんな会社やめてやるあんな事をこの僕にするなんてやめてやる僕の事を軽く見やがってやめてやる……」
ふ、と見上げる英利。
ビルの壁面で送電線補修作業をしている電力会社の工事人――、ＭＩＢだった男達。作業用のゴーグルをつけ、テスターで電圧を見ている。
英利、関心を失い、駅の方へ歩いていく。
英　利「（オフ／遠ざかる）やめてやるあんな会社絶対やめてやる今度やめてやる……」

やがて黄昏は群青に覆われ――
街は自らが発する光で彩られていく。

○黒味にスーパー

S「きおくにないことはなかったこと。
きおくなんてただのきろく。
きろくなんてかきかえてしまえばいい」

ややあって、玲音の声。

玲　音「（オフ）――そうなの……？」

□CM★

○プレゼントデイ、プレゼントタイム

の映像が流れる。
雑踏、ざわめき、会話の輻輳――。
それが徐々に、静かに、止んでいき――

○虚ろな街

★私はどんな作品であっても、CM入り位置は指定しない。それは演出の範疇だと考えるからだ。しかしこの『lain』layer:13では、アバン・タイトルをCM明けに入れたいという明確な意図があった為、例外的に指定している。

人の姿がかき消えた街。
車も走っておらず、しかし街灯やビルの明かりは点いている。
交差点の真ん中に、ぽつりと立つ――玲音。
無表情に、ただ立っているだけの様に見えたが――
わっと悲しみがこみ上げ――顔を歪める。
頬を伝う涙を手で拭う。
密やかな嗚咽が漏れ――
玲音の声「(ラジオトーン)どうして泣くの?」
顔を上げる玲音。
もう一人の玲音(清楚なワンピース姿。便宜上lain★と表記)は、あどけない顔で玲音を見つめているが、その姿にはフィルム傷が走り、フリッカーで揺れている。
lain「誰の記憶からも自分を消してしまったから?」
玲音「――」
lain「でも、それはあなたが望んだ事じゃない」
玲音「そう――だけど――」

★コンテ~アフレコ台本では〝れいん〟と表記されていた。この方がしっくりくる。

lain「誰も変な死に方なんてしていないし、誰も傷ついていないし、誰も憎んだりしない」

玲音「そう、だけど……」

lain「ワイヤードから死んだ人の情報が紛れだすなんて事もう、ないよ」

玲音「――」

lain「だから玲音は、もうどこにもいないでいいの。それが望んだ事だったんじゃない？」

玲音「――あの人みたいな事言うんだ……」

lain「あの人？　そんな人も最初っからいないの。いても、神様になれるなんて変な事は考えない」

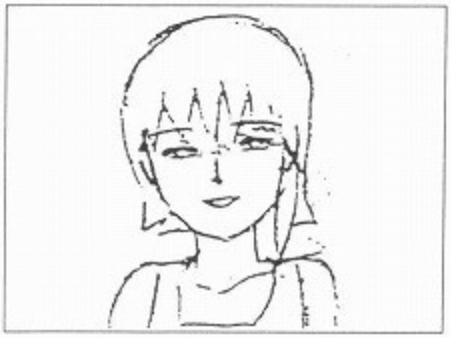
玲音がいるその街は、円筒の下辺にある。

暗い巨大な洞窟の下辺に、その交差点はあった。

街の建物は遠くに離れるにつれて抽象化している。

それは甚だしくプラトン的な象徴舞台。

玲音「（見上げ）――もう、あたしはどこにもいない。どこにもいないんだったら、あたしは誰？　あたしはどこにいるの……？」



lain「――自分で言ってたじゃない」
玲音「え……？」
lain「ワイヤードはリアル・ワールドの上位階層なんかじゃないって。あの人はそれを間違えていた」
玲音「（あ……）」
lain「ネットワークは、情報を伝えるフィールド。情報はそこに留まってはいない。情報は常に流れて機能するもの――」
玲音「――そっか……」
lain「人の記憶、個人のものとか、人の歴史の中のものとか――、それだけじゃなくって、共有されている無意識だって――。そんなに膨大なメモリを蓄積出来る様なものを、人間が自分で作れると思う？」
玲音「ワイヤードは繋げているだけだったんだ……」
lain、近づく。
玲音「――でも――、じゃあ、どこと繋げられていたの……？」
lain「人がそれを知る必要があるのかな」
玲音「え……」

lain「知らなくったって、ずっとこれまでやってこれたじゃない。人の世界はそれぞれに神様を作って、お祈りして世界はこうだって思い込んで――」

玲　音「――嫌な言い方」

lain「嫌でもそれが玲音、あたしなんだよ。判ってるでしょ」

玲音、小さく首を横に振る。

lain「そうだ……。玲音は人なんかじゃない。（くすくす）どこにでも遍在しているもの――、じっと見つめるもの――、そうよ、玲音は神様なんだよ」

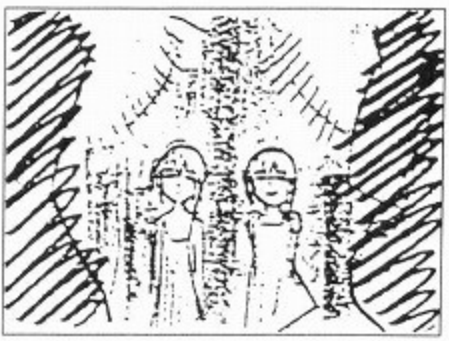
玲　音「違う！」

lain「神様になっちゃえば楽じゃない。人なんかよりずっと楽になれると思う。何もしなくっていいの。ただいて、見ているだけ。誰も玲音を蔑んだりしない。誰も玲音を嫌ったりもしない」

玲　音「そんなの――」

lain「もう一度、初めからやりなおそうよ。せっかくリセットしたんだもの」

玲　音「もういい!!」



ｌａｉｎ、キョトンとした顔で玲音を見つめていたが――やがてパーフォレーション★が乱れ――消える。

ｌａｉｎの声「（遠くオフ）じゃあ、あなたは何なのよ、玲音」

残された玲音が居る場所。

そこに街などは無く、冷たく暗い巨大な洞窟の中。

玲音、顔を覆う。

玲　音「――あたしはどこにいるの……？」

その声は洞内に響き――

父の声「（間近で）ほら、食べなさい」

顔を上げる玲音。

巨大な空洞の先、黄昏の光を逆光に、巨大な父親の顔が覗き込んでいる。

玲　音「――お、とうさん……」

○岩倉家／ダイニング★

黄昏の光の差す室内。

テーブルにはマドレーヌと紅茶。

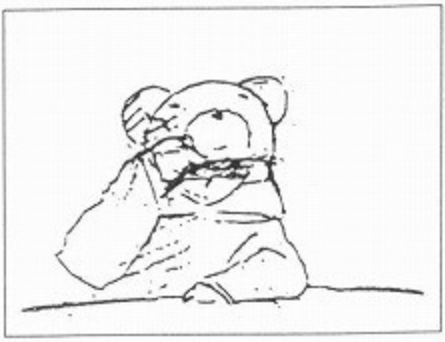
父親が優しそうな顔で前に座っていた。

★パーフォレーション
フィルムの映像面横にある穴。ここが欠損すると、上映画面がガタガタと揺れてしまう。

★このシーンは、諸事情からマドレーヌ無しとしてコンテが描かれた。完成シーンは大変素晴らしく仕上がっていたし、テレビとしてはあれで良かったと思っているが、未練があった私はNX誌の連載にて、このシーンを小説化した。

玲音、どぎまぎ。その服は――くま着ぐるみ。
フードを被っている。先の映像はフード★内側の見た目だった。

父「(苦笑) いいんだよ、もうそんなもの被らなくたって」
玲音、フードを脱ぎ――、おずおずとマドレーヌ★を手にとる。
玲音「――(上目づかいで父を見て) ――いただきます」
口許に持っていく玲音。
父「そうじゃない」
玲音「え……?」
父「マドレーヌは、その紅茶に浸して食べるんだ。そうすると、もっと美味しくなる」
玲音「――(こくりと頷く)」
マドレーヌを紅茶に浸す玲音。
じっと、優しく見つめている父。
じゅわっと紅茶に浸されたマドレーヌを口許へ運びゆっくりと食べる。
玲音「(あ……)」



★岸田氏が創案した〝くま着ぐるみ〟に対して、私がシナリオにて、言い方がおかしいが「借りを返した」シーン。

★このマドレーヌは、気恥ずかしくも、しかし記憶(未来をも含む)を巡る物語として意識せずにはおれない『失われた時を求めて』へコミットする意図で書いた。しかし本来の狙いとしては、〝食べる〟という生々しい行為を玲音にさせてあげたかったのが一番だった。

黄昏の光が強まり、室内のディテイルが消失。
父と、ダイニング・テーブルと玲音だけになる。

父　「美味しいだろう？　玲音」

玲音「――（こくりと頷く）」

光に包まれた父親、老いている。

玲音「――記憶って――、過去のものだけじゃないのね……。
今の事、明日の事まで――」

父親の姿、ボケて抽象化していく。

玲音、振り向く。

○黄昏の街

ありすだ。二十歳を過ぎて美しく成長している。
腕を組んでいるのは――あの教師。
二人は愛し合っている。間もなく結ばれるのだろう。★

ありす「――（笑）いいわよじゃあ、ベッドルームのカーテンは好きにさせてもらうもん」

と、ありす、ふと前を見て思案気。

男　「どうした？」

★layer:: 08の録音前に、浅田さんにはもう一言付け加えていた。「最後にありすは幸せになるから」

ありす「あの子……」

ありすが見ている先――、玲音が立っていた。

男「知ってる子？」

ありす「なんかあたし……」

ありす、男の腕を解いて、玲音の方へ。

背も高くなっているありす、玲音の目線まで屈み

ありす「こんにちは」

玲音「――こ、こんにちは……」

ありす「前に会ったっけ？　会ったよね？」

玲音「――」

ありす「あ、教育実習で行った学校の子？　あ、でも違うな……。

ええと……」

玲音「――初めまして」

ありす「え……」

玲音「（微笑）初めまして、だよ」★

ありす「――（怪訝）――そう……？　（微笑）初めまして。あ

たしありすっていうの。思いっきりな名前でしょ（苦

笑）恥ずかしいんだけどね。あなたは？」

★ここの香里ちゃんの芝居がまた素晴らしかった……。

玲　音「――レイン」
ありす「――れいん……」
　教師の男も来て
男　「やっぱり知り合い？」
ありす「ううん、勘違いだって。じゃ、さようならレイン。いつかまたどこかで会えるかもね」
　手を振って二人、玲音の前から去っていく。
玲　音「――そう、いつだって会えるよ、ありす……」
　ぎこちなく手を振る玲音。
　雑踏の中に立っている玲音――。
　そして――、雑踏が消えた。
　再び街も消えて――、玲音は独りそこに。

○黒味★

玲　音「（オフ）どこにいたって、どの時間にいたって、あたしがあたしなんだって思えば、それがあたし。玲音は、レイン」
　ぼうっと、画面奥から玲音の顔が浮かぶ。

★この最後の〝ありす〟は私が申し入れてカットした。

★このシーンの終わりまでで、『lain』シリーズは幕を閉じる。コンテの最後の頁には、監督のメモが書き添えられていた。
「みんな、どうもありがとう」

玲音はじっと画面のこちら側を見つめている。

玲　音「人はみんな繋がってる。人の意識が本当にあるところで……。

あたしは、そこにいるの。★

だから――、あたしはどこにだっているの……。

（微笑み）だから――（やや画面に近づいて）、

いっしょにいるんだよ……ずっと……」

微笑んだ目には、すぐに哀しみの色が。

じっと、画面のこちらを見つめ続けるが――

目を伏せる玲音。

そして――溶暗。

長い間の後――

○プレゼント・デイ、プレゼント・タイム★

――の画像、再び流れる。

街の喧騒、会話の輻輳――。

○坂道／黄昏

★このカットの原画は安倍吉俊氏。私の我が侭で、本人と監督、岸田氏に頼み込んで、最終話で1カット、原画を描いて欲しいと希望していた。イラストレーターであり、アニメーションの原画はおろか動画も描いた事もない彼に書かせるのはどちらにも失礼だったとは思うが、デザイン面では力を発揮しつつ、アニメの制作がスタートすると、版権イラスト（ジャケット等）とプレイステーション版の静止画に追われていた安倍君に、玲音というキャラクターのオリジネーターとしてのイコンを、シリーズの画面に残して貰いたいと思ったからだった。演出上、かなりノイズが掛けられてはいるが、独特の線と表情がしっかりアニメーションとして動いている。

★ここ以降のシーンはカットされた。私としても納得している。やるべき事は、この前のところまでで終えている。玲音の行き先は、観ている人の〝記憶〟に委ねられるべきなのだ。これは、そういう物語だった。

坂道の中途で立つ玲音。
坂の頂の方を見ている。
しかしそこに立つ者はもういない。
玲音、振り向く。
いつもの見慣れた、電線が覆う町。
ぶーん、ぶーん……。
風に靡く電線の音――。
玲音、坂を下りていく。
その坂は果てし無く一本の道となって、町を貫いている。
玲音は独りで歩いていく。
しかし、玲音は独りではない。
ぶーん、ぶーん……。
人はみな、繋がっている。

End of Script

13話は、中村監督のコンテも遅れ、作画期間2週間を切るという危機的な状況にあった。しかし完成した作品は御覧の通り、このシリーズを締めるに相応しい仕上がりとなった。(12話には及ばないものの)。

こう注釈を書いていながら、実は未だ私は客観的にシリーズを振り返る事が出来ないでいる。オンエアが始まる二ヶ月程前から、オンエア終了(製作終了が同時)までの数ヶ月間、狂乱の日々だった。映像製作面に関わっていたという事もあるし、アフレコ現場に全部立ち合い、ダイアローグのチェックをしていたというのもある。とにかく、普通のシナリオライターの仕事から逸脱して、これほど深みにはまった作品は初めてだった。

今は、玲音が愛しい。
ありすが愛しい。
その想いだけが重く心に残っている。

serial experiments lain

原案・企画
production 2nd

シリーズ構成・脚本
小中 千昭

オリジナル・キャラクターデザイン
安倍 吉俊

キャラクターデザイン
岸田 隆宏

美術監督
佐藤 勝

美術設定
平沢 晃弘
塩沢 良憲

色彩設定
西表 美智代

撮影監督
安津畑 隆

編集
瀬山 武司

音響監督
鶴岡 陽太

音楽
伸井戸 'CHABO' 麗市
supported by たつのすけ

2nd UNIT MUSIC & SOUND DESIGN
竹本 晃・笠松 広司

オープニングテーマ
「DUVET」／music by BOA
words by Jasmine Rodgers
song by BOA
(POLYSTAR)

エンディングテーマ
「遠い叫び」／伸井戸 'CHABO' 麗市
作詞・作曲　伸井戸 麗市
(東芝EMI)

音楽製作
7th Mother 伊藤 恵美
光遊社
J-WORKS

キャスティング
松岡 超

録音調整
はた しょうじ

音響制作
楽音舎

ビデオ編集
小永 組雄・小林 真理
(アクティブ・シネ・クラブ)
森満 康巳
(SUPLEX INC)

SUBTITLE・PROGRAMMING & CG works
中原 順志・高井 政彦
高橋 吏・山際 浩二
(SR-12W)

グラフィック・オペレーション
杉浦 充
(レアトリック)

メインタイトル・ロゴデザイン
奥田 晶久

デジタル・エフェクト
レアトリック　SR-12W
アクティブ・シネ・クラブ

写真協力
湯川 有人

設定協力
鍵山 仁志

アシスタント・プロデューサー
井出 美恵

設定制作
佐藤 和治

制作デスク
廣川 隆志

番組宣伝
伊藤 淳也

番組担当
岩田 牧子
(テレビ東京)

エグゼクティブ・プロデューサー
真木 太郎
川村 明廣

プロデューサー
ueda yasuyuki
安部 正次郎

監督
中村 隆太郎

アニメーション制作
トライアングルスタッフ

製作協力
GENCO

製作
PIONEER LDC



解説

切通理作（きりどおし りさく）

私が子どもの頃、テレビは一日二時間までと言われ、世間ではその悪影響が取り沙汰された。あんな光る箱に子守りをさせていいのかと。「テレビばかり見ていると…」と、私自身よく言われたものだ。今後、それに代わるものといえば、やはりパソコンということになるだろうか。最近ネットを長時間やればやるほど自閉的になるという統計が新聞に発表された。

テレビドラマやアニメーションの作り手から話を聞くと、一般視聴者のホームページや、ニフティの会議室に寄せられた意見を気にしている人が多いことに気づく。雑誌や書籍に載る批評などよりもずっとだ。何といっても反応が早い。番組が放映された直後、もう書き込みがなされている。作り手からすれば、見たくなるのが人情というものだろう。

一方、そこに口汚く悪口が書いてあったりすると、数日間は立ち直れないという声も耳にする。ある脚本家氏は、結局ニフティにつなぐのをやめてしまったとか。

ネットをやっていると不思議な気分になるのは、書き込みの意見をずっと読んでいくと、だいたいこの声は何％でこういう疑問をもつ人は何％でと、同じラインでつながっている人々の個々の細胞が集まった、一つの全体のように見えるということである。

それを見つめている自分もまた、細胞の一つでしかないという無力感。逆に、自分は一歩距離を置いて全体を眺め得るんだという全能感――神になったような気持――を同時に味わってしまう。

これら書き込みをする人間の多くはハンドルネームであり、実体はわからないのだ。

そんなものに一喜一憂するのはバカらしいと思いつつ、一人ひとりの実体になど意味があるのかとも思ってしまう。

これまで、数々の預言者や人智学者が、アカシックレコードの実在を唱えてきた。宇宙の彼方に、全宇宙の過去から未来までの記録を納めた図書館があり、それは人類の集合的無意識なのだと。

このアカシックレコードを開けば、人類はインターネットを止揚して次の段階へ行けると主張しているホームページは実際に複数存在する。

いろんなホームページを開いていると、そのHP自体の内容よりも、他のサイトへのリンクを重要視しているものが多い。どんどん他へとつながっていくことの快感。でも、何のために？

テレビ東京系の深夜アニメ『ｌａｉｎ』は、同名のゲームソフトとのメディア・ミックスだが、我々の生きるこの現実に迫ったドキュメントになっている。

特別暗いわけではないが、いつも周囲からは一歩はぐれているような中学生の玲音。ある日、自殺した少女からメールが届く。彼女はリアル・ワールドを捨ててワイヤードへと旅立ったのだ。リアル・ワールドとは肉体を持った現実の世界で、ワイヤードとは電脳世界という区別はあるが、実はワイヤードの自分がメタファライズされたものがリアル・ワールドではないのか。

昔、テレビの心霊番組で、肉体は霊魂の入れ物に過ぎず今生きていると思っている現実の自分は、肉体という服を着ている霊なのだという説を聞き、恐れと共にワクワクしたことがある。

そう。これは現代の怪談でもあるのだ。

ワイヤードには神がいることになっている。

神を信じなさいという声を聞く玲音。彼女自身、ワイヤードとリアル・ワールドの区別がつかなくなってくる。

彼女の未来はどうなってしまうのか、我々の現実と同じように目が離せない。

ここまでの文は、『サンデー毎日』誌上で私が連載していたテレビコラム「光る箱」において、当時放映中だった『ｌａｉｎ』に触れた回の全文である。

「光る箱」は、毎週話題になったテレビ番組について語りつつ、テレビというメディアと、視聴者の現実との関わり方に言及しようとしていた連載だった。当時メジャー番組とも言えなかったこの深夜アニメについて、私がぜひ書きたいと思ったのは、コンピュータ・ネットワークを主な題材としていながら、まさにテレビというものの特性に迫ろうとしているという直感を持ったからである。

しかし、その直感がなんであるか、この時はまだ文章にし切れないもどかしさが残った。

その後、すぐ『ｌａｉｎ』の第十二話がオンエアされたのだが、放映の翌日、友人のアニメマニア氏から電話があった。

「君のコラム読んで『ｌａｉｎ』を初めて見てみたんだけど、ちょっと今イチだったな」。

彼の言い分はこうだ。『エヴァンゲリオン』以降、セル画の枚数の少なさを逆手に取り、心理描写に重点を置くこうした作品が出てきたのは好ましいことだが、どこか限界を感じてしまう。このような霊肉二元論では、結局主人公に人間の肉体の温かみを実感させて終わらせるしかない。しかしそれでは、所詮絵で描かれた表現でしかないアニメの空々しさを免れないのではないか。

「まあ次が最終回だっていうから、そこまで見てみなければなんとも言えないけどさ」との一言で電話は切れた。

私はうまく言い返せなかったが、『ｌａｉｎ』がそんな風に終わるわけがないと確信があった。

彼が『ｌａｉｎ』を霊肉二元論だと思ったのは、機械の中で胎児の如く眠る玲音に、ＣＨＡＢＯの『遠い叫び』が被さるエンディング部分で強烈なメッセージ性を感じてしまったからだろう。この世に黙ってオサラバさ。誰の手にも掛からない…。だが番組を虚心坦懐に見ていれば、ワイヤードに関し、とりたててリアル・ワールドと比べての無実性（汚されていない世界という意味の）は描写されてないことがわかる。

逆に、電線が張りめぐらされ、どんな場所でも携帯電話を使って会話できる、この現実世界自体もワイヤード的といえるのだ。

昔、テレビは深夜になると一日の放映を終えた。子どもの頃、夜に目覚めてしまい、居間に行ってテレビを灯けてみると、そこにはザーザーと雨が降っていた。砂嵐の向こうに顔が浮かび上がったなどという噂話が学校で流行ったこともあった。

『ｌａｉｎ』最終回、いつもならオープニングの歌が始まるところで、イキナリザーッと画面が砂嵐になり、その向こうから玲音の顔が映る。

彼女は、見ている私に向かって、テレビから直に話しかけてきた。

その時、ブラウン管の前に座っていたのは私一人だった。しかし、同じ時間にこうしてテレビを見ている他の視聴者は確実に存在するだろう。

多くの個が時間を共有しているとしても、そこに最終的な名宛はない。だが、我々は玲音の痛みを直に感じることが出来たのだ。

メディアミックス時代のアニメであり、ビデオソフト化が前提となっている『ｌａｉｎ』。だからこそ、オンタイムで見る体験が重視されている。同時に、今ここで我々が生きているということを、うまく描けた動画（アニメ）としての絵でしかない「肉体」のみに頼らず示し得ていたともいえるのではないか。

【切通理作】文筆者。六四年生。著書『お前がセカイを殺したいなら』『怪獣使いと少年』ほか。

scenario experiments
lain
the series

1998年12月5日　初版第1刷発行

著　者／小中千昭
発行人／吾郷輝樹
発行所／株式会社ソニー・マガジンズ
〒102-8679　東京都千代田区五番町6-2
電話　03(3234)5811
印刷所／中央精版印刷株式会社

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。
無断転載を禁ず。

©Chiaki J. Konaka
©1998 Triangle staff／PIONEER LDC.

ISBN4-7897-1320-2　Printed in Japan

コネクト・ワイヤード

TVシリーズ全13話を完全収録!!

脚本家自身による
脚注を加え、
立体的によみがえる
現代のお伽話。

『serial experiments lain』初の
公式シナリオ・ブック

小中千昭

ソニー・マガジンズ

serial experiments
lain
©1998 Triangle Staff/PIONEER LDC

カヴァーイラスト:安倍吉俊

進化する
アニメーション
情報誌
エーエックス
AX
毎月10日
発売!!

安倍吉俊×小中千昭による
『serial experiments lain』ビジュアル・ブック
1999年初頭
発売決定!!

serial experiments
lain the series

VIDEO&LD&DVD
『serial experiments lain』(全5巻)lif.03 98/11/25 ON SALE!
¥6,800(税抜)発売元:パイオニアLDC © 1998 Triangle staff / PIONEER LDC

CD
『serial experiments lain』sound track ¥2,913(税抜)
『serial experiments lain』sound track/cyberia mix ¥2,700(税抜)
発売元:パイオニアLDC IN STORE NOW! © 1998 Triangle staff / PIONEER LDC

プレイステーション版ゲームソフト
『serial experiments lain』¥5,800(税抜)
発売元:パイオニアLDC 98/11/26 ON SALE! © 1998 SR-12W / PIONEER LDC

scenario experiments

lain

the series

小中 千昭

chiaki j. konaka



scenario experiments

lain

the series

シナリオエクスペリメンツ レイン

小中 千昭

ソニー・マガジンズ

ISBN4-7897-1320-2

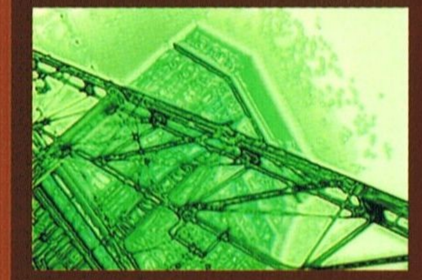
C0076 ¥850E

9784789713207

1920076008504

定価：本体850円＋税

Close the world,.txEn edt neqO



プレゼント・デイ、プレゼント・タイム

夜の街――、人が無言で行き交うにも拘わらず、
無数の喋り声が幅輳している。
ビルとビルの間には無数の電線。
どこもかしこも〝繋がって〟いる。
人は誰しも〝繋がれて〟いる。



cover illustration:yoshitoshi ABe



小中　千昭 chiaki j. konaka

(こなか・ちあき)特殊脚本家。幼少期より映画・TVを問わずファンタジー性の強いドラマに惹かれ自主映画制作を経て映像製作に従事、学生時代より映像ディレクターとなる。フリーになって以降、演出家から脚本家としての活動に移り、ホラー/ファンタジー系を中心にアニメ・特撮等の映像作品で活躍する。今回の『Ｌａｉｎ』ＴＶシリーズ(放映・98)では、シナリオのみならず、7話・9話などの実写加工の映像パートの制作にも参加した。アニメ関連の著書では、ほかに『魔法使いＴａｉ！』(放映・96)の小説版(富士見ファンタジア文庫)など。



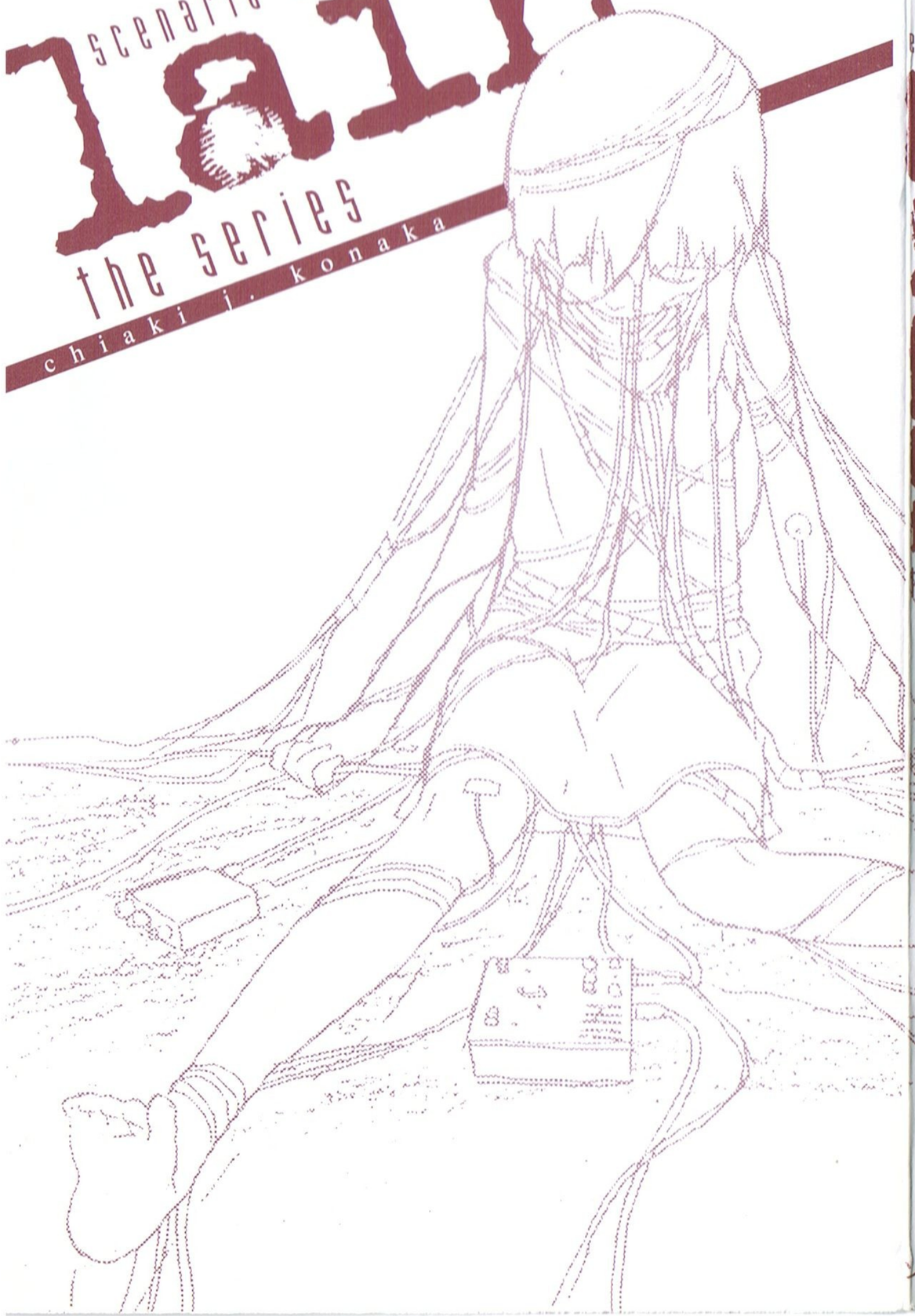
『serial experiments lain』
©1998 Triangle Staff/PIONEER LDC

scenario experiments

lain

the series

chiaki j. konaka



scenario experiments

lain

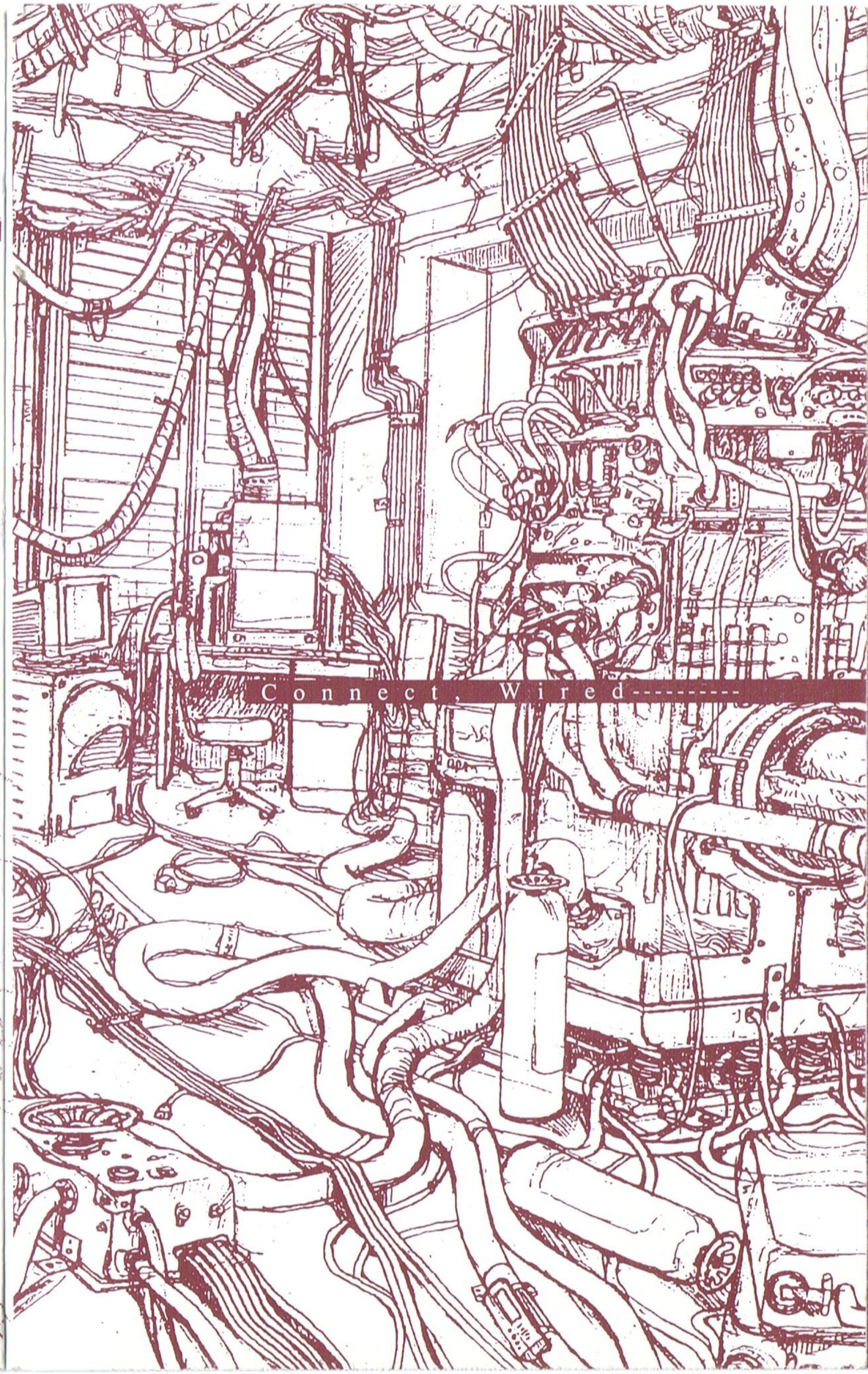
the series

シナリオエクスペリメンツ

レイン

小中千昭

ソニー・マガジンズ



Open the Next. Close the world.txt

scenario experiments

lain

the series

lain

lain

Open the Next. Close the world.txt

Character File

scenario experiments

lain

the series

岩倉玲音（14）

いわくら・れいん／本編の主人公。
鴎華学園中等部に通う内気な少女



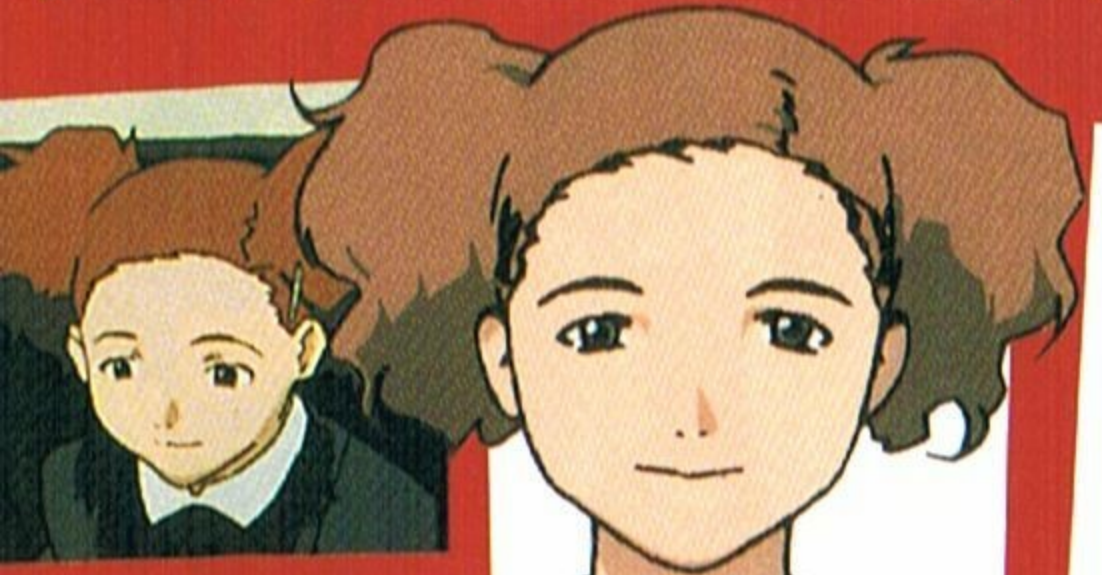




山　本　麗　華(14)

れいか／クラスメイト







加　藤　樹　莉(14)

じゅり／クラスメイト





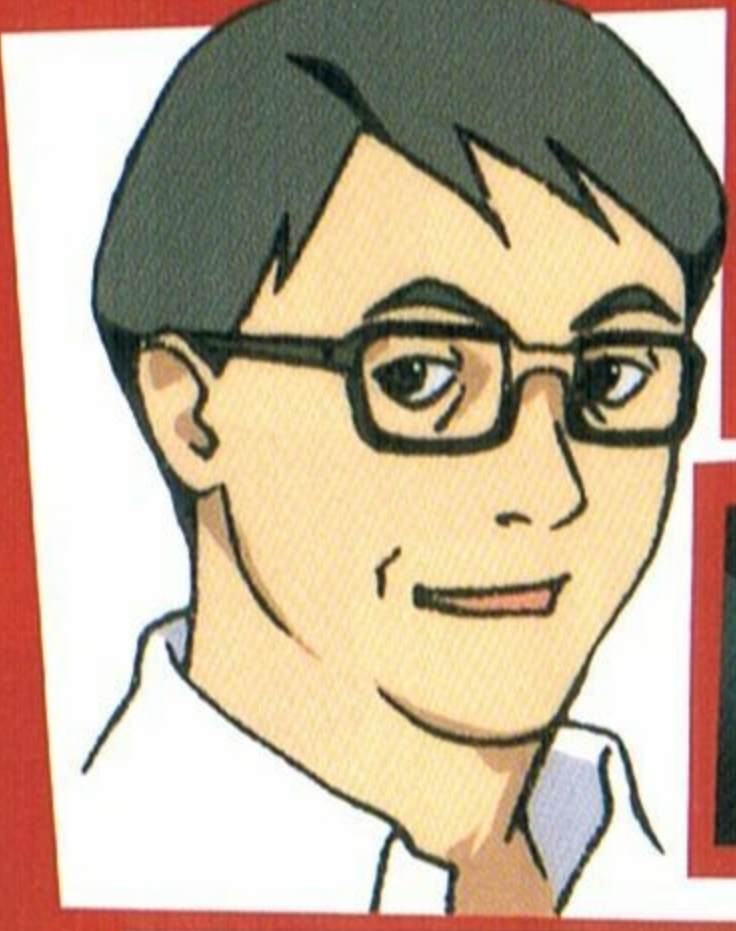




瑞　城　あ　り　す(14)

みずき・ありす／玲音を気に掛けているクラスメイト





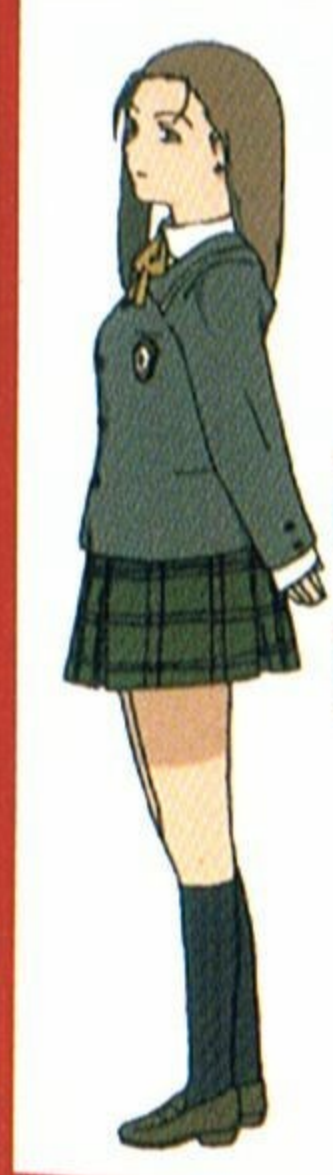




岩　倉　康　雄(45)

玲音の父親。サラリーマン











岩　倉　美　香(16)

玲音の姉。高等部に通う







岩　倉　美　穂(38)

玲音の母親



M I B

謎の黒服の男たち

カール・ハウスホッファ（35）

林随錫（32）

ミューミュー（10）

マサユキ（11）

タロウ（11）

キッズ

サイベリアに通う小学生

scenario experiments

lain

the series

英利政美（30）

えいり・まさみ／デウス

サイベリアの少年

"アクセラ" を服用する

千砂

ちさ／自殺した同級生

①ナイツ

エリート商社マン

②ナイツ

小学生の子を持つ若妻

③ナイツ

フリーター

JJ

ネットカフェ&クラブ
"サイベリア" のDJ



黒　澤

橘総研に属する男



ホジソン教授

KIDSシステムの考案者

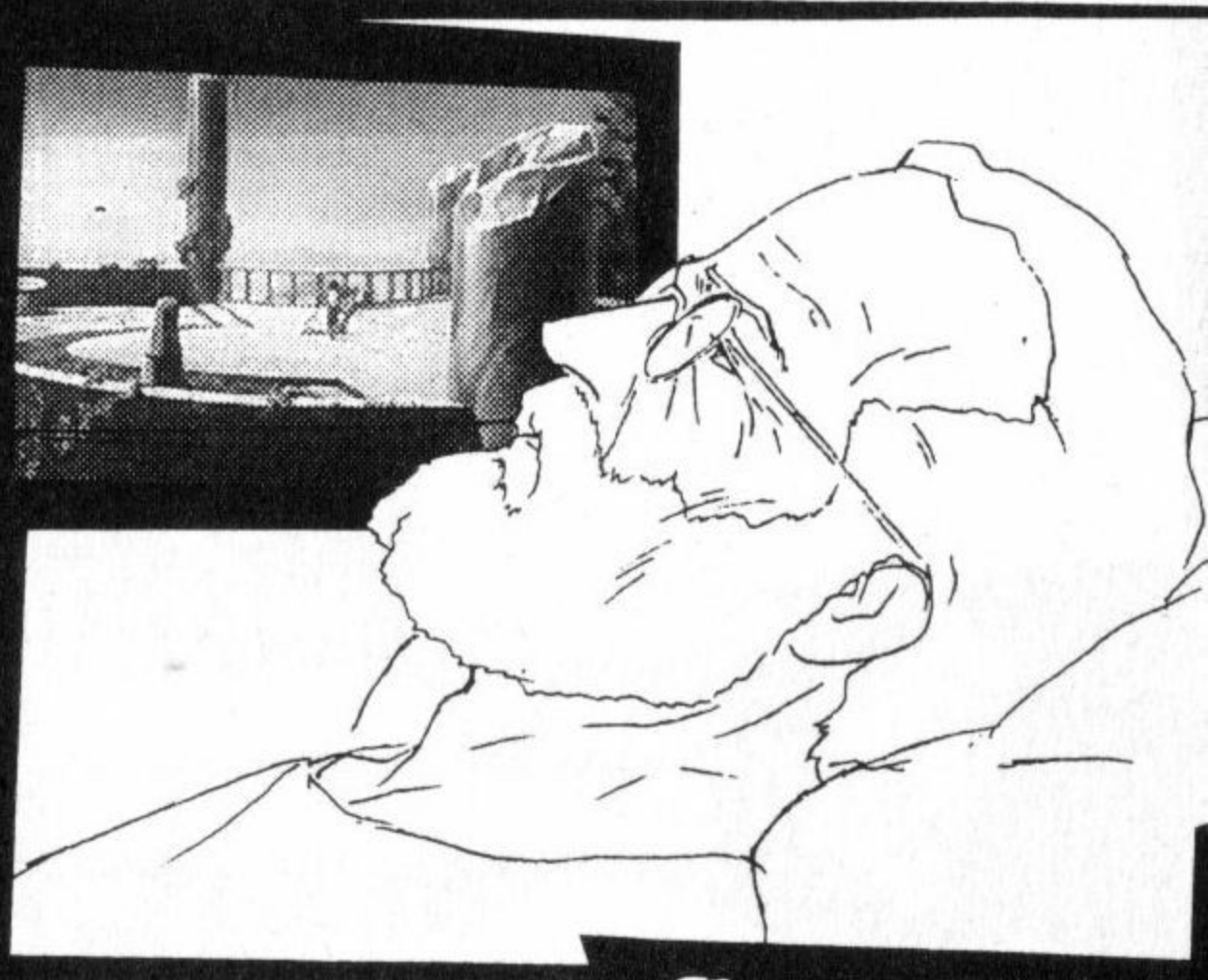


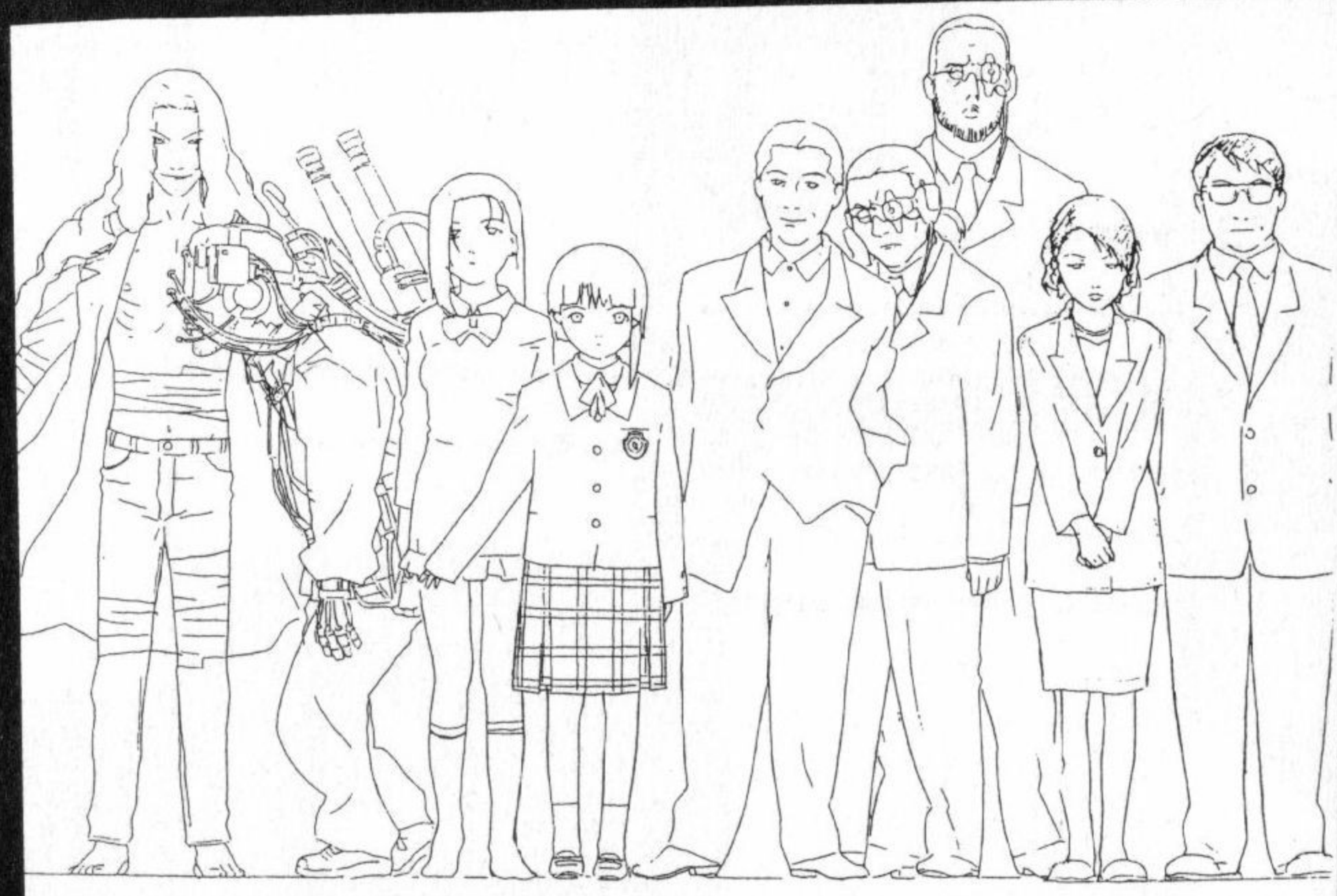




ね　ず　み

ナイツに接近したハッカー





人　物　対　比　図

scenario experiments

lain

the series

小中 千昭
chiaki j.konaka

scenario experiments

lain

the series

from
『serial experiments lain』
the TV series

contents

layer : 01 WEIRD ····· 5
layer : 02 GIRLS ····· 29
layer : 03 PSYCHE ····· 55
layer : 04 RELIGION ····· 83
layer : 05 DISTORTION ····· 107
layer : 06 KIDS ····· 131
layer : 07 SOCIETY ····· 157
layer : 08 RUMORS ····· 183
layer : 09 PROTOCOL ····· 209
layer : 10 LOVE ····· 233
layer : 11 INFORNOGRAPHY ····· 259
layer : 12 LANDSCAPE ····· 283
layer : 13 EGO ····· 309
解説 切通理作 ····· 332

本文・脚注 小中千昭

カヴァーイラスト 安倍吉俊（オリジナルキャラクターデザイン）
表紙原画 lain…岸田隆宏（TV版キャラクターデザイン）／NAVI…安倍吉俊
ブック・デザイン 土井敦史（バナナグロープスタジオ）
協力 トライアングルスタッフ／パイオニアLDC

layer:01

CAST

岩倉 玲音	清水 香里
岩倉 康雄	大林 隆之介
岩倉 美穂	五十嵐 麗
岩倉 美香	川澄 綾子
瑞城 ありす	浅田 葉子
山本 麗華	手塚 ちはる
加藤 樹莉	水野 愛日
四方田 千砂	武藤 寿美
吉井 恵子	根谷 美智子
アベックの中年男	山野井 仁
アベックの若い女	出口 佳代
おやじ	堀川 仁
少女の声	川喜 多美子
S	栗原 みきこ
男	八戸 優
DJ	アリ 森泉

STAFF

絵コンテ	中村 隆太郎
演出	中村 隆太郎
作画監督	関口 雅浩
画面設計	岸田 隆宏
原画	大関 紀子
	古川 達也
	松尾 裕子
	高崎 由利
	千島 知明
	えんどう 麻未
色指定	平出涼子
制作進行	下井 美奈子
背景	スタジオ美峰
	大橋 由佳
	河野 百合香
	島田 雄司
	保木 いずみ
	片岡 奈美
	根崎 知恵子
	井芹 達朗
	小泉 荘平
	伊藤 聖
	京田 邦晴



○プレゼント・デイ、プレゼント・タイム★

夜の街――、人が無言で行き交うにも拘わらず、無数の喋り声が輻輳★している。

わあああんんんんん

ビルとビルの間には無数の電線。

一九二〇年代までのニューヨークがまさにこうだった。地下埋設工事が行われるまでは。

その中で漏れ聞こえる声――

若い女「(オフ／囁き) どうして来ないの？　こっちに来ればいいのに」

○渋谷／センター街

深夜で店は殆ど閉まっているものの、人の通りは未だ多い。

ふらふらとした足取りで少女が歩いている。

汚れた制服は私立の中学校のもの。流行りな感じでは無く、古めかしいデザイン。

クラブとクラブを移動中の着飾った少女達が、その

★本来はイメージ的な、シーンの〝柱〟（シーン名）を、中村監督はアバン・タイトルにてテキストにして出すばかりか、外国人俳優により声としても聞かせる演出をしている。

★輻輳（ふくそう）
方々から一斉に集まるというのが本来の意味だが、天災時など電話網がパンクした状態に用いられる。

子の風体を見てゲタゲタと指差して笑う。

○白地にビットマップフォント★

S「――どうしてそうしなきゃいけないかは、自分で考えなくてはいけないこと」

○ビルの屋上

雑居ビルの屋上。ラヴホテルのネオンが眼下にひしめく様に瞬いている。

風に髪をなびかせ、無表情に手すりから真下を覗き見る少女。

疎らにアベックが歩いている。

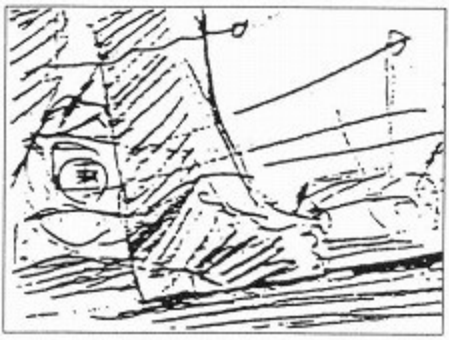
少女、顔を空に向け、声を出さず何か言葉を言う。

そして――微笑み――

○白地にビットマップフォント

S「あたしは、こんなところにいなくてもいいの」

★初期話数では、情報をテキスト文字として画面にそのまま出すというシーンを意図的に多く書いている。物語が進むに連れコミュニケーションの方法も変質していくという狙いだったが、最終話近くまでこのスタイルは貫く事になった。「白地」ではなく色鮮やかなイメージはレアトリックの担当。



○路地

アベックが歩いているすぐ背後に、黒い影が落下したかと思うと、ドンという音。
驚いて振り向く二人。

血が流れていく。
ネオンの光を浴びて、赤や青や緑……。
その血は坂を一筋の流れを作り、流れ落ちていく。

○住宅地／翌朝

朝の早い時間。
人の歩く姿も殆ど見られない。
しかし、喋り声の輻輳はここでも起こっている。
路地と路地、屋根と屋根、電柱と電柱——。
空には常に、鈍色に光るワイヤーが。
〝スキャナー★〟がドラッグが切れた状態の様に、脳の中に直接〝声〟が流れ込んでくる感覚。
意味の無い言葉の繋がり。

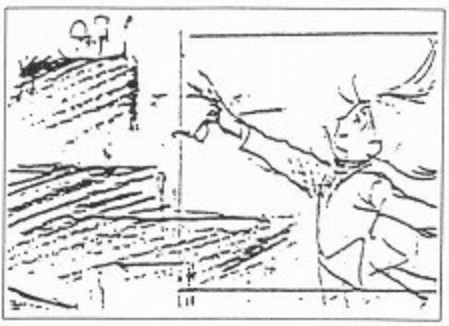
★スキャナー
ジョン・クローネンバーグが撮った映画『スキャナーズ』に於いて、テレパス能力者をこう呼称していた事に依る。テレパス機能抑止薬が切れた主人公の頭に流れ込む会話がイメージにあり、こう書いたのだが、監督にも特に説明はしていなかった。「Layer: 01」が完成した時、あまりにもその音響効果が近かったので驚き、後に音イメージ担当の笠松広司氏（このシリーズ音響面の大きな力となった）に訊ねたところ、「偶然です」。

★そう、これより始まる物語は、ネットワークやコミュニケーションを〝言葉〟として象徴させる。
ここは現実の現代が、少しだけ歪んだ世界。
しかしこれは、現実の現代と遊離したものではない。

○白地にビットマップフォント
S「こんなところにいたら、いつまでも繋がる事なんて――」

○私鉄車内
郊外へ下る電車。さして混んではいないが、玲音は立ってドアにもたれている。
微かに窓ガラスに映る自分の制服姿。
小首をやや傾けて、その奇異さを感じている玲音。
モゴモゴとしたトーンで、会話の輻輳が聞こえている。玲音、背後を見る。
吊り革に摑まる者、座って新聞を読む者――。
誰も口を開いていない。しかしモゴモゴとしたトー

★普通、こういう事はシナリオには書かない。



ンの喋り声は玲音に聞こえ続けている。

玲　音「――（ポツリと）うるさいな……」

誰も反応しない。

玲　音「――（やや声を張って）黙ってられないの……？」

近くの数人が玲音を見つめる。

玲音はじっと窓外を見ているばかり。

座っていた男、機嫌悪そうに目を新聞に戻す。

玲音、ふと見上げる。

ゆるやかに動いて見える、隣の線路の送電線。

○住宅街を走る線路

パンタグラフが送電線を擦りながら、電車が高架の上を走り抜けていく。

送電線は無数の電線と繋がり――

○鷗華学園

中学から短大まである女子学園★。

登校する生徒達の中に、玲音がいる。

★鷗華学園は女子学園であると明記し、美術やキャラクターも設定されているが、layer：04 にて男子学生

他の生徒よりやや幼い感じ。
玲音、ふと、立ち止まって小首を傾げる。
歩いていた生徒達の姿がかき消え、無人の校庭になっている。
しかし、生徒達の会話は聞こえ続けている。
わーん……。それらがコンクリートの校舎に反響して玲音を包み込んでいく。
次に玲音が自我を取り戻した時、風景は元に戻っていた。

○白地にビットマップフォント
S「みんな早く」

○二年B組／教室
玲音が入ってくると、生徒達が幾つかのグループを作り、ヒソヒソと話をしていた。
玲音、構わず自席へ向かう。
鞄を机の上に置いて教科書を出していると——



がいるという台詞があり、これは私のミス。

突如少女が泣きだす。
玲音、振り向くと、樹莉という生徒が机に伏して泣いていた。
玲　音「？」
★樹莉の周りにはありすと麗華がなぐさめる様に囲んでいる。
ありす「樹莉、気にしないほうがいいって」
麗　華「そうだよ。いたずらに決まってるってば」
玲音、じっと見ていたがやがて関心を失い、前を向いてノートを開こうとすると――
ありす「（オフ）玲音」
見上げる玲音。ありすが覗き込んでいた。
玲　音「なに」
ありす「あんたんとこには来なかった？」
玲　音「何が」
ありす「メール」
玲　音「メール……？」
ありす「（やや苛立たし気）四方田千砂からのメール」★

★ありす／樹莉／麗華
私の脚本作品では幾度か登場した名前のキャラクターで、初出は『学校の怪談／絶叫ハイスクール』（関西テレビ'94）。プレイステーション・ゲーム『ありす in サイバーランド』（96）のヒロイン三人もまたこの名前だった（麗華は麗奈になっている）。『lain』の〝ありす〟は、私の強い希望で『～サイバーランド』の〝ありす〟を演じた浅田葉子さんをキャスティングして貰った。ネットワークを題材としているところから、私自身の生理として、『～サイバーランド』と『lain』は切り離せなかったのが理由なのだが、このlayerを書いている段階では、ありす達はあくまで玲音の学友程度の想定で登場させていた。

★四方田千砂
私が脚本、弟の和哉が監督で、静岡

玲　音「（俯き）あたし――、苦手だから……」
ありす「（嘆息）メールくらい毎日チェックしなさいよ。まあいいけどさ……」
麗　華「（来て）玲音は子どもだからねー」
玲　音「何で――、（樹莉を見て）泣いているの？」
麗　華「だから、四方田千砂からメールが来ちゃったからじゃないよ」
玲　音「千砂、って……」
麗　華「D組の子。先週、渋谷で飛び下り自殺したの、先生も言ってたでしょーが」
玲　音「――」
ありす「樹莉だけじゃないの。今週入ってから何人にもメールが来るのよ……」
玲　音「――だって――」
ありす「そ。死んだ子からメールが来る筈がない。でも来る……」

玲音、思案気――。

黒板に黙々とC言語★の構文を書いている教師。

放送でオンエアした深夜ドラマ・シリーズ『Alice SI』('95)の登場人物の一人として創ったキャラクターの名前。『Alice SI』の千砂は、シリーズの一話目で失踪してしまう〝6人目のアリス〟だった。

★C言語
コンピュータのプログラミングに用いる人工言語。

生徒達は黙々とそれを引き写している。
玲音にはやや難解であるらしい。必死に理解をしようと黒板を見つめるが、無意味な文字の羅列に見えて仕方がない。
小さく嘆息し、目を自分の手元に移す。
シャーペンを握っていた自分の右手。
ペンを落とし、掌を広げる。
まだ子どもっぽい指先。その一本一本から、エクトプラズム★の如きものが、しかし赤黒いそれがすっと延びだして虚空に漂い始めていく。
玲音はそれをじっと見つめ続けている。

○白地にビットマップフォント

S「死ぬ時？　痛かったよ（笑）」

○住宅街／午後

わあああんんんんんんん

会話の輻輳。

★これは神経症に於ける幻視の典型的なものの一つ。玲音が特に病んでいるのではなく、それがあたかも自然である様な空気を描きたかったのだが、実際どういう画面になるのかは想像がつかなかった。
layer:: 01 は、アニメーション・キャラクター・デザイン岸田隆宏氏が全カットのレイアウト（画面設計／原画・背景の元になるもの。実写映画で言えばキャメラのフレーミングに近い）を描かれているが、このシーンのレイアウトだけで一ヶ月半が費やされている。
余談ながら、『lain』1話のレイアウトはアニメーターの間で極めて高い評価を得、このコピーが幾つかのアニメ・スタジオに流通していたらしい。

風にびゅんびゅんと音を立てる送電線。
坂道。★
坂の多い町。
ゆっくりとその坂を登っていく玲音。
彼女の自宅はその頂にある。
『岩倉』の表札。まだ建って間もないモダンな住宅。
玲音、鍵を開けて中へ。

○岩倉家／ダイニング

玄関から階段に向かって歩く玲音。
この時間には誰もいないらしい。

○玲音の部屋

入ってくる玲音。
子どもっぽい色彩の壁紙。しかし物はあまり無く、ガランとしている。
鞄を床に置いて机に近づく。
そこには、子ども用のNAVI★（ネットワーク・コ

★坂道が多い町、というのは、テレビシリーズに先行して製作されたプレイステーション・ソフト版のアニメーション部分（監督・えんどうてつや氏／キャラクターデザイン・坪和等氏）で書いたシナリオからそのままイメージを引き継いだもの。

★NAVI
いわゆるパソコン、携帯端末などを総称したものとして用いている語。初出は『アミテージ・ザ・サード』('95)というOVAシリーズで、以降

ンピュータ端末。卓上型・携帯型共にある。玲音の最初の端末は極めて機能が低く、モニタも液晶）が隅に寄せて置かれていた。
じっと見つめる玲音。

セーターに袖を通しながら、再び机に近づいてくる玲音。
ＮＡＶＩの操作パネルを机の中央に持ってきて――
起動キー★を押す。
Ｓ「Login」
Ｓ「Who?」
玲音、おぼつかない手でキーを打つ。
Ｓ「lain」
玲　音「れ・い・ん」
声に合わせ波形が表示され――
Ｓ「Accept」
Ｓ「You have mail」
玲　音「誰から?」

私が書く近未来物でそういったアイテムを出す場合はほぼ統一呼称している。語源は、アラン・ケイの理念を受けApple Computerが提唱した概念 Knowledge Navigatorから。
このシーンに登場する児童用ＮＡＶＩは、オリジナル・キャラクター・デザイナーであり、全てのｌａｉｎプロジェクトのキー・ヴィジュアルを握った安倍吉俊氏がデザインしたもの。CADで使うプロッタの様なポインティング・デヴァイスが特徴的。

★ここで立ち上がるオペレーティング・システムCOSは、以降テレビシリーズに登場する全てのＮＡＶＩのインターフェイスをデザイン・製作した中原順志氏によるもの。中原氏はプレイステーション版『ｌａｉｎ』のディレクターであり、本来はプログラマ。シリーズ中盤以降は、オンエアに追われての大変な作業となったが、ここで登場するCOSはかなりの時間を掛けてデザインされ、

ややあって――

S「四方田千砂」

玲音「――」

S「Read?」

玲音、エンターキーを押す。

白地の画面に文字が打ち出されていく。

S★「こんにちは。元気?」

玲音「――」

S「玲音とは一度だけ、一緒に帰った事あったよね。覚えてる?」

玲音、小さくこくりと頷く。

S「あたしはただ肉体を捨てただけ。あたしはこうしてまだ生きてるって証明できるの」

玲音「――」

S「それを教えたくて、玲音にこのメールを送ってるの。判る?」

玲音「――」

S「今判らなくてもいい。きっとすぐに判る様にな

Macintosh上でAfterEffectsというアプリケーションを駆使して創られた。

★S
このSは、〝スーパー・インポーズ〟の略で、シナリオでは単に文字で出すという通常のシナリオ作法として書いている。中村監督はこれを、合成音声によるヴォイス・ナヴィゲーション・システムとして演出し、全てが台詞として発語された。故にエンド・クレジットに〝S〟というキャラクターが表記されている。

るから。みんなだって……」

玲　音「どうして――死んだの？」

S「誰かのいたずらメールだとかって、学校では噂になってるそうだけど、そうじゃないって事を玲音には判って貰いたいの」

玲　音「どうして自分で死んじゃったの？」

まるで会話をしているかの様。しかし――

S「ここには神様がいるの」

玲　音「――」

もう文字は何も語ろうとしていなかった。

玲　音「――」

○ダイニング／夕刻

母親、姉と玲音が食事をしている。

誰も見ていないテレビが無意味な情報を垂れ流し続けている。音は消されており、食器の触れる音、食物を嚥下する音ばかりが肥大して聞こえる。

玲音は自分の前の皿に載ったものが、とても食べ物

に見えず困っている。
母親も姉も玲音には全く関心を払っていないらしい。
姉の美香、半分以上残して席を立つ。

美　香「昼が遅くってさ。ごちそうさま」
玲音は食べるのが遅いらしい。
スプーンを動かすのをやめ――、母親を見て

玲　音「――ママ？」
美　穂「何？」
玲　音「（極く小さな声）メールが来たの……」
美穂、玲音に目を向けず。
玲　音「――先週自殺した子から」
美　穂「――」
二人、食事を続ける。

○玲音の部屋

ＮＡＶＩの画面が点っぱなしになっている。
しかし単に緑色の待機状態になっているばかり。
玲音はベッドに寄り掛かり、独りぼーっとしている。



と、外で車が止まる音。
玲音、窓に近づく。
タクシーから父親が下りるところが見える。

○父の部屋

着替えもせず、父の康雄は自作の端末に買ってきたパーツを接続しているところ。
ハッキーな性分らしく、かなり手の込んだシステムになっている。
と、ドアが薄く開き、玲音★が半分顔を覗かせる。
康雄、気づき——

康雄「——玲音、どうした?」
玲音、おずおずと部屋に入ってくる。
玲音「——」
康雄「玲音がこの部屋に入るの、珍しいな」
玲音「——あたしの、NAVI——、新しいのに——」
康雄「(破顔)やっと興味が出てきたかのかい。だから言ってただろう?」

★完成作品のこのシーンで、玲音は〝くま〟の着ぐるみの様なパジャマを着ている。
岸田隆宏氏が最初にこのデザイン・ラフ画を描いてきた時、私はやや抵抗感を抱いた。というのは、〝くま〟というのは私や弟の一種のトレードマークの様な存在で、『くまちゃん』という映画も製作していたからだ。
私が脚本ということで、そこまでイコンの様に〝くま〟印を出してしまうのは、監督や岸田氏にとっても損なのではないか、と考えた。しかし、中村監督は、何故岸田氏がそういう衣装案を描いたかを解釈し、私やプロデューサーに説明をしてくれて、納得したのだった。
玲音がくまパジャマを着るのは、家族と対峙する時、或いは外界からの干渉を絶つ時——という演出がここで生まれた。

言いながら、筐体を開いた基盤に新しいキャッシュカードを差し入れる作業をしている康雄。

玲音、その手元をじっと見つめている。

康雄「中学生になったんだから、もっといいマシンを使いなさいって。友達に遅れちゃうだろ？」

玲音「――」

康雄「この世界はね玲音。リアル・ワールドでもワイヤードでも、人間はみんなが繋がって、それで社会が動いている。玲音の様な子でも、すぐに友達が出来るんだって。怖がる事なんて全然ないんだよ。そこら辺のところがママには理解出来ないんだな……」

玲音「――（儚い声）怖くなんか――ないよあたし」

康雄「――（玲音に向き）でも、どうして急にそんな事を言い出したのかな？」

玲音「――会いたい友達がいるの」

康雄「――」

組み上がったマシンに灯が入る。

★キャッシュ
Cache現金の事ではなく、CPUに最も近いところで動作するメモリの事。しかし実際の画面ではPCI拡張カードが描かれていた。斯様に、この作品のNAVIは'98年現在のパソコン、及びその周辺機器そのものが描かれている。フィクションなのは、その機能と動作速度。

★リアル・ワールド
Real Worldネットワークと相対した意味での現実世界。

★ワイヤード
Wired このシリーズに於けるネットワークの総称。アメリカではインターネットをこう呼ぶケースもあるが、このシリーズに於ける用い方は〝繋ぐもの〟というニュアンスを強める意図で選んでいる。

大規模なＮＡＶＩの前に、安楽椅子で座る康雄。
じっと部屋の隅で見つめる玲音。
シュウンンンンンン
★ペルチェ・クーラーのファン音が低くこもる。
康雄の前に仮想ウィンドウが次々に開いて、★ＣＵメールの交換が始まる。
顔の無い人の形。それがウィンドウに一人ずつ。
声も出さずに会話をしているかの様な康雄。
時間差のある★ｂｂｓボードでも、仮想リアルタイムモードにより、あたかもシンクロ・ミーティングの様に会話が成立する。それを複数こなしている康雄。
まるで――、まるで異界にだけ魂が飛んでいる様。
肉体の康雄はアルカイックな笑みを浮かべ微動だにしない。
その相貌をじっと見つめ続ける玲音――。

○私鉄車内／翌日朝

また同じ様にドアにもたれ、ぼんやりと外を流れる

★ペルチェ・クーラー
ペルチェ素子という、電流を通すと熱を吸収するものを利用した、集積回路冷却装置。実際にはこれのファン音は筐体の外には聞こえない。

★実際の画面では、大型ＣＲＴモニタが六台並べられ、マルチ・ウィンドウＯＳが起動するという描写となった。この０Ｓのインターフェイスも中原順志氏の力作。

★ＣＵメール
動画を伴う音声メール、という意味で『～サイバーランド』で造った言葉。〝ＣＵ〟はＳｅｅ Ｙｏｕの意味で、暫く前に流行ったテレビ電話風チャットの名前をもじっている。

★ｂｂｓボード
ネット上のテキスト・ベースによるコミュニケーション形態。掲示板と称される事が多い。

景色を見つめている玲音。
キキキキキキキキキキ
急ブレーキ。どよめく車内。玲音、手すりに摑まろうとして——届かず、床に転げる。
会話の輻輳が高まる。
膝の痛みを堪えながら立ち上がる玲音。
と、車内アナウンスの声。

車掌「皆様お急ぎのところ申し訳ございません。只今この車両は事故の為停車中です——」

新聞を手にしていた男——

男「人はねたんじゃないのか？」

ざわめく室内。
玲音、窓外を見る。

玲音「！」

隣の線路の上の送電線、何か液体が伝って流れている。ポタポタと地面に雫を落として。
玲音、線路を見下ろす。
それは——血。ポタポタと送電線を伝って血が流れ



ていた――。

玲音「――」

○抽象的イメエジ

街の中にいる玲音。
否、それは学校の中かもしれない。
あるいは、家の中――。
どこにいても玲音は一人。
その周囲に居る者は、全てただの他者でしかない。
人間ですらないかの様な感触。
ずっと玲音はそれで構わないと思っていた。
しかし――

○線路

白く靄が掛かった様な世界。
玲音はぽつりと鞄も持たず線路の上に立っている。
何故自分がここにいるのか判らない。
ふと見ると、前方に人がいる。

他校の女子生徒の様だ。
玲音、怪訝そうに少女を見つめる。
少女は髪のせいで表情が見えない。
あの飛び下りた少女の様に、ふらふらとした足取りで線路の中央に立つ。

玲音「！」

遙か彼方から、ライトを点灯させて電車が走ってくるのが見える。
少女はそれを待ち構える様に、しかし何の決意もしてなそうなポーズで立つ。

玲音「――!!」

玲音は叫んだ。しかし声が出ていない。
それだのに、少女の耳にはそれが届いたらしい。
少女が玲音に振り向く。

玲音「！（恐怖）」

少女の顔は、まるで曇り硝子の向こうの様にぼやけていた。
その背後から光が迫り――



あっけない程、少女の躰を車輪下に巻き込み、玲音に向かって迫る!!

玲　音「!!（悲鳴を上げる顔）」

○2年B組教室

ハッと我に帰る玲音。

自席にきちんと座っていた。

見回すと、他の生徒達は皆黒板を見ながらノートに書き写している。

担任の声「岩倉さん」

玲音、ハッとなって前を見る。

未だ若い、スーツ姿の女の教師★が固い顔で玲音を見つめていた。

玲　音「（か細い声）はい……」

恵　子「ここ、テストに出るわよ」

玲　音「――」

玲音、唇を噛み、シャーペンを手にとって黒板を見る。

★女の教師
この話数を書いた時点では、このキャラクターをもっとフィーチャーする腹案があったので、吉井恵子という名前を与えているが、結局は背景的な存在で終わってしまった。

玲音「――」

暗い緑色の黒板に無秩序に書かれた文字が――蠢いている。

玲音「――」

やがてその文字は、玲音の子ども用ＮＡＶＩのモニタと同じ書体の文字になって――

Ｓ「早くワイヤードに来て」

玲音「――」

もう文字は元の恵子の書いた英文に戻っている。

○住宅街

無数の針金が空を覆う、いつもの町の風景。

坂を登っていく玲音。

誰も他に人はいない――筈だが、誰かとすれ違った気がしてふと振り向く玲音。

玲音「――」

白い顔をした千砂が、力無いポーズで立って玲音を見ていた。



玲　音「――千砂、ちゃん……？」

千砂、微笑む。

玲　音「――そこは、どこ？」

千砂の顔が――徐々に白く消えて――

玲　音「――（か細い声）待ってよ」

もう、その場所に人の姿など無かった。

立ち尽くす玲音。★

To Be Continued...

★このラストショットは、レアトリックがレンダリングを吐き出すのに一日半掛かったという大労作。最初の玲音のサイズから、あの異常な広角画面まで1カットで引いている。何気ないかもしれないが、通常のセルやフィルムだけでは創り得ないデジタルならではのショット。

layer:02

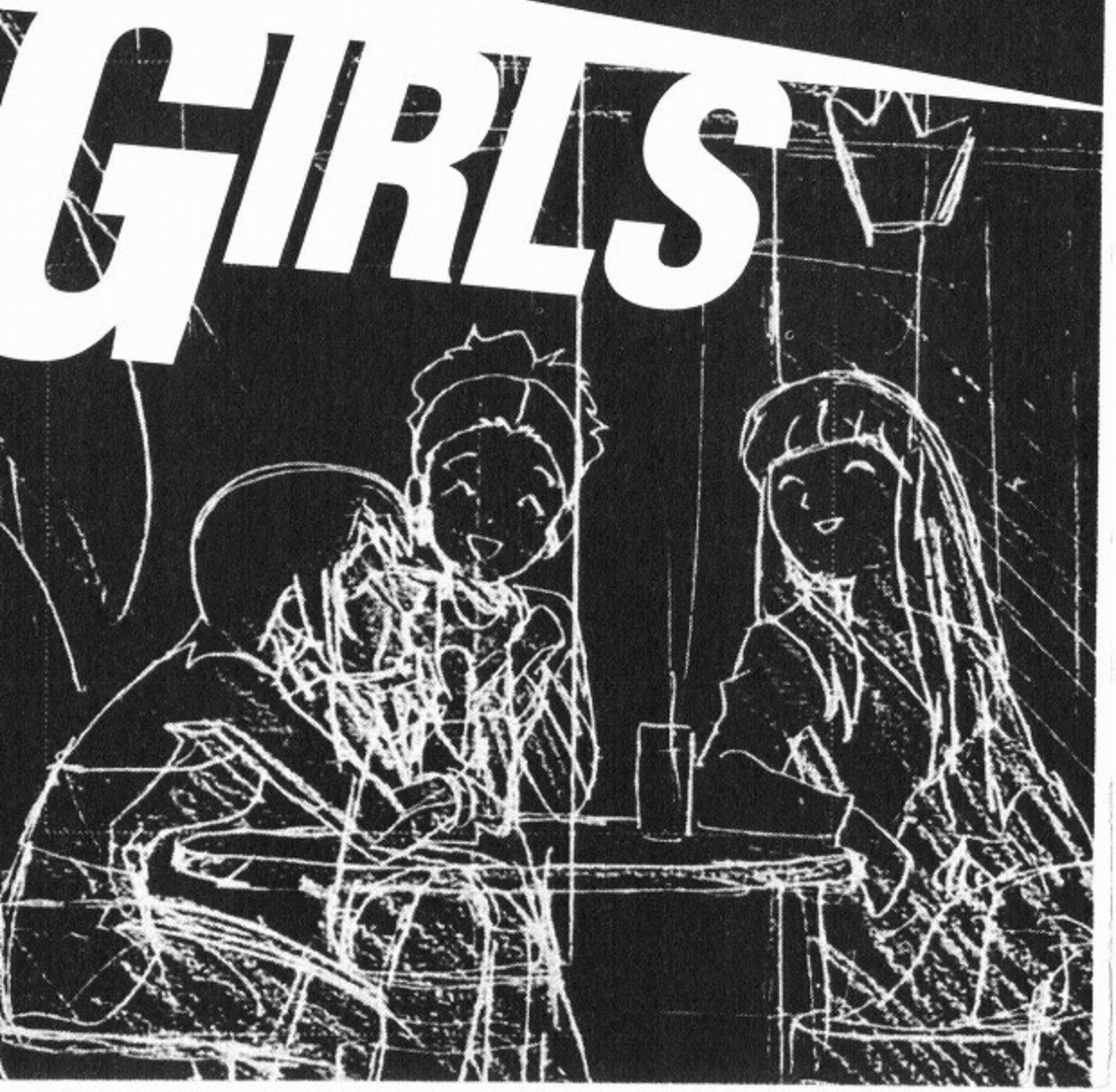
GIRLS

CAST

岩倉 玲音	清水 香里
岩倉 康雄	大林 隆之介
岩倉 美穂	五十嵐 麗
岩倉 美香	川澄 綾子
瑞城 ありす	浅田 葉子
山本 麗華	手塚 ちはる
加藤 樹莉	水野 愛日
四方田 千砂	武藤 寿美
少 年	小宮 悟史
タロウ	滝本 啓人
ミューミュー	山本 有紀
マサユキ	藤間 宇宙
若い女の声	佐藤 美佳子
S	吉岡 久仁子
男の声	伊藤 英敏
運送屋のバイト	千葉 進歩
DJ	アリ 森泉

STAFF

絵コンテ	中村 隆太郎
演出	中村 隆太郎
作画監督	菅井 嘉浩
画面設計	柳野 龍男
	関口 雅浩
	菅井 嘉浩
原画	安藤 正浩
	後藤 有宏
	三宅 雄一郎
	中谷 マリ
	後藤 隆宏
	千島 知明
色指定	ますだ よしまさ
制作進行	鈴木 眞砂弥
背景	猿プロダクション
	本田 修
	小杉 光芳
	本田 利恵
	真悠 峻大



○プレゼント・デイ、プレゼント・タイム

夜の街――、人が無言で行き交うにも拘わらず、無数の喋り声が輻輳している。
わあああああんんんんんん
ビルとビルの間には無数の電線。
その中から漏れ聞こえる声――
若い女「(★オフ／囁き)――何を怖がっているの？　ちょっと試してみるだけでいいのに――」
どこもかしこも〝繋がって〟いる。
人は誰しも、〝繋がれて〟いる。

○クラブ・サ★イベリア

インダストリアル・パンクが無機的な超低周波で暗い穴蔵の中を揺さぶる。
ひしめく人の顔すらも判然としない程暗い。
夜行性の生き物達。
着飾る者、そうでない者。

★中村隆太郎監督は、シナリオが4話まで進行したところで参加された。そこまで出来ていたシナリオに、殆ど直しの注文は出さなかったが、このアバンタイトルに不特定な女性の語りかける声を入れるというのをフォーマットにしたいという意向を出された。

★サイベリア
このクラブの名前は、layer:: 09でもその名が登場するダグラス・ラシュコフの著書から引用したもの。サイバーカルチャーを論じた同名書は大森望氏の翻訳で出版されている(アスキー出版局)。

○白地にビットマップフォント

S「サイベリア？　別に来たくて来てるんじゃない」

○クラブ・サイベリア

★ヒュプノウシスへ誘う様な明滅するライティング。ガスマスクを被り、★PVCヴィニルのメイド衣装を着た★ハウス・ミストレスがドリンク・ボトルをトレイに載せて、踊るでもなく立って話している客の間を巧みにすり抜けて歩く。

隅のテーブルに座っていた中学生くらいの少年の前にドリンク瓶を置くハウス・ミストレス。

少年、防毒ガスの顔を見上げる。

と、女、ボトル底に小さく畳んだ紙片をそっと差し入れる。

少年はポケットからくしゃくしゃになった一万円札をその脇に放る。

ハウス・ミストレス、それを胸元に仕舞い、再び雑踏の中へ消えていく。

★ヒュプノウシス
hypnosis 催眠状態

★PVCヴィニル
ラバーと並ぶフェティッシュな衣装の定番素材。光沢のある伸縮性の無い生地。

★ハウスミストレス
コスチュームを着た、演劇的存在としての、ウエイトレスという意味の造語。実写ビデオシネマ作品『毒婦』(監督・小中和哉'95)にて、防毒マスク姿の女というのは既に登場させていた。

○白地にビットマップフォント

S「一万？　そりゃ高い。相場は四千円てとこだ」
S「アクセラ。俺らはそう呼んでる。仕入れは同じ様なもんだけど、あれは正確にはドラッグじゃない」

○クラブ・サイベリア

少年、紙片を広げる。
その中には――、一★錠のカプセル。
少年、脇に置いていたショルダーバッグからルーペを取り出し、ライトを点灯して錠剤に見入る。
そっと二つに割る少年。
カプセルの中身は、極めて精緻なサーキット。★極小LEDがチカチカと青い光を明滅させていた。
初めて微笑む少年。
それを嚥下し――ボトルの液体を飲み干す。

少年の瞳孔が開く。

★テレビ番組としては、ドラッグ的な描写は好ましくないと考え、極小機械という設定にしたが、シナリオの描写でも不適切という事で、画面ではカプセルではなくグミ状のゼリーに覆われたものという描写になった。このアイデアは中原順志氏による。

★極小LED
発光ダイオード。機器類のパイロットランプに用いられる。

○白地にビットマップフォント

S「僕は、加速したのを感じた」

○クラブ・サイベリア

ふっ。音がかき消え、少年は自分が加速を始めた事を知る。

人々の動きが緩慢に見える。

その人々の中に――、談笑している女の子のグループが見えた。

ありす、麗華、樹莉。少年の存在を気にも留めず、すれ違う男から声を掛けられても無視。

じっと凝視し続けていた少年、立ち上がり――

○白地にビットマップフォント

S「早くこっちにおいでよ」

○住宅街／翌朝

わあああんんんんん



高圧電線が風に揺れて笛の様な音を立てている。
坂道。
その登り切ったところが玲音の住む家。

○岩倉家／玲音の部屋

子ども用ＮＡＶＩの前に座っている玲音。
画面には文字化けしたテキスト。
じっとそれを見つめていた玲音、被りを振る。

玲　音「ううん、違うよ」

文字、うねうねと無意味な記号としてスクロールしていく。

玲　音「――判んない……」

ギッ。背後のドアが開いた。
振り向く玲音。

美　香「あれ、誰か来てんのかと思った」

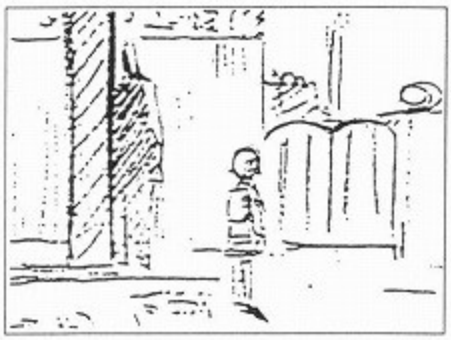
高校の制服を来た姉の美香、物憂げな目で玲音を見つめる。

玲　音「――誰かって、誰？」

美　香「――玲音の空想の友達」
玲　音「――」
美　香「とかね」
玲　音「――」
　美香、玲音から関心を失いドアを閉めつつ
美　香「そろそろ出ないとまた遅刻だよ」
　あっ、と思い、急いで鞄の支度を始める玲音。

○坂道

　早足で下っていく玲音。
と――、やや下の電柱の背後に、黒い人影。
玲　音「――」
　極く僅かに、漠然とした不安を抱く玲音。眉を顰めなるたけその方を見ない様にと急ぐ。
　徐々にその電柱に近づく。
　堪えきれず、玲音、横目で電柱を見る。
　電柱の背後に立っていたのは――黒ずくめの服を着た男だった。全く感情を感じさせない陶器の様な目



で玲音を見つめている。
玲音、目を逸らし、駆けだす。

○鷗華学園

登校する生徒達。
玲音、一人歩いていると背後から
ありす「（オフ）おはよ」
振り向くと、ありすら三人。
玲　音「お、おはよう」
樹　莉「（しげしげと玲音を見て）――違うよぉやっぱり」
玲　音「え……」
麗　華「そうかなぁ」
玲　音「な、に？」
ありす「（苦笑）よしなさいよ、可哀相じゃない玲音が」
麗　華「あ？　あごめん。いやさぁ、昨日の夜、サイベリアに玲音そっくりな子がいてさ」
玲　音「さい、べりあ？」
樹　莉「あたしたち昨日、勇気出して初めて行ってみたんだよね」
麗　華「大した事なかったじゃん」

ありす「キンチョーしてたくせに（くすくす）。（玲音に）あ、クラブだよ。夜中に若い子たちが集まる様なところ」

玲　音「――」

ありす「そこで玲音にちょっと似た子がいたの」

玲　音「（小首を傾げ）――あたし、昨日は……」

ありす「判ってるって。玲音じゃないよその子。あたしたちもはっきり見た訳じゃないんだけど、凄く派手な恰好してたし、何か凄い剣幕で怒鳴ってたし」

玲　音「――」

樹　莉「そうだよぉ。性格とかも全然違うって感じ」

麗　華「でも――（しげしげ）似てたけどなぁ」

玲　音「（俯き）――あたしも★――行ってみたいな……」

ありす「！　行ってみようよ！」

樹　莉「まじー？　玲音みたいな子が行って面白いかなぁ」

ありす「折角行ってみたいって思ったんだもの、いいと思う。玲音だって、もうちょっと社交的になった方が楽しいよ。ねっ？　玲音」

玲　音「――」

★中村監督は、徹底して玲音はサイベリアへ行きたがらないという描写にしている。

○3DCG―画面

〝★アクセラ〟の構造を微細に見せつつ――

男の声「――一種のスマート・ドラッグであるこのアクセラは、ナノ・メカニズムによって胎内にて固有の周波数の振動を発振し、ある特定のホルモンの分泌を促します。そのホルモンが分泌されますと、人間の意識の中の時間の感覚が影響を受け、意識が加速した様になると言われています。意識だけではなく、確かに脳の働きも活性化されまして、演算機能が倍から最大十二倍まで高くなる様です。このナノ・メカニズム自体は消化液で一昼夜にてほぼ消滅しますが、その影響力は、断続的にフラッシュバックとして現れます。薬品ではないので厚生省の管轄では当然ありませんが、警察庁では麻薬と同等の効果があるとして現在調査を進めており――」

○白地にビットマップフォント

S「人はみんな、繋がっている」

★アクセラ
Accela 加速させるもの／アクセラレーションからの造語。
実際のダイアローグでは〝スマート・サプリメント〟と言い換えられた。
このアクセラのデザインも安倍氏による。単に外装だけでなく、本体がナノマシンを放出し、胃壁に刺さって機能するまでを図解した設定書までも描かれていた。
ナレーション後半は完成作品では聞き取れない。

○教室★

授業を受けている生徒達。

玲音、ぼんやりと黒板に書かれた★シェル・スクリプトの構文を見つめていた。玲音の耳には耳鳴りの様なゴーッという音だけが低く聞こえている。

と――、玲音の脇を誰かが元気よくすりぬけ黒板に向かっていく。

玲音「――」

黒板前に立った子、振り向く。それは――玲音。しかし表情は普通の子の様に明るい。先生に何かを言って、黒板に構文の欠落部をチョークで埋めていく。

玲音「――」

拍手。玲音、振り向く。

生徒や先生達が、教壇の玲音に向かって微笑みかけながら拍手をしている。

玲音もまた、当惑した顔で拍手――

ハッと振り向く。

生徒や先生達、席の玲音をじっと見つめていた。

★このシーンは大幅にコンテで変更されている。
ここに限らないのだが、シナリオと画面の相違部分を注意して観て貰うと、監督の意図が明確に浮かんでくる、と思う。

★シェル・スクリプト
UNIXというネットワークOS（一般ユーザではなく、ネットワーク・サーバーや研究目的、プロフェッショナルなグラフィック用ワークステーションに使われる）にて、ユーザのコマンドを受け取り、自動実行するプログラム。MS-DOSで言えばバッチ・ファイルに相当するが、比較にならない程複雑。よって普通中学校で教える事はない、と思う。

玲音、我に返る。あの耳鳴りの音も消えていた。
恥ずかしさで俯く玲音――。
と、前の席のありすが振り向き、自分のＮＡＶＩを見せる。

玲　音「？」

玲音、自分のＮＡＶＩ★を見る。
ありすの可愛い自画像の下にテキスト。
Ｓ「今夜、サイベリアに一緒に行かない？」
玲音、嬉しさを顔に出せないが――、ありすを見てちょっと顔を赤らめていた。

○廊下

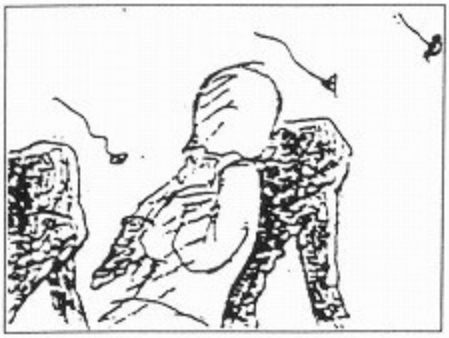
一人歩く玲音。
授業をしている声が廊下にまで漏れ聞こえている。
無人の廊下に、玲音の上履きの音が響く。
突き当たりは階段。その脇にトイレ。
ふと、突き当たりに人が立っているのに気づく。
陰になっていて、判然としないが制服を着た生徒の

★携帯ＮＡＶＩ
これも安倍氏のデザイン。現行のＰＨＳに、ペン・オペレーション機能を持たせた設定で、主にメーラーとしての機能に特化したものとなっている。

様だ。
玲音、立ち止まり、その人影をじっと見つめる。
徐々に――、見えてくる。
玲音の息、荒くなる。
判ってきたのだ。それが、少なくとも今、この現実世界で生きている者ではないという事を。
女の子の人影、ゆらりと前に出る。
その顔は曇り硝子の向こうにある様にぼやけている。

玲　音「ひっ」

玲音の方へ歩み寄ってくる女の子。
玲音、恐怖に足が竦んでいる。
何と、女の子だけではない。
壁から抜け出たかの様に、男や女など何人もの〝顔の無い者〟達がこちらに向かって歩きだしてくる。
玲音の吐息だけが廊下に響く。
無音のまま〝顔の無い者たち〟が玲音の方へ。
そして立ち竦んでいる玲音の脇をどんどんと通り過ぎていく。



ぼやけた顔のまま、少女が玲音の眼前へ！

玲　音「やだよぉ……」

目を閉じる玲音。

女の子は玲音の体を通り抜け――過ぎ去っていく。

玲音、はっと目を開けて振り向く。

そこには誰も歩く姿などない。

チャイムが鳴った。

○住宅街

わあああんんんんんん

高圧電線が風に震える。

玲音が坂道を登ってくる。

○岩倉家

玲音、家の前にトラックが止まっているのに気づき駆けだす。

運送屋の若い男（かっこいい）、玲音を見て――

運送屋バイト「ここ、君ン家？」

こくりと頷く玲音。

運送屋バイト「(安堵)良かったぁ。今下ろすからさ、ドア開けてくれる?」

玲音頷き、急いで鍵を開けドアを開く。

バイトの男子、額に汗を光らせてながら、幾つもの大きな段ボールを玄関先に運び込む。

箱には全て、人の目を意匠にした企業CI★がついている。

運送屋バイト「じゃここ、サインくれる?」

差し出された伝票に、ボールペンで『岩倉玲音』と書く玲音。

バイトの子、自分が下ろした荷物をしげしげと見入って

運送屋バイト「すげぇなあ。俺も欲しいよ」

玲音、当惑。

運送屋バイト「(伝票のサインを見つつ)これ全部あんたのだろ?」

玲　音「(小首を傾げ)判んない……」

★橘総研のマークは、安倍氏のデザイン。



運送屋バイト「ふうん、じゃあこれが何だか知らないのか」
玲　音「（頷く）」
運送屋バイト「最新式のＮＡＶＩだよ。それもフル装備の。これだけのマシン・パワーがあったらワイヤード入っても全然ストレス無く自由に動けるだろうなぁ。俺も自作マシンやってんだけどさ、全然敵わないや」
玲　音「――（微笑）そんな事――ないよ。あたし全然知らないんだもの」
運送屋バイト「すぐ判るってこんなの。じゃ、どうもー」
手を振ってトラックに乗り込んでいく男子。
黙って見送る玲音。

○同／夜

岩倉家の前に止まるタクシー。

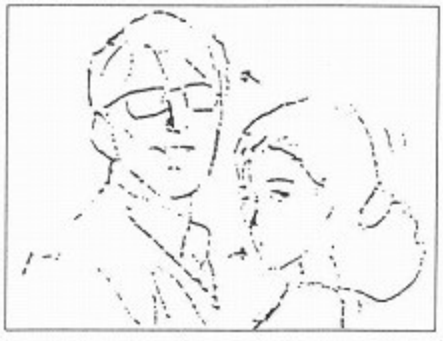
○玲音の部屋

車の音に気づき、本を読んでいた玲音、部屋から出ていく。

○玄関

玲音、階段を音も無く下りてきて――、止まる。
玄関先に積まれた段ボール。その脇で――、父親が母親を抱き寄せ、キスをしていた。
怪訝な顔でじっと見つめる玲音。
これが夫婦だろうか……？
父親、玲音に気づきゆっくりと母親を離して

父　親「届いてたな、玲音のＮＡＶＩ」
母親も玲音に気づき、ややうろたえている。
母　親「早く片づけてくださいよ。邪魔なんだから」
母親、キッチンへ。
父親、段ボールを撫で
父　親「メシを食ったらセットアップしてあげるからね。いいんだよ、このＮＡＶＩは。私が自分で使いたいくらいだ」
玲　音「（小声）今夜は……」
父　親「友達にも自慢出来るぞ」
言いながらネクタイを緩めつつ居間へ向かう父親。
玲　音「あたし、今夜……」



○玲音の部屋

開いた段ボールが脇に無造作に詰まれ、父親、玲音のデスクにハードウエアをセットしている。
玲音はやや後ろに立ってじっと見つめている。

父　親「子ども用のＮＡＶＩなんてものをいつまでも使ってはいけない。コミュニケーションというものは、人と人との関係が成熟するに合わせて、それなりの高度なシステムが必要なものだよ。判るかい？　玲音」

玲　音「――」

父親、メイン・スイッチを入れる。
ブン。仮想モニタ★が机上にスクリーンを投影する。

父　親「（振り向き）おいで」

玲音、駆け寄る。
父親、タッチキーを操作。

父　親「このマシンにレジストレーション★をしなさい」

きょとんと父親を見上げる玲音。

父　親「話しかけてごらん」

玲音、怪訝そうにマシンに向かって――

★このシーンでも未だ仮想モニタを出す事は見送られた。ＳＦ的な感覚は初期話数では極力抑えられている。

★レジストレーション
Registration 登録。現行の UNIX や WindowsNT といったOSはネットワーク利用を前提としており、ユーザはまず最初にそのマシンに触れる時、登録をする。

玲　音「ハロー、ＮＡＶＩ」

その声の波形が仮想ウィンドウに浮かぶ。

ピーッ。Ｓ「★Authorized User」

父　親「これでこのＮＡＶＩは、玲音のものだ」

玲　音「――」

○白地にビットマップフォント

Ｓ「どうして早く来ないの？」

○岩倉家／深夜

玲音の部屋の明かりが消えた。

ややあって――、玄関の扉がゆっくりと開く。

★外着をまとった玲音、そっと音を立てない様に出てきた。

坂道を駆けて下っていく――。

○深夜の街

会話の輻輳。

★Authorized User
そのマシンのOSに、ユーザが承認されたというメッセージ。

★このくだりも完成作品とは異なる。

昼間のそれより、感情が皆昂っているかの様にトーンが高い。
明滅する街の灯。
ゴキブリの様な雑踏の動き。
その中を駆けてくる玲音。

ありすの声「――それで角を右」

玲音、耳に携帯ＮＡＶＩを当てている。
見回す玲音、交差点を曲がっていく。

ありすの声「――見えた？　その地下だよ」

○クラブ・サイベリア

低周波の振幅に地下全体が揺らいでいる。
階段を下りてきた玲音、入口近くにたむろしている大学生程の若者達の目を気にして、俯く。
と――、小学生の三人連れが脇を抜けていく。

小学生１「ばーっか。そんな方法じゃ情報省★の監視センターにすぐ見つかっちゃうって」

小学生２「アタッチするだけだったら平気じゃない？」

★情報省
現実の日本では、ネットワーク事業は郵政省が司る。

小学生3（女子）「こんどあそこのゲーセンでさあ――」

こんな年下もいるのだ、とやや安堵する玲音。

と、目の前にありす達。

ありす「やっと来た来た」

樹　莉「おそいー。あたしたちもう帰ろうとか言ってたのにー」

麗　華「でもこんな時間、玲音いつも寝てるんでしょ」

玲　音「（こくりと頷き）――ごめん」

ありす「いいよ（ニコ）。学校じゃないとこでみんなと会うの、新鮮でしょ」

玲　音「（やや微笑む）」

雑踏の中を歩きながら

樹　莉「玲音さあ、夜なら夜向きな服ってもんがあるもんよ」

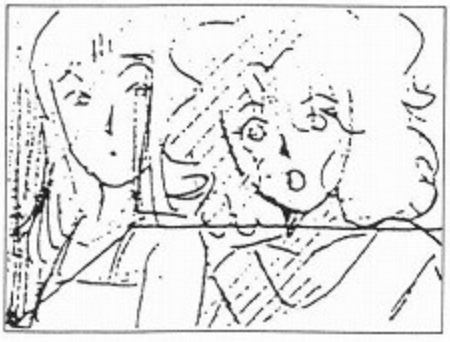
玲　音「――」

ありす「今度玲音に、大人ぽい服選んであげようよ」

麗　華「（苦笑）えー？　似合うかなぁ」

樹　莉「――けど――」

ありす「何？」



樹　莉「じゃあやっぱりこないだのって、玲音じゃなかったんだね」

麗　華「だからそう言ってるじゃないよ。玲音はあんな恰好しないし、あんな言葉遣いしないし、あんな顔しないってば」

玲音がここへ来たのはそれが理由だった。

玲　音「――あの、その子って――」

ありす「？」

玲　音「――あたしと、そっくりだったんだよね？」

樹　莉「あたし絶対玲音だって思ったくらい」

玲　音「――それ――、あたしかもしれない……」

ありす「え……？」

と、その時！　銃声がホール内に響きわたる。

悲鳴、怒号。

ありす達は脅えて体を寄せ合う。

麗　華「何よ!?」

玲音、きょろきょろと見回す。

ドゴーン!!　ドゴーン!!

再度の銃声に一斉に出口に向かって押し寄せる客達。

ありす達は押されてカウンターの方へ。

樹　莉「きゃあああああ！」

倒れる樹莉。

ありす「樹莉！」

ありすと麗華、樹莉を抱き起こす。

玲音、無人となったホールの中央を見る。

明滅するライトに照らされ、一人の男が立っていた。

冒頭の少年である。

その周囲には、少女の屍体が二体。

床にどす黒い血が流れ出している。キラキラと、店内のライトを反射させつつ、流れに従ってフォルムを次々と変えている。

じっとそれを見つめる玲音。

ありす「玲音！」

ありす達は樹莉を抱えて出口近くへ来ていた。

玲音、振り向かず。

麗　華「何してんだよあの子！」

樹　莉「――」



ありす「レイーン！」

少年、玲音を見た。

手には★タクティカル・ユニット付きのグロック。

少　年「（早口に）何で俺にこんなことさせんだよあんたに一体何の権利があるのさ俺はただ頭をクリアーにしたかっただけなんだ知らないそんなこと関係ない死んだ奴がどうして俺は関係ないあんたは傲慢なる神の俺は関係ないワイヤードは絶対にリアル・ワールドに干渉してはならない俺は関係ないあんたは誰」

玲音、じっと無表情に少年を見つめ続ける。

ありす「玲音！（麗華に）ちょっと樹莉をお願い」

麗　華「！　どうすんのよありす！」

ありす、玲音の方に走りだす（スローモーション）。

少年、ゆっくりと銃を持ち上げる。

レーザーサイトの赤い光点が玲音の足元から顔に向けて上がっていく。

ありす「れーいーん!!」

ふ、と無音。

★タクティカル・ユニット付きのグロック
レーザー照準などオプションを装着するユニットをつけた拳銃だが、テレビ的配慮から、実銃ではなくアレンジされた仮想のものと描かれた。

玲　音「（レインの声になる）どこにいたって、人は繋がってるのよ」

少　年「――」

赤い光点、玲音の顔面を通りすぎ――

少年、口を開く。その口の中に光点。

玲音の顔に、血の飛沫が点々とかかる。

フロア中央に、高校生の女の子二人、そして少年の軀が重なる様に倒れている。

★玲音に駆け寄り、抱き寄せるありす。

玲音、うっとりとありすの体温を感じている。

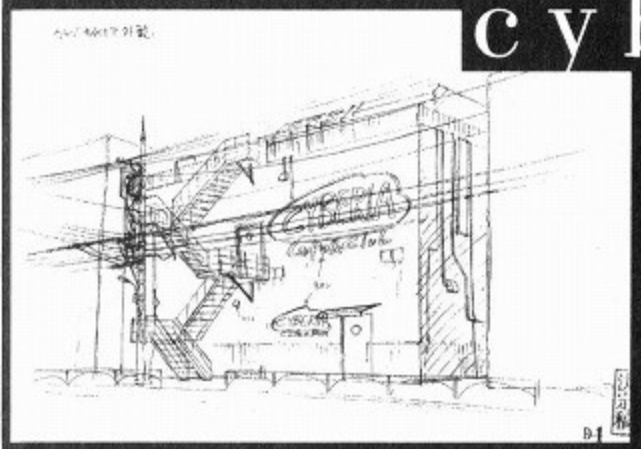
顔の飛沫が店内の明滅する明かりを反射して――

To Be Continued...

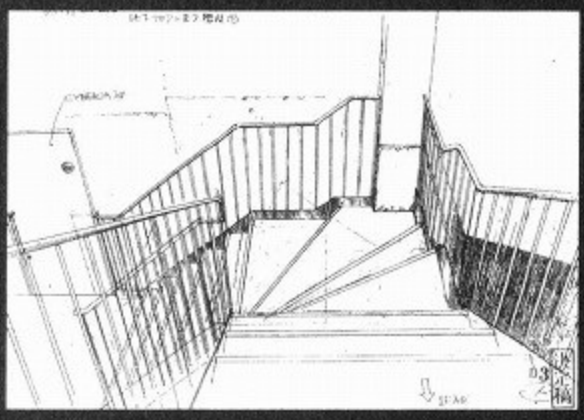
★このラストシーンもニュアンスが随分異なるものとなっている。当初コンテを見た時点では監督に異議を申し立てたのだが、監督は譲らなかった。ずっと玲音の心情を〝繋げて〟世界を創り出していた監督の計算は、後になって理解した。

cyberia
サイベリア

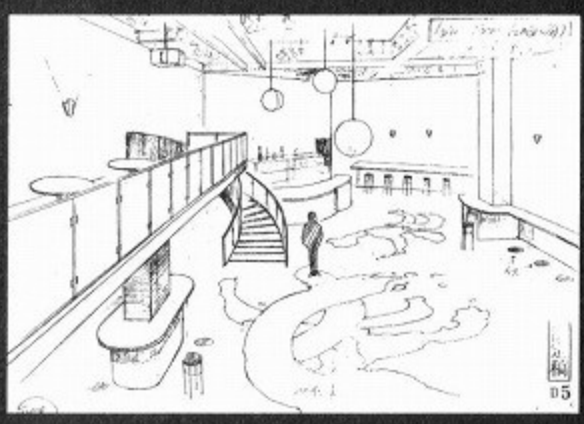
Column•01



ネット・カフェ、サイベリア。
夜には、クラブとして若者たちが集う。
地下へと向かう階段には、
飛び降り防止のネットがついている。
扉の中。ミラーボールの明かりに照らされ、
ネット・キッズたちの姿も見える。
そこには、防毒ガスマスク姿の
ハウス・ミストレスがいる。



そこは、初めて"ワイヤードのレイン"が
姿を現わした場所。
専属DJである"JJ"は、
どうやら彼女と親しいようだ。



layer:03

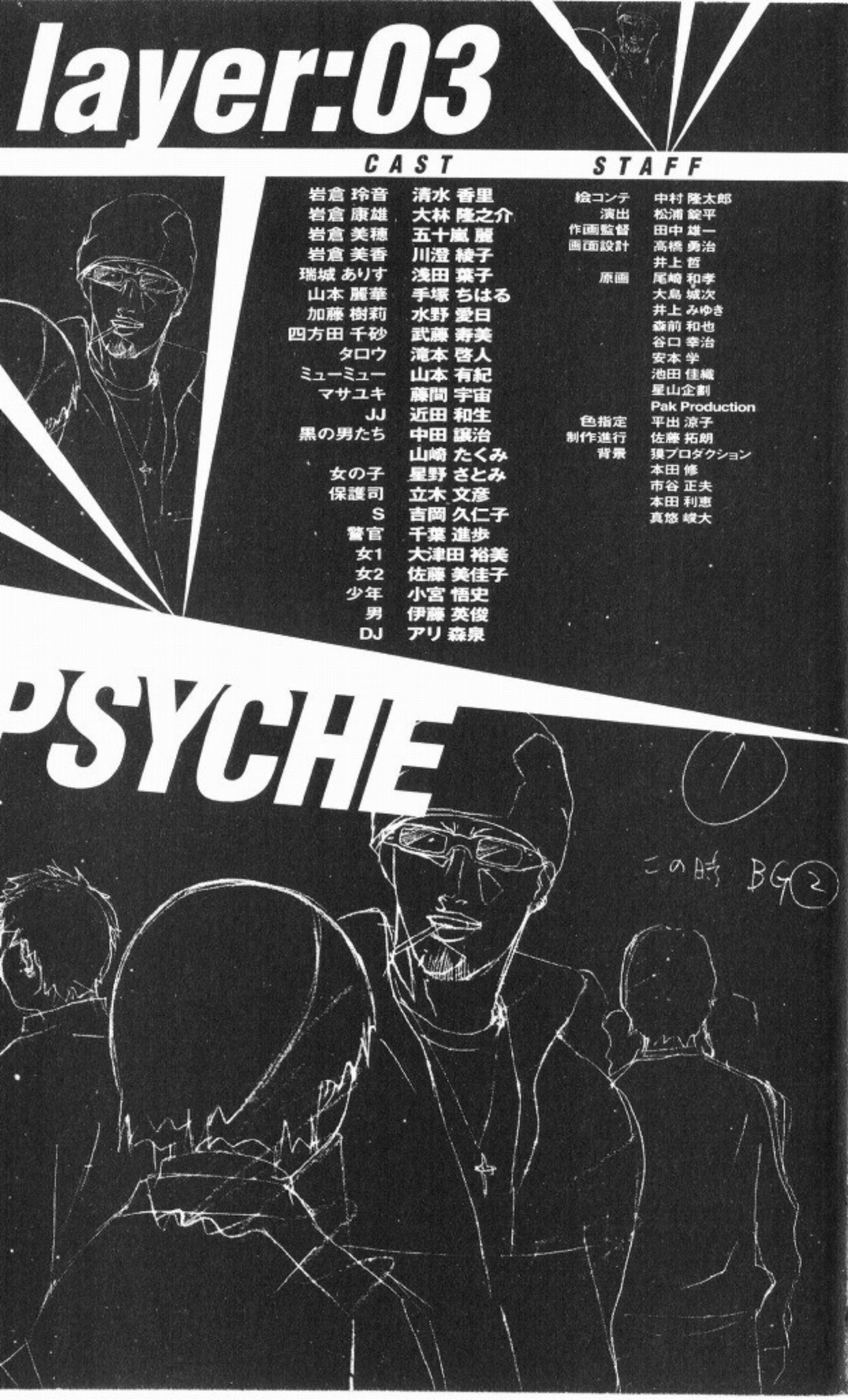
CAST

岩倉 玲音	清水 香里
岩倉 康雄	大林 隆之介
岩倉 美穂	五十嵐 麗
岩倉 美香	川澄 綾子
瑞城 ありす	浅田 葉子
山本 麗華	手塚 ちはる
加藤 樹莉	水野 愛日
四方田 千砂	武藤 寿美
タロウ	滝本 啓人
ミューミュー	山本 有紀
マサユキ	藤間 宇宙
JJ	近田 和生
黒の男たち	中田 譲治
	山崎 たくみ
女の子	星野 さとみ
保護司	立木 文彦
S	吉岡 久仁子
警官	千葉 進歩
女1	大津田 裕美
女2	佐藤 美佳子
少年	小宮 悟史
男	伊藤 英俊
DJ	アリ 森泉

STAFF

絵コンテ	中村 隆太郎
演出	松浦 錠平
作画監督	田中 雄一
画面設計	高橋 勇治
	井上 哲
原画	尾崎 和孝
	大島 城次
	井上 みゆき
	森前 和也
	谷口 幸治
	安本 学
	池田 佳織
	星山企劃
	Pak Production
色指定	平出 涼子
制作進行	佐藤 拓朗
背景	猿プロダクション
	本田 修
	市谷 正夫
	本田 利恵
	真悠 峻大

PSYCHE



○前回のフラッシュ★

どおおおんんん!!

クラブ・サイベリアの中に響く銃声。

玲音の顔に血の飛沫が点々とかかる。

玲音に駆け寄り、抱き寄せるありす。

玲音、うっとりとありすの体温を感じている――。

○プレゼント・デイ、プレゼント・タイム

警察の赤色灯、警察無線――。

夜の街――、人が無言で行き交うにも拘わらず、無数の喋り声が輻輳している。

ビルとビルの間には無数の電線。

その中の会話が漏れ聞こえ――

女の声「(オフ／囁き)――レインて子、聞いた事あるでしょ？ワイヤードのレイン――」

どこもかしこも〝繋がって〟いる。

人は誰しも、〝繋がれて〟いる。

★コンテでオミットされた。

○渋谷北警察／夜

○同／少年課

心細気に小さくなって座っている玲音。
廊下では引き取りに来たありすの両親が警察官に頭を下げている。

玲　音「（聞こえない程に小声）あ、りす……」★

ありす、気づかない。

玲　音「（もう少し大きな声で）あり――」

男の声「（オフ）君の両親は――」

ハッと前を見る玲音。精気の無いくたびれたジャージ姿の男が立っていた。

保護司「旅行にでも行ってるんか」

玲　音「え……」

保護司「君の教えてくれた電話番号にかけても、誰も出ない」

玲　音「あたし、嘘なんて言ってない――」

保護司「（嘆息）ああ、嘘とは思ってない。調べたからね。確か

★この台詞は、ニュアンスはそのままに、意味を違えて後半に移動されている。同時にありすのキャラクターをより強く出す演出がなされた。ありすの役割が後半大きくなっていく要因は、この監督コンテにもあった事に、本稿執筆時、気づいた（このコンテが上がった頃に layer:06.07 辺りのシナリオを書いている）。

かに君は岩倉玲音で、その現住所の電話番号だった」

玲　音「（怪訝）――誰も――出ない……？」

保護司「もう今夜は遅いから送らせるけどね。また話をして欲しい。連絡するから」

玲　音「――」

ありすの声「（小声）玲音！」

玲音、見る。

ありすが両親と帰るところ。小さく手を振っていた。

玲　音「――（掌を上げる）」

○岩倉家前

坂道を登ってくるパトカー。

岩倉家の前に止まり、ドアが開く。

玲音、家を見上げる。

部屋には全く明かりが点いていない。

警　官「鍵は持っているね」

玲　音「あ……、はい」

警官、パトカーに戻り走り去っていく。

○同／玄関

鍵を開け、暗い室内に入ってくる玲音。

○同／リビング

覗き込む玲音。誰もいない。

○同／両親の寝室

ドアを開ける玲音。
ベッドには綺麗にカバーがかけられている。

○同／玲音の部屋前

玲音、ドアの隙間から明かりが漏れているのに気づく。

玲　音「！」

細く蒼い光――。
玲音、脅えた顔でゆっくりと近づき、ノブに手を掛ける。



○玲音の部屋

玲　音「――」

照明の消えた部屋、その奥の机には真新しいＮＡＶＩシステムが組まれ、仮想モニタが蒼い光を明滅させていた。この家で〝生きて〟いたのはこの機械だけだった。

玲　音「――ハロー・ＮＡＶＩ」

仮想モニタに文字。

Ｓ「こんばんは、レイン」

玲音、机に寄って、椅子に座る。

おぼつかない手でキーを押していく。

玲　音「メ――ッセー、ジ……」

Ｓ「レイン宛のメッセージはありません」

玲　音「――」

感情を失ってしまった様な顔の玲音。

じっと仮想モニタを見つめる。

と――、画面の中、極く極く僅かに渦を巻いている。

見ている者が無意識下に、その混沌の中へ入り込ん

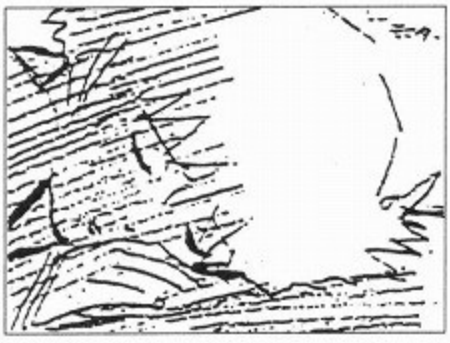
○岩倉家／朝

いくかの様な錯覚を起こさせる。
そして、その奥から声の輻輳が聞こえてくる。
男、女、子ども、老人――。
玲音はただじっと、その渦を見つめ続けている。
玲音は独りではない、そうＮＡＶＩは告げているかの様。

数時間後。
机にうつ伏せて眠っている玲音。

数時間後。
ベッドで枕を抱きしめ、眠っている玲音。

数時間後
悪夢に苛まれているのか、苦悶の顔を浮かべている玲音。



○同／階段

階下から聞こえるテレビの音。

玲音、怪訝そうな顔でゆっくりと下りていく。

○同／ダイニング★

父、母、姉が朝食を摂っていた。

玲　音「（小声）――おはよう……」

三人とも、玲音の声が聞こえないかの様。

玲　音「（やや大きく）おはよう」

誰も玲音を見ようとすらしない。

玲　音「（大声で）おは――!!」

玲音、目を丸く見開き凝視。

三人、玲音を向いている。しかし彼らの眼窩にはあるべき眼球が無く、ぽっかりと空洞になっている。

玲　音「（声無き叫び）」

血の飛沫のフラッシュ。

○玲音の部屋

★カットされたシーン。

ハッと起きる玲音。
『夢……？』

○階段

下りてくる玲音。
そっとダイニングを見る。

○ダイニング

母が一人、片付けをしていた。

母「（背を向けたまま）寝坊して遅刻なんて、中学生にもなって恥ずかしくない？」

玲音「え……」

母親、玲音を一瞥。

玲音、思わず目を落とす。

母「あら、気分が悪いの？　学校休む？」

玲音「――ううん。行く……」

玲音、部屋に戻りかけて振り向き

玲音「お母さん、昨日の夜って――」



母　「――（玲音をじっと見つめ）え？」
玲音「――いい、やっぱり」

○岩倉家前

制服の玲音、出てくる。
と、坂道のやや下ったところに黒塗りの車が止まっていた。
歩きながら玲音、その車に見入る。
米国製セダンだが、屋根には無骨なアンテナが幾つも設置されている。
窓はスモークで潰され内側を見る事は出来ない。
しかし――、玲音が見つめていると、一瞬チカっと赤い光が瞬いた。
玲音、観察されていた様な気がして、坂を駆け下りていく。

○私鉄車内

ドア前に立ってぼんやりと窓外を見ている玲音。

いつもの様に会話の輻輳が聞こえていて、玲音はそれを無視し続けている。
と――
男の声「――レイン」
輻輳する声に混じって、玲音の名を呼ぶ者がいた。
ハッとなって見回す玲音。
通勤・通学時間を外れて空いている車内。誰も玲音の事など見てもいない。
男の声「――だよ、レイン――判るね？――」
玲　音「誰……？」
必死に見探す玲音。
男の声「――独りじゃない――」
玲　音「やだ」
玲音、耳を抑え目を閉じる。
そんな事で音は遮断されず、くぐもった声がもごもごと玲音を苛み続ける。



○鷗華中学／教室

憂鬱そうな顔で教室に入ってきた玲音を見つけ

樹　莉「玲音！」

ありすら三人、駆け寄る。

玲　音「お、おはよう」

ありす「昨日、大変だったね。御免、あたしたち――」

麗　華「別にあたしたちが悪いんじゃないよ、ありす」

ありす「そうだけど、無理に連れてったのは――」

樹　莉「（玲音に）お家の人に怒られた？」

玲　音「う、ううん……」

樹　莉「そう！　ラッキーだったじゃん！　あたしんちとかもう大変で」

ありす「あれから、お家の人、来てくれたんだ」

玲　音「――うん……」

授業が始まっている。

玲音、ノートにぐるぐると執拗に渦巻きの落書きを描き続けている。

既に真っ黒になるぐらいまで――。

と――

声　「（フェード・イン）――というばかりではない。プシューケーはただのプロセッサだと捉えると全体が見えなくなってしまう」

玲音、「またか」と眉を顰める。

声　「汎用情報端末として、ＮＡＶＩは小学生にまで普及するに至っているが、ワイヤードでの活動限界はマシンに依存しているのが現状だ。プシューケーはいかなるＮＡＶＩの機能をも劇的に上げる事が出来る」

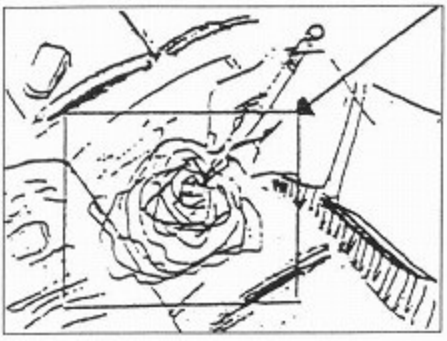
玲音、耳を塞ぐ。聞きたくない。

違う声　「（クロス・フェード）あたしはもうリアル・ワールドにはいる意味が無かったの」

はっ、と目を上げる玲音。それは千砂の声。

千砂　「（オフ）あたしはリアル・ワールドにとっていてもいなくてもどうでもいい存在だった。それが判った時、あたしは肉体を無くす事に何の怖さも感じなくなったの」

ぎゅうっ、と耳を塞ぐ玲音。



ふと振り向いたありす、玲音を見て心配そう。

違う声「――レインは誰？」

玲　音「（小さく）え……」

違う声「レインは誰？　レインは誰？」

玲音のノートの渦巻き、極く、極く僅かに回転をしている。

その中に引き込まれそうな感覚を覚えている玲音。

○玄関

下校のチャイムが鳴っている。

玲音、ありす達三人のやや後から来る。

麗　華「なーんかつまんないね」＼

ありす「（苦笑）しょうがないよー。暫くは夜、ウチ抜け出すのって超難しいし」

樹　莉「なーんかつまんないー」

ありす「――（ふと真顔）――でも、あたしたち、変だよ」

樹　莉「変？」

ありす「――あたしたち、昨日、人が死ぬをを間近に見たんだよ？

それなのに、まるで映画でも見たくらいの感覚でいる」

麗華「――だって――」

玲音、自分のげた箱に上履きを入れようと開ける。

と、何か小さな封筒があったのを見つける。

麗華「昨日の夜、確かにあたしたち、あそこにいたけどさ、何かリアリティが無かったって気がする」

三人の会話を聞かず、玲音、袋を手にとる。

樹莉「――あたしも、そんな感じかな……。ありす、そんな深刻に受け止めない方がいい思う」

ありす「そうじゃなくって、深刻に受け止められないから変なんだって――、玲音？」

玲音「（はっ）え？　あ、何……」

玲音、思わず封筒を後ろ手に隠す。

ありす「（気づき）あれ？　今のって――（ニヤ）もしかしてラヴレターとかぁぁ!?」

樹莉「うそーっ！」

麗華「ちょっ、見せて見せて見せて！」

玲音「ち、ちがうよぉ――多分……」



玲音、後ずさる。

麗　華「ケチケチしないで見せなさいよ」

執拗に迫る麗華。

だめだめと首を振る玲音。★

ありす「麗華！　そんな無理に言ったら可哀相じゃない」

麗　華「（むー）玲音のケチ」

玲　音「――」

○学校近くの道

独りになった玲音、早足で来て――、周りを見回し、人がいないのを確認。

ポケットから封筒を出す。

何か立体物が入っている。

玲音、封筒の中の物を出してみる。

それは――、1センチ四方程の集積回路。★

他には何も入っていなかった。

やや落胆した顔の玲音。

玲　音「――プシューケー……」★

★コンテでは麗華達がプシューケーを見るという芝居に変更。

★プシューケーのデザインはやはり安倍氏。それを中原氏の所属するソフトハウスSR-12Wで Light Wave 3Dにて3DCG化していたが、本篇では使われなかった（AX誌の連載では使用）。

★プシューケー
Psyche 魂、精神といった意味合いの語だが、〝サイケデリック〟の語源という方が馴染みがあるだろう。元々はギリシャ神話で、キューピッドが愛したスピリチュアルな少女の名から来たもの。

○漆黒――否、螺旋

暗い混沌が僅かに渦を巻いている。
★クロス・トークする声達。

声　1「――違うってば。あたしのヴォイス・メールが覗かれてたのよ！　信じらんないもう――」

声　2「――届いたレジュメにあった内容は、当該の条項が含まれておらず、現在対応を検討しているところです。貴社におきましては――」

声　3「――キスするのが好きなの。それだけで幸せになれる」

声　4「――こないだクラブでガキがアクセラでラリッちまって事件起こしたろ。あれで闇に流してる奴がビビっちまったみたいでよ、全然ブツ入ってこねーんだって」

声　5「――プシューケーは台湾の工場で量産されている模様です。設計したと言われているのは、ナイツと呼ばれている団体、と申しますか、いやそもそもそのナイツが実在するものなのかも判らないのです。ワイヤードにはそういった都市伝説が多く――」

★クロス・トーク
複数の会話が同時にだぶって聞こえる事象。放送業界や普通のドラマでは「やってはならないこと」となっている。
以下の様な会話は今後も多用しているが、物語のキーワードは大抵ここで最初に登場させている。



声　6「――気持ちいいよ――。死ぬって――」

声　7「僕は、加速したのを感じた――」

声　8★「――いやだ――、部屋に誰かいるの！　緑と赤の縞々の服着た、子どもみたいに小さい人が！　あたしベッドで動けないの！　ほら！　ドアのところに立ってあたしをじっと見てる！　助けてよぉぉ！」

声　9「あなたの秘密の恋人、あなたと一緒にいる写真を持ってるんです。私は商売をしたいだけです。どうです？　買って戴けないと、あなたの会社のサーバーにこの画像のデータを流しますけれど？　ワイヤード中であなたは有名になりますよ。フフフ――」

声　10「――玲音、どうしてこっちこないの？――」

○玲音の部屋／夜

ＮＡＶＩの前に座っている玲音。

仮想モニタには

Ｓ「メールが届いています――」

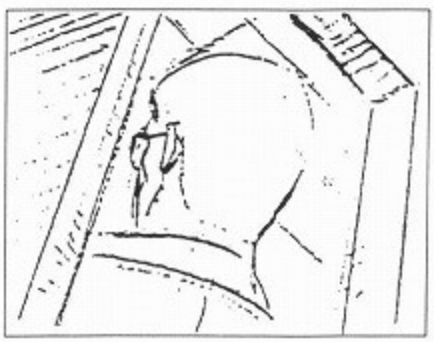
玲音「――」

★この部分は〝ありす〟役の浅田葉子さんが担当している。

玲音はプシューケーを手にしていた。
と、ドアが開く。振り向く玲音。
父「どうだい、新しいＮＡＶＩには慣れたかい？」
玲音、立って父の前へ
父「どうした玲音」
玲音、プシューケーを見せる。
玲音「これ――知ってる？」
父、チラと一瞥しただけ。
父「知らないな」
父、背を向け部屋を出ようとする。
玲音「（咄嗟に）お父さんなら！」
父、止まる。が振り向かず。
玲音「――（小声に戻り）お父さんなら、知ってるかな、って」
父「――（背を向けたまま）知らないと言っただろう」
出ていき、ドアを閉じる父親。
玲音、独りぼっちに――。

○坂道

玲音、そっと家を抜け出して出てくる。



坂道を降りようとした時——

玲　音「！」

またあの車が止まっていた。
ライトを消しているが、エンジンは回っている。
暗い室内で、チラ、チラっと赤い光が見える。
玲音、逃げる様に坂を降りていく。

○夜の街

駅から雑踏の中へ。
意味の無い会話の輻輳が充満している。
玲音、耳を抑えながら、足早に抜けていく——。

○クラブ・サイベリア入口

裏路地を入った雑居ビル。
その地下への階段が、サイベリアへの入口。
階段ではクラブ・ファッションの男女がキスをしている。
玲音、見ぬフリ★をしつつ降りていく。

★完成作では「見て見ぬフリ」ではなく、明快に嫌悪を表情に出していた。

○同内フロア

★インダストリアル・パンクの重低音が響く。

玲音、おずおずとしながら、客達の中を進んでいく。

と！　いきなり肩を摑まれ

ＪＪ「レイン！」

玲音「え……」

ハウスＤＪの男が玲音に笑いかけている。

ＪＪ「最近どうしてたんだよ。あんまし顔見なかったからよ」

玲音「――あたし……」

ＪＪ「あれー、今日はヤケに少女趣味してんじゃん」

玲音「――（目を落とす）」

玲音には判っていた。彼が言っているのは別の玲音の事なのだろう。

ＪＪ「★またレイヴやっから。★オルグ頼むぜ」

ＪＪ、ＤＪブースへ向かって歩き去った。

ほ、っと息を漏らす玲音。

ふと前のテーブルを見ると、小学生（キテる服を着

★早い時期に、シリーズの音楽は仲井戸麗市氏の、ブルージーなものになるのが決まっていたので、こういったシーンは完全にノイズ扱いになると想定していた。しかし、2nd Unit Music」とクレジットされた竹本晃氏は、ミニマルな抑圧的環境音楽をメインに、毎週毎週画面が出来てからそれに合わせて作曲するという凄まじいワークをこなす事になる。サイベリアの音楽も、エスニックなテクノなど多彩なサウンドとなった。ＪＪ役を演じたのは、実際にＤＪもしている近田和生氏で、二人のコラボレーションは二枚目のサウンドトラック盤にまとめられた。

★レイヴ
Rave「夢中で喋る」というのが本来の意味だが、1988年頃にイギリスで起こったアシッド・ハウスのムーヴメントにて野外で催されたノンストップのエレクトロニック・ダンスパーティをこう呼んでいた。

★オルグ

ている）のグループが携帯ＮＡＶＩで遊んでいた。
玲音、近づき――
玲　音「これ、知ってる？」
玲音、掌のプシューケーを見せる。
目の色を変える小学生たち
★タロウ「これ、プシューケーじゃねーのか!?」
ミューミュー「うそぉ！　あたし初めて見た！」
マサユキ「どこで買ったの？　どこで買ったの!?」
玲　音「――えっと、買ったんじゃなくって――」
タロウ「いいなぁ。これ入れたらこいつ（ＮＡＶＩ）でワイヤードでフル・アクセス出来るんだぜ」
マサユキ「フル・アクセス！　いいよなー」
玲　音「これ、どうやって使うの？」
ミューミュー「ダッさー。そんなのも知らないの？（くすくす）」
マサユキ「ねえ、これ売ってこれ売って！」
タロウ「ばか。買えるかよお前が。（玲音に）ＮＡＶＩ、何使ってんの？」
玲　音「よく判んないんだけど――、タチバナの多分、一番新し

Organize「組織する」という意味で、団塊世代であると、政治的な意味が強く感じられるだろうが、クラブ・カルチャー周辺では、イベントの主宰をするといった意味で多く使われる。

★タロウ、マサユキのキャラクターの原型は、私の映画処女作『TARO!』(91)の主人公からきている。ミューミューは『lain』で創った名前。

い奴」

三人、顔を見合わせる。

マサユキ「すっげー！」

タロウ「あのさ、それ、自分で内部にアクセスした事ある？」

ううん、と首を振る玲音。

タロウ「だろうな……。あんた中2？　中3？」

玲　音「2」

タロウ「なら情★報基礎は習ってんだろ？　ＮＡＶＩのマザーボードの基本的なレイアウトは教科書に載ってる」

頷く玲音。

タロウ「こいつ★はメインのプロセッサの裏側にコネクトするんだ。そこで本来の情報をインターセプトして勝手に動作する。（ニヤ）作業自体はプラモ作るよか簡単だよ。静電気だけ気をつければね」

玲　音「――そう。ありがとう」

玲音、去ろうとすると――

タロウ「待ってよ」

振り向く玲音。

★中学校でコンピュータの授業はあるが、マザーボードのレイアウトまでは教えていない、と思う。

★コンテでは、この台詞はマサユキに振られ、タロウはじっと玲音を見つめているという芝居になっている。当然これは後の展開を踏まえての演出（今話執筆時は、この三人はlayer: 05で死なせるつもりだった）。

プシューケの取り付けについては、後にAX誌の連載でより詳細な説明を書いた。一般的なPCのマザーボードのチップセットNorth Bridgeに上から被せる形で装着するというもの。

タロウ「情報はタダじゃないんだぜ、ワイヤードでも、リアル・ワールドでも」

玲　音「――えっと……」

マサユキ「幾ら貰う？　幾ら貰う？」

タロウ「（ニヤニヤ）あんた、レインでしょ」

玲　音「――あたしの事、知ってるの」

ミューミュー「えええっ!?　この人がレインー？　うそー。全然話と違うじゃないー」

タロウ「俺、前に一回見てるんだ。ワイヤードでね。そん時は今と全然違ってたけどな」

玲　音「あたしを――ワイヤードで……？」

タロウ「ワイヤードではリアル・ワールドと違う人格を装うってのはまあ普通だけどさ、ちょっと極端だね、あんた」

玲　音「――あたし、何をしてあげたらいい？」

タロウ「（ニヤ）一回、デートしてよ」

ミューミュー「（ムカ）ばか……」

玲　音「――」

タロウ「今の人格じゃヤだぜ。あのイッちゃってるレインの方で

だよ」

玲音、表情を顔から無くし、冷徹に少年を見つめる。

タロウ「――、じょ、冗談だよ」

玲音、背を向け店から出ていく。

○坂道／翌日夕刻

風が電線を震わせている。

坂道を登ってくる――玲音の姉・美香。

黒い車が止まっているが、気にも留めず。

○岩倉家前

美香がやってくる。と、ドアの前に二人の男が背を向けて立っていた。

美　香「？……」

背の高い二人の男★、全身黒づくめ。美香の足音が聞こえている筈なのに、振り向かず。

美　香「（やや脅え）あの……、ウチに御用ですか？」

男達、振り向かず。

★全身黒づくめの無個性な二人、乃至三人の男――。UFOフォークロアに登場するMIB（Men In Black）のイメージを借りている。MIBについては、UFO関係の本を参照されたい。
シナリオでは明確に〝MIB〟と表記していたが、同名のコメディ映画が公開されてしまったので、クレジット等では「黒の男たち」などと変更された。

美　香「――どなたですか……？」
と、ゆっくりと一人が振り向く。
美　香「！」
その目にはビデオアイ・ゴーグルが装着されていた。
赤い光が明滅している。
もう一人も振り向く。
まるで双子の様にそっくりなその男の目にもゴーグルが。
美　香「――（勇気を奮い）警察呼ぶわよ」
ＭＩＢ１「――あなたは私達と会っていない」
美　香「（混乱）え……？」
ＭＩＢ２「何故なら私達は今、ここにいないから」
そう言って二人、ゆらりと歩きだして美香の方へ。
美　香「（脅え）やだ……」
しかし、二人、美香の脇を抜けて車の方へ歩いていく。
唖然と見送っていた美香
美　香「――な、何よあいつら……」

★この layer 執筆時は、未だMIBのキャラクターはデザインされておらず、無個性な存在として描いている。岸田氏がキャラを上げて以降、二人にはダイアローグ上でも個性を与えている。

○同内／階段

ダイニングで美香が母親に報告している声。

美　香「（オフ）今度来たら絶対警察呼んでよ!?　聞いてる？　ママ！」

母親、小声で何か答えた様子。

憮然とした顔で階段を上がっていく美香。

○玲音の部屋前

通りすぎて自分の部屋へ入ろうとした美香、ふと玲音のドアの隙間から光が漏れているのに気づく。

美　香「？」

○玲音の部屋

ドアを開けて中を見た美香、愕然。

美　香「なっ――何してんのよ玲音」

玲音の机の周りには何冊もの雑誌や本。工具、チューブ類。



そして解体されたＮＡＶＩを前に、玲音がぺたりと座り込んで図面を見ていた。

美　香「玲音！」

玲★音、ゆっくりと美香の方を見て――

玲　音「（微笑）お帰り、お姉ちゃん」

To Be Continued...

★完成作品では、玲音はスリップ一枚になっており、「静電気がダメなんだって」という台詞と共にシリーズ屈指の名シーンとなった。
余談ながら私も、最初に買ったMacintoshに自分でメモリ増設をした時は下着姿になったのだけれど（しかも失敗している）、最近の電子パーツはそれほどデリケートではないらしい。

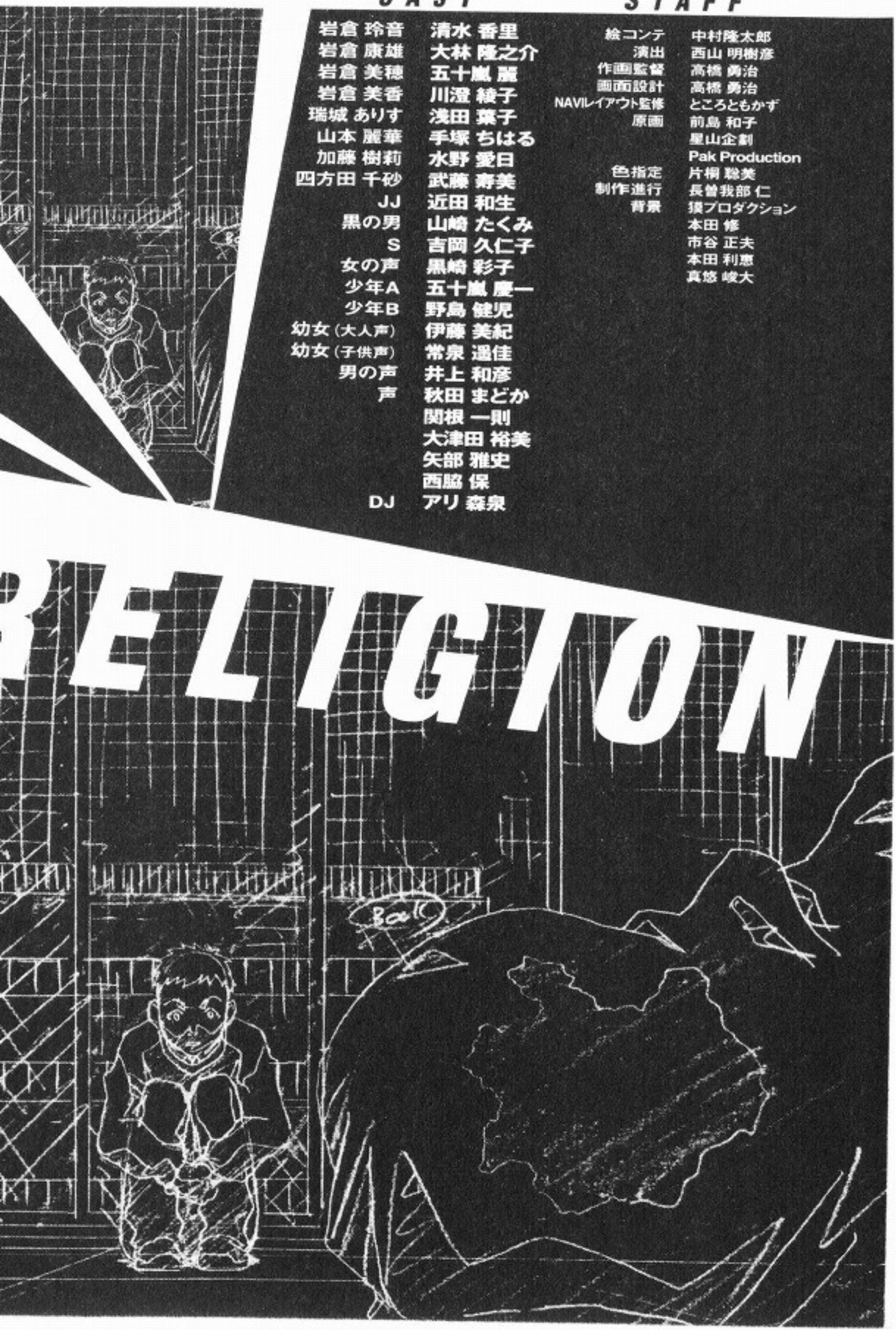
layer:04

CAST

岩倉 玲音	清水 香里
岩倉 康雄	大林 隆之介
岩倉 美穂	五十嵐 麗
岩倉 美香	川澄 綾子
瑞城 ありす	浅田 葉子
山本 麗華	手塚 ちはる
加藤 樹莉	水野 愛日
四方田 千砂	武藤 壽美
JJ	近田 和生
黒の男	山崎 たくみ
S	吉岡 久仁子
女の声	黒崎 彩子
少年A	五十嵐 慶一
少年B	野島 健児
幼女（大人声）	伊藤 美紀
幼女（子供声）	常泉 遥佳
男の声	井上 和彦
声	秋田 まどか
	関根 一則
	大津田 裕美
	矢部 雅史
	西脇 保
DJ	アリ 森泉

STAFF

絵コンテ	中村隆太郎
演出	西山 明樹彦
作画監督	高橋 勇治
画面設計	高橋 勇治
NAVIレイアウト監修	ところともかず
原画	前島 和子
	星山企劃
	Pak Production
色指定	片桐 聡美
制作進行	長曽我部 仁
背景	猿プロダクション
	本田 修
	市谷 正夫
	本田 利恵
	真悠 峻大



○プレゼント・デイ、プレゼント・タイム

夜の街――、人が無言で行き交うにも拘わらず、無数の喋り声が輻輳している。

わあああああああああんんんんん

ビルとビルの間には無数の電線。

その中から漏れ聞こえる声――

女の声「（オフ／囁き）――親なんていらいない。人間なんて、たった一人なんだよ。誰とも繋がってなんか、ない――」

どこもかしこも〝繋がって〟いる。

人は誰しも〝繋がれて〟いる。

○岩倉家／夜

玲音の部屋に明かりが灯っている。

○玲音の部屋

前回よりも更に混沌となっている部屋。バラされたＮＡＶＩと、そのパーツ、周辺機器、ケーブル、デバイス・ボード――。

その中にぺたりと座り込んでケーブルを結線している玲音。特に感情は見せず、淡々と作業をしている。
ドアが開き、父親が覗いている。
しかし玲音は気づいているのか、そうでないのか、振り向かない。
★しばらくじっと玲音を見つめていた父親、そっとドアを閉じる。

○ダイニング

冷蔵庫を開け、ミネラルウォーターのボトルを出そうとしていた美香、半分残ったワインのデキャンタを見つけ、背後の母親を気にしつつ、こっそり飲む。
父親が降りてきた。

母「――どうだった?」
父「――」

父、黙ってリビングのソファに座り、新聞を読み始める。

美香「玲音、おかしいよ。ま、今日に限った事じゃないけど」

★このシーンの康雄の芝居は、完成作品ではかなりエモーショナルなものになっている。



父、美香を見て

父「いや、おかしくはないんだ」

美香「何よそれ」

母「美香。お父さんに言葉遣いが悪いわよ」

美香、唇を尖らせ、階段を駆け上がっていく。

母、父の脇に立つ。

母「――そうなのね……」

父、母の腰に手を回し――

父「そうなんですよ」

母、父の頭にそっと掌を這わせ――

○団地の廊下

ダン！

若い男が必死の形相で廊下を走る。

背後から何かが追っているらしく、しきりに気にしている。

高校生「はあっ、はあっ、はあっ――」

突き当たりのドアの前で止まる男。震える手でポケ

ットをまさぐり、鍵を探している。

高校生「あっ」

チャリン！　鍵が床に落ちた。

慌ててしゃがみ込んで拾い、ふと背後を見る。

高校生「わあああっ！」

廊下の奥、暗いその先に、ぼんやりと立つ白い人の影。幼い幼女の様だ。

脅える男、必死に鍵を鍵穴に入れようとするが、手が震えて中々入らない。

高校生「な、なんだよう……、くっ、くそっ！」

堪えられず、また振り向く少年。

ドン！　いつの間にか、かなり接近してきていた。

しかし依然幼女の顔は影の中。

高校生「わあああっ！」

再びドアに向かい、鍵を開けようとする少年。

と――、少年の顔のすぐ脇に白い小さな手が――

高校生「！」

少年の脇から、背が届く筈がないのに、幼女の顔が



被さり――

幼　女「（成人女性の囁き声）ガ★ッチャ」

高校生「！」

○団地外観

少年の悲鳴が響く。

○鷗華中学外観／翌日午前

チャイムが鳴った。

○同／教室

授業を終え、出ていく教師。

生徒達のリラックスした顔。

樹莉、ありすのところへ来て

樹　莉「次の時間、ホームルームなんでしょ？　ラッキー」

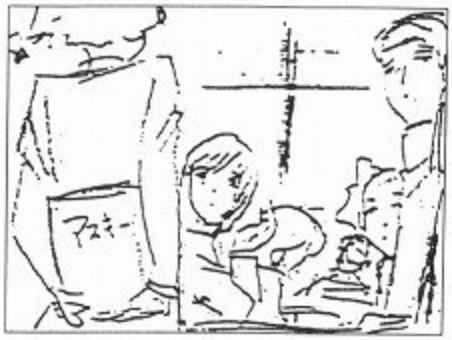
麗　華「（来て）臨時の職員会議なんて変だね」

ありす「（思案）――やっぱり、あれホントなのかな……」

麗　華「あれって？」

★ガッチャ
Gotcha!"I've got you!"の簡略形。
鬼ごっこでの「つかまえた！」

ありす「三年の男子が自殺したって――」
樹　莉「じ、自殺……」
ありす「ウチの学校だけじゃなくって、最近何人も――噂だけどね……。玲音？」
背を向けていた玲音、振り向く。
ありす、ふと怪訝な顔。玲音、前よりも明るい顔になっている。
玲　音「なあに」
ありす「玲音が聞いてる訳、ないよね……」
玲　音「自殺の事？」
麗　華「！　知ってんの、あんたが」
樹　莉「うそー」
玲　音「（微笑／小さい声）ていうか、あたしも聞いただけ」
ありす「どこで……？」
玲　音「ワイヤード」
ありす「あっ、もう新しいＮＡＶＩに慣れたんだ。今度あたしにも見せてよ」
玲　音「うん、いいよ。でも、ちょっと改造してるの」



樹　莉「改造ー？　玲音てば、そんなハッキー★な趣味あったっけ」
麗　華「――（じっと玲音を見つめ）、最近、ちょっと変わったね、あんた」
玲　音「――そう？」
ありす「――」

○ショピング・モール

モダンなアーケード。小ぎれいな店が並ぶ。
その中を、ワッフルを食べながら歩くありす達。
玲音もいる。

ありす「――で、ワイヤードじゃどんな噂になってるの？」
玲　音「――えと……、何かゲームなんだって」
麗　華「ゲーム？　ネットワーク・ゲームの事？」
玲　音「よく判んない。あたしやってないから。でも――、死んだ子達って、みんなそれにはまってたって」
樹　莉「男子って好きだよね、そーゆーの」
ありす「ふうん……。ゲーム……。でもどうして……」

玲音、残ったワッフルを急いで口に押し込み、手を

★八ッキー
Hacky Hacker の転用。
このシーンで玲音が持っている雑誌は『Super ASCII』誌か『さぺ』誌だと設定の人に言った記憶があるが、画面では『Hacker's Heaven』というオリジナルの雑誌表紙が作られていた。

スカートで払う。

ありす「（苦笑）そんなに急に食べたら喉につっかえるよー」

樹　莉「あははは。ホント」

玲　音「（照れ）――だ、だいじょぶ」

やっと嚥下した玲音――

玲　音「あたし、先に帰っても――いい？」

麗　華「いちいち断んなくたっていいけどさ」

ありす「何か用事？」

玲　音「早く帰って、ＮＡＶＩを組み上げたいの。まだちゃんとしてないから」

樹　莉「ふーん。友達よりマシンが大事か」

玲　音「（当惑）え……」

ありす「樹莉、よしなさいよそういう苛め方」

樹　莉「別に苛めてないじゃん」

ありす「（玲音に）玲音、完成したら、見せてよね」

玲　音「（はにかみ）うん」

玲音、駆けだしていく。

ありす「――（呟く）確かにあの子、変わってきた……」



と――、その脇を通り抜けていく母子。
その幼い娘は――、あの団地に現れた幼女だった。
しかし今は、極く普通のあどけない笑みを浮かべている――。

○玲音の部屋

取り敢えず、組み上がったらしい。未だ周辺は雑然としており、電線やパイプも剝き出しのまま。

玲　音「ログイン、玲音」

ぴっ。

S「Authorized」

玲　音「メール」

モニタにずらっと到着メールのアイコンが並ぶ。
じっと見つめていた玲音、その内の一つをセレクト。

S「Voice Mail」

若い男の声「――こんにちは、レイン」

玲音、立ち上がり、脇の周辺機器の調整を始める。
声は無頓着に流れ続ける。

声　「君がくれた質問は僕一人じゃ解決出来ないので、僕の研究室の仲間に聞いてみた。もし君が本当にプシューケー・プロセッサを持っているのだったら、多分君の予想通り、発振はヴァリュアブルに設定すべきだ。NAVIのマザーは大体どこの製品でも規格が統一されてるんだけど、多少の仕様差はあるからね」★

玲音、聞き流しつつ作業に没頭。

声　「成功を祈ってるよ。じゃあまた何かあったら聞いてくれ」

玲音、メイン・モニタの前に来て、椅子に座る。

暗い画面には螺旋――。

○クラブ・サイベリア

重低音の非音楽が轟音をたてて響く。

DJブースで、CDをチョイスしていたハウス・DJのJJ。

レインの声「JJ！」

JJ、顔を上げず

JJ「あー？」



★この玲音にサジェストを与える技術畑の若い男という存在は、プレイステーション版に重要な役割で登場するキャラクターと実は同一のつもりで書いている。テレビシリーズではこの後一回登場して終わりとなった。

レインの声「ガキんちょ達がハマってるネット・ゲーム、知ってる？」

ＪＪ「あー、ファントマ★ねー。よしなって。あんたみたいな〝大人〟がやるもんじゃねーよ」

ニヤっとして前を見るＪＪ。

ＪＪ「あれ……？」

誰もブースの前にはいない。

ＪＪ「――俺も空耳聞く様になっちまったかよ……」

○団地の屋上

同じデザインの建物が不条理に立ち並んでいる。

そのうちの一つの屋上。

取り込み残された洗濯物がパタパタと夜風にはためいている。

バッ！　シーツを次々とめくり走る中学生の少年。

少　年「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ――」

必死に何かから逃げている。

★ファントマ
PHANTOMa 同名のクラシック映画があり、その主人公は怪盗だが、ここでは本来の亡霊 Phantom からのイメージを狙っている。
実はこの名は、『～サイバーランド』にて、シナリオを書いていながら、諸般の事情でオミットされたエピソードのサブタイトルだった。

少　年「俺は――俺はもう止めたんだからなっ！　関係ねぇよ！」
語調とは裏腹に懇願する様なトーン。
広い空間に出る少年。
無機的なコンクリートのステージ。
はっと振り向く少年。

その少年のヴィジョンは、湿った石壁のダンジョンに見えている。
暗がりの向こうからぼーっと光る人間が近づいてくる。

少　年「わあああっ！」
背を向けよろける様に駆けだす少年。
持っていた携帯ＮＡＶＩを床に叩きつける。
ガシャン！
振り向かず走る少年。

ごおおおおおおんんんんん



ダンジョンをつき進む少年の視点。
行けども行けども暗黒の迷宮。
少　年「ここはワイヤードじゃねーんだぞ！　何で――、何でこんな――」
レインの声「待って！逃げないで！」
少年、見回す。
少　年「だっ、誰だよ！」
ばおおおおおんんん
いつしかそこは広大なドームの中。
少　年「お前もPK★か!?　助けてよ！」
レインの声「あたしはまだそこまでいけない」
少　年「（泣きべそ）何なんだよお前は！」
頭を抱え、走り出す少年。

バン！
少年、眼前の光景に愕然、立ち止まる。
何も無い筈の前方に、まるでガラスがあるかの様に人の手形が幾つも幾つも――。

★PK
Player Killerの略。一世を風靡したネットワーク・ゲーム『ウルティマ・オンライン』で有名になった存在。ゲーム本来の筋から離れ、仮想世界内にて他のプレイヤーを殺す目的のみに専心するプレイヤーの事。

少　年「ふっ――ふざけてんじゃねーよぉぉぉ（泣く）」
　戻ろうと後ずさる少年。
　と――、その肩に触れる白く小さい手。
少　年「！」
　振り向くと――、幼女（前のとは違う）の顔が何故か同じ目の高さにあった！
少　年「うぐっ――ぁぁ……」
　白い幼女、目を見開く。その眼窩にはあるべき眼球が無く――
　口を開いた。くわぁ……。
　少年、必死に目を閉じ、何も無いのに銃を撃つ構え。
少　年「ブレット・チャージ！　ゲージ5！」
　トリガーを引く仕種。
　と！　あたかも銃がそこにあるかの様に閃光と轟音。
　ガン！　ガン！　ガン！
少　年「くたばれ！　くたばれ！　くたばれ！」
　虚空に浮かんでいた白い幼女に弾着！　虚ろな孔が次々と開いていく。



少　年「くたばれくたばれくたばれくたばれ」
ガン！　ガン！――
そこで弾が切れた。

ぱたぱたぱた……。
風に飛ばされた白いシーツが屋上中に散らばっている。
ぱたぱたぱた――。
その内の一枚、赤い。否、赤く染まりつつある。
床に体育座りして膝を抱え嗚咽を漏らしている少年。
目を上げると――
そこにはシーツに覆われた、小さな屍体。
死者となった幼女の白い掌。

空が蒼くなり始めた――。
ぱたぱたぱた……。
数時間前と全く変わらない光景。

否――、少年と幼女から離れたところに、ぽつんと
玲音が、哀しそうな顔をして立っていた。

○ダンジョン

3DCGでぐりぐりと進む主観画面。

少　年「（オフ／訥々（とつとつ）と）――ファントマは、専用の★クライアント・アプリケーションがあって、それを使ってワイヤードの中で戦うっていうゲームです……。
僕はちょっと前に、非合法なサーバーからそのアプリをダウンロードして遊んでました。
そのゲームは、僕らにはダンジョン型のアクション・ゲームっていうインターフェイスだったんですけど、幼稚園で使ってる、ちっちゃい子用の鬼ごっこゲームと何故かリンクしてたみたいで……。
僕――、ただ怖かっただけで――、ちっちゃい子だったなんてそんなの――。
僕、悪くないですよ。だって全然知らなかったし――」

★クライアント・アプリケーション
ネットワーク・ゲームは、仮想世界を形成するホスト側のサーバー、及びそれを運用するソフトと、ユーザ側のソフト双方で構成される。